

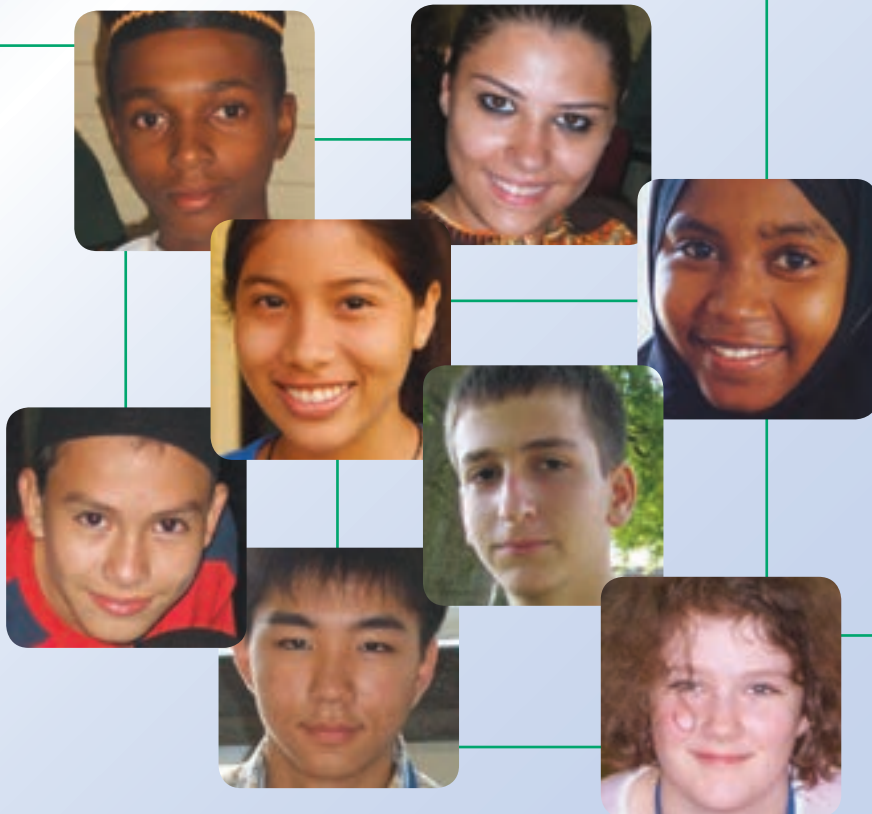


Arigatou Foundation
G N R C



共に生きることを学ぶ

倫理教育のための
異文化間・諸宗教プログラム



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

unicef

**共に生きることを学ぶ
倫理教育のための
異文化間・諸宗教プログラム**

**倫理教育委員会
子どものための宗教者ネットワーク
ありがとう基金**

The Interfaith Council Secretariat welcomes requests for permission to reproduce and translate this book in part or in full. Applications and enquiries should be addressed to Arigatou International, 1, rue de Varembe, 1202 Geneva, Switzerland, which will be glad to provide the latest information on any changes made to the text.

Design, layout and illustrations by  services-concept.ch
and the Interfaith Council Secretariat (Geneva).

Printed in Geneva, Switzerland by ATAR Roto Presse SA.

This book may also be consulted and downloaded on the following website:
<http://www.ethicseducationforchildren.org>

目次

共に生きることを学ぶ

子どもと倫理教育	1
『共に生きることを学ぶ』はどのように開発されたか	1
『共に生きることを学ぶ』はどこで使えるか	2
子どもはみんなの倫理的義務	3
贈り物としての子どもと子どもへの責任	4
子どもは生活から学ぶ	5
倫理教育と人権	6
倫理と倫理教育	7
倫理、価値観、道徳	8
倫理の対象は“関係”	8
永続する価値観はあるか？	9
倫理の原則と倫理教育で教える基本的価値観	10
選択能力：最高の贈り物にして最も難しい責任	10
人間の尊厳を守る	11
尊敬と相互理解	11
共感と「他者の身になって考える」能力	12
個人の責任とみんなの責任	13
和解と「橋渡し」へのアプローチ	13
倫理教育	14
共通の人間性	15
共通の人間性を示す具体的表現	15
複数の宗教が並存する多元的世界	16
倫理的な生き方のための宗教的リソース	16
責任の4つの側面	16
宗教者と非宗教者	17
互いの関係から学ぶ	17
共に祈るか、祈るために集うか	18
スピリチュアリティ	19

セクション1 利用の手引き

21

範囲と目的	21
学習モジュール	21
4つの価値観	22
モジュール	23
若者の生来の精神性を育む	24
教師と進行役 — 学習プロセスの要	24
学習プロセスとガイドライン	25
方法論	27
用いられるべき基本的学習方法	28
用いられるべき具体的学習方法	29

適切な環境づくり	32
手本になる	32
学習モジュールを初めて使うとき	33
『共に生きることを学ぶ』は誰を対象に使うべきか？	35
『共に生きることを学ぶ』はどこで使えるか？	35
『共に生きることを学ぶ』を使えるのは誰か？	36
参加者のための手引き	37
困ったときはどうするか	38
私のグループには宗教的多様性がない	38
宗教問題ではなく、社会問題を扱いたい	38
宗教の違いのせいで、グループ内に敵対意識がある	39
参加者が、暴力的な状況にさらされた体験がある	40
ワークショップのトピックのせいで参加者が感情的に取り乱す	41

セクション2 学習モジュール

43

モジュール1：自分と他者を理解する	44
多様性を尊ぶ	45
他者との関わりの中で自分を知る	45
共通の人間性	46
私たちは仲良くできないか？	46
他者の立場に立って考える	47
相互理解のニーズに応える	47
モジュール2：共に世界を変える	48
相互尊重を怠るとどうなるか？	49
私の周りにある紛争、暴力、不正を理解する	49
平和は私から始まる	50
非暴力の選択肢	50
和解への歩み	51
信頼のかけ橋を築く	51
世界を変えるために共に活動する	52

セクション3 進歩をモニターする

53

学習日誌	53
参加者の学習を評価する方法	54
ピア・ツー・ピア・モデル	55
グループシェアリング・モデル	56
〈私と世界〉モデル	57
メンタリング・モデル	58
チェック表モデル	59
手軽にできる「やる気測定」評価モデル	60
影響の評価	61

セクション4 アクティビティ 63

アクティビティ一覧	63
-----------	----

セクション5 資料集 123

物語	123
ケーススタディ（事例研究）	138
道徳的ジレンマ	143
映画・ビデオ	149
歌	156
詩	159
平和の祈り	167
ロールプレイング	175
ピースニュース・カード	177
子どもの権利条約	179
世界人権宣言	182
折り鶴の折り方	183

セクション6 私たちはこうしました 187

セクション7 参考文献 219

出典	219
物語	219
詩	219
平和のための祈り	220
ケーススタディ	220
道徳的ジレンマ	220
アクティビティの補助資料	220
アクティビティの参考資料	221
用語集	222
略語解説	224
倫理教育委員会メンバーリスト	225
倫理教育委員会部会メンバーリスト	226
GNRCコーディネーター	227
付録	228
評価・感想記入用紙	228
影響評価チェック表	230



謝辞

『共に生きることを学ぶ』の執筆にあたっては、数多くの機関および友人の皆様にご支援をいただきました。多くの組織、専門家、著者、同僚の評論者、アドバイザー、コンサルタント、ボランティア、インターン、倫理教育委員会事務局の方々の献身により、本書の出版が可能になりました。ここに、厚く御礼申し上げます。

倫理教育委員会

名誉顧問：エル・ハッサン・ビン・タラール王子

委員：A.T. アリヤラトネ、アドルフ・ペレス・エスキヴェル、クル・ガウタム、ハンス・キュング、ピピファテマ・モサーヴィ・ネザード、アリス・シャルヴィ、ディディ・アサバレ・タルウォーカー、アナスタシオス・ヤノウラトス、ノウル・アマーリ、エマニュエル・マシアス（敬称略）

部会委員：ハサン・アブニマー、スワミ・アグニヴェッシュ、チャランジット・アジットシン、ファリダ・アリ、イブラヒム・アル・シェディ、ケゼヴィノ・アラム、ウェスリー・アリアラジャ、アリシア・カベスド、メグ・ガーディニエール、アンドレス・ゲレロ、マグナス・ハーヴェルスラッド、ハイジ・ハッドセル、ビノッド・ハラン、スチュアート・ハート、アッサ・カラム、メソッド・キラニ、マーレーン・シルバート、ハンス・ウコ、デボラ・ワイスマン、スニル・ウィジェシリワーデナ（敬称略）

GNRC

コーディネーター：ムスタファ・アリ、ヴィンヤ・アリヤラトネ、ラジア・イスマイル、マルタ・パルマ、メルセデス・ロマン、カイス・サディーク、ドリット・シッピンおよび各地域の同僚（敬称略）

GNRC各地域のメンバー

岩崎敦志GNRC事務局長およびGNRC事務局（東京）

子ども・若者

世界各国で実施されたさまざまな試験、研修ワークショップに参加し、資料の開発に貢献してくれたすべての子ども、若者、青年進行役（ファシリテーター）

国際連合および国際機関

ターニャ・ターコヴィッチをはじめとする国連児童基金（ユニセフ）関係者

ヘレン・ゴスラン、リンダ・キングをはじめとする国連教育科学文化機関（ユネスコ）関係者

リソースパーソンとしてご協力頂いた方々

ガーナ・ダッシュ、マハル・ダ・コスタ・ソト、デビッド・アロンド（敬称略）

校正にご協力頂いた方々

町田宗鳳、アディブ・サアブ、ハリム・ヌジウム、メイ・サディーク、アマダ・ベナビデス、ジェニー・ネムコ、ヘザー・ジャービス、レイラ・オマール（敬称略）

制作

アーナウド・ドゥボシェをはじめとするServices Concept社の方々（デザイン、レイアウト、イラスト）
ヘンリ・シュウェイクハルドをはじめとするATAR Roto Presse SA社の方々（印刷）

写真

ムスタファ・アリ（表紙、P189-191、P195、P204-207、P209）
ローランド・カレ（P210、P212）
サティッシュ・カンナ（P198-200）
ピーター・ウィリアムズ（表紙、P216-218）
マリア・ルシア・ウリベ（表紙、P192-197、P200-203、P207-216、P218）

ありがとう基金

藤田尚三事務局長およびありがとう基金事務局（東京本部）
ピーター・ビリングス（編集）

倫理教育委員会事務局

アグネッタ・ウコ事務局長、マリア・ルシア・ウリベ・トーレス、ジャネーヌ・トスバス・デ・ロス・コボス、その他
コンサルタント及びインターン

はじめに

『共に生きることを学ぶ』は、ありがとう基金が発足した子どものための宗教者ネットワーク（GNRC）が、世界規模で推進する倫理教育イニシアチブにおいて初の具体的成果を示すものです。

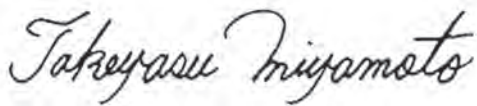
ありがとう基金により設置された倫理教育委員会は、子どもたちへの倫理教育、および諸宗教学習推進を目指した対話や、パートナーシップの提携、そして協調のための国際的リソースセンターであり、活動に携わる方々のきずなを深める場としての役割を担っています。

倫理教育委員会は、その設立当初から、2008年5月に開催されるGNRC第3回フォーラムでの発表に向け、この資料集の作成に取り組んでまいりました。倫理教育の推進は、国連子どもの権利条約に謳われるように、子どもたちが健全に身体的、精神的、道徳的、社会的発育を遂げる権利、教育を受ける権利を享受することの実現に向け、宗教界、国連機関、NGOなど、志を同じくする幅広い分野の方々の協力をいただいて進められました。

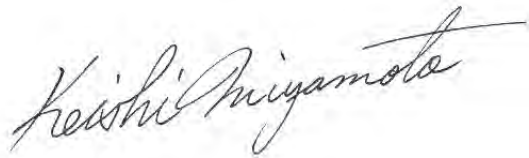
この資料集の作成にあたり、異なる宗教や精神的伝統および一般社会の教育者や学識者、国際機関、NGO、教育機関、子どもたちによる体験を集めました。そして、制作に携わった方々の中でも、とりわけユニセフ、ユネスコの皆さまに感謝申し上げます。

『共に生きることを学ぶ』は、異文化間、諸宗教間の学習、人としての権利、倫理観や価値観が育まれ、子どもたちに生来備わっている精神性の発育を高められる質の高い教育という観点から、倫理教育の課題に取り組んでいます。この新しい資料集を使って、子どもたちの倫理観や価値観をさらに育てるとともに、より良い世界の構築にお役立て頂けることを祈念する次第です。

その実現は私たち全員の手になんてかまっています。



ありがとう基金総裁
GNRC創始者
宮本丈靖



ありがとう基金代表
宮本けいし

ありがとう基金は、世界のすべての子どもたちのためにより良い環境を創ることを使命とする、宗教を基盤とした国際NGOです。

子どものための宗教者ネットワーク (GNRC) は、ありがとう基金の主要なイニシアチブの一つで、諸宗教間の協力を目的としています。

倫理教育委員会は、子ども向けの倫理教育に関する国際リソースセンターおよび対話、パートナーシップ、行動を結び付けるものとして機能します。

『共に生きることを学ぶ』は、倫理教育のための異文化間・諸宗教プログラムです。これは、国連子どもの権利条約 (CRC)、世界人権宣言 (UDHR) 第26条1項、万人のための教育に関する世界宣言、およびミレニアム開発目標に謳われている、子どもが身体的・心理的・精神的 (スピリチュアル) ・道徳的・社会的に健全かつ十分に成長し、教育を受ける権利の実現に寄与することを目指した教育者や青年指導者向けの教材です。

目的

『共に生きることを学ぶ』は、以下を目的としています。

1. 子どもや若者が、他の文化や信条を尊重することを奨励する価値観に基づいて、しっかりした倫理的判断を下せる力を伸ばす。
2. 子どもや若者に、他者との違いへの気遣いや他者についての理解を育む手段として、対話力—人の話を聞き、自分も話す能力—を身につけさせる。
3. 子どもや若者の、和解と多様性尊重の姿勢で社会のニーズに応じていく能力を養い、それによって平和の文化に貢献する。
4. 子どもや若者が自分のスピリチュアリティを大切に思い、育んでいけるようにする。
5. 世界人権宣言やCRCに謳われ、すべての宗教が説いている「人間の尊厳」を確認する。
6. 異なる宗教や民族、文化が並存する世界で、互いを尊重しつつ共に生きる可能性を確認する。
7. 教育者に対し、さまざまな地域や環境で使える異文化間・諸宗教学習のツールを提供する。
8. 文化や民族、信仰や宗教が異なる人々との共生を成功させる方法を開発し、促進する。

子どもと倫理教育

2000年5月、ありがとう基金は、子どもの権利擁護と福祉のための活動を行っているさまざまな宗教の人々の間における相互協力の促進を目的として、「子どものための宗教者ネットワーク」(GNRC)を設立しました。

GNRCは、宗教者のほか、国際機関、各国政府、NGO、学者、実業家をはじめ、職業や階層、年齢、性別を異にする人々と緊密に協力し、支援活動や共同作業を通じて、21世紀の子どもたちのためにより良い環境を創る運動をグローバルに展開しています。

子どものために献身する諸宗教によるイニシアチブの数々は国際社会に歓迎され、ありがとう基金は国連と緊密に協力して、子どもの権利を守る活動を行っています。2002年5月に開催された国連子ども特別総会で、ありがとう基金総裁でGNRCの提唱者でもある宮本文靖・妙智會教団会長は、GNRCの代表として国連総会本会議で演説し、その中で子どものための諸宗教教育を推進する「倫理教育委員会」の設立を提唱しました。この委員会は、宗教者や教育者に加え、子どもの豊かな精神性—倫理観や、宗教や文明が異なる人々を尊重する心—の育成を、国連とも協力しつつ、特別総会の成果文書である「子どもにふさわしい世界」に謳われている「質の高い教育」における不可欠なものとして働く人々で構成されます。

この構想の実現に向けて、GNRCは定期的に会議を開き、倫理や教育の専門家、ユニセフやユネスコの代表、関係指導者および有識者を招きました。こうして2004年5月、スイス・ジュネーブで開催されたGNRC第2回フォーラムにおいて、宮本師の賛同を得て、倫理教育委員会が正式に発足したのです。

『共に生きることを学ぶ』はどのように開発されたか

倫理教育委員会は、さまざまなコミュニティや社会が他者と人間の尊厳を尊重しながら平和的に共生できるよう、異文化間・諸宗教学習を通じた倫理教育を推進しています。この精神によって『共に生きることを学ぶ』は開発されました。

宗教の異なる人々が真に協力し合えるようになることを心から願い、倫理教育委員会は、さまざまな宗教や世俗の伝統に属する学者、教師、教育者を集め、この教材の開発を依頼しました。これらの人々は、多様性が人を豊かにし、他者だけでなく自分自身を理解するのに有効であるという理解に基づき、この教材の開発に参加しました。

『共に生きることを学ぶ』が指針としているのは、いかなるときも人間の尊厳を守るという誓いであり、その目的は正義や人権尊重に対する子どものコミットメントを強化することと、人と人の中や社会の中に協調的な関係を築くことです。『共に生きることを学ぶ』は、子どもや若者により強い倫理観を身に付けてもらうための異文化・諸宗教プログラム実施を支援するツールで、世界中の青年指導者や教育者に提供されています。『共に生きることを学ぶ』は、若者が文化や宗教の異なる人々を理解し、尊重し、また地球はひとつのコミュニティであるという感覚を培う助けとなるように考えられています。また、この教材は、ユニセフおよびユネスコとの緊密な協力の下に開発されました。

本書のタイトル『共に生きることを学ぶ』は、ジャック・ドロロール¹が紹介したユネスコの「21世紀教育国際委員会」の報告書『Learning: the Treasure Within (学習：秘められた宝)』の4本柱のひとつを参考に選ばれました。

『共に生きることを学ぶ』はどこで使えるか

『共に生きることを学ぶ』は、さまざまな宗教的・世俗的背景の中で活用されることを前提に、倫理や価値観の普及に携わる人なら誰でも使える教材として作られました。グローバルなレベルで意味を持ちながら、かつさまざまな文化的・社会的状況に合わせた解釈ができる、柔軟性のある教材の開発が目的とされています。

ローカルなレベルにおいてもこの教材が有効であることを確認するため、これまで多くの地域や文化の中で試験的使用が行われました。（「私たちはこうしました」、187ページ参照）世界10カ国で『共に生きることを学ぶ』を使ったテストワークショップが開催され、そこでは子どもと一緒に活動している各宗教団体や非宗教組織が参加しました。ワークショップでこのマニュアルを使った子どもや若者は、アフリカの伝統宗教の信者、バハイ教徒、仏教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、ブラマ・クマリスのメンバー、そして無宗教派の人など、300人以上に上ります。こうしたテストワークショップに加え、教育、倫理、スピリチュアリティ、異文化間・諸宗教学習、子どもの権利といった各分野の専門家から得た意見やコメントのおかげで、この教材を開発する上での貴重な経験と勉強の機会を得ました。

『共に生きることを学ぶ』の効果は既に現れはじめています。イスラエルで行われたGNRCプログラムでは『共に生きることを学ぶ』を、ユダヤ教徒、キリスト教徒やイスラム教徒の若者グループがイスラエルとパレスチナの歴史スポットを訪ねる6日間の旅の中で使いました。訪問地はすべて、この地域の紛争に象徴的な意味を持つ場所です。若者は一カ所に止まるたび、自分たちの価値観や、そこで共有した歴史に対する異なる見方を話し合いました。彼らはこの体験を、次のように要約しました。

「私たちはみんな一緒に、深い学びの体験に参加しました。互いの歴史、文化、信条について学びながら、同時に自分のアイデンティティを強め、より強く、しっかりした理解を形成したのです。私たちが扱ったのは難しい、厄介な問題でしたが、グループ内の関係を壊すことはなく、相手を傷つけるような議論に訴えることも、話し合いが決裂することはありませんでした。私たちの故郷は、異なる国家や宗教の間に、お互いの孤立という強固な壁が立ちふさがっています。その壁を崩すという点では、私たちのしたことは小さな一歩かもしれませんが、でも重要な一歩を成功裏に踏み出しました。現在の絶望的なムードの中で、こうした小さな一歩は珍しく、貴重なものです。そこに参加したことを、私たち皆が名誉とし、誇りに思うべきだと思います」

インドでも、『共に生きることを学ぶ』を使って1週間の倫理教育ワークショップが開催されました。ニューデリーから参加した15歳のカルパナは、こう述べています。

「他者を尊重することについては、頭では分かっていました。でもここへ来て、それが現実になんを意味するのか、また、私たち若いヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒が一緒になって自分たちのコミュニティをより良くしたいと思ったら、どんな姿勢や行動が必要なのかといったことが分かりはじめた気がします」

ケニアから参加した16歳のモハメドは、倫理教育のテストワークショップで学んだ後、それを生かしてケニア北部に平和クラブを設立しました。モハメドは村に若者を集め、村が直面するさまざまな課題に対処する、非暴力的な方法を策定しました。平和に向けて変化を起こすため、若者の積極的な活動を結集したのです。

1 <http://www.unesco.org/delors/ltolive.htm>

コロンビアとエクアドルが接する一触即発の国境地帯では、教師、親、子どもを対象に、倫理教育ワークショップが開催されました。事例研究、ロールプレイ、ディスカッションを用いて、参加者たちは紛争で問題となっている点をはっきりさせ、非暴力的な代案を考え、一人ひとりが平和の構築に向けて積極的に努力することを誓いました。コロンビア人の進行役のひとり、このワークショップの効果について、こう述べています。

「コロンビアでは暴力的な紛争が続いており、不幸なことに、直接被害を受けた子どもたちの中には、その影響が行動や態度に刻み込まれてしまった子もいます。そのせいで他者に恨みを抱いたり、他者に我慢できなくなったりすることがあるのです。でも、私が見て嬉しかったのは、故郷を追われ、難民としてエクアドルで暮らすコロンビアの子どもたちが、自分の体験や不安を打ち明けて、どうしたらもっと他者を尊重できるようになるか、差異を受け入れるにはどうしたらいいか、自分の権利が侵害されても非暴力的に対処するには、といったことを、自ら提案していたことです。彼らは、自分が問題の一部ではなく、解決策の一部になれることを発見したのです」

『共に生きることを学ぶ』は、順応性の高い教材です。どのような文化や宗教、社会背景に置かれた子どもにも活用でき、異なる環境や文化を尊重し合う心や共通の価値観を育むことができます。子どもは生まれながらに豊かな精神性を発達させる可能性や、より良い世界への希望を持っています。この教材は、そうした可能性を伸ばすスペースを提供し、世界中の子どもたちが置かれた状況を変えることに貢献します。利用に必要な情報はすべて、セクション1の「利用の手引き」に掲載されています。

ユネスコおよびユニセフは、『共に生きることを学ぶ』の開発に深くかわかり、多文化・多宗教社会を念頭に置いた質の高い教育に大変有用な教材として推薦しています。²ユネスコの「異文化間教育ガイドライン (Guidelines for Intercultural Education)」は、『共に生きることを学ぶ』の哲学やアプローチについて、次のように支持を表明しています。

「宗教教育は、自分自身の宗教やスピリチュアルな慣習について学ぶことであるとも、その他の宗教や信仰について学ぶことであるとも言える。これに対して諸宗教教育は、宗教の異なる人々の間に、積極的な関係を形成することを目的としている」³

子どもはみんなの倫理的義務

「今この瞬間も、世界中に約20億人の子どもが暮らしている。この20億の若い体と心は、人間として途方もない可能性を秘めており、慈しむ価値のある存在だと、私たち皆が思っている」⁴

私たちの周囲は、創造の美と驚異に満ち溢れています。それは、いのちの奇跡です。人間の中にも、いのちを豊かにする、とてつもない可能性が秘められています。これらは生きとし生けるものすべての幸福のために役立てなくてはなりません。しかし、私たちの住む世界は、暴力や戦争、貧困や不正がはびこる世界でもあります。

子どもの成長と発達には、身体、心理、社会、文化、精神、宗教、環境といった面が関わっています。悲しいことに貧困や最低限の設備を利用することも教育を受けることもできないため、また病気や栄養失調によって、私たちの子どもの多くは今もお苦しんでいます。

子どもの権利条約 (CRC) は、その第12条で子どもには、自分に関係する事柄について意見を述べ、耳を傾けてもらう権利があると定めており、それを支える精神については前文で次のように言明しています。

「子どもは、社会において個人として生活するための十分な準備が整えられるべきであり、かつ、国際連合憲章において宣明された理想の精神並びに特に平和、尊厳、寛容、自由、平等および連帯の精神に従って育てられるべきである」

² www.unesco.org/education

³ ユネスコ「異文化間教育ガイドライン」14ページ

⁴ Kul Gautam, Towards a World Fit for Children, WCC Journal on Health and Healing, Issue No 179, January 2005, p. 5

そして、

「子どもの保護および調和のとれた発達のために、各人民の伝統及び文化的価値が有する重要性を十分に考慮すべきである」⁵

すべての子どもは将来への望みであり、聖なる贈り物であり、未来を印す生き証人です。子どもは生まれながらに、希望に満ちて前向きに生きる力を持っています。問題は、その力をどうやって伸ばすかです。

この課題に取り組むために、倫理教育委員会の構想は以下の具体的なビジョンを指針としています。

「私たちが思い描いている世界は、すべての子どもたちが豊かなスピリチュアリティを育むことができる世界です。それは、倫理的価値観を大切にし、異なる宗教や文明を持つ人々と連帯して生きることを学び、『神』『究極の現実』『神聖なる存在』などと呼ばれるものに対する信仰心をもつということです」⁶

また、倫理教育委員会の構想は、以下の信念を支持します。

「倫理教育は、子どもたちが生まれつき備えている、自分の仲間や家族、コミュニティの幸福に積極的に貢献する力を伸ばします。それが、ひいては人類という大家族が一層の正義、平和、思いやり、希望、尊厳のある環境の中で繁栄していく助けになるでしょう」⁷（訳注2）

すべての子どもを慈しむことは、理想であると同時に、社会全体の倫理的義務でもあります。

贈り物としての子どもと子どもへの責任

ある意味では、子どもは私たちのものです。私たちが子どもをこの世に送り出し、子どもの面倒を見ているのですから。しかし、子どもは私たちの所有物ではありません。子どもは独立した個人であり、やがて花開いて一人前の大人になります。カリール・ジブランは『預言者』で、こう述べています。

それから、胸に赤ん坊を抱いた女が言った。「子どもについて話してください」

すると彼は、こう言った。

あなたの子どもは、あなたの子どもではない。
 彼らは、生命を求めいのちの息子であり、娘なのだ。
 あなたを通して生まれたが、あなたから生まれたのではない。
 あなたと一緒にいるが、あなたのものではない。
 愛を与えるのは良いが、考えを押し付けてはいけない。
 子どもには子どもの考えがあるのだから。
 子どもの体を家に置くのは良いが、魂を閉じ込めてはいけない。
 子どもの魂は明日という家に住んでおり、
 あなたがそこを訪れることは、夢の中ですらできないのだから。
 子どもになろうと努めるのは良いが、子どもを自分に似せようとしてはいけない。
 いのちは後戻りすることも、昨日に留まることもない…⁸

⁵ 「子どもの権利条約」前文

⁶ 倫理教育委員会「ビジョンおよびミッション」

⁷ 同上

⁸ Khalil Gibran, The Prophet, Chapter entitled: Children. Arrow Books Ltd. New York. 1991

親や大人は誰でも、ジレンマに直面しています。私たちは子どもという贈り物を与えられています。子どもは私たちの保護下にあり、私たちには、彼らが大人になるまでを導く責任と機会があります。とはいえ、私たちは自分のものの見方を子どもに押し付けたくはありません。そんなことをすれば、子どもが自分の人生を生きる、つまり、自分の人生を見出し、そこから学び、自分の価値観を形成する自由を奪うことになるかもしれないからです。責任感と見識をもって謙虚な気持ちで子どもを育て、教育しなくてはなりません。それは私たちが、子どもと世界に対して負う義務です。

子どもは生活から学ぶ

子どもは、この世に生を受けた瞬間から学びはじめます。周囲の環境、日々の体験そして私たちが見せるお手本や行動がすべて、子どもが自分と世界をどのように理解するかにかかわってきます。「子どもは生活から学ぶ (Children Learn What they Live)」はよく引用される詩ですが、この現実を端的に表現しています。

けなされて育つと、人をけなす子どもになる
とげとげしい環境で育つと、乱暴な子どもになる
馬鹿にされて育つと、引っ込み思案な子どもになる
自尊心を傷つけられて育つと、
誇りを持たない子どもになる

(だが)

広い心で接すれば、我慢強い子どもになる
励ましてあげれば、自信に満ちた子どもになる
褒めてあげれば、人の長所を見つける子どもになる
公平であれば、正義感のある子どもになる
守ってあげれば、人を信頼できる子どもになる
認めてあげれば、自分を愛せる子どもになる
和気あいあいとした環境で育てば、
子どもは、この世には愛があると思えるようになる⁹

学びの中心は、常に“体験”です。体験は最高の教師です。このことはいくら強調しても強調し過ぎることはありません。子どもは理想的な世界に生まれてくるわけではなく、さまざまな“力”を「観察し・体験し・評価し・結びつけ・対処する」というプロセスを通じて学びます。ところが、そうした力は、子どもにも親にもほとんどコントロールできない場合が多いのです。現実には複雑で、価値観と価値観が衝突し、相反する真実がそれぞれ「こっちが正しい」と主張し、何を選んだらいいのか混乱するばかりです。こうした現実の中で、正しい選択をする助けとなる価値観を子どもに身につけさせる方策が、切実に求められています。

9 Dorothy Law Nolte, Children Learn What They Live. Workman Publishing Company. New York. 1998

倫理教育と人権

倫理教育委員会のビジョンと任務は、世界人権宣言の中の、思想や信条、意見や表現の自由の権利、教育を受ける権利、休息や余暇を持つ権利、十分な生活水準や医療を受ける権利、コミュニティの文化生活に参加する権利を謳った条項と特に共鳴するものがあります。また、倫理教育委員会は子どもの権利条約にも全面的に賛同しています。『共に生きることを学ぶ』は、特に第29条に対応しています。この条項には、子どもの教育は、

- a) 子どもの人格、才能並びに精神的および身体的能力を、可能な最大限度まで発達させ、
- b) 人権および基本的自由並びに国際連合憲章にうたう原則の尊重を育成し、
- c) 子どもの父母、子どもの文化的アイデンティティ、言語および価値観、子どもの居住国および出身国の国民的価値観並びに自己の文明と異なる文明に対する尊重を育成し、
- d) すべての人民、種族的、国民的及び宗教的集団、原住民である者の間の理解、平和、寛容、両性の平等及び友好の精神に従い、自由な社会における責任ある生活のために子どもに準備させ、
- e) 自然環境の尊重を育成すること

に向けられるべきであると書かれています。

子どもの権利条約は、子どもに対し責任ある接し方をするための手段を提供しています。すべての国が署名し、2カ国を除いてすべての国が批准したCRCは、子どもの権利を3つの分野に分け、すべての子どもは以下の権利を有する、としています。

- > 生命、健康、教育、発達の権利
- > 安全と庇護の権利
- > 参加の権利

CRCは、子どもの権利を全体として守るために、4つの一般原則を定めています。

- > 生存と発達の権利
- > 差別を受けない権利
- > 意見を聞いてもらう権利
- > 子どもの利益を最優先すること

『共に生きることを学ぶ』は、子どもの権利条約に謳われた、子どもが教育を受け、また身体的、心理的、精神的、倫理的、社会的に健全かつ十分に発達できる権利を実現するための一助として開発されました。

倫理と倫理教育

人間が集団でコミュニティを作って暮らすようになって以来、コミュニティの幸福のために、行動を道徳で規制することが必要になりました。これが倫理です。『共に生きることを学ぶ』の利用にあたっては、倫理、価値観、道徳教育とは何か、何を意味するのかについて、利用者がある程度の共通認識を持つことが重要です。

「あなたにとって倫理とは何ですか」という質問をしたら、多分、次のように、いろいろな答えが返ってくるでしょう。

「倫理とは、これは善だとか、これは悪だとかいう自己の感情と関係がある」

「倫理は、自己の宗教的信念と関係がある」

「倫理的とは、法律を守ること」

「倫理とは、社会的に認められる行動基準」

多くの人は、倫理を自分の感情と同一視します。しかし、倫理的であることは、単に心の命じるところに従うことではありません。感情は、何が倫理的かを決める根拠にはならないからです。

また、倫理を宗教と完全に同一視することもできません。大抵の宗教は、高い倫理規範を説いています。でも、もし倫理が宗教に限定されるなら、信者にしか適用されないことになります。しかし、倫理は信者の行動だけでなく、信仰を持たない人々の行動にも適用されるものです。

倫理的であることは、単に法律を守ることだけではありません。確かに法律には多くの場合、倫理的規範が示されており、ほとんどの市民はそれに従います。しかし法律も感情と同じく、倫理から逸脱することもあります。歴史上には、奴隷制度が合法だった社会がありました。女性は男性より劣った存在だと、法律に明記されている幾つかの社会もあります。ヨーロッパには、女性に投票権がなかった時代を覚えている女性が今でもいるのではないのでしょうか。

倫理的であることは、「社会が許容すること」をすることとも違います。社会の行動規範が、倫理的であることから逸脱することもあるのです。

また、もし倫理的に行動することが「社会が許容すること」をすることになるなら、最初にその基準を定めなければなりません。議論のある問題、つまり私たちを一番悩ませる問題については、調査をしさえすれば事足りることになります。また、たとえそうしても、社会のコンセンサスが得られなければ、倫理的な行動を明確に規定することは難しくなります。

では、倫理とは一体何なのでしょう？ 第一に、倫理とは入念に考察された善悪の基準で、人間がどう行動すべきかを定めた決まりです。倫理には普通、権利・義務・社会への貢献・公平さ・徳という面があり、レイプや盗み・殺人・暴行・誹謗中傷・詐欺などをしてはいけないという、理にかなった義務を課す基準でもあります。また、倫理規範が奨励するものとして、「正直さ」、「思いやり」、「忠誠心」、「人間の基本的ニーズの充足」といった徳目が挙げられます。社会学者ヨハン・ガルトゥングは、約50カ国の人々を対象に、この世になくても済まないものが何かを質問し、その調査結果から「幸福」、「アイデンティティ」、「自由」といった、人間の基本的ニーズを導き出しました。¹⁰

第二に、倫理とは人間の倫理的基準の研究と開発のことです。感情、法律、社会規範は、倫理的であることとは食い違う場合があるので、基準が理にかなっていることを確認する必要があります。

10 Johan Galtung, Human Needs, Humanitarian Intervention, Human Security and the War in Iraq, keynote address, Sophia University, Tokyo, 2004
http://www.transnational.org/forum/meet/2004/Galtung_HumanNeeds.html

それ故、倫理とは、私たちが作る社会や制度が理にかないう、根拠のしかりした基準を満たしていることを確認するために、私たちの道徳的信条や道徳的行動を継続的に研究する努力をも意味します。その基準が宗教的または文化的信念の体系から生まれたものであろうと、国際文書によるものであろうと同じです。¹¹

倫理、価値観、道徳

「倫理」「価値観」「道徳」の概念を区別しようとする、それが困難なことにすぐに気がつきます。

辞書 (Compact Oxford English Dictionary) においては、以下のように定義されています。¹²

倫 理： 人間の行為の道徳的価値や、人間の行為を制御すべき決まりや原則を対象とした哲学的研究。

価値観： 道徳的原則、あるいは個人や集団が何を容認するかの基準。

道 徳： 人間の行動、特に善悪、正邪の区別の選定に関連した事柄。

倫理とは、道徳規範の設定を容易にする信条、思想、理論のことです。道徳は、行動とより密接に関係しています。価値観とは、集団、コミュニティや社会が許容することに相当します。どれも大切であり、互いに関連があります。高い基準を持っていても、それを守れない人もいます。それは、倫理観は強くても、道徳心が弱いということです。また、ある集団の価値観が、別の集団では容認されない場合もあるでしょう。

例えば、ポール・リクール¹³ やギー・ブルジョ¹⁴ のようなフランスの哲学者は概して、「倫理」という言葉を人間行動についての根源的な疑問 (生命の終わりと意味、義務と責任の根拠、善悪の本質、良心の価値など) を考察するときだけ使い、その適用や具体例や行動を表すときには「道徳」を使っています。また、「倫理」には“問い”や開かれた心や精神という含みがあることが多いのに対し、「道徳」は定められた規範の体系、つまり行動に一定の方向性を与えるためのルールの解釈であることが多いのです。

倫理の対象は“関係”

倫理的要求は、そこへたどりつく道筋がどうであれ、つまるところは“関係”を対象としています。デンマークの神学者K・E・ロイシュトルップは、人間についての倫理的要求は、プリズムを通った光のように屈折しながら、私たちが持つ他者との様々な関係を明らかにしているという考えを紹介しました。¹⁵

自分自身や他者、そして生きとし生けるものを育む地球とどのような関係を持つかは、倫理観や価値観が一番はっきり現れる部分です。倫理的規範や倫理的行動の源泉は、「神」の存在に帰することもできれば、偉大な英知や人権の原則を備えた「神」や「精神的な師」の啓示に帰することもできるでしょう。

倫理的行動の源泉は、ひとつとは限りません。肝心なのは、すべてががつながっているいのちの営みを理解し、それに対応する上で、倫理はどれくらいの価値があるのか、また、人道的価値観を養い、共同体意識を高めるために、倫理はどれほど役立つのか、ということです。

11 Adapted from Hans Ucko: "Ethics, law and commitment," Current Dialogue, Issue 46, December 2005, <http://wcc-coe.org/wcc/what/interreligious/cd46-09.html>

12 Compact Oxford English Dictionary, Oxford University Press. 2005

13 Paul Ricœur, *Soi-même comme un autre*, Paris, Seuil, 1990

14 Guy Bourgeault, *L'éthique et le droit face aux nouvelles technologies médicales*, Montréal, Les Presses de l'Université de Montréal, 1990

15 K.E. Loegstrup, *Ethical Demand*, University of Notre Dame Press, Notre Dame and London, 1997

すべての宗教コミュニティは、倫理を人生の特定の一部分と捉えるのではなく、人間の営みすべてに適用されるものと考えています。それは、個人、家庭内、仕事場、社会に適用されています。例えば、イスラム教の倫理は、一般的に知られているあらゆる道徳的美徳から成っており、個人や集団の生活の隅々にまで行き渡っています。家族との関係、市民としての行動、政治・経済・法律・教育・社会といった分野の活動も倫理の範疇です。イスラム教の倫理は信者の生活を、家庭から社会、食卓から戦場や平和会議に至るまでカバーしています。文字どおり「ゆりかごから墓場まで」です。

このように個人とコミュニティの双方を重視すると言えば、アフリカの伝統的宗教のほとんどに、こんなことわざがあります。「人は、他者との関係においてのみ人である」

このような人と人のつながりを考えて、私たちは、子どもたちの共同体意識を高める助けになるよう倫理的価値観を探しています。この場合の共同体とは、身近な人たちはもちろんですが、民族、国家、人種、文化、宗教の壁を越えたコミュニティでもあります。相互依存的な世界において、私たちが求め、育んでいきたいのは、互いに相手に対して責任を持つことの大切さを育成する価値観です。

永続する価値観はあるか？

多くのコミュニティは倫理的価値観を、態度や行動パターンを規定する具体的な言葉で表現します。例えば愛や思いやり、正義や公正さ、正直や寛容、非暴力や自制といった言葉です。もっと包括的な大原則が強調されることもあります。「自分自身と同じように隣人を愛せよ」とか、「自分がされたくないことは、他人に対してもするな」というようなことです。これは、こうした原則に従って生きれば倫理的に良い結果が出ると信じられているからです。子どもの特定のスキルや能力を伸ばすことに力を入れていけば、それが自然に倫理的行動につながっていくのではないのでしょうか。

ユネスコは、人間の発達に関して、子どもが自分の世界と創造的な関係を持つことのできるいくつかの普遍的な価値観を特定しています。子どもが自尊心を持つこと、選択能力を養うこと、自分の選択に対して責任を持つこと、公平な決定を下す能力、他者や他者の意見を尊重する心構え、自ら進んでコミットし、そのコミットメントを守ることなどです。これらは子どもたちが倫理的に考え、行動できるようにするために、彼らの内に育まなければならない価値観と見なされる多くの資質の好例です。¹⁶

他者との関係は、しばしば人間のアイデンティティを形成します。女の子と男の子では、母親や父親との関係が違ってきます。学校に通えば、そのこともまたアイデンティティの一部を形成します。家庭や文化的環境も同じです。伝統は、家族の伝統であれ、地域や国家の伝統であれ、アイデンティティや信条や価値観を形作ります。出来事もまた、個人、国家、地域、グローバルなレベルであれ、アイデンティティの形成のプロセスに寄与しているのです。

宗教的・精神的（スピリチュアル）・文化的アイデンティティも同じように形成されます。さまざまな宗教的または文化的信念や慣習に接し、各々の宗教や文化が持つ独自性に触れるからといって、自分自身の宗教やスピリチュアリティや文化の伝統に忠実でないことにはなりません。世の中には他にも宗教や文化があるという現実が、権威者からオープンで温かく愛情のある、なごやかな雰囲気の中で、恐れではなく尊敬や愛情を感じさせるやり方で伝えられるなら、それは自分の伝統に対する脅威とはならないのです。教育環境全体は、互いを知り、受け入れ、他より優れ、特別扱いされる特定の宗教や慣習などなく、皆等しく正当であるという考え方によって体现されなくてははいけません。多様であっても、すべてに共通する部分があることを強調する必要があります。それは人間性です。イメージとしては、何もかもが溶けて混じり合う「るつぼ」ではなく、「モザイク」を思い浮かべてください。個々の文化的アイデンティティが多様性から生れる豊かさを確認しつつ、それぞれの重要性を持ち正しく認識された状態です。

16 ユネスコはこの他にもいくつかの「人道的価値観」を『Eliminating Corporal Punishment: The Way forward to constructive Child Discipline』(Stuart N. Hart (Ed) . Paris, UNESCO, 2005) に挙げている。これらの価値観は国際的な専門家5人からなる専門委員会により、文化の壁を越えた倫理的・道徳的価値観を反映すべく定められた。

自分自身のアイデンティティの感覚を持つためには、“自主性”が必要とされます。つまり人に頼らないで済むこと、思想・言論・行動の自由、そしてもし自分の信条が多数派や政府当局等の信条と対立しても、検閲や懲罰を受ける恐れのない自由のことです。自尊心や自信は、なくては他者から尊敬されないというだけでなく、他者を尊重するための土台としても不可欠です。

倫理を、日々の生活の中で実践される個人の価値観の問題と捉えてしまうのは、よくあることです。しかし今日の世界では、私たちはグローバルなレベルで考え、行動せざるを得ません。貧困や欠乏に苦しむ何百万という人々、地球資源の乱用、環境危機、暴力や戦争の蔓延、強欲と利殖の文化。これらが、グローバル化した暮らしの中で倫理的価値観を行使させようとする圧力となって、私たちにのしかかってきます。私たちが子どもたちとともに倫理的に繊細になることによって、文化や文明、国家や民族の壁を越え、宗教的アイデンティティやコミットメントにこだわらずに関係を築いていくことができるのです。現在に対処しつつ未来に備える方向性を、多くの人が求めはじめています。

倫理的原則と倫理教育で教える基本的価値観

すべての宗教コミュニティが賛同し、従うことのできる共通の倫理的価値観を見つけようとする試みは、これまでもありました。その1つが、1993年にシカゴで、ハンス・キュングの主導の下に開催された万国宗教会議百周年記念大会にて発行された文書です。「Towards a Global Ethic (グローバルな倫理を目指して)」と題されたこの文書は、今では広く知られて世界中で受け入れられており、人類全体の指針となる共通の価値観について異なる視点を持つ人々の間での合意の可能性を示すアイディアが含まれています。¹⁷

1993年以降も、あらゆる分野で、グローバル・コミュニティの賛同を得られるような倫理基準を作成するという試みがさらに続けられました。世界の人々の宗教、文化、生き方はあまりにも多様なため、共通の合意に達し、それを実行するのが困難になっています。しかし、それでも人類全体として、未来の世代のために倫理原則における合意に向けて努力すべきだという点についてはコンセンサスがあるように思われます。

より良い未来を築く作業の中心となるのは、子どもたちが倫理的価値観を培う手助けをすることです。そして、グローバルな視点で発展した価値観は、ローカルなレベルにおいても意味のある価値観でなくてはなりません。当然のことながら、場所も文化も異なるコミュニティが、子どもの内に核として育むべき倫理的価値観がどのようなものかを決める最適な立場にあるからです。しかしながら、私たちは、各コミュニティが独自に到達した倫理規範にとっても共通点が多いことに驚くことになるかもしれません。

選択能力：最高の贈り物にして最も難しい責任

選択する能力は、人間が生きていく上での最高の贈り物のひとつです。もちろん、常に選んだものが手に入るとは限りません。それでも私たちには、違いを見分け、嫌なものは拒否し、好ましいものを選ぶ能力と権利があります。人類誕生の物語に関してユダヤ教の伝統の解釈のひとつでは、最初の男女アダムとイブが暮らしていたエデンの園には、2本の木が生えていました。生命の木と、善悪の知識の木です。2人は、この2本の木の実を食べたらどうなるか知らされていました。しかし、私たちが知っているように、彼らは善悪の知識の木の実を食べたのです。間違えたのでしょうか、それとも意図的な選択だったのでしょうか？

¹⁷ Declaration Toward a Global Ethic. The Council of a Parliament of the World's Religions
http://www.parliamentofreligions.org/_includes/FCKcontent/File/TowardsAGlobalEthic.pdf

ハロルド・クシュナーはこの選択が私たちが人間たらしめる所以であると示唆しています。

「私たちの最初の祖先は、永遠に生きることも、人間として生きることを選んだ。彼らは永遠の命より道徳心、つまり「善悪の知識」を選んだ。永遠の命を与えてくれたはずの「生命の木」をはねつけ、「善悪の知識の木」を選んで良心を授かったのだ。その埋め合わせとして神は、自らと同じく善悪を知る能力を得た人間に、新たな生命を生み出すという神自身の神聖な力を贈り物として授けた。私たちは、永遠に生きるのではなく、子どもを産み、育て、教育し、魂や価値観、名前までも引き継がせることで、死を上手に逃れている」¹⁸

選択肢の中から選ぶという人間の能力は、すべての宗教で認識され、肯定されています。しかし同時に、選択能力は、最も厄介で難しい責任です。選択には、区別し、違いを見分け、決定を下す能力が要求されます。その一方で、自分自身のみならず、他者や周囲の世界にも影響を及ぼす決定を下すというのに、その結果や影響を十分に確認できないというジレンマに直面します。倫理原則や倫理的価値観は、私たちがそうした選択をする際、大きな助けになります。

人間の尊厳を守る

人間の尊厳という概念は、倫理教育が価値観や倫理原則を培うことにおいて奨励しようとしているものをうまく捉えています。人の尊厳が踏みにじられる時に、その人の人間性が否定されます。人間の尊厳は、多方面から脅かされることがあります。

生きていくために最低限必要なものがないという状態は、人間の尊厳に対する侮辱です。シーク教に「貧者の口は神の宝箱」ということわざがあります。この言葉の裏にあるのは、すべての宗教の基礎となる根本的な価値観のひとつ、つまり人間の尊厳です。このことわざでは、貧困や飢餓や欠乏を神に対する侮辱と見えています。シーク教の礼拝は毎回「ランガル」と呼ばれる食事会で終わります。ランガルは万人に開かれており、カーストも社会的地位も、宗教や国籍も問いません。それどころか、グルドワラーと呼ばれるシーク教の寺院は、終日、台所を開けていて、信者だけでなく、求められれば誰にでも食事を提供します。

イスラム教では、貧者の必要に応えることが信仰の5本柱のひとつとされており、困っている人を助けるために収入からその一定の割合を寄進するよう、信者全員に求めています。神を愛し、隣人を自分と同じように愛することは、ユダヤ教とキリスト教の中心的な戒律です。さらにユダヤ教では、人間は神の姿に似せて創られたとされています。ヒンズー教のヴェーダ哲学では、究極の現実であるブラフマンと人間の現実であるアートマンを、別々ではなくひとつの存在と見えています。ブッダの教えも、カーストによる差別を疑問視し、男女平等を奨励しています。

各宗教の伝統が常にこうした教えに忠実であったわけではありません。ときには各宗教が、自己のコミュニティの内外の人々の尊厳を傷つけるような仕組みや慣習を作ったこともあります。しかし、すべての宗教は、人間の尊厳を否定する行為を逸脱と見えています。尊厳は、人間であることを意味するものの一部なのです。

尊敬と相互理解

個人が尊厳を持ち、尊重される権利は、「世界人権宣言」や「子どもの権利条約」といった人権文書の中核となっています。

18 Harold S. Kushner The Lord is My Shepherd. (New York, USA) , First Anchor Books Edition, 2004, p. 23-24

生存、発達、保護、参加という普遍的権利については、大半の国が合意しています。年齢・性別・人種・宗教は関係ありません。大人の行動や判断に大きく依存している18歳未満の子どもの権利が守られているかどうかを国際委員会は監視し、その結果や評価を各国に公式文書で詳しく伝えています。こうした文書や国連の他の人権文書に謳われた権利は、普遍的かつ奪うことのできないものであり、文化や宗派にかかわらず、すべての人に教えられるべきです。こうした権利は人道の根本原則であると世界が合意しており、いかなる団体や組織も、これを希釈、占有、変更することはできません。

宗教や世俗の伝統は、ほとんどが自分たちの信じていることが正しいと確信しています。それを他者と分かち合いたいと願う者もいるかもしれません。しかし、今日では、ほとんどの伝統は相互尊重を、私たちのあらゆる関係に知らしめるべき、不可欠な価値観と認めています。相互尊重という考え方が大切なのは、それが差異を肯定し、“差異”を“悪”と混同せず、自然かつ正当な差異が分断に発展することを防ぐからです。互いに理解し合い、差異と類似の価値を認めれば認めるほど、相互尊重も発展します。相互尊重は、私たちが差異を超えて関係を築く助けになり、互いの間違いを正し、互いを豊かにし、自分に反省の目を向けるというプロセスにも役立ちます。

すべての人間の尊厳を尊重することが、子どもの倫理教育において、根本的な価値観や倫理原則になり得るのは間違いありません。人間の尊厳を支持・擁護することは、子どもや若者が他者を人間として自分と同じように尊重し、価値を認める助けになる、ある1つの価値基準を持っていることを暗に示しています。この価値観を備えた人は、他者との間に健全な関係を築くのに役立つ態度や心構えを発揮することができます。

尊厳は、多様性を保つ意味でも重要です。なぜなら一部の宗教は歴史的に、他者との関係において、二者択一的な姿勢をとってきたからです。「我々が正しいなら、彼らは間違っている」、「我々に真実があるなら、他の者に真実はない」、「我々のやり方が人間の運命を実現することにつながっているなら、他のやり方は誤った方向につながっている」というわけです。

共感と「他者の身になって考える」能力

人を思いやる関係の中心には、必ず共感があります。共感とは、他者の体験に入り込み、その人の喜びや悲しみ、幸福や苦悩を理解し、感じ取る能力です。

共感とは、人間が持つ2つの重要な能力が1つに結びついたものです。それは、分析力と同情心、知性と心の働きです。分析とは、問題について事実を集め、状況を観察し、根本原因を割り出して解決策を提案すること。同情とは、他者の気持ちを感じること、苦しんでいる人の痛みや腹を立てている人の怒りを感じ取ることです。

アメリカ先住民スー族の古い祈りに、こんな言葉があります「おお、偉大な精霊よ、我に与えたまえ、他者を非難したり批判したりする前に、その人のモカシンを履いて歩く（その人の身になって考える）だけの賢さを」。私たちが人を思いやる時、他人は自分と同じはずだという考えを脇に置き、相手が何か独自のものを関係に持ち込んだという事実を受け入れます。また、他者が不当な扱いを受けているとき、それと気付くのも、その不正を正そうと決意するのも思いやる心の働きです。

すべての宗教は、貧しい人や弱い立場の人、抑圧された人に対する共感を人々に呼びかけます。ユダヤ教の伝統では、それをこのような言葉で正当化します。「…あなたもエジプトでは奴隷だったのだから」。

キリスト教では使徒たちが、こう諭されます。「自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちの思い、自分も苦しみを受けているような気持ちで、虐待されている人たちのことを思いなさい」。イスラム教では、ラマダーン（断食月）は、「忍耐と共感と自浄の月」と呼ばれます。仏教の教えでは、共感とは愛のこもった優しさであるとし、それは、単なる哀れみの一形態である同情をはるかに超えて、絶対的かつ即時的に他者と同化する境地に至ることだと理解されています。人権は、絶対的平等の上に成り立ちます。権利は普遍的で、さらに一部の人は、子どもの権利条約に謳われているように、他者の権利を守る具体的な責任を負っています。他者の権利を守るために心を砕くことは、宗教にせよ世俗の伝統にせよ、根本にかかわる重要なことです。

他者の体験への共感を求めていくことは、おそらく私たちが子どもに伝えることのできる、最も大切な価値観の1つでしょう。

個人の責任とみんなの責任

世界のさまざまな問題に対処する上で「責任」という言葉がどれほど重要か、私たちはますます強く意識するようになっていきます。多くの人は「権利」はすぐ主張するのに、権利に伴う「責任」には気づきません。私たちは子どもの育て方に責任があります。この責任をおろそかにすると、子どもは道を誤ります。政府には、社会のまとまりと平和を維持する責任があります。この責任を無視すると、社会が混乱に陥る可能性があります。資源が公平に配分され、基本的なニーズが確実に満たされるように計らうのは、社会の責任であり義務です。この責任を放棄すると、争いや暴力が起こる可能性もあります。あらゆる人には、地球を大切にすることがあります。この責任が果たされなかったために、環境は大惨事の一手手前まで来ているのです。

こうして列挙していくと、ほとんどすべての個人的・社会的・グローバルな関係が含まれていきます。すべての関係は、お互いに対する責任と、社会に対する責任を果たす各々の個人とに依存しています。互いを大切にすることはみんなの責任です。それを果たせば、より公平で平和な世界に暮らすことができるようになります。

責任は、自由に取り捨選択できるものではありません。それは根本的な倫理的価値観であり、子どもが他者や周囲の世界と関係を築きはじめるその時から、彼らの心と精神にしっかりと刻み込む必要があります。

和解と「橋渡し」へのアプローチ

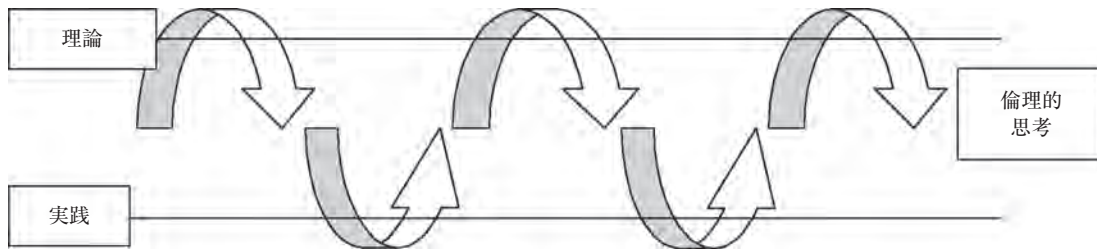
多くの人は和解を、平和の構築や個人レベル・共同体レベルでの関係修復への一段階と見ています。しかし今日、和解は現実的な行動というだけでなく、生きる姿勢であるという認識が広がってきています。言い方を変えれば、和解は状況改善の手段のみならず、共同体で暮らしていれば必ず起こる問題や、激しい意見の相違や争いごとに対処する姿勢です。和解が倫理的価値観として注目を浴びようになったのは、人間には差異や意見の相違を暴力で解決しようとする傾向があるからです。暴力は、争いに対処する簡単で手取り早い方法と考えられているようです。しかし、長期的な解決策にはなりません。かえって憎しみや不満を募らせるだけです。和解の精神は今の時代において必要不可欠な倫理的価値観であることを、強調しておくなくてはなりません。

『共に生きることを学ぶ』では、多くの宗教や文化が並立する多元的なグローバル社会において、どうしても倫理教育に含めなくてはいけないと思われる4つの倫理的価値観に焦点を絞っています。尊敬・共感・和解・責任の4つです。これで全部というわけではなく、これだけあれば他の価値観は不要というわけでもありません。子どものための倫理教育の目的は、一通りの価値観を子どもに植え付けるのではなく、多元的な世界で生きていくために必要なスピリチュアリティを培うことです。

また、倫理的価値観とスピリチュアリティは別々の行動指針ではなく、関連し合い、互いを高め合うものです。スピリチュアリティを備えた人は、倫理的に高潔な人です。そして、倫理的に高潔な人は、他者が見習いたくなるようなスピリチュアリティを示すのです。

倫理教育

倫理教育委員会は、他者への態度や接し方を自分自身に関係のあるものと考え、それを推進します。



この図は、らせん状に発展する学習のプロセスを示しています。子どもや若者は、自由な批判的思考を伴う学習を通じてこそ、自分自身、他者、環境、そして「神」「究極の現実」あるいは「神聖なる存在」と呼ばれるものと、「ポジティブな関係」を築くことができるのです。ポジティブな関係を築くことで、子どもの生来の精神性が豊かにされ、成長、異なる宗教や文明の人々に対する相互理解と尊敬への道が開かれます。そのことによって子どもや若者は、人間の尊厳を保護し、連帯、個人と集団の責任、和解を促進する価値観とその実践に基づいた世界を他者とともに構築するパートナーとなることができるのです。この学習は、子どもや若者に倫理や価値観を土台とした生き方を教え、その実践に参加させ、自由な批判的思考を持つゆとりを与え、スピリチュアリティを育んでいきます。

倫理教育委員会は、多元的なグローバル社会における倫理についての、新しいダイナミックな考え方を推進します。これは、すべての宗教や社会が独自で行えることですが、諸宗教的に行うという点がこのイニシアチブのユニークな点です。倫理教育委員会は、新たな宗教を提唱しているのではなく、多様性を認め、肯定しているのです。新しい「教え」ではなく、ポジティブな関係を築くことを重視する新たな「やり方」です。このアプローチには、以下の特徴があります。

- > 異文化間の
- > 諸宗教的
- > 多様性を肯定する
- > 現在行われている個人と集団の教育課程において、自分自身の中の、そして他者との関係の中での対話とコミュニケーションを肯定する

この学習プロセスを通じて、交換・交流・理解の場が生まれます。批判的思考、他者に対する理解と開かれた心を奨励することによって、子どもも若者も大人も自分自身の伝統や価値観、そして他者のそれを発見できるようになります。こうして他者と交流することで、「与えたり・受けたりすること」を続ける中で、互いを豊かにする可能性が生まれます。これは共通の人間性の一部を構成します。

共通の人間性

ほとんどすべての社会において、人々はさまざまな宗教に属しています。社会の倫理的行動は、その社会の中で最も盛んな宗教に強く影響されるのが普通です。実際、道徳的・倫理的な理想とその説明は、しばしば宗教の教義と密接に関連しています。誰かになぜ人道的な仕事に携わっているのかを尋ねたら、その人は「私は神を愛しているので、隣人も愛しているからです」と言うかもしれません。ユダヤ教やキリスト教では、隣人を愛し、その基本的なニーズを満たすことは、神への信仰の強さが真に試される機会と見なされています。イスラム教では、困っている人を助けることは信者の宗教的義務です。自然環境に対する仏教徒のアプローチは、生きとし生けるものを哀れむ気持ちから生まれてきます。ヒンズー教徒やシーク教徒や他の伝統宗教の信者も同様に、世界とどうかかわっていくか、そのインスピレーションを自分の信じる宗教の教えから引き出すかもしれません。今日では、倫理的行動のインスピレーションを、宗教というレッテルが貼られていない、スピリチュアルな源泉から引き出している人も大勢います。

これらの行動についての説明をひとつに結び付けるのは、どれも道徳的・倫理的な内容だということです。その根底にある価値観が、他者や自然との関係において、何をすべきで何をしてはいけないかを教えてくれます。そうした価値観はまた、世界のあるべき姿についてのアイディアやイメージを思い浮かべる手助けをしてくれます。おかげで私たちの想像力は、今ある姿の世界に限定されることはありません。したがって、こうした価値観は、より良い世界を作るために協力する上で役に立つのです。

共通の人間性を示す具体的表現

私たちは互いの関係の中で共通の人間性を肯定し、共通の理想に向けて協力することができるという確信はすでにいくつかの分野で実証されています。

世界人権宣言は1948年に採択されました。この宣言が謳っている権利は、広く解釈されています。例えば人権の基本的ニーズは、衣食住に限定されず、身体的、精神的、文化的、スピリチュアルなニーズや、自身のアイデンティティを持つ権利、選択能力と選択の自由などにも拡大されました。さらに最近におけるそうしたもうひとつの文書である「地球憲章」は、自然保護を謳い、環境に対する私たちの行動の指針となっています。

これまで子どもにかかわる独特のニーズには、あまり関心が払われていませんでしたが、現在急速に認識されるようになっていきます。国連子どもの権利条約（CRC）は、18歳未満の子どもの権利を定めた権利章典です。1989年に採択されて以来、宗教や文化も大変異なる多くの国に批准され、世界で最も批准国の多い人権条約となりました。子どものためにより良い世界を築こうとするコミットメントが、人権を道徳的・法的義務として明記しようというグローバルな闘いの最前線に、子どもの権利が位置づけられるという結果につながったのです。CRCの採択以降、子どもの生存・発達・保護・参加の重要性を認識する政府が増えました。

つまり、人間社会のメンバーが互いの違いを超えて集まり、自分たちの生活を一緒になって統制し、容易にし、活性化するような共通の倫理的・道徳的目標に向けて努力することができる、という事例は既に存在するのです。

複数の宗教が並存する多元的世界

倫理的な生き方のための宗教的リソース

宗教は数世紀にわたって信者に倫理的価値観を説き、教え込んできました。実際、子どもは宗教的生活の中でこそ、人生の価値を学ぶのだと主張する人もいます。こうした理解は、宗教が宗教そのものとして、あるいは文化表現として、その聖句や寓話、格言、実例や慣習を通して道徳的・倫理的価値観を伝達する媒体であることを示唆しています。更にこれは、家族やコミュニティとの基礎的なきずながなければ、社会の行動規範に順応した道徳的な人間に成長するのは難しい、ということも意味します。社会学者マイケル・ウォルツァーは、こう述べています。

「社会は必然的に個別なものである。なぜなら社会には構成員と記憶がある。自分の記憶だけでなく、共通の営みに関する記憶をもつ構成員がいる。一方、人間性には構成員はいても記憶がない。したがって歴史も文化も慣習もない。なじみの暮らしぶりも、祭りもなく、社会財についての共通理解もない。そうしたものを持つのは人間として当然だが、だからといってそうしたものを持つ単一のやり方があるわけではない」¹⁹

個別なものは度が過ぎると、排他性と狂信性につながることがあります。倫理的な大義のため、あるいは自分たちの宗教の名のもとに活動していると主張する過激派が、世界の平和や安定に及ぼす危険は深刻です。これを過小評価してはいけません。子どもたちが、他者は敵だと教えられたり、信仰への誓いとして暴力を振るうようにそそのかされたり、他者のニーズや権利に対して鈍感になるようしつけられた例は、世界中で見られます。したがって、宗教の枠組みの中での学習には、宗派が何であろうと、特に子どもが関係する場合は、「責任」の4つの側面に注意を払う必要があります。

責任の4つの側面

その1：いかなる宗教も、子どもたちの中にそのコミュニティの信仰や価値観を育む際は、他者とその「他者性」を尊重するやり方でそれらを教え、学ばせなくてはなりません。自分とは異なる信条を持ち、異なる行動を取る人とかかわり方を学ばない子どもは、多くの宗教や文化が共存する社会で生きていく用意が十分ではありません。

その2：宗教がその宗教の実践を教える際は、他の人間に対してオープンかつ正直で思いやりのある態度を培う宗教的・文化的価値観を前面に出すよう、意識的に努力する必要があります。こうした価値観を、子どもが小さいうちから伸ばすことが必要です。

その3：宗教はそれぞれが違うことを認めた上で、共通の問題のための相互協力の土台となり得る共通点や、それぞれに重なり合う価値観を探さなくてはなりません。信仰の教えや実践にあたっては、人間が共通の人間性を持ち、相互に依存していることを示すような方法で私たちの信仰を教え、実践する必要があります。

その4：今日、私たちは、「諸宗教教育」という概念を重視しています。ある宗教を単独で学ぶのではなく、他の宗教と関連させながら学ぶ方法です。子どもが自分の宗教を知り、大事に思うだけでは足りません。人間のコミュニティとしても、特定の問題との関連においても、他者が何を信仰しているかを理解し、それらの信仰と自分の信仰との共通点を知る必要があります。

¹⁹ Michael Walzer, *Thick and Thin: Moral Argument at Home and Abroad*, Notre Dame, University of Notre Dame Press, 1994, p. 8

人生は宗教による区別がありません。私たちは皆、宗派にかかわらず、誕生、死、喜び、痛みといった共通の体験をし、存在の根幹にかかわる疑問への答えを捜し求めます。こうした困難を前に、宗教教義は、価値観を中核に据えた倫理規範を広めようと努力し、それぞれの宗教はそうした価値観や倫理を、その宗教的教えとそれに沿った宗教生活を通して伝えていこうとします。

国連子ども特別総会（2002年）に参加した子どもたちは言いました。

「私たちは約束します、お互いに尊敬の気持ちと尊厳をもって接することを。

私たちは約束します、違いがあっても心を開き、心を配るということを。

私たちは世界の子ども。生まれや育ちは違っても、共通の現実を分かち合っています。

私たちは、すべての人々にとってより良い世界を作る努力によって結ばれています。

大人の皆さんは、わたしたちを未来と呼びます。けれども、わたしたちは『今』でもあるのです」²⁰

今日の多くの若者や子どもは、この多元的な世界を現実と考えているだけでなく、共通の活動の場として活用しています。彼らの世界に対する理解、交流、貢献、共通の人生経験、複合的なアイデンティティ、倫理基盤は、この新たな多様性を土台に形成されます。彼らは一丸となって、より良い世界を造る闘いに臨み、自分自身の伝統を超えて、価値観を中核とした倫理規範を探そうという意志を持っています。

宗教者と非宗教者

倫理教育と宗教を教えることの間には、本質的なつながりがありますが、両者は同じものではありません。倫理教育は信仰を超越しています。

ウィルフレッド・キャントウェル・スミスは次のように述べています：

「私の考えでは、信仰とは、美を愛でること。真実を求めて奮闘すること。正義を追い求めること。善いものもあれば悪いものもあると認めること、そして、それが重要だと認めること。愛を感じ、実践すること。有神論者が『神』と呼ぶものを愛すること。これらすべてと、他にもたくさんのことが、個人と共同体の信仰の例だ」²¹

ウィルフレッド・キャントウェル・スミスは、宗教者であることには、善いこと、許容できること、悪いことを区別する能力を持ち、そうした区別が重要だと信じるのが含まれる、と述べています。そのような生き方をしている人々は、「〇〇教徒」の看板は上げていなくても、共同体とポジティブな関係を保つことの重要性が分かる豊かなスピリチュアリティを持っている人々です。彼らは特定の宗教に属していないので「俗人」のレッテルを貼られることもありますが、本当は、私たちの子どもたちにふさわしい世界を築く上での、大切なパートナーなのです。

互いの関係から学ぶ

「信仰」と「倫理的な生き方」は、共に何らかの宗教に根差していることもあれば、個々の宗教の特徴を超越していることもあります。倫理教育委員会が促進したい倫理は、諸宗教の文脈を前提とし、他者との関係を主眼とするものです。この倫理で大切なのは、教義や教えよりも態度です。隣人や自然や人生と、どう向き合っていくのかということです。理屈ではなく、このような心構えと、そこから生まれる実践を通してこそ、私たちは自分の伝統や、隣人の伝統を理解するのです。

²⁰ UNICEF, Towards a World Fit for Children. September 2005

²¹ Wilfred Cantwell Smith

もはや私たちは、各宗教が孤島であるかのように生きることはできません。今日の世界は、異なる宗教を持つ人々や宗教を持たない人々が、否応なく出会う世界です。文化や宗教が多様化する今日の社会において、他者の信仰が重要性を帯びてきています。よって、諸宗教の理解に務め、その宗教生活にアプローチすることは、宗教者にとって不可欠なことなのです。

諸宗教学習は、質の高い教育の文脈の中でも理解されなくてはなりません。これは「万人のための教育に関する世界宣言」の目標6や、ユネスコの「学習の4本柱」－知ることを学ぶ、為すことを学ぶ、共に生きることを学ぶ、人間として生きることを学ぶ－に謳われています。ユネスコによれば、質の高い教育とは、学習者が生涯、自信をもって使おうと思える「道具」を作り上げることだとされています。また、ポジティブな価値観－あらゆる種類の人々や、それらの人々の権利、自然界、過去・未来を理解し、尊重すること－に基づく行動を展開していくことでもあります。

ユニセフは、質の高い教育は、個人が人生で成功を収め、健全な社会を創造していく上での備えであるとしています。それは、子どもや若者、大人が顕在的または構造的な紛争や暴力を回避し、紛争を平和的に解決し、平和をもたらす環境を個人の内面、個人と個人、集団と集団、国家、国際関係のレベルにおいて醸成する行動上の変化を実現させるのに不可欠となる知識・スキル・姿勢・価値観が、質の高い教育を通して形成されるからなのです。ユニセフは、暴力の予防・平和構築のための生活技能と、4つの柱に基づく内省的・情緒的・社会的学習の促進を支援しています。

共に祈るか、祈るために集うか

1986年にアッシジで開催された「世界平和祈願の日」で、ひとつのはっきりとした区別がつけられました。参加者たちは、同じ祈りを捧げるために集ったのではなく、共に祈るために集ったのです。では、共に祈るとはどういうことでしょう。

今日、宗教の異なる人々は、互いに出会い、知り合い、一緒に働くことができます。異なる宗教の隣人と対話をしながら暮らし、他者のスピリチュアリティに触れた経験のある人々は、この共に成長するという体験が、最終的には祈りや礼拝を共にするところまで進んでくれればと願っているかもしれません。自らにこう問いかける人もいます。礼拝や祈りや瞑想が諸宗教間のスピリチュアルな巡礼の始まりに留まるべきではなく、こうして共に探求することが、言葉よりもずっと強力に相互の対話を促進し、多元的社会での協力につながるのではないかと。

礼拝や祈りを共にしたいという願いは、コミュニティに対する共通の不安や、危機や大惨事から生まれることがよくあります。2001年9月11日の同時多発テロや、南アジアを襲った大津波の際は、宗教の異なる人々が、自発的に集まって礼拝と祈りを捧げました。第一次湾岸戦争のときも同様に、世界各地でユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒がいわゆる諸宗教の祈りのために集いました。世界には、祝日やコミュニティの祝い事の折に諸宗教的な礼拝を行って、国民のまとまりを表現する国もあります。そうやって、国民は宗教の違いを越えて団結していると誇示しているのです。こうしたイベントは、取ってつけたようで人間的な温かみに欠けるくらいがあります。しかし、同じ諸宗教的な礼拝や祈りでも、結婚式、慶事、家族行事など、より入念な性質を持ったものもあります。

子どもを諸宗教的な礼拝や祈りに参加させるときは、くれぐれも各人の宗教への配慮と尊重が必要です。礼拝や祈りは、各宗教の儀式的でスピリチュアルな側面、つまりその核心部分に属しています。倫理教育委員会が奨励している諸宗教学習は、細心の注意を払いつつ敬意を抱いて出かける学びの旅です。各宗教の聖域を訪れているのだという自覚をしっかりとって、共に旅路をたどらなくてはなりません。

スピリチュアリティ

子どもには、スピリチュアリティの面で、いくつか重要な能力があります。第一に、子どもの時間感覚は特別です。子どもは長時間、まったく動かずじっとしていることがあります。アリの行列の上にかがみこみ、その道行きに心を奪われている時などです。スピリチュアルな見方をすれば、子どもにはその瞬間のことに没頭する能力があります。これは、多くの大人にとっては、長い時間をかけて習得し直さなければならない能力です。この能力には、目の前の現実の十分な認識と、永遠の感覚という特徴があります。

小さな子どもが生まれつき持っている、もう1つのスピリチュアルな能力は、驚異の念にかられることです。現実と無関係な空想や夢ではなく、体と頭と五感をフルに使って、全身全霊で体験します。子どもはパンが作られている時にパン生地のおいを何度もかいだり、雨粒が屋根を叩く音に聞き入ったり、じっと座ってロウソクの火を見つめたりすることがあります。「驚異」は喜びにつながり、興奮や熱中を持続させ、活力や希望を高めてくれます。

小さな子どもが持っている第三のスピリチュアルな能力は「愛」です。幼い子どもは誰でも、与えることと与えられることを、心で知っています。お気に入りのおもちゃを持って近づいてくる子どもは、私たちがそれを取り上げたりせず一緒に遊び、そしてそれをまた返してくれるとみじんも疑っていないという特別な体験は誰にでもあるのではないのでしょうか。しかし、どんな幼い子どもでも、人を信用しないことを学ぶ場合もあることも、私たちは知っています。

子どもに関心を持つ人々のネットワーク創設に尽力した宮本丈靖師は、倫理教育委員会の設立にあたり、こう述べました。

「今日、我々の周囲では、暴力や不正が増加していますが、その根底にはスピリチュアリティの低下や基本的な倫理の軽視があると、私は確信しています。子どもは誰でも生まれつき、スピリチュアルな発達の可能性を備えています。平和への道に不可欠な一歩は、すべての子どもが、その可能性に十分アクセスできるようにすることです。ですから、学校でも、他の教育の場でも、諸宗教教育を実施することが、人間の尊厳が守られる平和な世界、本当の意味で子どもにふさわしい世界を築くという目標達成のために、絶対に必要なのです」

『共に生きることを学ぶ』の本文において、子どもが「生まれつき備えている、スピリチュアルな発達の可能性」にアクセスできるようにすることに言及していますが、これは、スピリチュアリティは子どもに「押し付け」たり「与え」たりするものではないという意味です。倫理教育の狙いは、子どもが自分のスピリチュアリティを自分と社会のために十分開花させる力を与えることです。子どものスピリチュアリティは「生まれつきの能力」ではありますが、それを育み、開発しなければならないことを認識することは重要です。時間を忘れるほどの熱中や驚異の念や愛を見せてくれる子どもに対し、私たちは、永遠や驚異や限りない愛情を入れる言葉や映像という器を差し出すことができます。このスピリチュアリティは、子ども自身の宗教やスピリチュアルな伝統の中で育むことが肝心です。そうすれば、その子の成長や発達を支える具体的な土台ができます。この成長は、教えを受け、反省し、統合し、ポジティブな関係を築いて続けていくことを含む学習プロセスを通じて起こります。

スピリチュアリティと宗教は同じではなく、ときには対立することもあります。スピリチュアリティを強調する人の中には、既存の宗教の枠内に何もかも押し込められるのを嫌い、もう少しオープンにいたいという気持ちから、そうしている人もいるかもしれません。しかし、「偽のスピリチュアリティ」も存在します。これは人々を、自分のことしか考えない自己中心主義に導く、あるいは生きている世界の現実から人々の目をそらすものです。スピリチュアリティは気持ちや感情に関連するものと考え人もいます。しかし、スピリチュアリティは、感情や気持ちや思いやりを社会的な関わりに変える手段です。そしてそのような関わりは、解放と啓発の原動力です。

スピリチュアリティは姿勢であり、生き方であり、自分を宇宙の中に位置づけることです。それは、私たちを今の自分から引き離し、普段体験できる現実を超えた向こうまで引っ張ってしてくれます。

第一に、「超越しようとする」スピリチュアリティの関心は、目の前のことではなく最終結果にあります。例えば、大人が子どもを相手に暴力を振るっている光景を見たしましょう。それはほぼ常に、その人が目先のことにとらわれているからです。最終結果に気持ちを向けることができないのです。多くの場合、大人が暴力に訴えるのは、この目先のことにとらわれているということが原因なのです。子どもに罰を与えるのは、今すぐ子どもを静かにさせたいという即座の思い、そうした目先のことばかりにとらわれている証拠です。罰を与えることが、その子にとって長期的に何を意味するのか問いかけることなどしないのです。「超越する」スピリチュアリティー超越的スピリチュアリティーは目先のことに留まらず、究極を追求することです。

第二に、「超越しようとする」スピリチュアリティは、答えを得たからといって満足しません。目の前のことを超えることは、疑問を持つことです。大抵の人は、手っ取り早く答えを欲しがります。疑問をたくさん持てば持つほど、目の前のことを超えた向こう側に向かうことになります。私たちは、もう答えを知っていると思い込んでいるために、これ以上疑問を問いかけることをしません。でもスピリチュアルな姿勢は、答えだけでは満足できないのです。

第三に、「超越しようとする」スピリチュアリティには限界がありません。むしろ重視するのは可能性です。人々がコミュニティの利益のために、共に暮らし働くことは可能です。「自分と同じように隣人を愛せよ」とは、目の前の現実を超えろ、一見矛盾するような生き方をしてみろ、という挑戦です。敵を愛することは可能でしょうか。それは現実的だろうかと疑問を持った時、私たちは、その可能性に心を開いているのです。

スピリチュアリティは、自分が今いる所を超えて行きなさい、目先の現実から究極に、答えから疑問に、限界から可能性に目を向けなさい、という呼びかけです。子どもが生来持つスピリチュアリティを育むことは、子どもにふさわしい世界を構築する運動の拡大につながります。

『共に生きることを学ぶ』のこの後の章は、
倫理教育のための異文化間・諸宗教プログラムを利用する際の実用ガイドです。

プロセスは2つの学習モジュールに分けられています。各モジュールにはそれを実施する活動に関するアイデアや、各モジュールを補助するさまざまな伝統や地域の物語や資料が含まれており、学習プロセスの助けとなるはずです。

この教材が皆さんの役に立つことを願っています。

セクション1

利用の手引き

範囲と目的

倫理教育のための異文化間・諸宗教学習は、多様性を肯定し、他者および自己との対話とコミュニケーションを奨励します。これは個人および集団における現在行われている学習プロセスであり、グローバルで多元的な世界を共に生きるための建設的な方法の推進を図るものです。この学習の目的は、子どもや若者が共通の価値観を育むことを可能にし、それを手助けし、その成長を支えることです。

『共に生きることを学ぶ』を通じて推進される倫理原則や倫理的価値観は、倫理教育委員会の任務に謳われているとおり、子どもたちに宗教や文明が異なる人々に対する尊敬の心を培うことを狙いとしています。その手段は、以下のとおりです。

- > 階級、民族、宗教、文化、イデオロギーの異なる人々の間で、お互いが尊厳と調和を保ちつつ、共存し、連帯することを重んじる価値体系を推進する。
- > 人権擁護へのコミットメントなど、国際社会によって大綱が定められ、採択された建設的な普遍的価値観の実践を推進する。
- > 他宗教に対する尊重へと自然につながるような精神性を育み、それぞれの伝統的信仰に根ざした宗教文化を豊かにするような異なる宗教間の相互理解と交流を追求する。
- > 子どもや若者が変化の原動力、そして平和の構築者となれるような平和の文化を育てる。

学習モジュール

『共に生きることを学ぶ』には、2つの学習モジュールがあります。「自分と他者を理解する」と「共に世界を変える」です。両方ともセクション2に入っています。この2つのモジュールは互いに関連があり、補完し合う関係になっています。

モジュールはどちらも、いくつかのキオスクからなっています。キオスクは、参加者が学びの旅に乗り出す出発点です。この旅には異なるルートがあります。それをたどるうちに、参加者は倫理的な問題に対応できるようになり、また、どうすれば自分たちが変化の原動力になれるかを発見することができます。また、モジュールには評価方法が付いています。これはセクション3に入っていて、あなたと他の参加者たちが進歩の度合いをチェックするためのものです。セクション4は実際のプログラム内容（アクティビティ）のリストです。モジュールをどんなルートで進むかを決める際に役立ててください。アクティビティの選び方については、各モジュールの中にアドバイスがあります。

2つのモジュールは、村の地図に描かれています。ルートはひとつに限られたものではありません。進む道は、あなたが他の参加者たちと一緒に決めてください。各モジュールを示すポスターが掲載されています。

「キオスク」は、日よけのある安全な場所で、人々がそこで一度足を止めて、動機付け、発見、異文化との触れ合い、熟考、対話を行う所です。参加者は異なるキオスクを訪れることで、自己発見の旅路をたどるのです。

このプログラムには時間制限はなく、グループのニーズに合わせて調整できるので、参加者がじっくりと考えながら、1つのキオスクの中やキオスクとキオスクの間のつながりを発見する余裕を持つことができます。モジュールは、さまざまな状況や背景に合わせて変更することが可能です。マップには休憩所もあります。あなたが立ち止まって、参加者の学習プロセスをチェックできるエリアです。休憩所の標識については「進歩をモニターする」のセクションを参照してください。

学習ルートを選ぶ際は、参加者が一連のキオスクをつなげることができるようにしてください。このアプローチを取れば、参加者は各モジュールで奨励されている価値観を育み、それぞれの課題を自分の生活に関連付けることができます。また、共に生きること、異なる文化や宗教を尊重すること、私たちが多民族的な世界を共に変えることができる、ポジティブな態度や行動を促す発見ができるような学習ルートを選んでください。

「キオスク」とは、もともとペルシャ語で「日陰」あるいは「日陰を作るもの」という意味です。本来イスラム建築では、屋根とそれを支える柱からなる、オープンで円形のあずまやを指しました。開放的ですが守られたスペースです。キオスクはペルシャやインド、パキスタン、13世紀以降のオスマン帝国で、よく見られました。

キオスク（ペルシャ語 کوشک クシュク；アラビア語 كوشك コシュク；トルコ語 Köşk コシュク；フランス語 Kiosque キオスク；ドイツ語 Kiosk キオスク；ポーランド語 Kiosk キオスク；ポルトガル語 Quiosque キオスク；ルーマニア語 Chioșc キオシュク；スペイン語 Quiosco/kiosco キオスコ）

4つの価値観

『共に生きることを学ぶ』は、4つの主要な倫理的価値観を奨励しています。

- > 尊敬
- > 共感
- > 責任
- > 和解

これらの価値観は2つのモジュールに組み込まれ、さまざまな文脈や状況に応用されます。その意図は、諸宗教学習と平和構築のプロセスを容易にすることです。

モジュールを通じて、参加者は以下について学ぶことが奨励されています。

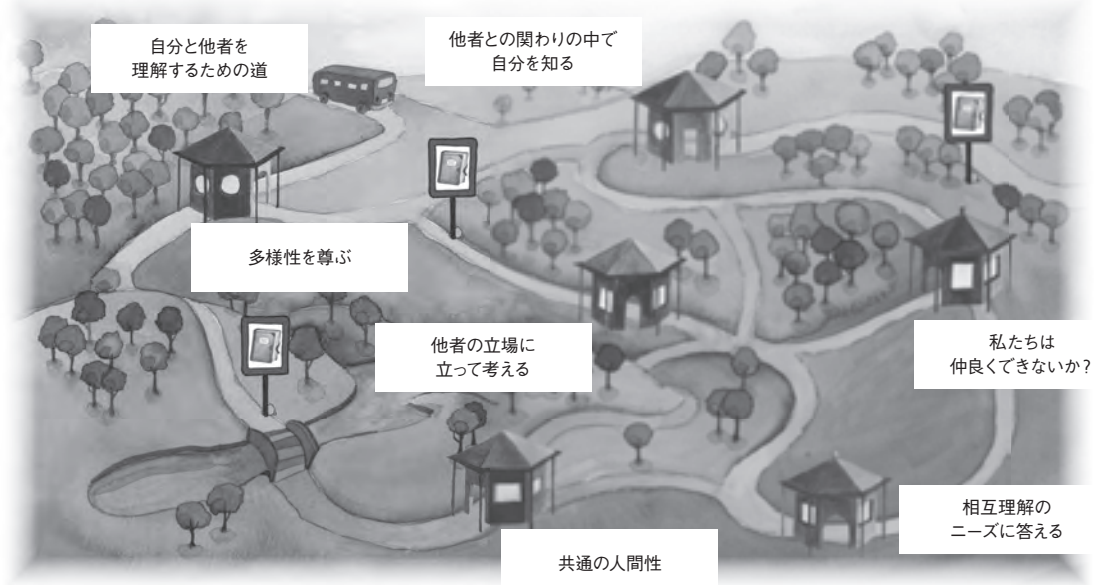
- > どうすれば自分と他者を尊重し、理解できるか。
- > どうすれば自分と他者に対して和解的な態度を取れるか。
- > どうすれば世界のニーズに応え、人権を擁護できるか。

宗教、文化、文明が異なる人々に対する**尊敬の心**は、「他者の立場に身を置く」、つまり共感を学ぶことで養われ、強化されます。尊敬と共感、個人および集団の責任に対するより強い意識と、それに基づく行動につながります。そして、それは和解に対して心を開くことにつながるのです。人間の尊厳が大切に守られるのは、私たちが、人間の背負っている多くの経験や現実、歴史や記憶を知り、平和、正義、平等、人権、調和のある共存のために努力する時です。

モジュール

モジュール1:自分と他者を理解する

このモジュールでは、参加者は他者との関係における自分自身について学びます。違いや類似を認識すること、他者の意見に耳を傾け、その視点を認めること、自分と異なる人々、違う考え方をする人々を理解し、尊重することを学ぶモジュールです。



モジュール2:共に世界を変える

このモジュールでは、参加者は社会変化が必要な世界を発見します。アクティビティを道しるべとして、参加者は和解に対して心を開き、他者と心を通わせる能力を養います。これによって、参加者は異なる文化や宗教を持つ人々と一緒に力を合わせて、また、自分たちの影響力のおよぶ範囲内で、自分たちの社会とより広範な世界を変える手助けができるようになります。



若者の生来の精神性を育む

『共に生きることを学ぶ』は、子どもや若者に人生の精神的側面を知ってもらうために開発されました。それは「子どもの権利条約」に謳われるように、身体的、精神的、道徳的および社会的に健全かつ十分に成長する権利を守ることに繋がります。この意図は、参加者1人1人が健全な自我像を描き、自己、他者、環境、および「神」、「究極の現実」、「神聖なる存在」と呼ばれるものとの間にポジティブな関係を結べるようにし、ひいては地域社会および地球共同体の一員としての生活の質を深めることにあります。理解が深まり、道徳的知性や批判的思考力が高まることで、子どもや若者は、さまざまな影響や選択肢が増えた社会において最良の選択をする準備を整えるのです。

教師と進行役 — 学習プロセスの要

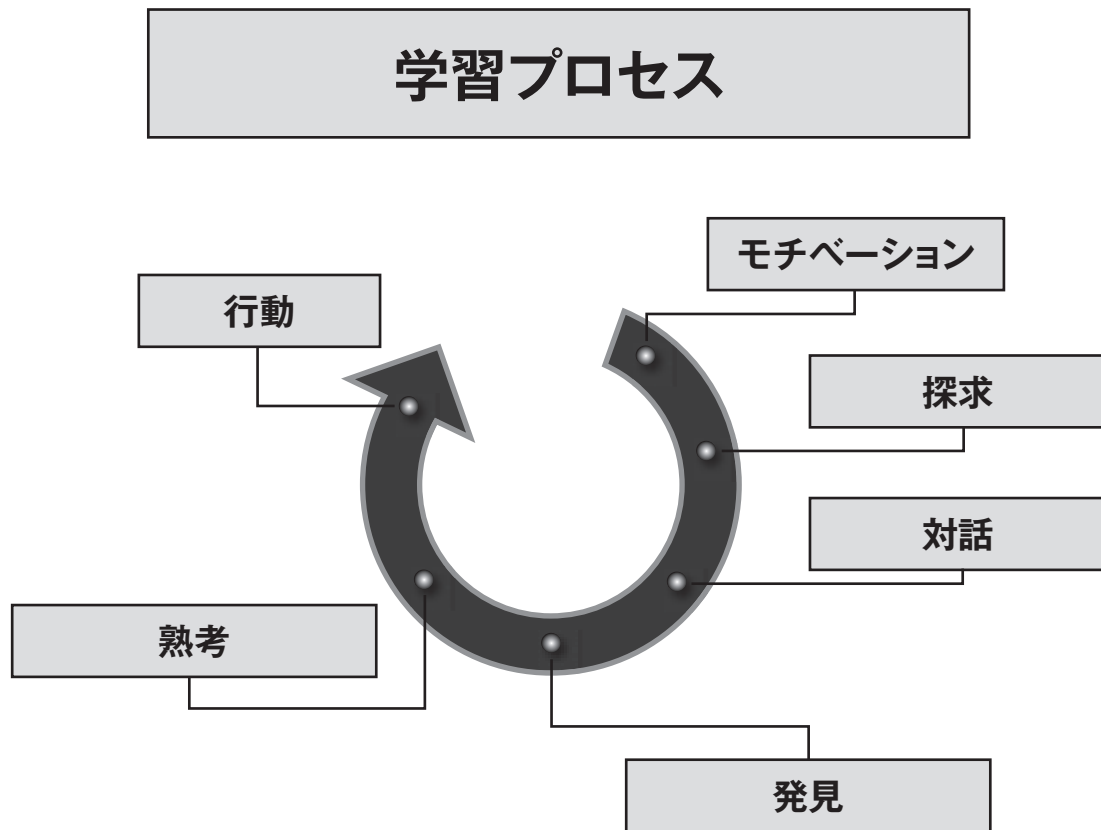
『共に生きることを学ぶ』では、民主的かつ参加型の進行が要求されます。大人や教師は倫理や価値観について知っているが、子どもや若者は知らないという考え方は取りません。教師や進行役は教えるのではなく、アクティビティを計画することによって、学習プロセスの道案内や組み立てをします。このプロセスは、教師および生徒全員が成長し、自分たちの知識や態度や行動を問う助けになります。

教師や進行役の「質」いかんで、学習経験に大きな差がつきます。参加者が安全な旅ができるかどうかは、進行役であるあなた次第です。参加者は難しいことや恥ずかしいことがあっても、からかわれる心配をしりせず、あなたがサポートしてくれると信じたいのです。有能で公平で正直な進行役なら、参加者との間に信頼関係を築くことができます。そうなれば彼らは喜んで、あなたが計画した旅に参加するでしょう。

進行役にとって重要なガイドラインを、いくつか記しておきます。

1. どのセッションも準備をして臨むこと。事前に頭の中で予行演習し、各段階で起こりそうなディスカッションや展開について考えておきましょう。問題や困難な事態、質問があった場合についても準備しておきましょう。必要なものすべてを用意し、選んだアクティビティをどのように始め、どのように締めくくするか、スムーズなやり方を見つけておいて下さい。
2. タイミングは非常に重要です。セッションをアクティビティが使える時間内に収めるように考えること。時間が足りなければ、アクティビティを短縮するか、そうでなければ適切な方法で中断します。
3. セッションの開始時（や再開時）にはアイスブレイカー（緊張をほぐすもの）を用意して皆をまとめ、終了時には皆が「良いセッションだった」という気持ちで帰れるようにすること。
4. 楽しいセッションにすること。一緒に楽しく過ごせば、参加者はより積極的に参加し、交流するでしょう。
5. 参加者間の悪質な行動や態度を容認しないこと。「この部屋では、どんな人種差別や偏見も許さない」ということを明らかにします。もし、そうしたことが問題になりそうだと最初から分かっている場合、それを最初に参加者と話し合うトピックにする必要があるかもしれません。
6. 常に敬意をもって参加者に接すること。他者を尊重する気持ちは、良い手本から学ぶものです。

学習プロセスとガイドライン



ここで説明する学習プロセスは、倫理教育の進行役を務める人のガイドとして、参加者の積極的な参加を促す助けになるものです。参加者は、らせん状の発見のプロセスをたどることで、新たな考えを生み、継続した学習へとつながります。セッションの準備や、参加者に諸宗教学習の経験をより強く意識させるためのモデルとして、この学習プロセスを役立ててください。



モチベーション（動機付け）

セッションの始めには、話、歌、詩、マンガなどを使い、トピックについての参加者の関心を刺激してください。彼らの知識に挑み、さらに進んだ倫理的な問題を探求する意欲を起こさせましょう。アクティビティに適切な、あるいは関係のある音楽やメディアはないか、参加者に聞くことも忘れずに。もしあればセクション5で紹介している資料集に加えてもいいでしょう。



探求

参加者は一度トピックに興味を持てば、関連情報を調べたくなります。多くの事実を与えるのではなく、参加者が実践を通して、いろいろな考えを模索して、新たな経験を得る時間にするのが大切です。また、ここは、参加者が互いに心を開き、意見や感情や胸の内を表に出せる雰囲気をつくるのに良いタイミングです。



対話

どのような学習プロセスも、その中心にあるのは対話です。諸宗教的学習プロセスでは特にそうだと言えます。対話は、意見を交換したり、体験を語り合ったり、他者を発見する機会であるだけでなく、参加者が自分自身の認識と向き合う機会にもなります。参加者が一方的に批判されることなく、楽な気持ちで十分な参加ができる適切な場を用意することが必要です。



発見

対話というプロセスを通じて、参加者たちは新たな理解や考えを発見します。しかし、そのような発見はすぐできることでも、一度に全員ができることでもありません。グループディスカッションの成果を共有できる場が必要です。そうすることで参加者は、断片をつなぎ合わせて、それまで気づかなかったことに気づく「なるほど!」という体験をすることができます。



熟考

これは、参加者が自分自身とのつながりを見つける時間です。学習日誌（53ページ参照）を使って、各人がじっくりと考えられる時間を用意してあげても良いでしょう。この時間のなかで参加者は、自分が学んだことを実際の状況と結びつけて再考し、自分の価値観や態度をチェックすることができます。



行動

行動は必ずしもセッションの一部ではありませんが、常に学習の結果としてあるべきものです。毎回、セッションの最後には必ず参加者に、学んだことを自分の置かれている現状に関連付けさせてください。それによって、相応しい行動を考えつくかもしれません。セッションは、参加者が変化の原動力となり、相互理解を要する状況に対応する彼らの能力を高めるようにします。

異文化・諸宗教学習を通じた倫理教育は、教育の目的ではなく手段です。この学習プロセスは、異文化的・諸宗教的観点から開発されました。これを使うことで、参加者はさまざまな文化や宗教、アイデアや考え方について、じっくりと考えることができます。また、この学習方法は、参加者が他者に心を開き、内なる自己を成長させ、自分の周囲にあるニーズにより良く対応することに役立つよう開発されました。

方法論

『共に生きることを学ぶ』には、伝統的な手法と現代的な手法の両方を取り入れています。あなたがバランスよくプログラムを進められるように、アクティビティは63～64ページに載っている方法論に沿ってグループ毎に分類されています。こうしたアクティビティのためにセクション5の「資料集」で、十分な材料を提供していますが、あなた自身の教材を作りたくなるかもしれません。

全体としての方向性は、児童心理に新たな洞察をもたらしたユダヤ系ポーランド人の児童文学作家で教育者のヤヌシュ・コルチャックがその著書で確立しています。コルチャックの日記や著述から、次のような心構えや方法が浮かび上がってきます。

- > 子ども1人1人が健全な自尊心を育成することを奨励します。子どもは他者を傷つける必要を感じることなく、自分自身を好きになれるようでなければなりません。これは倫理的な個人であるための前提条件です。子ども1人1人が、自分の家族、コミュニティ、文化、宗教に誇りを持ち、同時に、他者の家族、コミュニティ、文化、宗教を尊重することができるよう奨励されるべきなのです。
- > 倫理的な決定や選択が必要とされる実際に他者に起こった話、あるいは他の参加者の実体験に基づいた状況などの具体的な事例研究を使って話し合い、考えます。ディスカッションにおいて焦点となるのは、その状況においてどのような選択がなされたのかと、その選択に至るまでのプロセスです。つまり何を考慮に入れなければならなかったのか、またその理由は何か。もし別の選択がなされていたら、どのような結果になっていたか。
- > 昔話や寓話、格言、歌などを用いて、倫理的行動についてのディスカッションを誘導します。
- > 進行役は、生徒に対しても他の進行役に対しても、常に倫理的な態度を見せなくてはなりません。大人同士がピリピリした雰囲気だったり不作法であったりすると、若者はすばやく察知して、自分の行動の言い訳をする場合もあります。
- > グループの行動規範を定め、もしそれが破られたときは、必要に応じて規律を正すための話し合いを持ちます。¹

こうしたアプローチが、交流、対話、出会い、発見、批判的思考、熟考、行動に必要な場を提供する方法論につながります。『共に生きることを学ぶ』の方法論は、他者との関係において行われる自発的な学びのプロセスの中に個人を置きます。また、参加者にスキルを身につけさせ、知識を広げ、多元的社会の中で生き、行動することを学ぶことができるようにする心構えを養う手助けをします。

グループに一番ふさわしい方法を選ぶのは、進行役であるあなたの役目です。ここで提案されている方法は、組み合わせて利用することも、参加者の状況や年齢に合わせて調整することも可能で、多くのアクティビティに応用できます。そのことを念頭に入れておいてください。どの方法も、積極的な参加や関与、他者とのつながりを促すように考えて作られています。

¹ Janusz Korczak (1878 - 1942年) ユダヤ系ポーランド人の児童文学作家、児童教育者。自分だけなら逃がしてやるという申し出を断り、経営する孤児院の子どもたちに付き添ってアウシュビッツに送られた。「夜、病気の子どものそばを離れたりしないし、こんなときに子どもたちを見捨てたりもしない」と言ったと伝えられる。コルチャックの児童教育論は、子どもを今を生きる者として尊重すること、そして、子どもには子どもの権利があるということだった。彼は孤児院で「裁判」の考え方を発展させ、子どもも大人も、善行をすれば平等に報いられ、悪行をすれば平等に矯正されるようにした。(参考: UNESCO Prospects, Quarterly Review of Education, Volume XVII, 1987)

用いられるべき基本的学習方法

経験をベースにした学習

経験をベースにした学習は、体験と焦点を絞った熟考を使って、知識を増やし、スキルを伸ばし、価値観を明確にします。²経験は、参加者の身に以前起こったことでも、現在起こっていることでもよく、教師や進行役が行う実際のアクティビティに参加した体験でも構いません。学習者は個別、あるいはグループで、その経験を振り返り、評価し、分析します。

この学習には、3つの特徴があります。

- > 全人的なかかわりー知性・感情・五感をすべて使う。
- > 学習と個人的体験が結びつく。
- > 変化に対する継続的な熟考が、より深い理解につながる。

この手法は、シミュレーション、ゲーム、ロールプレイ、サービス・ラーニング、社会見学などのテクニックを通して発展させることができます。

協力をベースにした学習

学習者は少人数のグループに分けられ、グループごとに作業して、共通目標の達成を目指します。参加者たちは、メンバー全員がお互いの努力によって学習できるように助け合うことになります。したがって、協力をベースにした学習では、生徒たちの学習の取り組みに良い意味での相互依存性が生まれます。全員が割り当てられた課題に貢献してこそ目標を達成できると、参加者が認識します。この手法によって、相互の働きかけを通じて学ぶことができます。

この学習は、子どもたちがいろいろな相手と力を合わせて働く能力を伸ばします。小グループでのやりとりでは、グループの他のメンバーから出されるさまざまな反応を熟考し、それに対応する機会が多くあります。また小グループにおいては参加者が、文化の違いに基づく問題に、自分の視点を付け加えることもできます。こうしたやりとりは、他の文化や考え方を理解する助けになります。

この学習には、参加者のコミュニケーションスキルを高め、自尊心を強化する効果もあります。この方法を用いたアクティビティは、グループ全員の成功を促すので、参加者1人1人が自分は能力が高い、そして価値ある存在だと思えるようになります。協力をベースにした学習テクニックの例には共同プロジェクト、ゲーム、ロールプレイなどがあります。

問題をベースにした学習

この手法は、問題を扱いながら、子どもの創造性や批判的思考、そして倫理的価値観を分析し、熟考する能力を育むのに役立ちます。この手法では、子どもの自然な好奇心を生かして、疑問を出し、それに回答することを促します。子どもや若者は、絶対的な答えや簡単な解決法のない、複雑な現実世界の状況を反映した問題に直面します。

この学習は、参加者が自分たちの学習に対して積極的に、自制心を持ちながら課題と向き合う姿勢をとる助けとなります。

この手法はロールプレイや、事例研究、ジレンマ、社会問題の分析と一緒に使うこともできます。経験ベースの学習のテクニックと一緒に行うこともできます。

² David Kolb, *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development* Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1984. Association for Experiential Education. <http://www.aee.org>

ディスカッションをベースにした学習

ディスカッションとは、参加者間の口頭でのやりとりで、活発な意見交換を目的としています。コミュニケーションや人の話を聞くスキルを養うのに役立ち、異なる課題や考え方への理解を促進します。ディスカッションにはディベート、ラウンドテーブル（円卓会議）、フォーカスグループなどのさまざまなやり方があります。ディスカッションはケーススタディ（事例研究）、実話、ジレンマ、あるいは関連する映画や写真、歌などに基づいて行うことができます。

ディスカッションは、進行役の指導で改善することがよくあります。参加型のテクニックを用いて、あなたが意見を要約したり、異なる意見の関連を指摘したりすることを薦めます。こうしたテクニックには、マインドマップ、コンセプトスケッチ、メタプラン、カードなどがあります。

内省をベースにした学習

熟考は、上記のすべての手法の一部と考えることもできます。どの手法にも、個人または集団でじっくりと考える段階がどこかにあるからです。しかし、頭で考えるというレベルを超えて、子どもが自分の精神状態をチェックし、学習に集中する助けになる、別の種類の熟考もあります。この種の熟考は、子どもの自我と精神性を育む助けとなる内省的な手法です。

内省は参加者に、自分の心の奥にある考えや感情、願望を自覚し、評価する機会を与えます。これは、倫理教育のための異文化・諸宗教教育では特に大切な点です。なぜなら、子どもたちが自分の価値観や心構えについて、じっくりと考えることができるようになるからです。この手法は、個人の変化やコミットメントをチェックする際にも役立ちます。

内省は、個人でもグループでも行えます。瞑想や沈黙の時間、その他のどんな熟考テクニックでも、参加者が自分についてじっくりと考える助けになります。

用いられるべき具体的学習方法

芸術：芸術は学習にとっても役立つ手段です。芸術は創造力を刺激し、考えを言葉や絵や音に変換する能力を伸ばします。また、芸術は知性を補完するので、子どもが思案し、それから自分の意見や考えを創造的に表現するのを助けます。芸術には、作曲する、コラージュを作る、Tシャツにペイントする、絵を描く、映画を作る、写真を撮る、詩や物語を書く、といったことが含まれます。芸術を通して文化や社会を探ることも可能です。

アプリシエイティブ・インクワイアリー（肯定的な模索）³：問題はしばしば私たち自身のものの見方にあるという考え方に基づく、やや高度なテクニックです。ベースになるのは、人の長所に目を向けながら、人間関係や制度のなかで大切なものを見つけることによって、状況を変化させる道を探ることです。過去の似た例を探し、その時は何が一番効果的だったのかを分析し、将来何が必要とされるかを想像します。人々の能力に目を向け、その強みを土台に、特定の状況を変える方法を見つけることが要求されます。

3 この手法の詳細については、<http://appreciativeinquiry.case.edu/> を参照のこと。

ディベート（討論）：1対1またはチーム対チームで、形式に従って議論を戦わせることです。ディベートは単なる言葉やパフォーマンスのスキルだけでなく、理性的な議論、異なる観点に対する寛容さ、的確な自己分析を体現します。ディベートは対立する意見を持つ者同士が、侮辱ないし感情的な訴えや個人的偏見を交えずに問題について話し合う方法です。⁴

経験の共有：人の話を聞いたり、自分の考えや気持ちを言葉にしたり、他者と結びつける能力を高めることで、子どもが我が身を振り返って自分の偏見に気づくことを可能にするテクニックです。ストーリーテリングやドラマ・サークル、現実にあった話、映画、歌、ニュースなどを使うと、体験を打ち明けやすい雰囲気づくりに役立ちます。

社会見学：このテクニックでは、学習の場が教室の壁を越え、外のコミュニティに広がります。子どもは、学校ではできない、新たな未知の体験をすることができます。社会見学は社会性や市民意識を育て、特定のテーマについての知識や理解を深める好機になります。

フォーカスグループ：5～10人のグループでディスカッションを行い、特定のトピックについて情報や意見を集めます。フォーカスグループでは進行を仕切るモデレーター（司会者）が、そのグループにふさわしいディスカッションのガイドラインを決め、全員に発言のチャンスが回るよう気を配ります。参加者同士のやりとりが刺激となって、中身の濃いディスカッションや洞察が生まれ、また、プログラムの影響や効果の質に関するデータを得ることができます。データは子どもや大人が平和についてどのような概念や価値観を持っているか、暴力への対処法についての考え、また学校やコミュニティで平和を推進する最善の方法などを分析するのに使えます。

ゲーム：協力して行うゲームを通じて、参加者たちが決まった課題をこなし、ゴールを目指して一丸となって取り組みます。他者と協力して働く能力を伸ばし、自信を育て、新たなアイデアを発見し、偏見に挑戦するゲームは、諸宗教学習を通じた倫理教育に適しています。ただし、公正でマナーのある競争ができる雰囲気を作る必要があります。「勝者」と「敗者」を浮き彫りにするゲームは避けましょう。ゲームはウォームアップとして、または参加やチーム作りを促すためにも使えます。

共同イニシアチブ：チームワークを土台にしたテクニックで、多様なメンバーからなるグループが、ある特定の状況に一丸となって対応します。相互理解を促し、コミュニケーションや人の話を聞くスキルを伸ばすのを助ける他、どうすれば社会に変化を起こせるかを創造的に考えるのにも役立ちます。共同イニシアチブには、子どもの権利を推進するキャンペーン、学校間の交流、テーマ週間、ビデオ作り、相互理解や尊重を推進するためのプロジェクトなどが考えられます。

瞑想：瞑想は子どもを落ち着かせ、集中力を向上させ、体と心の健康を高めることに役立ちます。瞑想テクニックには、思考、願望、感覚をより大きく意識できる瞑想法、ウォーキング、マインドフルネス・メディテーションなどがあります。子どもたちは瞑想を通じて、怒りやストレス、欲求不満をコントロールする方法を学ぶことができます。

問題解決：昔から使われている手法で、参加者が協力して問題を解決し、その体験を振り返ります。一般には次のような手順を踏みます。－問題点を明らかにする、問題の原因を分析する、いくつかの問題解決の方法を見出す、それぞれの解決法を評価する、解決法の1つを選ぶ、それを実行する、問題が解決したかどうかを評価する。本書で紹介しているアクティビティでは、必ずしも一連の手順を踏む必要はありませんが、提起された問題を分析し、解決または転換します。

4 ディベートについての詳細な情報は<http://www.idebate.org/debate/what.php> を参照のこと。

ロールプレイング：参加者が個人的な体験をすることなく、他者の経験に入り込むことで、問題点を探る方法です。参加者はそれぞれキャラクター（役柄）になり、協力して、ある状況を創り出します。それは参加者の現状に基づいた状況でも良いでしょう。キャラクターがどのような行動を取るかは、進行役のガイドラインに沿って参加者が決めることもできます。ロールプレイは、初対面の参加者同士が打ち解けるきっかけにもなります。また、創意工夫を促し、グループ内に相乗作用を生みます。特定の状況に対する理解を高めるためにも有効なテクニックです。ロールプレイは事例研究やちょっとした状況に基づいて準備することができます。

円卓会議（ラウンドテーブル）：ディスカッションや意見交換のためのテクニックで、平等と尊敬を奨励します。参加者はテーブルを囲んで座りますが、誰かが特別な立場ということはなく、全員が平等に扱われます。ラウンドテーブル・ディスカッションでは、進行役ではなく、参加者全員が話し合いの進行に貢献します。

サービス・ラーニング：コミュニティへの奉仕活動と、活動後の反省からなるテクニックです。参加者の社会に対する責任感や、自分のことよりもコミュニティを優先して考える心構えを養います。また、知識やスキルを具体的な問題に応用して、特定の状況を変える方法を学ぶためにも使えます。サービス・ラーニングのアクティビティには、リサイクル活動や環境プログラム、貧しい地域で子どもにパソコンを教えることなどがあります。

シミュレーション：ある仮想の社会集団や状況の中で、参加者がそれぞれの役割を担い、新たな仕事をこなすことや新たな役割に従って行動することの複雑さを実感します。参加者がさまざまな方法を分析して、倫理的な状況について熟考し、他人の立場で考える助けになるテクニックです。模擬裁判や架空インタビューは、このテクニックの一種です。

スポーツ：スポーツは平等性、参加、仲間意識を促し、努力、フェアプレー、人格形成、チームワークといった、社会的価値観や個人の目標を高めます。スポーツに参加することでコミュニティへのコミットメントは強まり、対人関係は改善され、指導的役割を担う傾向が強まるとされています。また、社会の結束や相互理解と尊重の精神を促進するので、平和のメッセージを伝え、非暴力による問題解決の方法を見いだすことにも役立ちます。

ストーリーテリング：しばしば即興のかたちで、出来事を言葉と音で伝える古くから使われている技法です。物語は、子どもをよく知っているようで全く知らない別世界に誘い込みます。皆と一緒に物語に耳を傾けるという行為からは、親密感と共同体意識が生まれます。物語はおとぎ話ではなく、人間であるということは一体何なのかをあらゆるレベルで表現します。ストーリーテリングを通じて、子どもは人の話を聞くスキルや、人の立場になって考える能力を育みます。また、物語の世界に入り込むことで、創造力や自分の行動を省みる能力を伸ばすことができます。

学習プロセスやここで提案した手法は、参加者に疑問を持ち、考え、倫理的価値観に基づいた意思決定をする能力を高めることを目的としています。『共に生きることを学ぶ』の狙いは、変化を促し、子どもや若者が自分自身の経験から理解し、学べるようにすることなのです。

5 サービス・ラーニングについての詳細な情報は、Service Learning: Lessons, Plans and Projects. Human Rights Education Program, Amnesty International and Human Rights Education Associates, HREA. March 2007を参照のこと。

適切な環境づくり

プログラムの実施前と実施中とで、参加者が意見、考え、信条を共有し、表現することができる適切な環境が必要です。

- > 経験型のアクティビティと実践型のアクティビティとが行える場所を選びましょう。
- > 使用する部屋に特定宗教のシンボルが飾られていないことを確認して下さい。中立的であり、どのような宗教や考え方をも歓迎するスペースでなくてはなりません。
- > 参加者にはワークショップと活動内容について、遅くとも1週間前までに知らせます。37ページに記載の手引きを配って、プログラムの目的や日程の他、参加者が知っておく必要のある情報を説明してください。参加者がプログラムの準備をできるようにして、期待を具体的にするのに役立つでしょう。
- > プログラムの始めに時間を取って、お互いに知り合うことから始めましょう。アイスブレイカー（緊張をほぐすもの）をもちいて、参加者の間に信頼が生まれるようにしてください。
- > 参加者自身に基本ルールを作らせます。基本ルールとは、グループがチームとして交流できるような作業の進め方や時間の使い方、コミュニケーションの取り方に関する共通の合意のことです。こうした基本ルールを作ることで、グループ内に相乗作用が生まれ、「これは自分たちのプログラムだ」という意識が芽生えます。参加者に基本ルールを作るためのブレインストーミングをさせてください。
- > グループのモチベーションを絶えずチェックしましょう。常に緊張をほぐすものを用意しておき、参加者の集中力や活気を引き出し、維持してください。
- > 少数グループに属する人たちの参加を奨励し、彼らが仲間に加わるよう絶えずお互いのやり取りを促すアクティビティを考えて下さい。
- > 休憩時間や食事の時間、公式なセッションが終わった後の夜の時間を活用して、参加者同士が交流できる場を作りましょう。こうした時間が、相互理解や発見のプロセスを促進します。
- > 参加者の考え、意見、提案が考慮され、プログラムの結果やアクティビティに確実に反映されるようにしましょう。こうすることで、共に知識を増やし、また、参加者は「自分は価値ある存在で、認められている」と感じるができます。
- > プログラムの最後はフィナーレにふさわしい、モチベーションを高めるアクティビティで締めくくりましょう。閉会式には詩や諸宗教的な祈りを使い、またワークショップの写真や音楽を使ったプレゼンテーションを準備します。
- > 参加者同士で友人関係を築き、連絡のネットワークを作ることを奨励し、プログラム終了後も対話を続けることを勧めましょう。

手本になる

良いお手本になることは大切です。あなたの参加者への接し方が参加者のお互いの接し方に強い示唆を与えることになります。ですから参加者に対しては、常に敬意と透明性をもって接してください。子どもや若者は自分たちの身近にいる、言動が首尾一貫した誠実な人を尊敬します。したがって、あなたはポジティブな価値観や考え方を示し、オープンで包容力があり、誰でも仲間として受け入れるやり方で行動することが求められます。

よいお手本を見ることは、「自分はどんな人間か」「どんな人間になりたいか」を考えるきっかけになり、困難な状況を解決する方法を見つける意欲を起させます。これはとりわけ子どもや若者には重要なことです。が、平和の文化を育むことを目的とする倫理教育においては、なお一層重要です。従って、良いお手本となることは『共に生きることを学ぶ』の効果を何倍にも増やすことができるのです。

学習モジュールを初めて使うとき

計画と準備が極めて重要になります。学習モジュールを使う前に、進行役となるチームは以下のポイントに沿って、大まかな計画を立ててください。

モジュールの内容を把握する

『共に生きることを学ぶ』は、尊敬・共感・責任・和解という倫理的価値観を中核に作られています。これらは「自分と他者を理解する」「共に世界を変える」という2つのモジュールに組み込まれています。

モジュールを最後まで読み、その最も重要な価値観や概念があなたにとって何を意味するのか、いかにプログラムをあなたの状況に合わせられるかについて、2、3文で書き留めてください。自分自身の理解と参加者に伝えたいことを確認する助けになります。それから以下のことを行います：

1. 「村」の地図を使って、あなたが取り組むいずれか一方、もしくは両方のモジュールからキオスクを選んで、学習ルートを準備してください。
2. アクティビティを選びます。あなたのプログラムの形態に最適と思われるアクティビティを選び、説明されている手法が設定やグループにふさわしいことを確認してください。
3. 選択した学習プロセスを把握し、それが、あなたが選んだアクティビティを通じて、モジュールの目標を達成する上で如何に役立つかを考えてください。

環境設定と参加者

自分がどのような教育環境の中で取り組むことになるのかを基本的な点について、またより具体的な点について明確にしてください。サマーキャンプですか、ワークショップですか、1回のセッションですか、それとも週1回のセッションを長期にわたって続けるプログラムですか、あるいはセミナーですか？教育環境によって、この先の計画の立て方が決まります。次の点をよく考えてください。

- > どのような人が参加するのか？
- > 同一のグループなのか、それともさまざまな子どもが混在するグループか。宗教と文化の両方の側面から考えてください。
- > 教育環境の設定や参加者がプログラムやセッションにどう影響するのか？

目標

プログラムの各セッションの目標を確認してください。目標はスマート (SMART) でなくてはなりません。

- > 具体的 (Specific)
- > 測定可能 (Measurable)
- > 達成可能 (Attainable)
- > 現実的 (Realistic)
- > 時宜を得た (Timely)

これらの目標を参加者にも教え、必要に応じて変えてください。

方法論

28、29ページの方法論をよく理解してください。あなたの設定する教育環境の中で、また参加者との間で効果がありそうなさまざまな手法を使ってください。そこで問題になりそうな点も確認しておきましょう。提案された手法はどれも参加型で、インタラクティブで、自発的な学習プロセスを促進するものです。

資料集

『共に生きることを学ぶ』には、アクティビティに使える教材が一通り用意されています。参加者の批判的思考を育む教材です。資料集には、話、詩、事例研究、歌、映画、ジレンマ、ロールプレイカード、平和の祈りなどが含まれています。

資料集に目を通し、以下のことを自問してみてください。

- > 他にどのような所から教材を見つけられるか？
- > グループ内に資料として使えるものがすでにないか？
- > どの資料教材をどのアクティビティに使うべきか？教育環境と参加者を鑑みて、どんな手法が最も有効か？
- > 別の補助資料はあるか？－例えば音楽、芸術、口承、物語など。
- > 資料をどのように利用または紹介するのが最善か？

概要

それぞれのキオスクについて、提案されているアクティビティに目を通し、あなたのグループと開催場所に最も適したものを選んでください。

セッション中、どのような流れで学習を進めるか考えてください。始まりと終わりは厳密に決めますが、その間は柔軟に対処できます。25ページの、らせん状の学習プロセスを参照してください。より参加型かつ熟考型の学習プロセスにすることができるよう。

あなたのセッションの学習プロセスが、やる気を起こさせ、質問する余地があり、参加者が発見するのに役立つものになるようにしてください。また、参加者が学習したことを自分の生活に結びつけるための十分な時間を残してください。

行動に移す

各セッションの最後は必ず、参加者が学んだことを自分の生活に結びつける時間を作り、さらにはその観点からどのような行動を取るべきかを考えるディスカッションで締めくくってください。行動は状況にふさわしいものでなくてはなりません。また、参加者自身が考え、グループが自分たちの問題との意識を持っている場合のみ、その行動は効果を上げることができます。文脈に応じて、個人で行動をとる場合も、学校やコミュニティを通して行動する場合もあるでしょう。

評価

セクション3「進歩をモニターする」の中に、あなたが参加者とともに、学習の進み具合を評価できる方法が多く記載されています。その1つが学習日誌で、参加者1人1人が自分で進歩を記録します。また、あなたが利用できる5つの評価方法も記載されており、その場で「やる気を測る」方法も載っています。

キオスクにはそれぞれ「休憩所」の標識がありますが、それは参加者に学習日誌をつけさせ、自分の進歩をチェックさせることをあなたに思い出させるためのものです。評価は進行役ではなく、参加者が行います。進歩の評価は自己チェックと反省に基づいています。つまり、参加者は学習したことを自分自身の状況に結びつけなくてはなりません。よって、参加者が自身の学習を管理することにより、自ずと力がつくようになっていきます。

あなたは進行役として、参加者の態度や知識、個人的、対人的、あるいは社会的スキルに変化が出てきたかを評価するために、参加者が受けた影響を評価するチェック表を作成することを勧めます。評価は価値観がどの程度身についたか、また学んだことを各人の現状と結びつけているかどうかに着目してください。影響を評価するモデルについては61ページを参照してください。

進行役も、各セッションの後で自己評価を行い、自分たちの学習や演習全般の成果を評価することが大切です。

プログラムの「準備・手配」、「プログラム内容」、「学習」に関しての参加者の第一印象を228ページの評価・感想記入用紙を用いて記入させて下さい。（228ページ参照）

『共に生きることを学ぶ』は誰を対象に使うべきか？

『共に生きることを学ぶ』は、12歳以上の子どもや若者を対象に使うことを想定して開発されました。年齢層によって最適な手法やアクティビティを選択することが可能です。手法やアクティビティは、さまざまな文化的や社会的背景に合わせて使えるように考えて作られています。

学習プロセスや手法は、子どもや若者が自分たちの社会に変化をもたらせるように、個人のコミットメントや共同計画を立てる能力を、参加者の中から引き出して発達させる助けとなります。

『共に生きることを学ぶ』は、主として多数の宗教が混在するグループと一緒に使うことを念頭に作られており、少なくとも2つ以上の宗教の代表者が出席することが理想的です。しかし、必ずしもそうはいかないこともあるでしょう。その場合は、他の宗教、伝統、文化に対するオープンさや尊敬の大切さをあなたが伝えることがより重要になってきます。

『共に生きることを学ぶ』はどこで使えるか？

この教材はさまざまな目的のためにさまざまな環境で使えます。

1. 学習モジュールは、ワークショップ、会議、セミナーなどで使えます。各モジュール内のテーマ別のキオスクに従い、時間や参加者や環境に合わせて活用してください。
2. 学習モジュールは、学校の授業で利用することもできます。アクティビティを、宗教や倫理の授業の一環として導入することも可能です。例えば、各モジュールについて学習ルートを選び、数カ月かけて、各キオスクのアクティビティを1つあるいは2つ以上、実行してもいいでしょう。1つのキオスクを、特定の学科を補完するために利用することもできます。
3. 子どもや若者向けのサマーキャンプで使用することもできます。このモジュールは、宗教や文化の異なる人たちがより包括的に学ぶことに役立つでしょう。各モジュールのキオスクを、サマーキャンプの活動のテーマとして使うことも可能です。

『共に生きることを学ぶ』を使えるのは誰か？

この教材の主な利用者は、公式教育、非公式教育、あるいは非正式教育⁶の場で子どもや若者と取り組みをする人々です。これには「子どものための宗教者ネットワーク」(GNRC)のメンバーや、宗教的・文化的コミュニティ、宗教教育者、教師、訓練機関などが含まれます。

公式な場で

学校は、カリキュラムに『共に生きることを学ぶ』を組み込み、また、生徒の批判的思考力を伸ばす手法やアクティビティを提供することで、子どもや若者に力を与えることができます。

『共に生きることを学ぶ』を学校で使うことで、より幅広いコミュニティに前向きな効果をもたらすことが可能となります。学校はかつて一所によっては今も一コミュニティセンターでした。人々が集まって活動し、計画を立て、集会を開き、考えを共有する場所だったのです。ですから学校は、コミュニティの構築や学習にとつての効果的な場として、私たちが互いをより尊重し、より良く理解する助けになります。

非公式な場で

学校教育を受けていない子どもや若者や、社会的に取り残された脆弱な立場にある子どもや若者（難民、移民、孤児等）を対象に、教育やスキル開発の場を公の学校教育制度の外に設けることは、彼らが知識、前向きな態度、寛容性、理解力を身につけ、彼らの行動の変化を促すための新たな方法となります。

宗教を基盤とする団体、青年団、平和クラブやその他の同様の教育機関は、諸宗教および異文化間の学習を通じて倫理の普及を図る上で重要です。若者はしばしば自発的にこうした団体に参加し、オープンな環境の中で社会問題を提起したり、話し合ったりします。こうした要素は社会のニーズに応える若者の能力を活性化するのに理想的な場所を作ります。

『共に生きることを学ぶ』は平和教育や人権教育のプログラム、とりわけ異文化・諸宗教学習や、人間の尊厳の推進に重点を置くプログラムにあわせて簡単に変えることができます。ディベート、公開討論、諸宗教カフェ（宗教間の対話の場）、ラウンドテーブル、共同イニシアチブなどは、批判的思考や宗教の壁を越えた対話を促進する機会として、非公式な場でより簡単に実現できる場合もあるでしょう。

宗教対立や隔離政策のせいで、公式に多宗教間の交流を設定するのが難しい場所では、相互理解を促進し、交流や対話の機会を提供するために、非公式な場が必要です。

6 「公式（フォーマル）教育」は学校や訓練機関で、「非公式（ノンフォーマル）教育」は、コミュニティグループや宗教コミュニティなどで行われる。「非正式（インフォーマル）教育」はその他、例えば友人や家族や職場の同僚とのインタラクションなどを指す。これは主として行政上の区分だが、生涯にわたる学習のすべての面をカバーしている

非正式な場で

家庭や家族の役割は、異なる集団の間における尊敬と理解を促進する上で必要不可欠です。宗教および文化の多様性が大切であることをはっきり表明することは、子どもや若者が「共に生きる」ためのより良い方法を探し、それに向かって努力することにモチベーションを与える方法のひとつです。家庭は、違いを理解し、アイデンティティの発達を促進できる場です。したがって親は、子どもや若者に力をつけさせる上で、力強い味方になる可能性があります。

参加者のための手引き

プログラムの中身や、参加者に何が求められているか、参加者がどんな体験をすることになるのか、参加者が学習の旅に出発するにあたり、いかに最善の準備ができるかについての情報を提供する手引きを用意してください。

事前に参加者に手引きを渡すことで、参加者の準備を円滑に行い、好奇心を刺激し、期待することを明確にできるようにします。

手引きに含まれるべきものは？

1. 紹介のメッセージ：プログラム参加に対する歓迎、プログラムの期間、開催者、参加者人数、どの国から、どの宗派の参加があるかを明記する、プログラムの成功のために積極的な参加が重要であることを強調する。
2. 目標：プログラムの終了時に、何を達成することが期待されるかについての概要をまとめてください。前述のSMARTを活用してください。
3. 議題：セッションごとの時間割りをしてください。休憩、食事、娯楽、遠足などの時間を取るようになっています。
4. セッションの説明：セッションの内容について、どのような準備ができるのか、各セッションに必要な準備・段取りのための情報をまとめてください。
5. 学習日誌：この学習に参加するにあたり、参加者はこれから学ぶ経験についての学習日誌をつけるよう要請されることを説明してください。
6. 役立つ情報：サマーキャンプもしくはワークショップであれば、場所、天候、必要な服装や、開催地にある設備等（公衆電話、インターネットアクセス、森林があるかないか等）についての情報を盛り込んでください。学校のプログラムであれば、可能な社会見学や実施可能な屋外活動のようなものがあればそれについての情報も提供してください。

参加者が興味を持てるような手引きとなるようにし、あなたが提供する情報が明確で簡潔なものとなるようにしましょう。

困ったときはどうするか

このセクションでは、倫理教育プログラムを実施する際、特定の問題にぶつかった場合にはどうすればいいかについての具体例が挙げられています。下記の仮想事例とアドバイスは、私たちが『共に生きることを学ぶ』の開発中に実施したテストワークショップでの経験や、そこで直面した問題を基にまとめたものです。

難しい状況が発生する可能性が考えられます。進行役はあらかじめ準備しておき、毅然と、しかし理性的に介入する必要があります。次に挙げるケースを読んで、こうした状況が進行役としてのあなたの仕事ぶりにどう影響するのかを考えることをお勧めします。

こんな場合はどうするか

1. 私のグループには宗教的多様性がない…

宗教の多様性を認識させ、異なる宗教の人と共に生きることができる価値観を奨励したいが、私の担当するグループは宗教的に多様でもなければ、私の町も宗教的に多様とは言えない。

『共に生きることを学ぶ』は、宗教的背景の異なる参加者と一緒に使うことを想定して開発されました。しかし、宗教的に多様なグループでなくても、この教材を使って他の宗教に対する認識を育て、なおかつ文化的な問題を扱うことが可能です。以下の有益なアドバイスに留意してください。

- > 経験型アクティビティを使って、参加者を他の宗教に触れさせる。80ページの「諸宗教訪問」アクティビティを利用して、参加者に他の宗教を紹介し、自分の理解や考えについて内省を促すことができる。
- > 他の宗教者をゲストとして諸宗教カフェやディスカッションに招く。参加者はその人と話すことで学ぶことができる。
- > 信教を表現する権利を描いた映画を使い、観賞後に参加者の考えや感想を話し合う。
- > 自己評価の一環として参加者に、異なる信仰を持つ人々と面会し、その宗教について学ぶように求める。
- > 他宗教の慣習を写した写真や映像を使い、その役目や意味を探る。
- > 異なる宗教の背景を持つ進行役のグループを形成する。
- > 参加者の宗教の中で、類似点や相違点を探る。複数の宗派や民族が存在するか。そうした違いが参加者の宗教的アイデンティティの形成にどう影響しているかを話し合う。

2. 宗教問題ではなく、社会問題を扱いたい…

私は『共に生きることを学ぶ』を使うことに興味があるが、宗教問題については話したくない。私の地域とより深く関わる社会問題について話したい。

『共に生きることを学ぶ』は、不正や宗教の違いが原因で起こる紛争などの暴力の対立をなくしていくことに若者を関与させる目的で作られました。その上で、多くの視点から多様性を理解させることを狙いとしています。焦点は主に宗教の違いに合わせています。

しかし、だからといって、他の種類の紛争や違いに対処する際のモデルとして使うことができないわけではありません。それどころか、『共に生きることを学ぶ』を使って、人と人との間の尊敬や理解の不足に根差したどんな問題にも取り組むことができます。ただし私たちとしては、たとえ主なトピックが宗教理解でなくとも、この教材を諸宗教的なグループで利用することを勧めます。そうすることで、参加者間にきずなが生まれ、宗教の違いを超えた協力が促進されるからです。

以下に有益なアドバイスを挙げます。

- > 取り組む社会的トピックを選ぶ。(若者グループ間の暴力、強制退去問題、移民、資源争い、性差別など)
- > 第1のモジュール「自分と他者を理解する」を使って、文化の多様性や考え方の違い、文化集団や社会集団に対する偏見やステレオタイプ、相手が誰であれ他者を尊重することの大切さなどを強調する。
- > 第2のモジュール「共に世界を変える」を、あなたが選んだトピックに合わせて調整し、その問題が人々の関係や、個人的・集団的に行動を起こす責任にどう影響しているかに焦点を当てる。自分たちは問題の一部ではなく解決策の一部になれることを参加者に認識させる。
- > 『共に生きることを学ぶ』を強制退去や暴力的状況の学習に利用する方法については、「エクアドルのワークショップ」(210ページ)や「エルサルバドルのワークショップ」(213ページ)「パナマのワークショップ」(216ページ)を参考にする。

3. 宗教の違いのせいで、グループ内に敵対意識がある・・・

私は『共に生きることを学ぶ』を宗教的に多様なグループに導入したい。ところが、一部の宗教グループには非常に暴力的な過去があり、参加者間で何度も対立が起きている。

『共に生きることを学ぶ』は相互理解や、自分と異なる人に心を開く必要性に対する意識を高めるのに役立ちます。信頼という架け橋を築き、参加者に和解の心を育むことが狙いです。したがって『共に生きることを学ぶ』は、上記のような問題への取り組みにも使えるはずです。

以下に有益なアドバイスを挙げます。

- > 第1のモジュール「自分と他者を理解する」により多くの時間を割き、参加者たちが安心して交流できる環境を作る。
- > 共通の人間性や多様性の豊かさの重要性を強調する。こうして参加者間の連帯感を生むことができる。
- > 他者の生き方や考え方を体験できる経験型の手法を用いて、参加者のステレオタイプや偏見に挑戦する。
- > 対話と共有の場を設ける。自分と違う視点に対して心を開くことの重要性を強調する。

- > 他者の立場で考えるアクティビティを使い、参加者に自分と他者の気持ちを振り返らせる。
- > 参加者と一緒に、宗教グループ間の紛争について明らかにする。すべての立場の見解に耳を傾け、紛争のパターンや経緯、紛争の当事者、紛争の影響を受けた関係やその後などを考える。紛争の原因は、私たちが他者と共鳴することができず、互いを理解し尊重することができないことに根差しているという点をよく考えさせる。もし参加者が紛争の経緯や原因についてよく知らなかったら、このやり方で、彼らの偏見に疑問を投げかける。
- > 他の地域の紛争転換についての事例研究、記事、映画、歌などを使い、話し合いの中で参加者自身の状況と比べながら類似点を引き出す。
- > 異なる宗教グループ間で、共通の理解を築くために努力している人たちの例を紹介し、そのことについて参加者にディスカッションさせ、考えさせる。
- > 参加者に、自分たちと他の宗教グループに属する人との個人的な葛藤について考えさせ、時間を割いて、「平和は私から始まる」のキオスク（「共に世界を変える」のモジュールの中にある）のアクティビティを実践させる。
- > バランスの取れた雰囲気を作り、ディスカッションや進行が偏るのを防ぐため、進行役は宗教の多様性を反映したグループにすること。

宗教の暴力や対立という観点から『共に生きることを学ぶ』をどう使うかについて詳しく知りたい方は、イスラエルで行われたワークショップの報告書「Massa - Massar（旅-道程）」(<http://arigatou.ch/mm/file/massa-massar-report.pdf>)を読んでください。

4. 参加者が、暴力的な状況にさらされた体験がある…

私のグループの参加者は、社会から疎外されている少数グループのメンバーで、日々暴力に直面している。

『共に生きることを学ぶ』は、さまざまな社会的、経済的、文化的背景を持つグループに使うことができます。過去に、あるいは現在暴力にさらされている子どもや若者が苦境を乗り越え、前向きな心で平和に貢献するためには、自尊心を高め、力をつける機会が必要です。

有益なアドバイスをいくつか挙げておきます。

- > モジュール「自分と他者を理解する」の中の「他者との関わりの中で自分を知る」のキオスクに重点を置く。
- > 参加者が自信や自尊心を高めることができる場を設ける。これは、参加者が創造力を使いながら、批判されずに参加し、交流できるアクティビティを通じて行う。少数派のグループが発言の機会を与えられ、意見に耳を傾けてもらっていると感じられるように気を配る。
- > 社会の不公平の原因をはっきりさせ、その状況を平和的に解消するためには力をつけなくてはいけないことを参加者が実感できるアクティビティを用意する。批判的思考力や問題解決能力を養うアクティビティを活用する。

- > 社会の対立や不公平に対抗する非暴力的なやり方を参加者が見つけられるよう手助けし、自分自身の状況に対して平和的に対処できる力を身につけさせる。さまざまな宗教指導者や社会的指導者が正義のために闘う姿を描いた映画を使っても良いし、非暴力的な抵抗運動を行っている人々や団体を招いても良い。⁷
- > 参加者が自分自身の葛藤や暴力的な状況について考えるのを助け、「共に世界を変える」モジュールの中にある「和解への歩み」のアクティビティを行うために時間を割く。
- > この種の状況における『共に生きることを学ぶ』の使用法についてのより詳しい情報は、「タンザニアのワークショップ」（207ページ）と「エルサルバドルのワークショップ」（213ページ）を参考にしてください。

5. ワークショップのトピックのせいで参加者が感情的に取り乱す…

ワークショップのトピックやセッションやアクティビティのせいで参加者が自分の気持ちに敏感になってしまい、十分に参加することができない。

『共に生きることを学ぶ』は、アイデンティティ、価値観、文化といった、きわめて個人的な事柄と関連するように作られています。そのため参加者は、嫌でも自分の先入観や偏見や体験と向き合うことになります。つまり自分の魂や感情を覗き込むことになるのです。このプロセスが、ポジティブな心構えを身につけることにつながればと願っています。

有益なアドバイスをいくつか挙げておきます。

- > 参加者が気持ちを他の参加者に打ち明けたい、あるいは打ち明ける必要があると感じたときは、耳を傾ける余裕を持つ。
- > 感情的に取り乱してしまった参加者と個別に話し、トピックについて感情的になるのは悪いことではないと知らせる。悩む原因は何か、なぜつらいのかを尋ねる。
- > もし、その参加者が生命にかかわる深刻な状況にいて、その影響を受けているのだと打ち明けたら、ワークショップやアクティビティの後で忘れずに話をし、その問題の解決方法を探す手助けをする。
- > もし、その参加者がセッションの最中に精神的苦痛を言葉や態度に表したら共感を示す。本人にどうしたのか尋ね、気持ちを表現させる。他の参加者に対しても、その人の話に耳を傾けて、理解に努めるよう求める。
- > 深呼吸や単調な言葉を繰り返させたり、歌を歌わせたり、横にならせたりして落ち着かせる。
- > そうした参加者が自己表現できる創造的なアクティビティを用意する。例えば絵を描くことなど。
- > もし参加者から内緒で何かを打ち明けられたら、その秘密を厳守すること。

⁷ 非暴力的対立に関する教材やゲーム、メディアについての詳細は、<http://www.aforcemorepowerful.org/> の 'A Force More Powerful' を参照のこと。

セクション2

学習モジュール

モジュール1：自分と他者を理解する

モジュール2：共に世界を変える

倫理教育委員会のビジョン

私たちは、すべての子どもたちが倫理的価値観を身につけ、宗教や文明の異なる人々と連帯して生きることを学び、「神」、「究極の現実」、「神聖なる存在」などと呼ばれるものへの信仰心を培いつつ、自らの精神性（スピリチュアリティ）を育むことができる世界を目指します。

若者に世界を変える力を与える

この2つの学習モジュールの中のキオスクは、世界を変えるために信頼の架け橋を築くことができるようにする諸宗教・異文化の旅へと参加者を案内します。

参加者は、このプログラムのアクティビティを通して、自分と異なる人々との関係を育成することの意義を学びます。「自分」や「自分と他者との関係」を育むことや、自分の生活の中において倫理的価値観を強化することの重要性に気づきます。参加者たちは旅の途中で、世界や自分の周りの人たちを理解する際、困難に直面するでしょう。その困難が「世界市民」としての個人と集団の責任を自覚するのに役立ちます。参加者は自分の経験を振り返り、さまざまな異なる価値観を結びつけ、自分自身と周囲を変える力を身につけます。力を合わせて楽しく作業し、達成感を味わううちに、参加者は世界を変えるための平和的な方法を発見するのです。

第1のモジュール「自分と他者を理解する」は、個人とそのアイデンティティに焦点を当てています。自分と、自分とは異なる宗教や文化を持つ人との間に、類似点と相違点を発見するのに役立つモジュールです。参加者は、他者の視点で自分を見ることで、共感をもって他者を認め、他者の気持ち、信念、生き方を理解し、尊重することを学びます。第1のモジュールの最後までに、個人には平和的で思いやりのある行動を取る責任があることについて、じっくりと考えることになります。これは、参加者が自分たちの精神性を育む助けになるでしょう。

第2のモジュール、「共に世界を変える」では、変化を起こす上で他者との結びつきが大切であることを考えます。このモジュールの旅で参加者は、社会の対立や紛争、暴力的な状況や不公平の原因を分析し、平和的な解決策を見出すスキルを身につけます。参加者は内なる平和を達成することで、和解の心を身につけることができ、それが他者との間に信頼の橋を架けるのに役立つことを発見します。第2のモジュールの最後には子どもや若者に他者と力を合わせ、社会変化へのニーズに倫理的に応答するという意欲が湧くことでしょう。

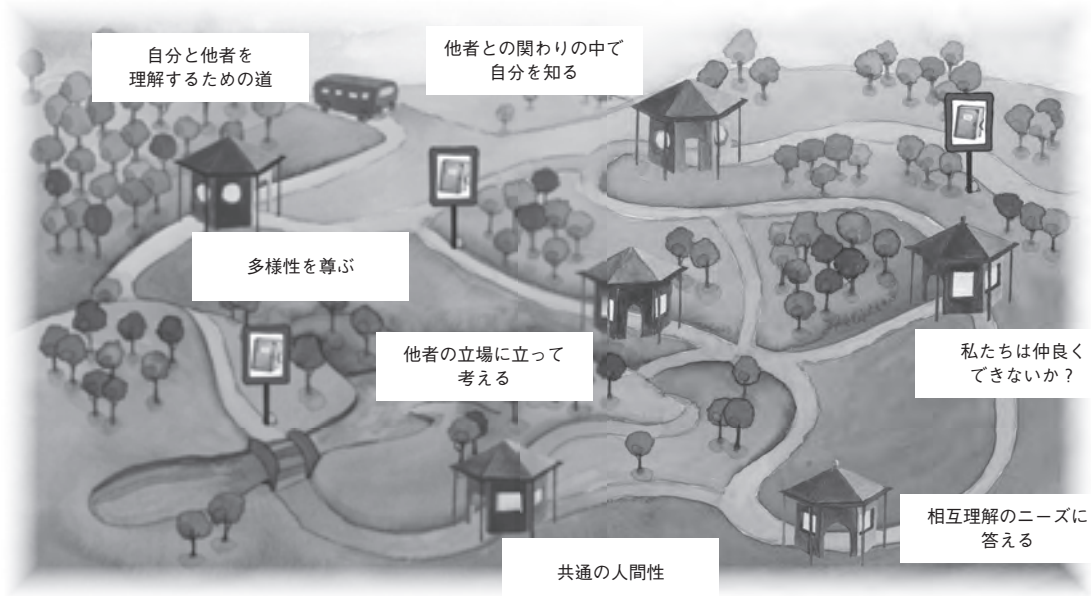
進行役は、各モジュールにおいて、取り上げるべきキオスクを選び、キオスクを回る順番を考えてください。

モジュール1

自分と他者を理解する

キーワード: 相互尊重

互いを尊重する気持ちは、互いを理解し、相違点と類似点を認め合うことで育まれます。



モジュール1のキオスクで参加者は、他者との関係における自己について学ぶことができます。他者との違いを受け入れることを学び、また、私たち皆に共通する点も発見するでしょう。異なる経路をたどるうちに、自分のアイデンティティはいかに自分のルーツ、家族、友人、また周囲の人々との関係によって形成されているかを理解します。この旅は、参加者が多様性を尊び、自分の偏見に向き合い、他者への理解と尊敬の必要性を認める助けになるでしょう。

あなたは進行役として、訪れるキオスクを選び、あなたのグループが「自分と他者を理解する」ための旅の計画を立ててください。

多様性を尊ぶ

このキオスクのアクティビティは、参加者が私たちの住む世界について考えるのを助けます。参加者は他者について学び、他者の多様性と豊かさを発見します。私たち皆をそれぞれ違う人間にしているのは何かを知り、その多様性を偏見なしに尊ぶ気持ちが生まれるルートです。

推奨アクティビティ

- > 写真の共有 70ページ
- > 地図を描こう 76ページ
- > 星をつかもう 77ページ
- > 諸宗教訪問 80ページ
- > 比べてみる 82ページ
- > 文化のタペ 83ページ
- > クイズ-他宗教についてどれだけ知っているか 112ページ

次に進む前に、少なくとも1つの評価モデルを使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。



他者との関わりの中で自分を知る

このキオスクのアクティビティは、参加者が、自分自身と、いかに自分が他者と関わっているかを深く考える手伝いをします。参加者は自分のアイデンティティを認識するとともに、誰もが有するアイデンティティを持つ権利を尊重する方法を学びます。参加者は、自分は他者と結びついていることや、自分のアイデンティティは他者との関係や経験を通じていかに形成されるかを発見します。

推奨アクティビティ

- > 私のライフ・ツリー 65ページ
- > 個人的経験の共有 67ページ
- > 星をつかもう 77ページ
- > 比べてみる 82ページ
- > 文化のタペ 83ページ
- > ボビーの話 103ページ
- > Tシャツペインティング 109ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。



共通の人間性

参加者は、このキオスクのアクティビティを通じて、私たちは皆、違いを超えて、共通の人間性を持っていることを発見します。自己の内面を探求し、参加者同士を結びつけることを促進するために他者の話に耳を傾けます。参加者は、人間としての共通の責任を果たすことが必要であることに気づきます。



推奨アクティビティ

- > ストーリーテリング 74ページ
- > 星をつかもう 77ページ
- > ドラム・サークル 79ページ
- > 嬉しい感謝 105ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

私たちは仲良くなれないか？

このキオスクのアクティビティでは、他者を尊重することの意味を学び、重んじる手助けをします。参加者は、自分の心構えや考え方や行動を問い直し、違いや偏見やステレオタイプを超えて物事を見ることを学びます。



推奨アクティビティ

- > 心に響く話 73ページ
- > 私の支持するもの 78ページ
- > 倫理銀行 87ページ
- > 尊敬についてのフォーカス・グループ 95ページ
- > 諸宗教カフェ 96ページ
- > ポピーの話 103ページ
- > 諸宗教対話 122ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

他者の立場に立って考える

このキオスクのアクティビティは、互いをより良く理解するために自分の偏見に気づき、偏見をなくすために取り組むよう参加者を導きます。このキオスクは「精神性の覚醒」という、内省的プロセスにつながります。この場合の覚醒とは、他者のニーズや気持ちに気づくようになるということです。これによって精神性や、他者に共感する能力が強化されます。



推奨アクティビティ

- > あなたの影は私の影 69ページ
- > 諸宗教訪問 80ページ
- > ロールプレイングの活用 85ページ
- > ケーススタディの活用 86ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

相互理解のニーズに応える

このキオスクでは、参加者は他者をより尊重し、理解するよう努力するというコミットメントに従って行動します。旅の中で発見したことを土台に、力を合わせて世界を変えるための新たな旅への出発点となるキオスクです。



推奨アクティビティ

- > 諸宗教カフェ 96ページ
- > 映画制作 110ページ
- > 諸宗教学習キャンペーン 117ページ
- > 学校間交流 118ページ
- > テーマ週間 119ページ
- > 子どもの権利キャンペーン 120ページ
- > 諸宗教対話 122ページ

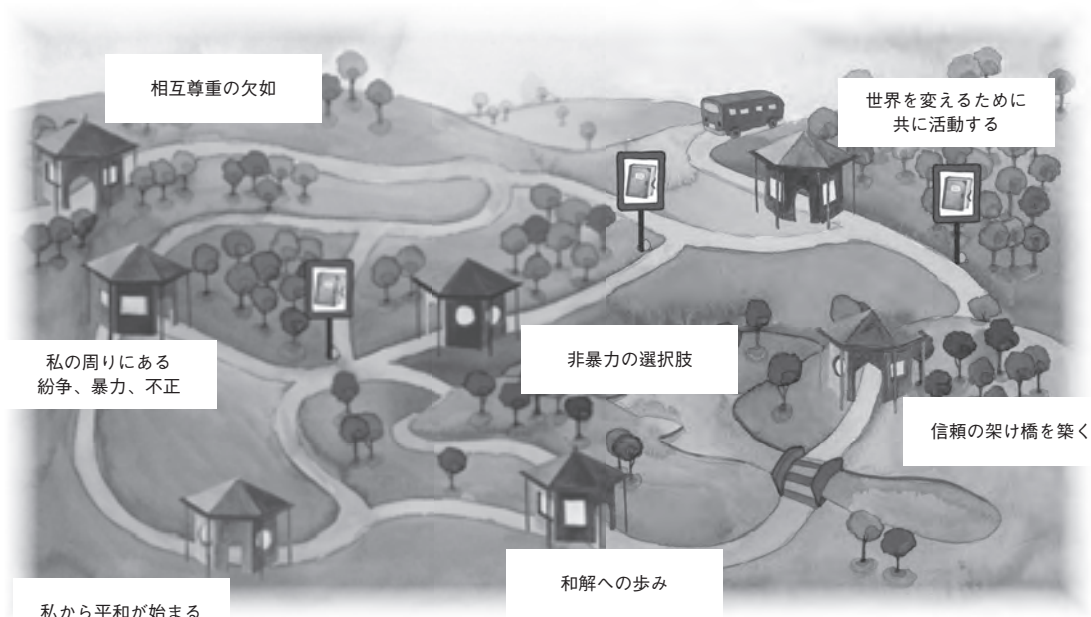
次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

モジュール2

共に世界を変える

キーワード：和解

和解とは、物事がうまくいかなかったときの傷を癒すというだけではありません。人が集まって共に生活をしていれば、問題や相違や対立は必ず起こります。和解は、それにどう対処していくかという姿勢です。



このモジュールでの旅は、「自分と他者を理解する」に続いて、信頼という架け橋を築き、互いに協力し合う意欲を参加者に起こさせ、各人が自分の身の回りで平和構築に貢献できるようにします。不正や暴力が発生するのは、私たちが互いに尊重し合うことを怠ってしまった時だということ、そして、他者と協力するときにはしばしば和解の精神が必要になる、ということを参加者たちは発見します。和解の姿勢は、参加者が壊れてしまった関係を修復し、心の平和を見つけ、個人的・集団的な責任を果たすことを促し、助けます。

あなたは進行役として、訪れるキオスクを選び、あなたのグループの「共に世界を変える」旅の計画を立ててください。

相互尊重を怠るとどうなるか？

このキオスクは、人間関係に対立は付き物であるが、建設的な変化を通じて平和的に解決することは可能であることを示します。参加者は、互いに対する理解と尊重を怠ることがどのように暴力、不正、人間の尊厳の侵害につながるかを探ります。



推奨アクティビティ

- > 映画の時間 71ページ
- > 実話から学ぶ 72ページ
- > 不正な状況 75ページ
- > もしも～だったら世界は… 104ページ
- > 千羽鶴 107ページ
- > 消えゆく島々 114ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

私の周りにおける紛争、暴力、不正を理解する

このキオスクは参加者を、周囲の紛争や不正、暴力的な状況の原因と結果に対する理解へと導きます。参加者は、人間の行動や行為を探り、創造、破壊、変化をもたらす人間の能力について学びます。



推奨アクティビティ

- > 映画の時間 71ページ
- > ロールプレイングの活用 85ページ
- > ケーススタディの活用 86ページ
- > ジレンマ 89ページ
- > 円卓会議 97ページ
- > ディベート 98ページ
- > 千羽鶴 107ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

平和は私から始まる

このキオスクは、参加者が自分の態度がしばしば暴力や不正の一因となることを考えるのに役立ちます。と同時に参加者は、そうした態度を変えるのは自分の責任だと気づくことになります。参加者は、自分の内面に目を向け、自分と他者との関係をよく考えることになるでしょう。内なる自己を養い、世界を変える力を強化するキオスクです。



推奨アクティビティ

- > ドラム・サークル 79ページ
- > 自分についての瞑想－沈黙の旅 99ページ
- > 嬉しい感謝 105ページ
- > マンダラ（曼荼羅） 106ページ
- > 千羽鶴 107ページ
- > Tシャツペインティング 109ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

50

非暴力の選択肢

このキオスクでは、参加者たちは自分のアイデンティティや権利に影響を及ぼす状況に対し、平和的に対処する能力を身につけます。非暴力の選択肢を発見し、不正や暴力的状況に対する非暴力抵抗運動の実例について学びます。平和を築き、コミュニティや社会や世界を変えることの重要性を改めて考えることになるキオスクです。



推奨アクティビティ

- > 社会見学 84ページ
- > 倫理銀行 87ページ
- > 6段階問題解決法 91ページ
- > ピース・ニュース 93ページ
- > 宗教指導者と社会指導者 101ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

和解への歩み

このキオスクは参加者が、壊れた関係を修復する手段として和解を重視することを手助けします。参加者は内なる自己を育み、他者の意見に耳を傾け、許し、癒し、回復させることを学びましょう。参加者が他者の人間性を理解し、他者の痛みや他者によってもたらされた痛み、および許し許されることの必要性を認識できるようにするキオスクです。



推奨アクティビティ

- > 心に響く話 73ページ
- > ストーリーテリング 74ページ
- > 6段階問題解決法 91ページ
- > 宗教指導者と社会指導者 101ページ
- > なぜ傷つくのでしょうか 102ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

信頼のかけ橋を築く

このキオスクでは、参加者は他の参加者と力を合わせて、信頼の架け橋を築き、不和を調停します。また、コミュニケーションスキルや人の話を聞くスキルを伸ばします。参加者は共通の目標を達成するために他者と協力し、同時に自分たちの社会を変える能力を評価し、探求します。



推奨アクティビティ

- > ロールプレイングの活用 85ページ
- > 6段階問題解決法 91ページ
- > 諸宗教カフェ 96ページ
- > 映画制作 110ページ
- > ボールを空高く 115ページ
- > プロジェクト開発 121ページ
- > 諸宗教対話 122ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

世界を変えるために共に活動する

このモジュールのキオスクを終えた参加者は、身の回りの世界を変え始める意欲と力を身につけているはずで、他者と力を合わせて周囲の状況を変え、自分たちの社会に、そしてさらには世界に平和と変化をもたらす準備が整っていることでしょう。



推奨アクティビティ

- > サービス・ラーニング 116ページ
- > 諸宗教学習キャンペーン 117ページ
- > テーマ週間 119ページ
- > 子どもの権利キャンペーン 120ページ
- > プロジェクト開発 121ページ

次に進む前に、評価モデルを少なくとも1つ使って、参加者が学んだことをチェックしてください。セクション3「進歩をモニターする」を参照のこと。

セクション3

進歩をモニターする

『共に生きることを学ぶ』には、明確な狙いと目的があります。力を合わせて社会に変化をもたらす意欲を若者に起こさせることです。この狙いを実現するためには、あなたのプログラムの効果をモニターし、評価することが大切です。このセクションでは、さまざまな評価方法を紹介していますが、その中で最も重要なのは「学習日誌」です。

学習日誌

37ページの「参加者のための手引き」に書かれているとおり、参加者は学習日誌をつけることになっています。そのために、各参加者にノートを配るか、各自が持参するようにしてください。アクティビティやモジュール全般にわたって使用します。日誌は個人用です。すべてのセッションで、各参加者に経験したことや感じたことを記録させてください。学習日誌をつけるのは、自己を深く省みるプロセスを促すためです。セッション後、参加者が1人で考える時間のあるときに、記入を終えるようにしてください。



個人で学習日誌をつけることは、『共に生きることを学ぶ』の中心的な要素です。可能であれば、各アクティビティの最後に行ってください。学習日誌は、異文化間・諸宗教的学習のプロセスにおいて、参加者が偏見を持たずに物事を見る目を養い、多様性への理解を深める上で役立ちます。このプロセスには時に「unlearning (アンラーニング)」が必要になります。つまり、過去に学んだことや、自分が正しいと思っていることを捨てなくてはならないのです。したがって、学習日誌は各人が自分のためにつけるもので、もし他の人とそれを共有する場合、本人の自発的意志によってのみなされるべきです。

自分自身と対話し、物事はなぜ、どのように起こるのかに思いを巡らせ、自分の知識、知覚、そして経験を把握する機会を子どもに与えることは自己批判的な学習を発展させるカギとなります。内省を促す質問は、若者が自分の理解を超え、その先へ進むのを助けます。自分の世界認識を問い直し、自分の視点や行動を考え直すことになるからです。

学習日誌に使う内省的な質問やメッセージには、例えば次のようなものが考えられます。

- > 私はこの経験から何を学んだか？
- > 私の考えは変わったか。もし変わったならばその理由は？
- > 何がうまくいかなかったのか？ それはなぜか？ どうすれば良くなるか？ どうしたらその状況を克服できるか？
- > 今日、私が自分について学んだことを1つ挙げるとすれば、それは（ ）だ。
- > 今日、私は（ ）しようとしたが、問題が起こった。明日は（ ）によって、その問題を解決する。
- > （ ）についての一番いいところ。
- > 以前は（ ）と思っていたが、今は（ ）と思う。
- > 今日、私は（ ）のやり方を変えた。なぜなら（ ）。

アクティビティ後に学習日誌をつけるために、あなたが参加者に対して行う質問や提案できる活動は、例えば次のようなものがあります。

- > あなたにとって尊敬とは何ですか。学校や家庭、コミュニティで、あなたが他者に敬意を示した時のことを書きなさい。
- > あなたが他者に対する敬意を欠いた態度を取った時のことも考えてみてください。
- > あなたに対して、他者が尊敬を欠いた態度を取った時のことを学習日誌に書きなさい。
- > 他者に対してもっと敬意を示すことができるように、あなたがしようと思うことを2つ学習日誌に書きなさい。
- > もっと思いやりを持てるようにするためには、あなたの生活をどのように変えればいいですか。変える必要がある点を1つ学習日誌に書きなさい。
- > あなたの周りで相互理解の障害になっている状況を解消するために、今あなたができることを1つ学習日誌に書きなさい。

参加者の学習を評価する方法

ここに挙げる5つの評価モデルは、子どもや若者が次のことをするのに役立つように作られています。

- > 自分を見つめ、プログラムの間に自分がどう変わったかを考える。
- > 自分と他者との関係を見つめ、他者との交流によってその関係がどう活性化されたかを考える。
- > 自分は今の自分と、将来どのような人間になりたいのかを考える。
- > 自分自身や、自分と世界との関係や相互作用を見つめる。



参加者の学習を評価しましょう！

ピア（仲間）・ツー・ピア（仲間同士）モデルを用いて、参加者に学んだことを自己評価させましょう。

ピア・ツー・ピア・モデル

参加者が2人ずつペアになり、各人が自分の経験や学んだことを共有することで、互いから学ぶモデルです。共通の学習経験を創り出し、異なる文化や社会的・宗教的背景について、各人の先入観に疑問を抱かせます。

ペアの組み合わせは参加者が自分たちで選んでも、あなたが決めても構いません。宗教や文化が異なる者同士を組ませるのが理想的です。

使用する質問やアクティビティの例

お互いから多くのことを学べます。20分かけて、同じ参加者である相手と知り合ってください。

- > 自分の家族や文化、国、宗教などについて話し合う。
- > 自分がどのような生活を送っているのか、何を信仰しているのか、それをどのように実践しているのか、どうすれば人生が豊かになると思うかを教え合う。
- > 相手に質問したいことはあるか？
- > このプログラムについての感想を述べ合う。

最後に、あなたが学んだことや経験したことを学習日誌に書き込んでください。



参加者の学習を評価しましょう！

グループシェアリング・モデルを用いて、参加者に学んだことを自己評価させましょう。

グループシェアリング・モデル

自分自身やお互いや世界について学んでいることを、参加者がグループ内でシェアする（共有する・教え合う）機会を提供するモデルです。また、尊敬や権利や責任について学んだことをシェアすることもできます。この進め方は、参加者が互いの経験を結びつけることを促進するはずで

参加者に対し、他者との関係をどう強化しているか、また、他者への理解や敬意をどう学んでいるかを、グループ内でシェアするよう指示してください。

使用する質問やアクティビティの例

- > 前回のセッションやこのプログラムで最も有益だったのはどの部分だと思うかを話し合ってみる。
- > その部分が特に有益だと思ったのは、なぜですか？
- > その部分で何が重要だったと思いますか？
- > 家庭や学校や近所で、人権や人間の尊厳の侵害にあたる状況を考えます。それに関わっている人たちの思い浮かべ、自分がその1人だと想像してみてください。
- > 自分ならどのような気持ちができるか、どう反応するかを教えてください。
- > その状況を解決するためにできることは何だと思いますか？

最後に、あなたが学んだことや経験したことを学習日誌に書き込んでください。



参加者の学習を評価しましょう！

「私と世界」モデルを用いて、参加者に学んだことを自己評価させましょう。

「私と世界」モデル

このモデルは、自分が学んだことが世界に対する見方や社会に必要な変化を見る目にどのような影響を与えるかを、参加者が理解するのに役立ちます。この自己評価法は、実生活にある問題を思い浮かべ、包括的な解決策に個人がどのように貢献できるかを分析することで、具体的な行動を起こす助けとなります。

参加者は、影響を受けている人に共感し、解決策や可能な貢献を話し合うことで、ローカルレベルとグローバルレベルで、社会に変化をもたらす必要性をイメージできます。この方法は、参加者が「ローカルな」状況を「グローバルな」文脈に置き換えて、自分自身を地球という共同体の一員とみなす手助けをします。

使用する質問やアクティビティの例

- > 世界地図（できるだけ大きいもの）を用意し、よく見えるように掲示します。参加者に、知らない場所か、知りたいと思っている場所（都市、国、又は地域）を2つ選ばせてください。それぞれの場所にピンを刺し、参加者にその場所について知りたいことを書き出させます。
- > 選んだ2つの場所について1カ月間、さらなる情報を探します。参加者は、新聞やテレビのニュース、インターネットを利用したり、親や友人に聞いたりして情報を集めます。政治、時事問題、文化、民族の多様性、宗教的实践など、なんでも構いません。毎週、参加者たちは集めた情報をシェアし、調べて分かったことを地図に書き加えます。
- > 選んだ場所についていろいろなことが分かったら、その社会において危機的状況と思われることを割り出します。危機的状況とは、変化が必要な事柄や、人々の悲しみのもとになっていることです。それを書いて、地図に貼ります。
- > その問題はもししたら解決できるかを参加者に考えるよう促します。誰が解決できるのか？ 私たちにも解決の手助けができるか？

最後に、あなたが学んだことや経験したことを学習日誌に書き込んでください。



参加者の学習を評価しましょう！

メンタリング・モデルを用いて、参加者に学んだことを自己評価させましょう。

メンタリング・モデル

参加者は、自分の考え、不安、イニシアチブ、人生の目標を、ロールモデル（生き方の手本になる人）と話し合います。これは各参加者が互いの経験をシェアし、自分の周囲に変化をもたらすことを奨励するためのツールです。参加者が他者の経験について考える助けにもなります。また、自分の人生をより良くコントロールする契機となるかもしれません。また、ロールモデルである大人が、倫理的な行動の手本を示すことで、参加者の学習を支援することができるモデルです。

「メンター（mentor）」とはギリシャ神話に由来する言葉で、信頼できる友人や助言者のことです。ホメロスの『オデッセイ』で、主人公オデッセウスの息子テレマコスの世話を任されたメンター（Mentor）は、テレマコスが人生における責任を学び成長する助けになりました。

使用する質問やアクティビティの例

- > あなたのグループの参加者の何人かにとってロールモデルになりそうな人を、少なくとも1人探します。あるいは、ロールモデルとは何かを参加者に説明し、自分のコミュニティから候補者を挙げさせます。ロールモデルは、尊敬され、高く評価され、なおかつ子どもや若者と話し、彼らに耳を傾けることができる人でなくてはなりません。
- > そのロールモデルを招き、人生、他者との関係、精神性や信仰について話してもらいます。
- > 参加者からも、この人物に、自分たちの経験、直面している困難な状況、自分たちでやり遂げたことや倫理的問題について話しても良いでしょう。過去数カ月間に、このロールモデルに話したくなるようなことが起こりましたか？
- > もし信頼が生まれ、招かれた人がグループに共感できるようなら、定期的にグループを訪問するようお願いしてください。
- > 参加者に、プログラムの外で自分のロールモデルを見つけるよう促します。それは見識があり、英知、知識を備え、その人と一緒にいると、参加者が「自分は信頼されている」、「向上できる」、「より良い、より公平な世界をつくる一員となる自分の責任を果たすよう励まされている」と感じられる人です。



参加者の学習を評価しましょう！

チェック表モデルを用いて、参加者に学んだことを自己評価させましょう。

チェック表モデル

一連の質問を利用して、各自の学習を評価するためのモデルです。参加者は自分の内面を振り返り、学んだことに基づいて、周囲を変えるために責任ある行動を取る方法を見つけることができます。

使用する質問やアクティビティの例

このチェック表を学習日誌に書いてください。

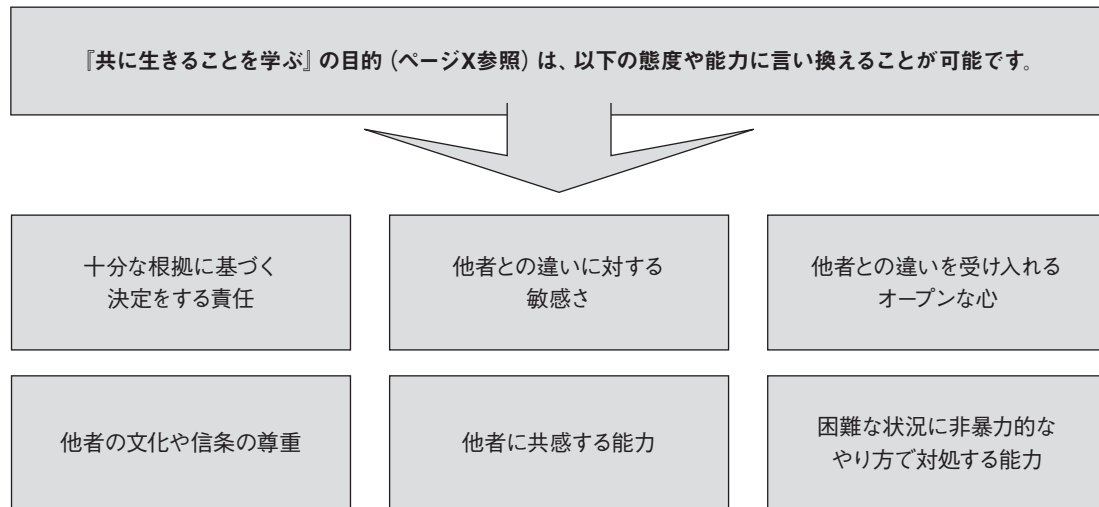
自己チェック表				
私が改善したい状況	その状況を改善したい理由	私にとって状況改善の妨げになることがあるか？	それには他者も関わっているか？	他者と力を合わせて状況を改善できるか？

手軽にできる「やる気測定」評価モデル

ここまでの5つのモデルは参加者が、自己評価やグループ評価をするために、学習経路の随所で使うものでした。進行役のあなたも、その場で様子を確認したい場合があるかもしれません。以下に役に立つ方法をいくつか挙げておきます。

- > **挙手**：参加者に手を挙げさせる質問をして、（発言のためでも、賛成／反対を示させるためでも）、その手の挙げ方で、参加者が楽しんでいるかどうか、また、どの程度満足しているかが、かなり分かります。手は高く上がっていますか？ 半分くらいまでですか？ それとも全く上がりませんか？ この方法は、情報が十分理解されたかどうかを評価するときにも使えます。
- > **アンケート**：参加者にアンケート用紙を配り、セッションにどの程度満足したか、その満足度を表す言葉3つに○をつけてもらいます。できるだけ参加者が使いそうな言葉を入れてください。
最高 すばらしい すごくいい すごい 良い まあまあ 楽しい 驚きがある
大変 難しい 考えさせられる イライラする 長すぎる 退屈 単調
- > **気に入った点と気に入らなかった点**：参加者は○をつけたところに手を置いて、前のセッションで気に入った点と気に入らなかった点を1つずつ挙げる。

影響の評価

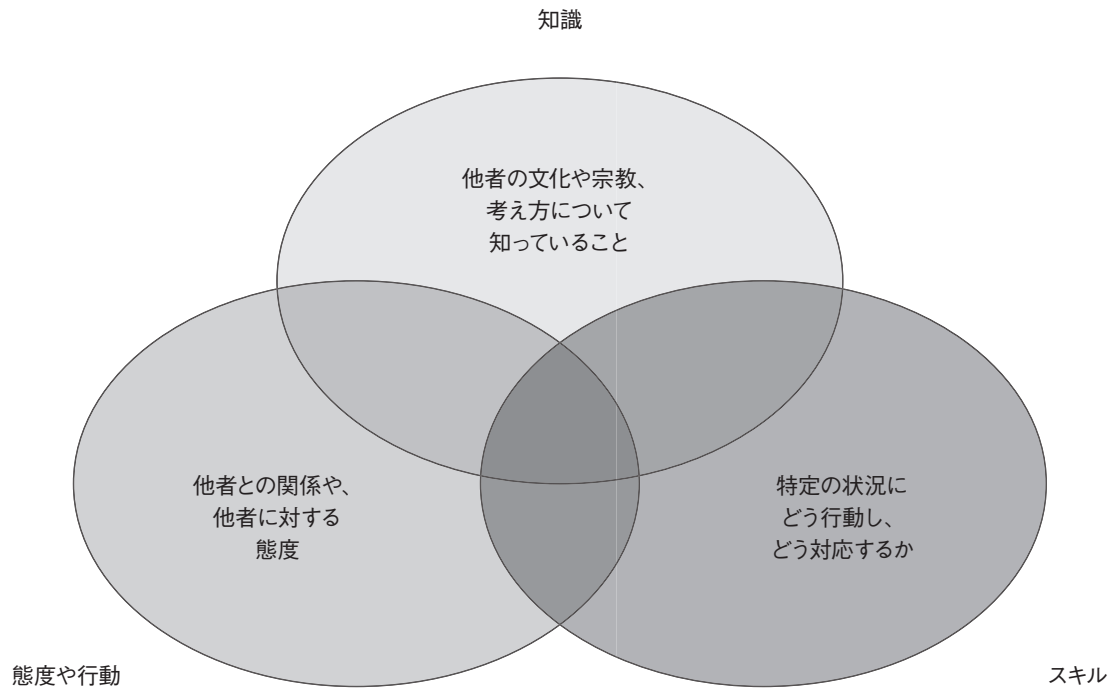


付録中（230～232ページ）の影響評価のチェック表は、『共に生きることを学ぶ』の目的に基づいたものです。このプログラムが参加者の知識や倫理的行動、態度や能力に影響を与えたか否かを、あなたが評価するのに役立つでしょう。

態度や行動の変化は、測定するのが難しいものです。質的分析をするデータで、それ自体も評価が必要ですし、評価には主観が混じるからです。チェック表からは、参加者の見方が変わったかどうか、あるいは進んで他者を尊敬し、平和的に行動する意思があるかどうかしかりません。

表にある質問は「知識」、「態度」、「スキル」の3種類に分かれています。自己、他者、世界の現実についての知識は、子どもが自分自身や他者に対して取る態度や行動に影響を及ぼし、結果的にすべてを含んだ、思いやりのある優しい振る舞いか、あるいはその反対に差別的で利己的な振る舞いにつながります。子どもの態度や行動は、価値観の育成や他者との交流のために提供されるスペースによって大いに影響を受けるものです。

他者に対するステレオタイプ、偏見、差別に関連した質問もあります。ステレオタイプとは、ある集団のメンバーの特徴はこうだ、と一般化することです。偏見とは、誰かがある集団に属しているという理由だけで、その人に対する態度を決めることです。（プラスの場合もマイナスの場合もあります）差別とは、偏見の対象に対して取る行動で、これにもプラスの差別とマイナスの差別があります。この種の質問は、自分自身や他者に対する子どもの態度や行動との相関関係を評価するのに役立ちます。



影響評価チェック表の利用法

付録中の表（230～232ページ）は、『共に生きることを学ぶ』プログラムの前後に使用するようにならされています。

プログラムの最初に、各参加者に表A、B、Cを1部ずつ渡し、目的は自分自身をより良く知ることであると説明します。名前は書きたくなければ書かなくても良いことを強調してください。記入したシートはフォルダーに入れるか、学習日誌にはさんで持っているように指示します。

プログラムの最後にも同じシートを渡し、参加者に記入させます。記入の目的は、プログラムを経て参加者の認識、考え、見地に変化があったかどうかを評価するためであると説明してください。

記入が済んだら、両方のシートを一緒にクリップで留めるよう、参加者に指示します。少し時間を与え、1回目と2回目で自分の答えのどこが変わったかを学習日誌に書かせてください。

書き終えたら、クリップで留めた2部のシートをあなたに提出するよう指示します。

1回目と2回目の回答を各参加者について比較し（2回分を一緒にクリップで留める）、プログラムが参加者にどのような影響を与えたか評価します。以下の変化に着目してください。

1. 自分自身と他者に対する認識
2. 他の文化や宗教についての知識
3. 自分の暮らす社会の現実についての知識
4. 表中の文章についての意見
5. 特定の状況においてどう行動するか

セクション 4

アクティビティ

アクティビティ一覧

モジュール1:自分と他者を理解する

キオスク	アクティビティ	方法	ページ
多様性を尊ぶ	写真の共有	経験をベースにした学習	70
	地図を描こう	ディスカッションをベースにした学習	76
	星をつかもう	ディスカッションをベースにした学習	77
	諸宗教訪問	経験をベースにした学習	80
	比べてみる	ディスカッションをベースにした学習	82
	文化のタベ	経験をベースにした学習	83
	クイズー他の宗教について どれだけ知っているか?	協力をベースにした学習	112
他者との関わりの中で 自分を知る	私のライフ・ツリー	内省をベースにした学習	65
	個人的経験の共有	経験をベースにした学習	67
	星をつかもう	経験をベースにした学習	77
	比べてみる	経験をベースにした学習	82
	文化のタベ	経験をベースにした学習	83
	ボビーの話	内省をベースにした学習	103
	Tシャツペインティング	内省をベースにした学習	109
共通の人間性	ストーリーテリング	経験をベースにした学習	74
	星をつかもう	経験と内省をベースにした学習	77
	ドラム・サークル	内省をベースにした学習	79
	嬉しい感謝	内省をベースにした学習	105
私たちは仲良く できないか?	心に響く話	ディスカッションをベースにした学習	73
	私の支持するもの	ディスカッションをベースにした学習	78
	倫理銀行	問題をベースにした学習	87
	尊敬についてのフォーカス・ グループ	ディスカッションをベースにした学習	95
	諸宗教カフェ	ディスカッションをベースにした学習	96
	ボビーの話	内省をベースにした学習	103
	諸宗教対話	ディスカッションをベースにした学習	122
他者の立場に立って 考える	あなたの影は私の影	内省をベースにした学習	69
	諸宗教訪問	経験をベースにした学習	80
	ロールプレイングの活用	経験と問題をベースにした学習	85
	ケーススタディの活用	経験と問題をベースにした学習	86
相互理解のニーズに 応える	諸宗教カフェ	ディスカッションをベースにした学習	96
	映画制作	経験をベースにした学習	110
	諸宗教学習キャンペーン	経験をベースにした学習	117
	学校間交流	経験をベースにした学習	118
	テーマ週間	経験をベースにした学習	119
	子どもの権利キャンペーン	経験をベースにした学習	120
	諸宗教対話	ディスカッションをベースにした学習	122

モジュール2:共に世界を変える

キオスク	アクティビティ	方法	ページ
相互尊重を怠ると どうなるか？	映画の時間	ディスカッションをベースにした学習	71
	実話から学ぶ	ディスカッションをベースにした学習	72
	不正な状況	経験をベースにした学習	75
	もしも〜だったら世界は・・・	内省をベースにした学習	104
	千羽鶴	内省をベースにした学習	107
	消えゆく島々	経験をベースにした学習	114
私の周りにある紛争、 暴力、不正を理解する	映画の時間	ディスカッションをベースにした学習	71
	ロールプレイングの活用	経験と問題をベースにした学習	85
	ケーススタディの活用	経験と問題をベースにした学習	86
	ジレンマ	ディスカッションをベースにした学習	89
	円卓会議	ディスカッションと問題をベースに した学習	97
	ディベート	ディスカッションをベースにした学習	98
	千羽鶴	内省をベースにした学習	107
平和は私から始まる	ドラム・サークル	内省をベースにした学習	79
	自分についての瞑想—沈黙の旅	内省をベースにした学習	99
	嬉しい感謝	内省をベースにした学習	105
	マンダラ（曼荼羅）	内省をベースにした学習	106
	千羽鶴	内省をベースにした学習	107
	Tシャツペインティング	内省をベースにした学習	109
非暴力の選択肢	社会見学	経験をベースにした学習	84
	倫理銀行	問題をベースにした学習	87
	6段階問題解決法	問題をベースにした学習	91
	ピースニュース	経験と問題をベースにした学習	93
	宗教指導者と社会指導者	内省とディスカッションをベースに した学習	101
和解への歩み	心に響く話	ディスカッションをベースにした学習	73
	ストーリーテリング	内省をベースにした学習	74
	6段階問題解決法	問題をベースにした学習	91
	宗教指導者と社会指導者	内省とディスカッションをベースに した学習	101
	なぜ傷つくのでしょうか？	ディスカッションをベースにした学習	102
信頼の架け橋を築く	ロールプレイングの活用	問題をベースにした学習	85
	6段階問題解決法	問題をベースにした学習	91
	諸宗教カフェ	ディスカッションをベースにした学習	96
	映画制作	経験をベースにした学習	110
	ボールを空高く	協力をベースにした学習	115
	プロジェクト開発	協力をベースにした学習	121
	諸宗教対話	ディスカッションをベースにした学習	122
世界を変えるために 共に活動する	サービス・ラーニング	経験をベースにした学習	116
	諸宗教学習キャンペーン	経験をベースにした学習	117
	テーマ週間	経験をベースにした学習	119
	子どもの権利キャンペーン	経験をベースにした学習	120
	プロジェクト開発	協力をベースにした学習	121

私のライフ・ツリー

目的：参加者に自らの人生とアイデンティティについて考えるとともに、他者の独自のアイデンティティを認めることを奨励します。

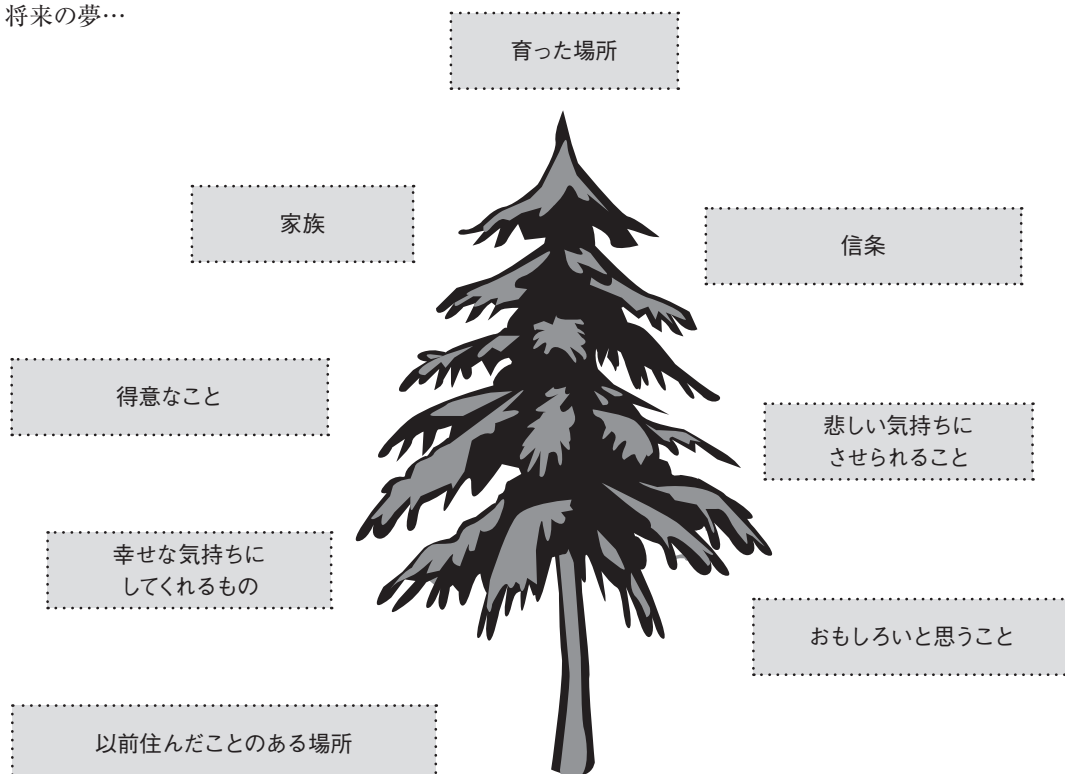
成果：参加者は自分自身と自らのアイデンティティについてより意識を深めます。ライフ・ツリーを共有することにより、最初はかなり似通った、あるいは異なったように見える他者の人生とアイデンティティについても知るようになります。

用意するもの：絵が描ける用紙、カラーペンまたはマーカー。

アクティビティ

参加者に用紙と数本のカラーペンを渡し、自分自身を表す木を描くように指示します。木を描き終わったら、参加者にその木の周りに自分自身について書き込みたい情報について考えるように指示します。黒板または大きな紙に参加者からの提案を記入し、参考にしてできるようにします。参加者が提案しそうな項目を以下に挙げます：

- > 住んでいる所
- > 以前に住んだことのある場所
- > 家族構成
- > 友人
- > 学校—学校名、学年
- > 得意なこと
- > 私のやりたいこと
- > 幸せな気持ちにしてくれるもの
- > 悲しい気持ちにさせられるもの
- > 私の信じているもの
- > 将来の夢…



参加者が記入を始める前に、この木について参加者と話し合います。木の根っこの目的は何なのか、どこが成長しているのか、木の根、枝の先、木のてっぺんにどの情報を書き込むべきなのかなどについてです。参加者の中には自分自身や将来について考える際、手助けが必要な人がいるかもしれません。

このアクティビティには内省や他者とのぎっくばらんな意見交換のための時間が必要です。すべての参加者がそれぞれの木に情報を記入し終えたら、希望者を募ってグループの仲間に自分のライフ・ツリーについて話してもらいます。数人の発表の後、参加者にグループ内を回って以下に該当する人を見つけるように提案します：

- > 同じ地域で育った人を少なくとも1人と違う地域出身の人を1人
- > 同じことで悲しい気持ちになる人と全く違うことで悲しい気持ちになる人
- > 同じことが得意な人と他の事が得意な人

以上はほんの提案です。自由に新しいテーマを取り上げてください。

このアクティビティの終りに、類似点と相違点について、それらが私たちのアイデンティティの一部を形成するあり方についてディスカッションをします。参加者はどのような結論を出すのでしょうか。各人の独自性やお互いの違いを尊重することについて考えます。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

個人的経験の共有

目的：参加者が他者の精神性から学び、自分自身の信条について考えることができるようにします。

成果：参加者は自分の精神的体験を探求し、お互いに共有し、共に考えるようになります。

用意するもの：参加者に紙とペンまたはマーカーを渡します。参加者にどのように他者とかわっているのか、悲しい時、幸せな時、考えごとをしたい時や1人になりたい時はどうするのか、などのいくつかの質問を用意します。（以下の例を参考にしてください）

質問事項の例：

微笑みたくなること、生きていると感じること、感動することは何ですか？

気分を害すること、怒りを覚えること、話しにくいことは何ですか？

気分がよい時、どんなことが起こるか、いくつか例を挙げてください。

気分が落ち込んでいる時、何がうまくいかなくなるか話してください。

自分が内心でどう感じているのかと、どのように他者とコミュニケーションをとるかには何らかの関係があると思いますか？

他者との関係で内面的に気分がよくなることはありますか？

アクティビティ

1. 担当するグループを、静かで邪魔されずに考えることができる場所に座らせます。庭、公園あるいは静かな音楽が流れている室内でもいいでしょう。
2. 参加者に、このアクティビティは内なる自分、自分の感情や信条、過去の出来事、他者との関係について考えるものであることを伝えます。これらの事を考える際の指針となる質問をいくつか用意したことを伝え、参加者にそのコピーを手渡すか、全員が見えるように質問を掲示します。参加者にはこれがテストではなく、考えることを手助けするための演習であることを伝え、安心させます。また、もしも自分の考えを共有したくなければ、そうする義務はないこと、紙に記入した内容は公開しないことを伝えて安心させます。
3. 提案される質問事項のコピーを配布するか、よく見えるように掲示します。参加者に1人で質問に対する回答を記入できる静かで落ち着ける場所を探すように指示します。回答は質問用紙あるいは別の新しい紙に記入してもらいます。
4. 参加者が内省する時間を少なくとも30分間与えた後、参加者がお互いに気楽に話ができるように輪になって座ってもらいます。参加者に、質問に回答するに際してどのように感じたかなどの一般的な質問でディスカッションを始めます。希望者を募って各質問への回答をグループ全体に話してもらいます。自分がした回答について話したくなければそれでも良いことを伝え、安心かつ円満な雰囲気を保つように努めます。
5. 最終的には最後の質問に焦点を合わせて、参加者の慣習、考える時間、自分の感情や信条を共有します。そして、自分の信条や信仰とは関係なく、他者との関係をより良くする方法について話し合います。

このアクティビティの終りに、参加者に「資料集/詩 (Resources/Poem) (160ページ) にある詩『魂の塩 (Salt for the Soul) 』を読んであげてもいいでしょう。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

あなたの影は私の影

目的: シルエット（影）を使って、参加者が他者の考え方を理解し、評価する手助けをします。

成果: 参加者は他者の感情を理解することによって「他者」について学び、「他者」がどのように行動するのか、「他者」の具体的な考え方について考えを巡らせるようになります。

用意するもの: 体と同じ程度の大きさの紙（模造紙数枚、壁紙の裏側など）、カラーペンまたはマーカー、静かな音楽。

アクティビティ

参加者を2人1組に分け、このアクティビティでは2人がパートナーとなつて行なうことを説明します。参加者に体の大きさと同程度の紙を渡します。そして、その紙を床に置き、交代でパートナーのシルエットを紙に描くように指示します。

シルエットが完成したら、参加者に以下の情報を自分自身のシルエットの上書き込むように指示します：

頭部:	考え
胸部（心臓）:	感情
胃:	必要なこと
手:	何かをしたいという欲求
足:	気に入っている、あるいは楽しめる活動

それぞれがこの作業を完成したら、参加者に記入した情報をパートナーと共有し、それぞれの考え、感情、必要なこと、欲求、好きな活動について、その理由を説明しないで表現するように指示します。

シルエットに記入された事をパートナー同士で教え合ったら、参加者にパートナーのシルエット上に横になり、目を閉じて自分がパートナーであると想像するように指示します。そして、静かな音楽をかけ、参加者に「自分の心を離れてパートナーの心に入り」、相手の考えを思い、相手の要求を感じ、相手の求めていることを求め、パートナーが楽しむ活動を自分が行っていると想像するように指示して、この熟考の過程を開始します。

最後の5分間で相手の立場に立つということが何を意味するのかを参加者それぞれに考えてもらいます。このアクティビティを終了する際、相互理解を示す方法として参加者にパートナーとハグするように指示してもいいでしょう。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

写真の共有

目的：参加者に世界の現実について説明を求める質問をすることで、それについてもっと学ぶ意欲を起こさせます。

成果：参加者は世界についての理解、人々がお互いを理解することに失敗したらどうなるのかについて考えます。

用意するもの：古い新聞と雑誌、はさみ、のり、約2メートル程度の紙または布（壁紙の裏側あるいは大きな紙を数枚貼り合わせたもの）、カラーペンまたはマーカー、カラースプレー（健康への害がないもの）。

アクティビティ

細長い紙または布を壁に取り付けます。黒いマーカーを使って紙にレンガなどを描き込み、通りにある壁に見立てます。

参加者に新聞と雑誌を渡し、自分たちの目で見えた世界についてのコラージュを作成するように指示します。世界の現実を表すと参加者が考えるものであれば、言葉、写真、自画像、落書きなど、何でも構いません。この作業の完成に45～60分間程度を見込み、参加者に、1人または2人1組などで協力して作業に取り組ませるようにします。

コラージュが完成したら、その周りに集まり、数分間それを眺めます。

その後、参加者に以下のような熟考した質問をします：

- > これは住んでみたいと思う世界ですか？
- > これは自分の子どもに残したい世界ですか？
- > 誰がこのような世界にしたのですか？
- > 壁に示された出来事の原因は何ですか？
- > 暴力や不正が行われている場所で、この壁に示されているような良い行動を取ること、あるいは再現することが出来ますか？
- > 世界で起こっている事について私たちに責任がありますか？

ディスカッションを個人的な体験の共有に持っていき、参加者に自分たちの社会で直面している現実についてもっと話すように指示します。

参加者に、これは彼らの旅のほんの一部に過ぎないこと、そして、状況を改善するために彼らが取れる行動があるか考えるべきであると伝えます。

このアクティビティを終えるにあたって、適切であれば、キャンドルを灯し、世界の平和を願う祈りを先導する、あるいは平和の歌を歌うのもいいでしょう。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

映画の時間

目的：世界中の紛争、不正や暴力的状況について知り、少数による行動でもいかに大きな影響をもたらすことができるかについて参加者の意識を高めます。

成果：参加者は新しい人々、新しい場所と歴史について学びます。映画の中でその行動が描かれている人物たちの勇気とコミットメントは、参加者に貧困、暴力、紛争の原因に疑問を持たせ、人々がこのような状況をより良いものに転換させていく永続的な必要性を認識することにつながるでしょう。

用意するもの：良質な映画のビデオまたはDVD、それを見るための快適な場所。グループが映画館で映画を鑑賞する場合、解散する前にグループで映画について話し合う場所と期間を確保できるように、時間を調整してください。

アクティビティ

映画は参加者が別の世界あるいは人生に入り込み、他者の状況がどうだったのか、あるいは現状はどのようなのかについて知ることを助ける媒体です。映画制作者の器量次第で、参加者が異なる視点、行動への動機、私たちが直面している状況の複雑さについて考えるようになる可能性もあります。

149ページの資料のセクションにいくつか適切な映画がリストアップされていますが、このリストに加えるべき映画は他にもたくさんあります。

参加者に映画のあらすじと時代背景の簡単な説明を行い、「映画鑑賞」の準備をします。参加者に、倫理の学習にとってこの映画を見ることが重要だと考える理由を尋ねます。

映画を見終わった後、参加者が映画とそこに描かれていた出来事や人物を理解したかどうかを試す一般的な質問をします。参加者に登場人物の行動の動機について尋ねます。すなわち、一部の登場人物が命令にどう対応しているか、他の登場人物が他者のための行動に自らの良心と自発性をどう用いているかについてです。映画が参加者の社会的現実に関係があるか、あるいは現在の世界情勢について知っていることを質問してもいいでしょう。世界の紛争と不正の原因を考えることでディスカッションの幅を広げます。また、参加者に映画と同様の状況に直面したらどのような立場を取るかを尋ねるのもいいでしょう。

最後に、参加者に映画の中の出来事を権利、尊敬および責任の観点から見てみるように指示します。つまり、誰の権利が侵害されているのか、誰の権利が守られているのか、人々はお互いに尊重し合っているか、人々は自分自身と他者のために責任を果たしているか、彼らは他者の権利を守っているかなどです。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

実話から学ぶ

目的：実際にあった話を通じて参加者が不正、紛争、尊敬を欠いた状況を調査することを助けます。

成果：参加者は、誰もが普遍的で奪うことができない人間の尊厳に対する権利を尊重する責任があることを自覚します。

用意するもの：新聞、雑誌または事例研究（139ページの「資料集/事例研究」）から現在起こっている人権侵害に関する情報を集めます。1つないし2つだけ、あるいはいくつかの話を活用するか選択することができます。同じような長さの話を選んでみてください。全員が同じテーマをディスカッションしても、異なるいくつかのテーマを持った話を使っても構いません。このアクティビティには進行役が使うフリップチャートとマーカーが必要です。

アクティビティ

1. 参加者を3～5人の小グループに分け、各グループに1つずつ話を渡します。
 2. 各グループにそれぞれの話を讀んだ上で、話の中の状況が起きた原因は何か、侵害された倫理原則ないし人権は何か、その結果はどうなったかを議論するように指示します。
 3. 時間がある場合、グループごとに話で讀んだ状況を再現する役割演技（ロールプレイ）を用意するように指示します。このロールプレイは必ずしも話をそっくりそのまま再現する必要はなく、それを解釈したものでも構いません。ロールプレイを割愛する場合は、5のディスカッションに進んでください。
 4. 各グループがロールプレイの準備と話し合いを終了した後、全てのグループを集めてロールプレイの実演、その後、それぞれの発表について話し合います。
 5. ディスカッションには以下の質問を活用してください。質問を進めながら、参加者の答えと考えをフリップチャートに要約し、参加者が自ら学んだことを視覚化できるようにします。また、カード・テクニクやマインド・マップ（Mind Map）を使って各グループの結論を提示して、相互に学べるようにすることもできます。
- > 主な登場人物と、その関係はどのようなものでしたか？
 - > 話の主な出来事または状況はどのようなもので、その原因は何でしたか？
 - > 誰の権利が侵害され、誰の権利が守られていますか？ 人々はお互いを尊重し合っていますか？ 人々は自分自身と他者に対する責任を果たしていますか？ 人々は他者の権利を保護していますか？
 - > 現在の状況を倫理的に解決する方法はありますか？
 - > 話の教訓はどのようなもので、私たちの生活にどのように関連していますか？

ディスカッションに加えて、参加者に個人的体験を進んで話すように促します。

このアクティビティの終りに、私たちの行動と姿勢が、良くも悪くも、いかに他者に影響を与えるかについて考えます。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

心に響く話

目的：参加者が困難な状況を変えるために必要な姿勢と価値観を探る助けをします。

成果：参加者は社会に尊敬・理解・平和をもたらすのに必要な姿勢と価値観について考えます。

用意するもの：123ページの「資料集」から、尊敬、他者の役に立つこと、和解、許しなどに関する適切な話を選びます。1つか2つだけ、あるいはもっと多くの話を用いるか選択することができます。同じような長さで、異なるテーマを持つ話を選ぶようにしてください。このアクティビティには進行役が使うフリップチャートとマーカーが必要です。

アクティビティ

1. 参加者を3人から5人の小グループに分け、各グループに1つの話を渡します。
2. 各グループにそれぞれの話を讀んだ上で、そこに含まれたメッセージと道徳的教訓を議論するように指示します。
3. その後、話の内容を描写するロールプレイ（必ずしも話とそっくり同じ再現である必要はありません）を準備するか、あるいは直接5に進みます。
4. ロールプレイの実演のためにすべてのグループを集めます。ディスカッションをして締めくくります。
5. 以下の質問を活用して話に関するディスカッションを促します。質問を進めながら、参加者の答えと考えをフリップチャートに要約し、参加者が自ら学んだことを視覚化できるようにします。また、カード・テクニックまたはマインド・マップを使って各グループの結論を発表して、相互に学べるようにすることもできます。
 - > 話の教訓はどのようなもので、私たちの生活においてどのような意味を持ちえますか？
 - > 話の中ではどのような価値観が強調されていますか？
 - > 私たちはこの話を実際の状況に関連付けることができますか？ いくつか具体例を挙げてください。

話に関するディスカッションに加えて、参加者に個人的体験を進んで話すように促します。

このアクティビティの終りに、話または聖典の中の教訓が私たちの生活にどう関係しているのか考えます。参加者に私たちの行動と姿勢が、良くも悪くもいかに他者に影響を及ぼすかについて考えるように促します。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

ストーリーテリング

目的：物語の世界に共に入ることによって話を聞くスキルを育成するとともに、お互いのつながりを持ちます。

成果：参加者は想像に心を開く感覚を高めるとともに、人の話を聞く能力を形成することができます。物語が伝える文化遺産を理解します。

用意するもの：123ページの「資料集」からふさわしい物語を選択します。自分自身の文化あるいは宗教の伝統から民話を選んで構いません。リラックスできる暖かい雰囲気を作ってください。

以下のガイドラインの出典は「ストーリーテラーのためのハンドブック」(Handbook for Story Tellers)¹です。

アクティビティ

物語を語るのに適当な環境を作ります。キャンプファイアの周り、自然に近い公園、あるいは静かなスペースが理想でしょう。キャンドル、お香、ギターやドラムなどの楽器、あるいは静かな音楽などを使って物語を始めます。

時には話の内容を理解するために簡単な紹介や背景に関する情報が必要です。常にこれから読む物語の出典を明らかにし、もう1人の物語の語り手や本などを提供してください。

物語を始める、あるいは終わるに当たって決まったフレーズを用意しておいてもいいでしょう。例えば、物語を始める際に、西インド諸島の習慣に従って物語の場面を設定します：

語り手：クリック (Cric)

聞き手側の応答：クラック (Crac) (お話してください)

物語の終わり：スニク (Snic)、スナック (snac)、スナウト (snout)；お話は済みました、これでお話は終わりです、という意味です。

物語を「昔々」という魔法の言葉で始めても構いません。アラブの人たちが物語を始める時には「Ken ye me ken, (it was and it was not)」という、みんながこれからお話が始まるぞ、と分かります。あるいは、イランで物語を話す時には最初に「Yeki bud, yeki nabud, (there was one, there was no one)」といいます。

聞き手と目を合わせながら進めましょう。子どもに落ち着きがないかどうかに注意してください。語が上手く進んでいない場合、物語とグループが合っていないことも考えられます。このような状況になったら、話の締めくくりをつけて、早めに終わらせることを考えます。どこか適当な所で切り上げて、子どもに自分で読書して物語の終わりを確認するように勧めることもできます。

子どもがある言葉を知らなかったり、言葉の意味を尋ねたりした場合、物語の中に短い定義を入れるようにします。聞いているグループ全体に落ち着きがなくなっても、怒ってはいけません。物語の時間が全員にとって不愉快な経験に終わってしまうことは避けてください。問題を分析してください。選んだ物語が聞き手にふさわしくなかった、あるいは物語が長過ぎた可能性もあります。外的要因が子どもの集中力を妨げたことも考えられます。

お話用の前掛けも小さい子どもにはおもしろいかもしれませんが。ポケットがついた大工用のエプロンで構いません。それぞれのポケットには物語を表す物を入れます。例えば「石のスープ (Stone Soup)」というお話の場合は石を入れておきます。1人の子どもがポケットを選んで、お話が始まります。いくつかの単純な小道具を使うこともいいでしょう。ただし、小道具が物語から関心を逸らせてしまうのは困ります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

1 Inez Ramsey, ジェームズ・マディソン大学名誉教授 <http://falcon.jmu.edu/~ramseyil/storyhandbook.htm>

不正な状況

目的: 参加者に世界でみられる不正について、もっと学ぶ意欲を起こさせます。

成果: 参加者は世界における不正の理由を問い、そうした状況を改善するために自分たちに何ができるのかを考えます。

用意するもの: 雑誌、新聞、ポスターなどから切り抜いた、不正な状況（不当な習慣、人々の苦しみ、貧困の写真、紛争の写真）に置かれた世界中のさまざまな人たちの写真。パワーポイントを使った発表も使用可。NGOのウェブサイトにはダウンロードできる関連写真が多くあります。

アクティビティ

選んだ写真を壁に貼ったり床に置いたりして、参加者に部屋の中を歩いて写真を見るように指示します。その後、写真が見える場所に輪になって座ります。

参加者に写真を見て感じたことを話し合うように指示します。

- > どの写真に最も引き付けられたか、そしてその理由を尋ねます。
- > 何人かに彼らが選んだ写真の中で何が起きていると思うかについて発言してもらいます:
 - > 起こった可能性があること
 - > 誰がやったのか?
 - > なぜ起こったのか?
 - > その人物が写真のような表情をしている理由は何か?
 - > 彼らが考え、感じているかもしれないこと
 - > 現時点で彼らに何が起こりうるのか?

参加者は写真に示された状況のいくつかについて多くの質問があったり疑問を持ったりするかもしれませんが。子どもたちが無力感やがっかりした気分でこの活動を終えないようにすることが重要です。

参加者が他者を理解しやすくなるような質問をして活動を締めくくるようにします:

- > なぜ人々はお互いを傷つけあうのか?
- > なぜ人々は他者の生命、信条や考え方を尊重しないのか?
- > なにが世界に憎悪と不正と暴力をもたらすのか?
- > 暴力的あるいは不正なシナリオの中で宗教と非宗教組織はどのような役割を果たすのか?
- > 宗教はどのように平和に貢献するのか?
- > 参加者は他者を助け、世界をより良くするために自分たちの住む町や村で何ができるのか?

この最後の質問に対しては、避難民あるいは居住人口の主流から「外れた」人々を助けることから、世界のために祈ること、意識を高めること、さらに自分の国の議会や首相に手紙を書くことなど、幅広い提案ができるかもしれません。参加者が自分たちでできる行動を考えることを奨励することが重要です。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

地図を描こう

目的：世界各地の文化と宗教を紹介することによって、世界とその豊かさについて参加者の関心を喚起します。

成果：参加者は他の宗教や文化、多様性を学ぶことの重要性についての理解を深めます。

用意するもの：大きな世界地図、地球儀、それがない場合は世界の見取り図。地図にコメントやメモを貼り付けるための付箋、小さなラベル、画鋏があれば十分でしょう。

アクティビティ

参加者を3～4人の小グループに分け、少なくとも4つの異なる宗教を代表する8カ国を地図上で示すように指示します。

グループ内で話し合う時間を15分、答えを地図上に示すためにさらに5分を与えます。

全員に地図を見てもらい、参加者にそれぞれの知識を共有させます。

選択した国の中で異なる宗教を信仰する少数派についての質問をすることで、参加者の回答からさらに議論を発展させます。

参加者に次の中から一般的な質問を質問してこの活動を締めくくることができます：

- > 世界にはどのような宗教が存在するのか？ リストを作り、どれだけ多くの宗教名が挙げられたかを確認する。
- > リストに挙げたそれぞれの宗教の信者がどのくらいいるのか？
- > 自分の国、住んでいる町、学校で最も信者数が多い宗教は何か？ 他の宗教の信者も住んでいるのか？ 他宗教の人たちとどのような体験をしたことがあるか？
- > 自分の国、町、学校の他の宗教の信者たちはその信仰が理由で困難に直面しているかどうか？ 偏見や差別があるか？ もしあるなら、なぜ偏見や差別があると思うか？ 不寛容さや相互尊重の欠如を減らすために何かできることがあるか？
- > 何の宗教も持たない人々についてはどうか？ そうした人々に対する偏見や差別はあるか？ 話し合いをする。
- > 参加者はフォローアップ可能な具体的提案（諸宗教訪問、文化の夕べ、社会見学など）を行ってもよい。

質問の多くについて答えが分からないようなら、主な質問を書き留め、参加者を含めて全員が図書館やインターネットで調べ、次の集まりで調べた結果を報告し合うことにします。

異なる宗教についてのビデオあるいはDVDの上映、異なる宗教の名称、それぞれの創始者、主な信仰や習慣（衣服、儀式、経典など）を盛り込んだプレゼンテーションを行うことも有益です。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

星をつかもう

目的：参加者に他者とはどんな人々か、自分たちとどのような類似点があるのか、あるいはどのような相違点があるのか発見させます。

成果：参加者は、自分たちと異なる他者が同時に非常に似通っている場合があり得ることを知ります。参加者は、彼らの内面と外面を知ることによって自分と他者を認識します。

用意するもの：紙とペン、たくさんのロール紙、あるいは長いカラー糸、粘着テープ、はさみ数丁。

アクティビティ

1. 各参加者に先端が5つある星を描くように指示します。星を真似るためのテンプレートあるいは図を見せて、出来上がる星すべてが似ているようにします。参加者に自分自身についてのどのような情報が自分のアイデンティティにとって基本となるものであるかを尋ね、リストから5つの質問を選ぶように指示します。参加者に星のそれぞれの先端に質問に対する答えを記入するように指示します。例えば、自分の宗教、好きな音楽、自分にとって大きな意味を持つ場所、自分にとって一番重要な人物、好きな活動などです。グループの構成に応じて、他の質問を選択することも可能です。
2. 参加者が星に記入し終えたら、輪になって座り、各自にそれぞれが選択したものを説明してもらいます。参加者に自分の星を壁に貼り付けるように指示します。各参加者に色のついた糸を一巻き渡し、参加者は自分の星の先端と同じような傾向を示している他の人の星の先端を結びます。
3. 各人は直前に発表を行った人あるいは自分よりも前に発表を行なった誰かと、少なくとも1つの類似点を見出すように努力しなければなりません。各参加者が少なくとも1つの類似点を見出せるように、あなた自身あるいは共同進行役が最初に手本を見せるのも良いでしょう。
4. すべてのリンクが終わったら、参加者にリンクが張られている星の持ち主についてもっと知るよう指示します。短い会話の中で、参加者はつながりのできた他の参加者とより多くの類似点だけではなく、相違点も見出す必要があります。例えば、ともにインド料理を好む；自分はフットボールが好きだが、相手はそうではない；同じ地区の出身であるなどです。
5. リンクができなかった星の先端がどのくらいあるのかも見てみます。つながりのない関心や愛着は特定の人たちに独特なものですか？ 世界にそれほど多くの多様性や豊かさがあることがどれだけ素晴らしいことなのかについて考えます。星はすべて同じように見えますが、私たちは実は星がすべて異なっていること、そしてそのことがどれほど胸を躍らせることなのかを知っています。
6. 参加者に会った人の中から1人を取り上げ、その人との共通点と相違点を説明してもらいます。
7. 最後に、私たち1人1人をユニークな存在にしているものとは何かについて幅広い議論を行います。すべての人には共通点があると同時に、重要な点で異なってもいることを強調します。そして、他者を外側からだけでなく、内面から理解することの重要性を考えてこの活動を締めくくります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私の支持するもの

目的：参加者に自分が信じていることを支持させます。自分自身の信念について考え、他者の信じていることを発見させます。

成果：参加者は自分の信念や意見が他者のものとどれほど異なっているのかを発見します。

用意するもの：チョーク、粘着テープ、布など、部屋あるいは運動場の中央にラインを引くのに適した備品。「同意します」、「同意しません」と書かれた大きな看板2枚。

アクティビティ

部屋の中央にラインを引き、2つの看板を線の両側に立てます。参加者に進行役に面して中央線に並ぶように指示します。そして、適当な看板に向かって移動することによって一連の意見に答えるように指示します。

いくつかの意見を声に出して読みます—以下にいくつか例を挙げます：

- > すべての子どもが学校に行けるようにするべきだ
- > 14歳を過ぎたら、賢い子どもだけに教育を受ける権利がある
- > いかなる理由であっても人を殺すことは間違っている
- > 人間は自分の信じるもののために闘う権利を持つ
- > 誰もが平和に暮らす権利を持つ
- > 何人も他国の占領下で生きるべきではない
- > 誰もが尊重される権利を持つ
- > 私は私に敬意を表す人にしか敬意を払わない
- > 公害は政府の責任である
- > 他人がごみをゴミ箱に捨てないのに、自分だけいつもごみをゴミ箱に捨てるのは意味がない
- > すべての人には自らの宗教を実践する権利がある
- > 宗教は世界の紛争の主要な原因である

これらの質問は参加者自身が矛盾する立場にあることを自覚できる表現になっており、それが熟考を促します。説明が終了したら、参加者を輪になって座らせ、何人かに自分の答えを紹介するように指示します。参加者が取り組んでいる問題のいくつかを取り上げ、どのように感じたかを話し合います。

参加者が質問に答えるのに困ったら、参加者になぜそのように考えたのかを聞きます。この議論で浮上してくる大きなポイントは、世界は単純ではなく、何を信じ、どのような立場を取るのかの決定は、必ずしも容易とは限らないということです。

参加者に他の人たちが線の反対側に立っているのを見てどう感じたか尋ねます。彼らや彼らの信条についてどう感じましたか？

人々の信条、意見には大きな相違があること、自分がそれを共有しない場合でもどのように他者の信条、意見を尊重すべきであるかを強調してこの活動を締めくくります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

ドラム・サークル

目的: 異なる環境において共有した体験を通じて、参加者同士がつながるためのスペースと機会を作ります。

成果: 参加者は異なった、より親密な形でつながりを持ち、それぞれ相手の生活についてより多くのことを学びます。

用意するもの: ドラム、薪、マッチ、燃えるもの。次のサイトにキャンプファイアの着火方法があります：
<http://www.luontoon.fi/page.asp?Section=8497>

アクティビティ

キャンプファイアと数個のドラムを用意します。参加者を焚き火の周りに集め、ドラムを手渡します。ドラムのたたき方をすでに知っている参加者がいる場合、彼らに手本を見せてもらうようにします。全員、あるいはできるだけ多くの人が参加できるようにドラム活動を設定するようにします。目的は、参加者に共に音を作り出す感動を体験してもらうことにあります。全員が楽しみ、リラックスしたら、話し合う場所を作ります。

参加者に思いついたことを何でも話すように促します。お互いから学び、それぞれの内面を発見するための場とします。

音楽、キャンプファイア、夜、そしてこのアクティビティに参加している1人1人に意味を持たせます。

この時間をユニークなものとしている要因について考えます。このテーマを拡大して、共通の人類の一部であり、共通の世界に住むすべてのすばらしい人々について考えます。

ドラム・サークルは、親密になる場として、また、人々がどのように平和のために協力することができるのかについて、個々に、そして共に考える時間となるでしょう。参加者が結びつき、自分自身とお互いについてより多くを学び、共同作業にあたって大変前向きな相乗効果を形成します。

可能であれば、ドラム・サークルを毎月恒例の特別イベントにしましょう。

ドラム・サークルは以下の活動と一緒に活用することができます：

- > ストーリーテリング
- > 歌とダンス
- > 瞑想と熟考

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

諸宗教訪問

目的：異なる神聖な場所（寺、モスク、シナゴグ、教会、シーク教寺院など）への見学ツアーを通じて、他の精神性の源を体験し、他の宗教について学びます。

成果：参加者は他の宗教の信仰、儀式および精神的表現についての認識を広げます。

用意するもの：参加者が学習する宗教に関する情報シートを渡します。参加者には訪問先でもメモを取らせします。

アクティビティ

参加者は異なる礼拝の場所をいくつか訪問します。この訪問は数日、1週間あるいはもっと長い期間の旅行に組み入れることも可能です。参加者の宗教が何であろうと、あるいは無信仰者であっても、全員が相手の立場に立つという新しい、おそらくはユニークな経験の恩恵を受けることができます。

宗教にゆかりのある場所へは、一般公開されている時か礼拝が行われている時のいずれかに訪問できます。いずれの場合でも、訪問する場所の「管理者」に連絡をして訪問を計画するのがベストです。この訪問を編成する人と面会し、諸宗教プログラムおよび訪問の目的を説明することが重要です。受け入れ先に対しては、この訪問の諸宗教的精神を踏まえ、プログラムには宗教の宣伝や他の宗教と比較する情報よりもその宗教について説明する情報が望ましいことを伝えておきます。訪問には例えば次のような内容を含めると良いでしょう：

- > 訪問する宗教の場所に属する人物による宗教の中核となる教義についての話
- > 礼拝場所における異なる儀式やその意義についての説明
- > 引率しているグループから質問する機会
- > 訪問する宗教の場所で礼拝している若者と話をする機会
- > 可能であれば、礼拝儀式を体験する機会
- > 適切であれば、受け入れ先の方にその宗教のやり方による祈りを捧げてもらうように依頼する

訪問の前に、参加者に他の信仰について学ぶという訪問の目的を伝えます。また、訪問する場所で適用されているドレスコードを守り、適切に行動する必要があることを強調しておきます。

それぞれの訪問の後、次の場所に向かう前に、参加者と話し合う時間を設けます。参加者にそこで学んだこと、そして、自分自身の宗教や学んできた他の宗教とどう違うのかについて話し合うように促します。宗教施設にいる間に体験したことやどのように感じたかについて振り返ります。

参加者の学習日誌には、例えば次のような事を記録します：

- > 礼拝場所－名称、場所など
- > 誰と面会したか、何を学んだか
- > 建物と礼拝の仕方についての主な印象
- > その宗教の信者の主たる信条
- > 自分の宗教との類似点と相違点－宗教を信仰しているのか、していないのか

諸宗教訪問準備のためのガイダンス

1. 参加者を訪問させたい礼拝場所に関する情報を入手します。参加者の宗教を考慮に入れて、ツアーを組むようにします。選択した場所について参加者と話し合ってください。
2. 礼拝場所のリストを作成し、この活動に割当てた時間内にすべての場所を訪問する最も実際的な方法を計画します。各場所の訪問に十分な時間を取るとともに、1つの場所から別の場所に移動する時間も計画に入れることを忘れないで下さい。
3. 訪問したい礼拝場所のそれぞれの責任者に連絡を取ります。訪問の目的と他者の信仰を体験し学ぶことの重要性を説明します。各場所で参加者に提供される情報が有益であり、他の宗教を尊重する精神に則って提供されるようにします。
4. 引率するグループが異なる信仰を持つ若者を含むものであれ、他の信仰への尊重を学んでいる過程の単一の宗教グループであれ、このグループの諸宗教的な性格を強調します。
5. 参加者を迎えてくれる受け入れ側の担当の人と訪問の日時について合意します。その担当者とのような訪問になるのかについて打ち合わせます。訪問が礼拝の時と重なるのか、参加者の服装はどうあるべきか、飲食物の提供の有無などです。礼拝場所に所属する子どもや若者も参加することができるかどうか尋ねてみましょう。
6. 可能な場合には、訪問時に学ぶ宗教について参加者向けのパンフレットを用意します。
7. 参加者に服装について通知します。
8. 訪問の前に参加者と準備会合を行います。参加者には質問を用意するように伝え、訪問場所とその内部も外部もすべて観察するように指示します。準備会合では、宗教について話し合い、参加者の何人かに自分の宗教について他の人たちに説明するように依頼します。参加者に敬意ある態度と偏見を持たないことの大切さを話しておきます。
9. 訪問中には、参加者にその場所を探索させ、出発前に質問の時間が取れるように手配します。
10. 訪問を終えたら、参加者に経験したこと、感じたことを書き留めるように指示し、報告の時間を共有します。自分自身の信仰とともに他者の信仰について学ぶことの重要性を強調します。

比べてみる

目的:異なる場所、宗教、文化、信条の間にある相違点と類似点を探索すること。このアクティビティは諸宗教訪問の前に（あるいは、必要があれば、諸宗教訪問の代わりに）役立てることもできます。

成果：参加者は世界の多様性についての知識を深め、他者の信仰や宗教の実践についてもっと学ぶ意欲を起こさせます。

用意するもの：異なる宗教と宗教的習慣を説明した資料。

アクティビティ

- > 諸宗教訪問を開催することができない場合、あるいは、おそらく何回かの訪問の準備のために、他の宗教の展示とプレゼンテーションを準備します。これには世界の異なる宗教と宗教的習慣を説明できる写真、画像、言葉または実際の事物（芸術品）などを含めます。できれば、このアクティビティと異なる宗教についてのビデオを組み合わせます。
- > あなたが提供する情報に人々がどんな服装を身につけているのか、何を行うのか、どこへ行くのか、祈りを捧げる対象は何か、やらないことは何か、などについての情報を含めるようにしてください。
- > プレゼンテーション終了後、参加者を小グループに分け、学んだ伝統の中から相違点と類似点を少なくとも5つずつ挙げるように指示します。
- > 世界がどのように異なり、どれほど多様であるか、この世界に住む人々がいかに異なり、いかに多様であるか、他者を理解できるようにするために他者の信仰について学ぶことがいかに重要であり、必要であるかについて考えながらこのアクティビティを締めくくります。

注意事項: このアクティビティを実施する間、他者の伝統を尊重することを守ってください。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

文化のタベ

目的：参加者が異なる文化と慣習を共有する機会を作ります。

成果：参加者は他の文化を体験し、それによって他者との関係において自分自身についてより多くの発見をします。

用意するもの：異なる文化について発表するのに適した場所。展示、説明、音楽、ダンス、飲食物やその他の出し物を用意できる所。

アクティビティ

文化のタベは他の国や宗教の伝統を共有し、体験する良い機会です。文化のタベの内容は、その国の伝統的な食べ物、衣装、音楽、踊りや地理、文化、宗教、経済に関する事実を含めても構いません。数回の文化のタベを企画して、イベントごとに1つの伝統を学ぶこともできますし、一度にすべての文化的グループを発表する文化のタベを1回だけ開催することもできます。発表される国あるいは宗教を象徴するミュージシャンやダンサーなどを招いた特別な文化イベントを含めることが可能かどうか考えてみてください。

文化のタベは、若い参加者たちの文化や生活について発表するのですから、彼らにイベントの組織を担当させる機会でもあります。彼らにプログラムの全体を決定させ、組織させるべきです。家族、友人および地元有力者に前もって招待状を送付し、大勢の来場者を確保します。

参加者が文化のタベに必要な資料の入手で困難に直面した場合、文化のタベのスポンサーになってくれるかもしれない大使館やレストランに連絡することを薦めます。大使館は情報、地図やパンフレットを提供してくれます。一方、レストランは、文化のタベを開催する目的を説明すれば、伝統的な食べ物を提供してくれるかもしれません。

一晩のうちにいくつかの異なる文化の祝典を催す場合、スタンドで各国についての「バザー」を催す案を提案します。そうすれば、来場者は飲食物を楽しみ、異なる文化の音楽に耳を傾けながら、スタンドからスタンドへと歩いて移動し、展示された調度品やその他の物品を見ることができます。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

社会見学

目的：参加者にこれまで行ったことのない場所を訪問し、訪問しなければ会うことはなかったと思われる人々と会う機会を作ります。彼らが見聞し、体験することが彼らの世界に対する見方に深い影響を及ぼすかもしれません。

成果：参加者は自分たちのものとは異なるコミュニティを体験します。住民の生活を改善するためにこのコミュニティがどのように取り組んでいるのかを考えます。また、このコミュニティにおける変化の必要性や、どのような支援が必要となるのか、こうした支援がどこから来るのか、彼ら自身がどうしたらその変化の原動力になれるのかを特定します。

準備：グループ内の参加者の大半にとって趣を異にし、馴染みの薄いコミュニティへの訪問を組織します。場所については、できたら異なる民族グループが居住する社会的・経済的に異なる所、あるいは遠出して外国を考えてもいいでしょう。この見学には数時間、1日、一晩あるいは1泊の滞在を要するかもしれません。

見学は、できれば訪問する地域の団体と協力して、十分な準備を行うことが重要です。見学が社交行事、「パフォーマンス」あるいは若者が活動に参加する集会のいずれであっても、そのコミュニティの現在の生活ばかりでなく、過去の経験や生活向上のために住民がもたらした変化にも着目します。

アクティビティ

参加者にこの訪問の開催の準備をさせます。参加者とどこに行き誰に会うべきか、見学先でどのようなことをすべきかを話し合います。

プログラムが双方向的なものであれば、参加者の準備をきちんと整えるようにしてください。参加者は演劇の上演、音楽の演奏や歌を歌っても構いませんし、訪問先の子どもと楽しむゲームを用意することも考えられます。何かを一緒に行うことで、参加者がコミュニティに関与することがはるかに容易になります。そのコミュニティの若者が受け入れグループとなって、一緒に活動を行なうなどして一緒に時間を過ごせば、双方ともお互いについて新しいことを学ぶことができるかもしれません。

この社会見学に、そのコミュニティに変化や転換をもたらしたことがある人々が関与する場合、質疑応答を行うためのパネル・ディスカッションあるいは円卓会議を開催します。

進行役として、訪問先のコミュニティに対する参加者の態度が紋切り型になってしまうことに注意し、このプログラムがこれらの点について前向きに取り組むようにしてください。

プログラムは共同進行役とともに十分に練り、訪問の目的とプログラムを把握するために、可能であれば事前訪問を実施すべきです。

社会見学の後、参加者と話し合いの場を設け、彼らの感情や反応について、そして訪問の結果それらがどのように変化したかを考えることができる話し合いを行います。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

ロールプレイングの活用

目的：紛争の原因および暴力的状況を解決できる方法を学ぶこと。このアクティビティは参加者が他者の立場に立って、他者の状況について考える手助けをします。

成果：参加者は特定の状況において人々がなぜそうした行動をとるのかを経験し、偏見、先入観や紛争の原因を模索します。参加者は非倫理的な行為がいかに社会に否定的な影響を与えるかを分析し、対立における暴力の度合いを減らすあるいは転換することが可能な方法を議論します。

用意するもの：参加者に自ら考えた状況を提案させるか、175ページの「資料集/ロールプレイング」の役割演技カードを活用させます。また、時事問題に基づいて独自に準備することもできます。すべての参加者が1つの役割演技を活用するか、同じテーマに基づいたいくつかのシナリオを活用します。

アクティビティ

参加者をグループに分け、各グループに彼ら自身が経験したことがあるかもしれない、あるいは彼ら自身の学校、近所、家族や友人などに起こっていたかもしれない対立、あるいは暴力的状況について考えるように指示します。学校での差別、居住地周辺での暴力的状況、家族間の問題あるいはコミュニティの結束の問題など考えられる対立の例を示し、参加者に創造性を発揮するよう促します。

参加者に、対立が暴力にエスカレートしていく様子を表現したロールプレイを上演するように指示します。他のグループの前で発表する前にセリフを読み通し、ドラマを練習する時間を与えます。

参加者に他のグループが演じた状況において暴力の度合いを減らすための解決策あるいは方法も見いださなければならぬと伝えます。

各状況が上演され、対立がエスカレートする場面で「フリーズ!」と言ってドラマを中断させます。この時に、他のグループの参加者に状況を転換させる、あるいは暴力の水準を低下させる方法を素早く考えるように指示します。アイデアを出す者がいた場合、その参加者にドラマの中で暴力の水準の低下に寄与できると考えられる出演者の1人の代わりを演じる、あるいは新たな出演者を登場させるように指示します。考えられる解決策を取り入れてロールプレイを繰り返し、他の参加者からより多くのアイデアを出すように促します。これを2、3回繰り返します。

それぞれ考えられる解決策が示された後、参加者に次のような質問をして短時間話し合います：

- > これは良い解決策だったか？
- > 関与した人たちがすべてが正義が行われた、あるいは行われると考え、満足したか？
- > これは現実の状況で可能なものか？
- > 一方的な解決策が可能か？ 妥協が必要か？（このドラマの要点）
- > もし~なら、どうなっていたか？（わざと反対の立場を取って、参加者に批判的に考えるよう促す）

すべてのロールプレイが上演されたら、非倫理的行為がどのように社会を破壊し、人間関係を壊してしまうのかについて考えます。共感はいかに尊敬とかかわるのか、他者を理解することがより良い関係の形成にどのように寄与するかなど、共感の意味とその重要性について話し合います。

参加者に自らの社会により正義と尊敬をもたらすために自らが従うことのできる慣習や行動について学習日誌に記入するように指示します。

ケーススタディの活用

目的：参加者に自分自身を他者の立場に置いて、他者の状況について考えさせます。

成果：参加者は特定の状況における人々の行動の理由を経験します。参加者は非倫理的な行為が社会に否定的な影響をもたらす可能性があることを分析し、暴力的対立および不正の原因について考えます。

用意するもの：138ページの「資料集/ケーススタディ（事例研究）」の中の事例研究を活用するか、時事問題に基づいて自分で教材を用意します。すべての参加者が1つの事例研究を活用するか、同じテーマに基づいていくつかの事例研究を使います。

注意：事例研究は少数派に影響する、あるいは若者の間に非倫理的な行為を誘発する状況に重点を置きます。事例研究はこのテーマを反映する必要があります。

アクティビティ

参加者を4～6名のグループに分け、各グループに1つの事例研究を渡し、議論を促すためにいくつか質問します：

- > 取り上げた事例研究では何が起きているのか？
- > 犠牲者（複数）は誰か？
- > 彼らを助けるために何ができるか？

グループに事例研究を読ませ、意味を話し合う時間を与えます。

全体討議を開きます。事例研究について話し合います。その事例研究に見られる否定的な結果をどのように回避することができたのか？

- > 自分がこの状況にあったら、どのように感じるか？
- > 自分ならどのように対応するか？
- > 人々に欠けていたものは何か？

議論が終わったら、非倫理的行為がどのように社会を破壊し、人間関係を壊してしまうのかについて考えます。

共感の意味を紹介し、その重要性について話し合います。共感はいかに尊敬にかかわっていますか？ 他者を理解することがより良い関係の形成にどのように寄与しますか？

参加者に自らの社会により正義と尊敬をもたらすために自らが従うことのできる慣習と行動について学習日誌に記入するように指示します。

倫理銀行

目的：「銀行業務」を比喻として用い、参加者が偏見、不寛容、不正に対する解決策を見出すことを手助けします。

成果：参加者は自らの社会の中で尊敬を促進する方法を探し、相互理解がいかに社会資本の構築に寄与するかを発見します。

用意するもの：銀行を表す箱。箱の代わりに、取引を記録した大きな紙である「バランス・ボード」でも構いません。「引き出し」を表す色の紙と「小切手」を表す別の色の紙。

用語

引き出し－特定された「問題」のことです。

小切手－銀行に預金できる「問題」の解決策。

バランス・ボード－左側に「引き出し」が記載され、右側に預け入れられる小切手を記載した掲示板。このボードが「つり合いがとれる」まで記載します。

アクティビティ

倫理銀行とは、ある特定の状況（学校、クラブ、家庭、友人、市/町、政府内）における理解や尊敬の欠如など、一定の問題のために債務（マイナス）状態で事業を開始する架空銀行のことです。参加者の任務は、問題解決のための解決策や行動を預け入れて銀行をお金のある状態にすることです。

このアクティビティは数週間にわたって行われることが考えられますが、グループは銀行が資金のある状態になると期待される時期についてあらかじめ同意します。

第1段階：引き出しの集計

参加者は1回またはそれ以上のセッションで銀行を債務状態に陥らせている「問題」を特定します。参加者はグループで作業し、家庭、近隣、学校、市や国などの異なる設定における問題を話し合うことによって問題を特定します。

参加者には人権憲章や尊敬、権利に付随する責任について思い出させます。参加者に、誰の権利が侵害されているのか、人々は自分自身と他者に対する責任を果たしているか、彼らは他者の権利を尊重しているかなどの質問をします。この分析は問題の根源およびその考えられる解決策を特定するのに役立つのでしょうか？

グループはそれぞれが特定した「引き出し」を共有するために集合し、引き出しを意味する色紙に記入します。これらの引き出しは「銀行」に入れられます。引き出しは「家庭」、「近隣」、「学校」、「市」、「国」などの異なる「勘定」項目の下にバランス・ボードに記載されます。

第2段階：銀行は機能している

参加者には解決策を特定し、銀行の「引き出し」に取り組む行動を準備する任務があります。参加者が最低でも特定の引き出し勘定の解決に向けて寄与する何かを行わない限り、銀行は債務状態のままです。そのような行動、あるいは解決策は「小切手」用の紙にメモされます。特定のセッションで寄せられたこれらの解決策が発表、調査、討議され、その後にバランス・ボードを更新します。

参加者にアイデアを共有し、問題にどのように取り組んでいるのかを話し合うことを促します。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

ジレンマ

目的：倫理原則に基づいて意思決定することの大切さを学びます。

成果：参加者は自分自身で倫理的な意思決定を行う能力を育成します。

倫理的ジレンマとは、1つのことを追求すれば別のものに背くという、倫理的義務との間にある明らかな対立を伴うことが多い状況のことです。

用意するもの：1つまたはいくつかの道徳的ジレンマ（143ページの「資料集/道徳的ジレンマ」を参照）のコピー、もしくは独自に作成する（下記を参照）；意思決定ガイドライン（90ページを参照）。

自分自身の道徳的ジレンマを作成します。

1. 参加者が善悪を決めなければならない状況を提起します。
2. 参加者自身にとっては利益と思われる最良の解決策が、他者には不利になるというジレンマを提案します。
3. ルールを無視した状況を説明します。
4. 参加者が自分自身で決断をしなければならない状況を伴うジレンマにしてください。

アクティビティ

参加者は3人から5人のグループに分かれ、それぞれ1つの道徳的ジレンマを与えられます。

このジレンマを議論し、全員一致の解決策に達するために、参加者に30分間与えます。それから他のグループと自分のグループが決定したことを共有します。

参加者に倫理的意決定ガイドライン（次頁）を紹介します。参加者はまずこのガイドラインについて議論し、その後にガイドラインを活用して自分たちの決定を見直します。

ガイドラインの導入によって参加者のグループの決定内容を変えたかどうか話し合います。人権の知識が決定に影響を及ぼしましたか？ 参加者は倫理的意決定ガイドラインを改定したいでしょうか？

ある問題が多く対立する見方を提起する事実について考える時間を取ります。事態を様々な見地から検討し、その利点に基づいてそれぞれの事項を考慮する必要性について話し合います。

倫理的意思決定ガイドライン – 諸宗教的アプローチ

決断をしなければならない状況に置かれた時、あなたが良い選択をするために以下の質問を役立ててみてください。

- > この決定は他の人々に影響するか？誰に影響するのか？
- > あなたの決定はあなたの信条に影響するか？
- > あなたの決定は他者の信条に影響するか？
- > あなたの決定は他者の意思あるいは信条に反した行動をさせるものか？
- > あなたの決定は異なる信仰あるいは文化を持つ人たちの考えを尊重しているか？
- > あなたの決定はあなたと異なる人たち（性別、宗派、異なる地位など）を悪いイメージに描く可能性があるか？
- > あなたの決定は人間の尊厳をおとしめるものか？
- > 家族、友人あるいは先生とあなたの決定を率直に共有できるか？
- > あなたの決定は問題に取り組んでいるか？それとも単に問題を隠しているだけか？
- > あなたの決定は何らかの否定的な結果を招くものか？

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

6段階問題解決法

目的：参加者に人間関係の対立を解決する構造的な方法を紹介します。

成果：参加者は問題解決に向けて非暴力の選択肢を学びます。参加者は自らが変わることによって解決に向けて取り組むことができること、そして和解の姿勢が役立つ場合が多いことを発見します。

アクティビティ

対立を演じるボランティアを2人選びます。対立の具体例を挙げると、学校で本や道具をめぐる口論、容姿や服装についてからかうこと、お金を取り上げるいじめ、貸したものが返却時に貸した時よりひどい状態になっていること、望まない行動を強要されることなどがあります。

ボランティアが残りのグループの前でロールプレイを演じます。激しい内容の口論にしたり、ボランティアがなかなか解決策を見出せないようにすることが重要となります。

その後に参加者に6段階問題解決プロセスを紹介します：

1. ニーズを特定する：

「あなたが必要とするもの（欲しいもの）は何か？」

対立する各人は相手方を批判、非難することなく、この質問に答えなければなりません。

2. 問題を明らかにする：

「問題をどのように捉えているか？」

グループは両者のニーズを含めるが、責任を分配しない対応策を取る手助けができます。対立関係にある人物たちは問題の定義で同意しなければなりません。

3. 考えられる多くの解決策について意見を出し合う：

「この問題を解決する方法を思いつく者は誰か？」

グループ内の誰でも対応策を提案できます。解決策は意見、判断、評価をすることなしにすべて書き留めます。この段階のねらいはできる限り多くの解決策を提案することです。

4. 解決策を評価する：

「この解決策で満足できるか？」

対立の当事者は考えられる解決策を検討し、どれが受け入れ可能で、どれが受け入れ不可能かを説明します。

5. 最良の解決策を決定する:

「両者ともこの解決策に同意するか？ 問題は解決されたか？」

当事者双方が同意し、解決策を見出すことにおけるお互いの努力を認めることを確かめて下さい。

6. 解決策が機能していることを調べるためにチェックする:

「10分後にお互いに再度話し合い、問題が本当に解決されたことを確認しよう」

この段階は非常に重要です。ロールプレイにおける架空の問題では、言うまでもなく本当の評価は可能ではありません。それでも、対立の性格や子どもの年齢によりますが、一定時間（数分間あるいは1時間から、翌日ないし次週まで）を置いた後に、合意に達した解決策を振り返って議論しても良いかもしれません。

参加者はその後4人ずつのグループに分かれ、異なるロールプレイの状況で解決策を実行します。

私たちの間に相違点があった場合の私たちのお互いに対する反応や、相手を非難する代わりに、解決策を探すことの重要性について考えてこの活動を締めくくります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

ピースニュース

目的：参加者が尊敬と理解が欠けている状況で解決策を見出すことを可能にします。

成果：参加者は尊敬の念が欠けている状況に前向きな解決策を模索し、この手法を自らの生活における対立に適用します。

用意するもの：ピースニュース・カード（177ページの「資料集/ピースニュース・カード」を参照）

アクティビティ

参加者に4、5人のグループに分かれるように指示します。各グループにピースニュース・カードを渡します。参加者に解決策を考え、テレビのニュース速報の重大ニュースであるかのようにそれを報告しなければならないと伝えます。

各グループには解決策を見出し、ニュース速報の準備をするために30分の持ち時間があります。各グループに状況を再現する、あるいは関係者をインタビューし、解決策を報告するように指示します。

各ニュース速報の後に討議を行います。質問は次のような内容が考えられます：

- > 所与の状況に対して考えられるその他の解決策があるか？
- > 状況が～によって悪化した場合はどうなるのか？
- > 提案された解決策が他者の権利を侵害していないか？
- > 自分がこの状況に置かれた場合、どうするか？
- > 人々はどのように和解できるのか？
- > 世界に平和をもたらすために和解は重要か？

新しい発想と論議を奨励し、参加者に頭を働かせて解決策を自由に考えさせます。参加者に他の人々を傷つけない平和的な解決策を考えるよう勧めます。

参加者に権利、尊敬および責任の観点から出来事を見るように指示します。具体的に言えば、誰の権利が侵害されているのか？ 誰の権利が守られているのか？ 人々はお互いを尊重しているか？ 解決策は人々が自分たち自身および他者に対して責任を取ることを考慮したものか？ 彼らは他者の権利を保護しているのか？ といった観点です。

次頁の「紛争転換のための12のスキル」を使って参加者とともに紛争を転換することが可能な方法について考え、このセッションを締めくくります。例えば、仲裁が紛争に関わる当事者間の理解を促すことにどのように寄与できるのかについて、参加者に説明します。参加者にこれまでに紛争の仲裁役を果たしたことがあるか、あるいは他の人々が仲裁しなければならないような状況を経験したことがあるかを尋ねてみます。例えば、権利を表明することによって、どのようにお互いにプラスになる状況を作り出すことができるのか、あるいは人々には優しく、問題には厳しく対処することによって、どのように平和的な交渉を達成できるのか、について参加者と話し合います。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

紛争転換のための12のスキル

ウィン-ウィン（双方に有利）	クリエイティブな解決策	理解
ニーズに立ち戻る > 相互利益の機会を追求する	好機としての対立 > 変化の重要性 > 機会の創出	相手側からはどのように見えるのか？ > 動機、ニーズ、利害に耳を傾ける
自己主張 > 自分の権利を知る > 自分の権利を正しく表現する	創造力 > 協力した方がうまくいく > 他者に対する力と他者と共有する力の違い	感情への対応 > 勝手にしない > 拒否しない > 充実した関係を創り出す
問題解決に向けた前向きな姿勢 > 自分はどんなメガネを掛けているのか > 自分自身の動機を理解する	対立の描写 > ニーズは何か？ > 利害は何か？ > 背景を理解する	選択肢の立案 > より良い解決策のための新たな代替策 > 多くのアイデアを出す
交渉スキル > 問題には厳しく、人には優しく > 合意を用意する	広い視野と寛容 > あらゆる観点を示す解決策 > 創造的バランス > 幅広い合意	仲裁 > 安全に学ぶ環境を促進する > 中立的代理人を見出し、活用する

私のメモ

尊敬についてのフォーカス・グループ

目的:「尊敬」の概念、その意味、尊敬の欠如が社会にどのように影響し得るのかについて話し合いを始めます。

成果:参加者は、最も身近なものからグローバルなものまで、すべての人々が尊重される権利を認めることがいかに関係を改善できるのかを発見します。

用意するもの:「世界人権宣言」および「子どもの権利条約」のコピー（「資料集」参照）。

アクティビティ

参加者に尊敬について話し合うフォーカス・グループを形成することを伝えます。

フォーカス・グループは面接に似ていますが、個人ベースではなく5～10人のグループごとに行われます。フォーカス・グループは各自が発言の機会を持てる体制を整えた司会者（モデレーター）によって行われます。参加者同士のやりとりが充実した議論と洞察力を刺激し、プログラムのインパクトと有効性に関する質的データをもたらします。フォーカス・グループは通常、踏み込んだ面接よりも迅速に実施することができます。フォーカス・グループは、子どもと大人が平和について持っている概念と価値観、暴力に対処する方法についての考え方、学校やコミュニティにおいて平和を促進する最良の方法についての提案などを検討するために活用されてきました。

「尊敬」に関する話し合いの要領は以下のようなものになると思われます:

「尊敬」に関する話し合いのためのフォーカス・グループ司会者の要領

フォーカス・グループ内の人たちが尊敬についてどう感じているのかを調査したいと考えています。議論を進めるために以下の質問を使います。以下の順番通りに使う必要はありません。

- > あなたを尊重しているのは誰ですか？
- > あなたに常に敬意を表さないのは誰ですか？
- > 人々があなたに対して敬意を表しているかどうか、どのように分かりますか？
- > あなたは他の人たちにどの程度敬意を表しますか？あなたが常に敬意を表す人は誰ですか？
- > あなたが他者に敬意を表さないのはどのような時で、その理由は何ですか？
- > 常にすべての人を尊重する理由は何ですか？
- > 一部の人たちだけを尊重する理由は何ですか？

必要に応じて、各グループに以下のトピックの1つに焦点を当てさせることもできます:

学校における尊敬	－尊敬を欠く具体的事例があるか？
街の中での尊敬	－尊敬の欠如に苦しむグループがいるか？（例えば、移民、少数民族など）
家庭内の尊敬	－家族の中でどの程度の敬意が示されているか？最も尊敬されている者は誰か？最も尊重されていないのは誰か？
宗教的尊敬	－私たちは他の人々の信仰を尊重しているか？ そうでないとしたら、その理由は何か？

各フォーカス・グループが出した結論を共有してこの活動を締めくくります。参加者が尊敬とは何かをどのように理解しているのかとその適用を視覚化するためにマインド・マップを活用するのも良いかもしれません。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

諸宗教カフェ

目的: 参加者が話題の問題を論議し、相互理解と学習を進展させることを可能にします。

成果: 参加者は人々が集まって関心のある話題を論議し、熟考し、社会問題に対する可能な解決策を提案するアクティビティを開催します。

用意するもの: 可能であれば定期的に集まって時事問題や宗教問題を異なる視点から話し合う場所。例えば、学校、近所、礼拝の場所、参加者の自宅など。

アクティビティ

できれば多くの異なる宗教を信仰している人々が集まって話題になっている問題を話し合い、カフェと同じように軽い飲食物を楽しめる場所として、諸宗教カフェを参加者に紹介します。

参加者に、一回ないしそれ以上の諸宗教カフェを設定することは相互理解促進へのコミットメントの一環となり得ることを伝えます。このような形式張らない会合は参加者が落ち着いて話し合いお互いについて学ぶ場となるように、さらに、このような機会がなければ出会うことがないかもしれない人たちが集まる場となるように、少人数のボランティアのグループが「委員会」を構成することも考えられます。

諸宗教カフェを設定するためには「委員会」は以下の段取りをする必要があります:

- > トピックを選定します。
- > 短いドキュメンタリー、パワーポイントのプレゼンテーション、外部からの講演者、写真の展示または新聞の切り抜きなど、情報を提示する方法を決めます。
- > プログラムは数時間続くものにします。プログラムは参加する人たちが到着する時間、軽食、進行を妨げる障害を取り払うために場を和やかにするものの必要性、トピックの提示、質疑応答セッションの必要性および/または聴衆全員に参加を促す一般討論などを想定しておかなければいけません。
- > 軽食に何を出すか、その調達先あるいは誰が飲食物を提供するのか、セッションのどの時点で軽食を出すかなどを決定します。
- > 誰か（必ずしも大人でなくても構いません）が「諸宗教カフェ」の非公式な「議長」を務めます。議長の仕事は、プレゼンテーション/講演者などの紹介、話し合いの監督、「聴衆」から質問を受け付け、意見の交換を円滑に行うことです。
- > 議長が参加者や講演者に状況について何をすることが必要なのか、状況をどのように変えることができるのかなどについて質問し、議論が中断しないようにします。
- > 議長はすべての人の貢献が敬意を持って扱われるようにしなければなりません。
- > 議長は平和を願う黙祷でセッションを終わりにします。さらに諸宗教カフェが開催される予定があれば、出席者が退出する前にその日時を伝えます。出席者から話し合いのテーマについての提案を受け付けることもできます。
- > 委員会は、特に礼拝の場所にポスターなどを貼って、さらには地元メディアを通じて、諸宗教カフェを宣伝する必要があります。広範な年齢層の出席を得るために父兄をかかわらせるようにすることも考えられます。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

円卓会議（ラウンド・テーブル）

目的：全員が同等の立場であるフォーラムに集い、重要な宗教的問題と紛争についてより多く話し合い、学びます。

成果：参加者は異なる宗教対立について、それらがどのように世界に影響を及ぼしたか、異なる文化、宗教、伝統を持つ人々を尊重する必要性についての情報を得ます。

用意するもの：全員が円形に座ってお互いの顔を見ることができる丸いテーブル、あるいはそれに近いもの。紛争もしくは討議中のトピックに関する情報。フリップチャートとマーカー。

アクティビティ

1. 参加者に問題を議論するラウンド・テーブル方式について説明します。ラウンド・テーブルには「先端」、「側面」、「末端」がないため、ラウンド・テーブルに座っている者の中で誰かひとりが特権的位置を占めることは不可能であり、全員が同等の者として扱われます。この考え方はでキャメロット城の円卓の騎士たちにまつわる英国のアーサー王伝説に由来しています。
2. 参加者と共に、彼らがラウンド・テーブルで議論する宗教問題あるいは紛争を選択します。討議の日取りを設定して、参加者が準備のための時間を取れるようにします。参加者にラウンド・テーブルはあらゆるアングル（経済、政治、社会および宗教）からの分析を可能にすることを目的としていることを伝えます。参加者に特に創造や破壊だけではなく変化をもたらす人間の能力に焦点を当てるように指示します。
3. 前もって参加者にトピックについて一定の情報を提供しますが、参加者には自分で調査し、何か新しいものを議論の場に持ち寄るように促します。
4. ラウンド・テーブルでは、参加者の1人に司会役を依頼します。情報を持ってきた人や質問者を関与させ、さらに自発的に発言しない人も引き込んで、全員が議論に貢献するようにします。
5. フリップチャートを使って紛争に関する図を描き、情報を提供することも良いでしょう。この仕事はボランティアが担当できるでしょう。
6. 進行役として、他の人々と同等に参加者として関与しますが、知識は提供しません。それは参加者たちの責任です。参加者の意見や解釈を訂正してはいけませんが、概念的に誤った解釈については明確にして下さい。
7. 次のような質問で議論を締めくくります：
 - ・なぜ宗教は紛争を増幅させるのか？
 - ・人々は信仰の異なる人たちと争うことを望んでいるのか？あるいは自分たちの信仰を共有したくないのか？
 - ・異なる宗教を信仰する人たちが共に生活し、働くことは不可能なのか？
 - ・異なる宗教を信仰する、あるいは無信仰の人たちが調和して共生できるようにするために、私たちに何ができるのか？

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

ディベート

目的：参加者に異なる視点から紛争と不正を理解させ、管理された環境の中での建設的な議論を実践します。

成果：参加者は人間の尊厳および自分たちの価値観の体系に影響を与える状況、行動および態度について考えます。

ディベート（討論）とは、概して決まった形式や手順に従い、ある問題について相反する立場を支持する議論を展開する2人、チームまたはグループの間の正式な口頭による対決です。討論には、相互作用の明確な枠組みの中で、人々が相違点について議論し、決定することを可能にしているルールがあります。

ここで示したルールは「世界学校ディベート選手権（World Schools Debating Championships）²」のルールを翻案したものです。参加者には定期的に討論を行うメリットがあると思います。そうすれば全員が話しをする機会を得られ、討論に貢献するために必要な規律を発展させることができるからです。

アクティビティ

参加者はニュースになっている、あるいは参加者にとって重要な時事問題を選択します。通常、討論の課題は次のような「申し立て」によって示されます：ここでは、一方の側、または肯定の議論をするチームが動議を提案し、他方がそれに反対していると判断します。時間を計り、秩序を保つ議長を選任すべきです。

1. 双方にそれぞれ3人の話者を擁します。
2. 各チームはそれぞれの話者が討論する順番を決める必要があります。討論開始に先立ち、各チームは議長に3人の話者の氏名および発言する順番を議長に通知しなければなりません。
3. 各チームの主要な話者が最初に、最も長く発言します。申し立てを提案する側が最初に発言し、次に相手側が発言します。
4. 最初の話者に各チームの2番目の話者が続き、最初のスピーチに応答しますが、その順番は申し立てに反対する側が先に発言し、申し立てを提案したチームがそれに続きます。
5. 各チームの3番目の話者の順番がきます。ここでも反対側が先に発言し、相手側が続きます。
6. 最初のスピーチ時間は8分間で、反論スピーチは4分間です。
7. 討論で発言が許されるのは各チームとも3人の話者のみであり、議長が討論の冒頭で発表します。
8. 討論の間、話者は聴衆の中のいかなる人物とも連絡をとってはけません。
9. 討論を締めくくるに当たって、聴衆に最も説得力がある議論に投票を求めることもできます。
10. 締めくくりの議論として、参加者に彼らの宗教的信条が彼らの考え、意見および行動のガイドラインの役割を果たしているかどうか、その場合どのような形でそれを果たしているのかを質問します。

トピックと話者を事前に決定し、準備により多くの時間を取れば、討論の質も良くなります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

² <http://www.schoolsdebate.com/guides.asp>

自分についての瞑想 – 沈黙の旅

目的：参加者が自分の生活、自分は何者なのか、自分と他者および環境との関係について思いめぐらす機会を作ります。

成果：参加者は、他者により前向きなやり方やかかわるために、自分自身を大切に必要性に気づきます。

用意するもの：明かりを薄暗くした部屋または6つに仕切られたスペース。色のついた紙または段ボール（黄、赤、緑、黒、白、青の6色）。静かな音楽、お香、キャンドル、壁に静かな場所の写真や聖典からの引用などを置いて穏やかな雰囲気を作り出します。進行役も6人必要です。

アクティビティ

家具を移動して1つの部屋に6つの空間を作るか、あるいは別々の6つの部屋の床に色の異なる紙または段ボールを敷きます：それぞれの色につき1人、合計6人の進行役が必要です。それぞれの色について、各進行役が熟考するためのいくつかの質問を行います。（以下の提案を参照）

参加者に、これから自分自身についてもっと良く知るための沈黙の旅に出発すると伝えます。参加者は6つの異なるスペースを移動し、それぞれのスペースで自分自身の生活や自分と他者との関係について瞑想します。参加者を1グループ5人を上限とする6つのグループに分けます。最初に、各グループに6つのスペースのうちの1つに行くよう指示します。グループが各スペースで約15分過ごした後、移動させます。

スペースにいる間、参加者は座っても、横になっても構いません。目を閉じたり、リラックスして構いません。進行役が質問をしますが、それは参加者が口頭で答えたり、議論を始めたりするためのものではありません。ここでの目的は質問を自分の生活に関連づけて心の中で熟考することにあります。

このセッションで参加者の中には動揺する人がでるかもしれませんので、進行役はそうした場合のために備えなければいけません。また、参加者がセッションについて感じたこと、つまり、最も気に入った点、最も気に入らなかった点、最も鮮明に覚えている点、そしてこの体験で何を学んだのかについて全般的な感想を尋ねる時間も設けてください。

進行役への提案（質問は尋問ではなく、修辭的なものです）：

- ・黄 – 自分自身の内部に光を見出すことを考えます。あなたはどの程度平和的に他者とかわりますか？時には他者の光となることがありますか？ 困難な状況にどうやって光をもたらすことができるかについて考えてください。あなたはどのように内面に平和を見出し、他者に平和をもたらすことができますか？
- ・緑 – 自然の色です。私たちは皆、環境に対する責任を負っています。そして、たとえ困難な状況にあっても、私たちの内なるものが私たちに万事うまくいくと教えてくれていて、私たちは希望を持たなければなりません。
- ・赤 – 愛情の色です。あなたの最愛の人は誰ですか？ 心臓の鼓動に耳を傾けてください。脈打っているのが感じられるほど心臓の鼓動が強くなるのはどんな時ですか？ 私たちは一部の人たちに自由に愛情を注いでいますが、愛情を本当に必要としているかもしれない他の人たちには愛情を与えていません。容易に愛することができない人たちの思いやることを私たちはどのように学ぶことができるでしょうか？

- ・ 黒 – 変化と内面の強さの色です。それは可能性と能力を意味しています。参加者がどのように他者を判断しているのかについて考える場所はここです。あなたは他者を非常に批判的に判断しますか？ 非常に扱いにくい人々に対して特に批判的ですか？ 自分自身とは異なると見なしている人を理解し、好きになることは難しいと感じていますか？
- ・ 白 – 参加者がどのように自分自身を愛し、大切にしているかを考える場所はここです。自分自身を愛せない限り、他者を愛することはできないと言われていますが、あなたにとって、これはどの程度真実ですか？
- ・ 青 – 参加者が自分自身の優れた資質や才能について考える場所はここです。あなたを元気づけるものは何ですか？ 何があなたの存在をユニークにしていますか？ あなたの資質と才能は他者にどのような影響を及ぼしていますか？ あなたはその資質をどうやって他者を助けるために、あるいは他者に役立つために用いますか？ 他者と共に平和に暮らし、世界の調和に寄与することは大切なことです。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

宗教指導者と社会指導者

目的：世界に平和をもたらした宗教的および社会的指導者について学習し、参加者や他者の生活に平和をもたらすことのできる精神的な実践について学びます。

成果：参加者はロールモデルの行動と姿勢について探求し、他者と和解の姿勢を育む方法について考えます。

用意するもの：次に挙げるロールモデルのうちの1人または複数の人物の生涯についての映画（テレビ・ドキュメンタリー、ビデオ、上映作品など）：アウン・サン・スー・チー、ダライ・ラマ、マハトマ・ガンジー、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ヨハネ・パウロ2世、イマム・W・ディーン・モハメッド、マザー・テレサ、ネルソン・マンデラ、キャット・スティーブンス（ユスフ・イスラム）、ラバイ・アブラハム・ジョシュア・ヘッセル、モーゼス・マイモニデス、ティク・ナット・ハン、シリル・エバディ、スワミ・ヴィヴェカナンダ、あるいは、あなたが平和と人類のために働き、影響を及ぼしたと考えるその他の人物。

アクティビティ

世界に平和をもたらした宗教指導者もしくは社会指導者の1人または複数の人物についてのプレゼンテーションを準備するかあるいは映画を上映します。映画（149頁の「資料集/映画・ビデオ」を参照）またはプレゼンテーションの後、参加者に主人公について話し合うように指示します：

- ・主人公を際立たせている特徴は何か？
- ・主人公の意欲を奮い立たせた信念は何か？
- ・不正な状況を転換するために、この人物は何をして、どのように行動したのか？
- ・この人物は許しについてどのように対処し、社会に和解をもたらしたのか？

参加者にとって和解とは何を意味するのか、人は他者とどのようにして和解できるのか、そしてなぜ和解が重要なのかについて参加者と一緒に話し合う必要があるかもしれません。

参加者に許しや和解にどのように対処しているのかを尋ね、議論をより個人的なものとしします。次のような具体的な質問をすることができます。

- ・私たちが他者を許すことを妨げているものは何か？
- ・より和解的になるにはどのような「代償」を支払わねばならないのか、すなわち、私たちが平和的に行動するための要件は何か？
- ・ロールモデルの教えを私たちの生活にどのように応用できるか？
- ・どのようにして和解が世界を変える手段となり得るのか？

各参加者に、内なる平和を得るためにどのような姿勢と行動を育成したいと考えているのかを書き留めるように指示して、この活動を締めくくります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

なぜ傷つくのでしょうか？

目的：参加者のすべての悲しみと痛みを取り除くことによって参加者の心を「癒し」、虚しさを精神的安らぎと内なる平和で満たすためのスペースを作ります。

成果：参加者は彼らの心を痛みと悲しみで満たす感情について瞑想し、和解と内面の安らぎが必要なことを認識します。

アクティビティ

参加者に、これは彼らに心の痛みをもたらしている物事や、彼らが他者にもたらしているかもしれない痛みについて瞑想するアクティビティであることを伝えます。参加者が和解と内面の安らぎを見出せるように手助けをします。

まず、私たちが言葉、態度や行動によって他者に対してもたらす可能性のある痛みについて考えます。例えば、ハンマーで強打して壁に複数の穴を開けた場合の壁のキズを例に挙げます。壁が以前のように滑らかな状態に戻るよう穴を修復することは極めて困難です。あるいは、手で紙をクシャクシャにし、それを参加者の1人に手渡して滑らかな状態にできるかどうか試してみてもいいでしょう。

私たちの態度、行動や言葉が人々との関係に簡単にはふさぐことのできない穴を開けてしまう可能性があることを説明します。同様に、他者が私たちの心にふさぐのが難しい穴を開けることもあります。私たちの心は穴が開いている時には空しく感じます。そして、この空虚さは許しと和解によって満たされる必要があります。

熟考を終えた後、以下の質問をフリップチャート上に用意するか、紙に記入して参加者に配布します。これらの質問の意図は、悲しみと心の痛みの原因について参加者が瞑想をする手助けをすることにあります。

なぜ傷つくのでしょうか？

あなたの生活の中で最近心の痛みを引き起こすようなことが何か起こりましたか？ それは何ですか？

心の中でどのように感じていますか？ あなたに苦痛と苦悩をもたらす感情とはどのようなものですか？

そのような感情は身体的なものですか？ それとも情緒的なものですか？ 説明してください。

現在のような感情を持続したいと思いませんか？ そのような感情が傷つけているのはあなた自身だけで、他に傷つけている人はいませんか？ そのような痛みを伴う感情を心に抱いたままエネルギーを浪費し続けたいですか？

心の穴をふさぐことができればどれほど幸せになるか、想像したことがありますか？ その痛みを解放すればあなたの生活がどうなるかを想像できますか？ 今、それができると思いませんか？

目を閉じて、そのような感情や思いがない生活を考えてみてください。自分自身が平安な場所にいると考えてください。では、その心を傷つけている感情を解き放ってください。

あなたの心を「癒す」ことができるのはあなたしかいません。あなたの魂に安らぎをもたらすことができるのもあなた自身なのです。自分を許すのです。許しは和解を意味するわけではありませんが、あなた自身が和解の姿勢で状況に向き合う準備になります。

各参加者にキャンドルを渡して火をつけ、この活動を締めくくります。キャンドルに火を灯すことは、安らぎを見いだし、心の痛みと悲しみをもたらした人々との和解に向けた前向きな姿勢を示しています。参加者に心の空虚さを許しと和解で埋めるために、集まって沈思するよう指示します。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

ボビーの話

目的：他者や内なる自己を見つめることによって、すべての人の価値を見いだします。

成果：参加者は自分たちが批判をした人物になり得ることを発見し、自分自身の偏見について、また、いかに自分自身が偏見の犠牲者になり得るかについて考えます。

アクティビティ

参加者を集め、ボビーの話をしてします。

ボビーの話

誰もがボビーを知っています。彼は学校内で良く思われていませんし、身体的に際立った特徴があります。ボビーは他の生徒と比べて太っていて、いつもだらしく見えます。服装は流行遅れで、時々臭うこともあります。歯並びが悪く、ニキビもいっぱいあります。

ボビーを見たことがありますか？彼は学校の廊下で皆が避けて通るようなタイプです。彼は食堂でも、休み時間でもいつも1人であるような人です。時折、親切な人たちが彼のそばに腰掛けようとしてますが、彼らは他の人からかわれることを恐れています。あるとき私は彼と一緒に座って話をしたのですが、ボビーはあなたや私ととてもよく似ていることに気付きました。

参加者に以下の質問をします：

- ・あなたのどんなところが魅力ですか？
- ・一部の人たちがあなたを避けているのは何が原因でしょうか？
- ・ボビーの悪口を言っても、それが彼のためになりますか？
- ・ボビーを避けることは彼が自分の世界から足を踏み出す助けとなりますか？
- ・ボビーの良い所は？
- ・私たちとボビーには何か共通点がありますか？

参加者の議論が終わったところで、ボビーを紹介します。ボビーは地球儀であらわします。参加者に両手を使って丁寧に地球儀を順に手渡すように指示します。ボビーは非常に敏感で、彼を傷つけてしまうかもしれません。地球儀が部屋を一巡したところで、参加者を小グループごとに集め、彼らの他者に対する接し方や偏見の原因となる考え方について話し合いをします。

全体での会合に戻り、強みや弱みとは無関係に、自分自身と他者を尊重する必要性について参加者と共に考えます。他者の外見ばかりに関心を集中させるのではなく、他者の内なる自己に目を向けることの重要性について考えます。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

もしも～だったら世界は・・・

目的：参加者に世界における紛争の影響について、より良い世界を構築するためにすべての人々に必要とされる価値観とは何かについて考える機会を作ります。

成果：参加者は紛争の原因と結果および相互理解の重要性について考えます。参加者は相互理解を育むために、どのように貢献できるのかを想像します。

用意するもの：フリップチャート、ペン、はがき、雑誌、新聞、糊。必要なだけ資料を揃えてください。

アクティビティ

1. 参加者に2人1組となり、与えられた教材を使って、次に例示するような場合に世界はどうなるのかについて絵を描くか、プレゼンテーションをするように指示します：
 - > 暴力的紛争が一切なかったら
 - > 自分が_____を変えた、または自分が_____をしたら。
 - > もしくは、あなたが議論で強調したいことに基づき、あなた自身の発言をします。
2. グループを集め、それぞれの組に書いたものについての説明をさせます。
3. 書いたものの中で取り上げられた問題を基に、議論を進めます。また、次の点を考慮します：
 - ・異なる宗教を信仰する人々との相互理解を促進するために、私たちに何ができるのか？
 - ・異なる宗教と文化を持つ人々との和解をどのように促進できるのか？
 - ・より理解を深めるためにはどのような資質あるいは価値観が必要とされるのか？
 - ・人々がより理解を深め、尊重し合えるようにするには、宗教はどのような役割を果たすと考えられるか？
 - ・人々がお互いを尊重し合える世界を構築するにあたって、どんな貢献ができるのか？

このアクティビティは参加者が描いたものを使って学校のキャンペーンとして実施することが可能です。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

嬉しい感謝

目的：自尊心を育み、嬉しい感謝を祝福します。

成果：参加者は自信と自尊心を強め、グループ内の人たちの間で精神的な支えと嬉しい感謝を経験します。

用意するもの：各参加者用にプラスチックのコップ2個と乾燥豆少々（緑豆の種子が好都合）。

アクティビティ

1. 参加者は輪になって座ります。参加者に目を閉じて深呼吸をし、その日の出来事や気を取られているさまたげを忘れるように指示します。
2. 全員に小さなプラスチックコップ2個を渡します。コップの1つには緑豆の種子を入れ、もう一つのコップは空にします。
3. 参加者に自分が過去1週間に行った善い行いを思い浮かべるように指示します。善行には、品行方正、誰かにきちんと話をしたこと、誰かのことをほめること、誰かを助けること、などが含まれます。
4. 良い行い1つにつき、参加者は満杯のコップから豆の種子を1粒とって別の空のコップに移すことができます。この作業はすべて無言で行われ、進行役も参加します。アクティビティのこの部分には約5分の時間を割きます。
5. 輪をめぐりながら、各参加者に自分の善い行いの話をグループ全体と共有するように求め、この間、他の人たちは、感情移入しながら、偏見を持たずに、「深く」聞き入ります。
7. 善い行い、幸福と嬉しい感謝に満ちたサークルの一部に参加することによって、人は自信を持つようになります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

105

私のメモ

マンダラ (曼荼羅)

目的: 参加者に内なる自分を探究し、心の安らぎを見いだす機会を提供します。

成果: 参加者はある特定の時間に自分の生活について考え、自分の内面の変化と変化の意味について深く考えます。

用意するもの: 色鉛筆、フェルトペン、カラーワックス、画用紙、リラックスさせる音楽、お香、コンパス、丸い皿。

アクティビティ

「マンダラ (曼荼羅)」という言葉はインドの古典語サンスクリット語に由来します。大まかに言って「円 (サークル)」を意味する言葉ですが、マンダラは単純な形をはるかに超えたものです。この言葉は全体 (ホールネス) を表し、生命そのものの組織的構造のモデルと見なすこともできます。宇宙の図は私たちに私たちの神 (the infinite) とのつながり、私たちの肉体と精神を超えると同時にその内部にも拡張する世界を想起させます。詳細とマンダラのモデルについては以下を参照してください: <http://www.mandalaproject.org/Index.html>。

マンダラは世界を内側から理解し、宇宙と創造との一体感を体験するために用いられています。芸術と教育を通して平和を促進する非営利組織(NPO)「マンダラプロジェクト」の創設者でありエグゼクティブディレクターを務めるベイリー・カニングハムはこのように語っています。「マンダラを知ることは我々自身、我々の惑星、そしておそらく我々自身の生きる目的についてさえも、我々の見方を変える可能性を秘めている」³。

- ・参加者が邪魔されず、瞑想できる静かな場所を探します。参加者には、創造力と直感を司る右脳を活性化させるために自分の心の状態を探究するように指示します。これにより参加者は自分の精神状態を観察するモードに入り、それが今自分がどのように感じているかを考え、自分の精神の状態を表す図を描くことにつながります。
- ・参加者の感覚を刺激するために、くつろいだ気分にするような音楽をかけたり、お香をたきます。参加者にお皿またはコンパスを使って円を描き、小さな点でその円の中心に印をつけるように指示します。円の中心から始めて、円の中を好きなようにシンボルや抽象的なもの、記号、言葉、幾何学的図形などで埋め尽くしても構いません。
- ・参加者の描画が終了したら、彼らが今どのように感じているかについて考えさせます。参加者にとってそれぞれの色や形が何を表しているのか、描画を行っている時にどんな体験をしたかについての熟考を導きます。参加者にマンダラは私たちが内面でどのように感じているかを表現していることを説明します。参加者に自分のマンダラを家に持ち帰り、頻繁に目にする場所に置いておくように促します。
- ・数週間後に再びこの活動を行い、参加者に時間を経たマンダラを比較し、彼ら自身の内面の変化を観察させることも可能です。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

3 マンダラ: Journey to the Center. ベイリー・カニングハム (Bailey Cunningham)、DK出版 (DK Publishing)、2002年

千羽鶴

目的: 相互理解の欠如による地球規模の影響について考え、参加者は平和の具体的シンボルを作ります。

成果: 参加者は、折り鶴を折ることによって広島への原爆攻撃を忘れないようにしている人たちのグローバル・ネットワークに参加します。参加者はどうしたら自分たちが変化の原動力、平和の仲裁者になれるのかを深く考えます。

用意するもの: 折り紙または約20センチ四方に切った紙。折り鶴の作り方の説明は183頁の「資料集/折り鶴の折り方」を参照してください。「子どものための世界平和プロジェクト (World Peace Project for Children)」ウェブサイト (www.sadako.org) にもあります。

アクティビティ

> 参加者に禎子の物語を伝えます。

禎子の物語

折り鶴は1943年に生まれた佐々木禎子という日本の少女の物語を通じて平和の国際的象徴になりました。

1945年8月6日に日本の広島に原爆が投下された時、禎子は2歳でした。成長した禎子は勇気があり、体が丈夫で運動が大好きな女の子でした。しかし、1955年、11歳になった禎子が大会に向けて練習していた時、めまいを感じて倒れてしまいました。禎子は「原爆」病と呼ばれることが多いがんの白血病と診断されたのです。

禎子の親友が折り鶴を千羽折れば誰でも願いがかなうという日本の古い言い伝えを教えてくださいました。禎子は神様が自分の願いをかなえてくれ、もう一度走れるようになると希望を抱きました。彼女は折り鶴を折り始め、1955年10月25日に12歳で亡くなる前に千羽鶴を完成しました。

禎子の勇気と強さに心を動かされた友人やクラスメートが彼女の手紙を集めた本を出版しました。彼らは禎子や原爆で死亡したすべての子どもたちための記念碑を建てることを思い立ちました。日本中の若者がこのプロジェクトの資金集めに協力しました。

1958年に金の折り鶴を手にした禎子をモデルにした「原爆の子の像」の除幕式が広島の平和記念公園で行われました。子どもたちは願い事もしました。その願い事は像の真下にある石碑に「これはぼくらの叫びです これは私たちの折りです 世界に平和をきずくための」と刻まれています。

今日、世界中の人々が折り鶴を折り、広島の「原爆の子の像」に送っています。

- ・人々や国の間の暴力と紛争が、罪のない人々にいかに大きな影響を及ぼしているのかについて話し合います。平和と相互理解を促進することの重要性について結論を引き出します。尊敬と尊厳の中で、共に生きる方法を学ぶことの重要性に対する意識を生むことに、禎子の物語がどのように寄与しているかについて話し合います。
- ・参加者に紙を渡し、折り鶴の折り方を教えます。折り鶴を折る前にその紙に各自の平和への祈りを書き入れる時間を取ります。参加者に禎子の物語と広島の核被害の影響について考えるように促します。
- ・世界の平和、戦争の犠牲者、人々と国家の間の理解の欠如に関して黙祷を捧げ、この活動を締めくくります。

この活動はいつでも実施できますが、毎年行われている広島と長崎の原爆犠牲者の追悼式に合わせて、8月6日ごろに実施するのが特にふさわしいでしょう。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

Tシャツペインティング

目的：参加者に自らのアイデンティティについて考えさせるアクティビティに関与させます。

成果：参加者は自己のアイデンティティおよび世界に対して自分自身をどのように表現したいかについて考えます。また、参加者は取っておいて着ることができる魅力的で価値のあるTシャツを作ります。

用意するもの：白い無地のTシャツを支給するか、参加者にTシャツを持参してもらいます。布用の塗料原料、適当な塗料、さまざまなサイズのブラシ、可能であればステンシル（型）なども。デザインの下書きをする普通紙とカラーペン。

アクティビティ

実際にペインティング作業を開始する前に、参加者がTシャツに描くものを考え、話し合う時間をとることが重要です。

参加者にTシャツに絵を描く活動について説明します。参加者に、自分自身についてのメッセージや自分が大切にしていることについて、Tシャツに何を描きたいのかを考えるように指示します。参加者に、彼らが着るTシャツは他の人々の目に触れるものであり、それを見た人たちは参加者が着ているものから参加者について実に短絡的な判断をする可能性があることを指摘しておきます。体験共有のアクティビティのいくつかをすでに終了していれば役立ちます。参加者がリラックスして自己のアイデンティティについて意味を込めて語れるからです。

参加者にデザインの下絵を描くための紙とカラーペンを与えます。デザインの大きさは最終的にTシャツに合わない点に注意を指摘します。

デザインに満足したら、それをTシャツ上に再現します。

参加者は自分のTシャツを着て、グループの他の人々と自分が描いたものを共有します。

セッションの終盤で、参加者がTシャツに描いたもの、Tシャツが彼らのアイデンティティについて主張していること、我々が何者であり、他の人々が何者であるのかを評価することの重要性について考える時間を取ります。

また、Tシャツがメッセージを伝えることができるとしたら、例えば紛争地域の他の人々ならTシャツに何を描くのかについて話し合うこともできるでしょう。

Tシャツを着た参加者1人1人の写真を撮り、ワークショップの記念として彼らに渡してもいいでしょう。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

映画制作

目的：参加者が関心のあるトピックについて考え、映画を通してそれに関する意識を高めます。

成果：参加者は彼らが選んだ問題についての意識を高める目的で上映できる映画を制作します。

用意するもの：ビデオカメラ、ビデオテープ、編集用ソフトウェア。

アクティビティ

特定のトピックに関して意識を高める手段としての映画制作の話を紹介します。参加者に短編映画を制作する機会があることを伝えます。参加者が制作した映画を彼らの仲間や、一般の観客あるいは影響力のある地位にいる人たちに上映できる場所を見つけるつもりであることを説明します。

ブレインストーミング、話し合いまたは円卓会議などの方法を通じて、参加者が映画のトピックを選択します。社会問題に関連したトピック、あるいは参加者が地域や世界の多様性についてより多く学ぶことにつながるトピックを選ぶように促します。

参加者による映画制作を助ける専門的な支援を受けることができます。(http://www.filmyourissue.com/making/index.shtmlを試してください) また、技術的知識があり、手助けしてくれる人物を見つけることができれば、大いに役立つでしょう。参加者はできる限り意思決定に関する権限を持ち、協力して作業を進めべきです。このアクティビティの重要な一面がそれです。

映画制作を開始する前に

1. 映画の目的を決定する。
2. 対象とする観客層を決定する。
3. 時間、撮影機会、編集の可能性を含む制約について検討する。
4. 絵コンテを描く。(映画のシーケンス)
5. 参加者が映像でどのようなものを見たいのかについての話し合い。(インタビュー、絵画、アニメ、画像、歌)
6. 参加者の作業の分担をする。インタビュー実施を担当する人、世論調査実施の可能性を含めた調査を担当する人、イラストの作成をする人や画像や音楽を調達する人、撮影を担当する人、編集を担当する人など。

映画完成後

全員が完成版に寄与できるように、参加者と編集プロセスについて話し合います。映画が完成して試写を見た後、参加者に映画づくりの中で発見したことについてよく考えさせるようにします。

[illegible][illegible][illegible]

他の宗教に関するクイズ 質問事項のサンプル

1. ムハンマド (マホメット) とは誰のことでしょう？
2. 仏陀 (釈迦) とは誰のことでしょう？
3. 「キリスト (Christ)」という言葉の意味は何でしょう？
4. イエスとは誰のことでしょう？
5. キツパ (kippa) とは何のことでしょう？
6. リインカーネーションとは何のことでしょう？
7. ジャイナ教徒にとってティールタンカラ (Tirthankara) とは何のことでしょう？
8. 巡礼とは何のことでしょう？
9. イスラム教とヘブライ語では神を何と呼びますか？
10. イエスには何人の弟子がいましたか？
11. 預言者ムハンマドはいつ生まれましたか？
12. ヒンズー教徒にとってブラフマンとは何を意味しますか？
13. ベーダ (Vedas) とは何ですか？
14. イスラム教の聖典の名称は何ですか？
15. ユダヤ教徒が祈りを捧げる場所の名称は何ですか？
16. グル (Guru) とは何ですか？
17. ガウタマ・シッダールタとは誰のことですか？
18. 「仏陀 (ブッダ)」という言葉の意味は何ですか？
19. イエスは何語を話しましたか？
20. サンスクリット語のトリピタカ (Tripitaka) という言葉は何を意味していますか？
21. 仏教徒の旗は何色ですか？
22. 瞑想 (メディテーション) とは何のことですか？
23. ユダヤ教の聖典は何と呼ばれていますか？
24. バハーウッラー (Bahá'u'lláh) とは誰のことですか？
25. ヒンズー教徒がディーワリーを祝う方法と理由はどのようなものですか？
26. ハヌカー (Hanukkah) とは何で、どのように実践されていますか？
27. ラマダンとは何で、どのように実践されていますか？
28. ヒンズー教におけるシバ神とは誰のことですか？
29. シーク教の聖典はどのように呼ばれていますか？
30. イスラム教の5本柱とは何ですか？

消えゆく島々

目的：紛争転換と非暴力の選択肢のトピックを紹介します。

成果：参加者は紛争とその原因について考えます。参加者は双方にプラスな状況を創り出すことの重要性を探究します。

用意するもの：新聞、音楽。

アクティビティ

床に新聞を広げ、新聞と新聞の間に隙間を空けます。新聞のページがたくさんある状態から始めます。各ページは島を表しています。音楽をかけ、参加者には新聞を踏まずに歩き回るように指示します。参加者に音楽が止まったら島に上がるように指示します。周期的に音楽を止めます。

音楽が止まるたびに島を1つ取り除きます。従って、島の手数は徐々に減少し、それぞれの島が混雑してきます。最終的には参加者全員を受け入れるスペースがなくなり、島に上がれなかった者はゲームから退出します。島が1つしかなくなり、参加者の大半がゲームから退出するまでゲームを続けます。

アクティビティの感想

ゲームが終了したら、何が起きたのかを参加者と討議します。以下にいくつかの質問を例示します：

- ・島の手数が減ってきた時に何が起きましたか？
- ・人々はどのような反応を示しましたか？
- ・島に上がることができず、ゲームから退出した時にどのように感じましたか？
- ・自分のスペースをどのように守りましたか？
- ・他の人たちを助けましたか？
- ・このゲームには実生活で起こることと類似性がありますか？

ゲームを実際の状況に関連づけて、参加者と資源や対立の原因について議論します。対立はごくあたりまえであること、ただし、人々が他者と共有、協力、連帯できない場合、対立が暴力的になり得ることを参加者に伝えます。私たちは自分たちのことだけを考えて対立を解決しがちですが、協力して状況を転換させ、誰も負け組にならないようにしたらどうでしょうか？

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

ボールを空高く

目的：参加者の間で協力と、信頼の橋を築くことができるようにチームの技能を向上させます。

成果：参加者は他者より良くコミュニケーションを取る方法を学び、共通の目標に向かって協力するスキルを発達させます。

用意するもの：小さいボールと大きいボール1つずつ。

アクティビティ

参加者に、できるだけ長くボールを落とさずにラリーを続けるボールを使ったゲームをすると伝えます。最低10人、最大40人のグループを作り、グループ全員でボールをつないで、下に落とさないようにします。できるだけボールを落とさないようにし、続ける回数を多くすることが目標です。

小さいボールでゲームを開始します。初めのうちは参加者の大半がチームの他のメンバーとのコミュニケーションを意識しない、あるいは協力して目標を達成する方法を学ぶ必要性を意識せずにボールを打っていることに気づきます。ボールが地面に落下したら、参加者にラリーを続ける回数を伸ばし、毎回より高い目標を目指すように促します。

参加者がラリーを続ける方法を発見したら、小さいボールを大きいボールと交換します。ボールが大きくなったため、地面に落下させずにつなぐことがより難しくなるかもしれません。メンバー全員が参加し、より高いスコアを獲得する方法に気を配るよう促します。

参加者が高い数字を達成し結果に満足したら、彼らがゲームから何を学んだかを共に考えます。次のような質問をしても良いでしょう。

1. このゲームをしてどう感じましたか？
2. ゲームの目的は何でしたか？
3. 好結果をもたらした要因は何でしたか？
4. 最初に高い連続回数を出せなかったのはなぜですか？
5. チームの各メンバーの貢献度はどうでしたか？
6. 目標を達成する上でメンバーの1人1人が重要だったのはなぜですか？
7. チームが採用した技法はどのようなものですか？
8. 目標達成に協力は重要でしたか？

各参加者に自らの体験を共有するように促すとともに、他者より良い協力ができるようになるにはコミュニケーション・スキルの育成が重要であることを強調します。参加者に他者との協力の仕方、多様な社会においてなぜ協力が大切であるのかについて質問し、このセッションを締めくくります。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

サービス・ラーニング

目的：参加者に自分たちと異なる他者や権利が損なわれている他者を手助けするという、不思議な力を体験する機会を作ります。

成果：参加者は他者のニーズに対する意識を発達させるとともに、尊敬の欠如がどのように人間の尊厳の侵害につながるのかについて考えます。

アクティビティ

若者に権利が損なわれている、あるいは侵害されている人々にかかわるボランティア活動を開始するよう促します。このボランティア活動は以下のものを含めることができます。：

難民

避難民

特別なニーズを抱える人々

社会から取り残された人々

貧困下に暮らす移民

極度の貧困状況に暮らす人々

これらのアクティビティは社会奉仕と精神性を促進する方法として、授業の一環、あるいは学校が制度化できるものです。

サービス・ラーニングのアクティビティの準備と開発のための手引き

- ・あなたの町で人間としての尊厳が侵害されている状況に関する情報を集める。
- ・あなたの町で取り残された人々、あるいは人権侵害に対応している団体のリストを作成する。
- ・あなたの担当している若者がボランティア活動を実施できると考えられる団体の1つ2つと連絡をとる。
- ・あなたの担当している若者と一緒にボランティア・プログラムを準備するために当該団体の同意を得る。
- ・当該団体の責任者または担当者に依頼して団体の活動やその活動が影響を及ぼす人々について話をしてもらう。
- ・どのような支援が必要とされているか、参加者がどのような活動を提供できるのかを決める：エンターテインメント活動；音楽演奏；演劇；（絵画、裁縫、音楽、数学、読書と作文などの）指導あるいは一般的な支援（買い物、手紙を書くなど）。
- ・参加者と共に、プログラム終了時まで、あるいは一定期間内で達成を目指すべき1つないし2つの目標を特定する。
- ・参加者と共に彼らの体験を調査するために反省会を設定する：
 - ＞ ボランティア活動から学んだもの
 - ＞ 他者のために奉仕あるいは支援する時に感じたこと
 - ＞ 他者と共有した相違点と類似点
 - ＞ 人権侵害を回避できる方法
 - ＞ 少数民族が差別を受けるのはなぜか
 - ＞ 少数民族差別を宗教的差別およびその影響と比較する

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

諸宗教学習キャンペーン

目的：参加者に諸宗教学習促進のためのクリエイティブなキャンペーン活動を準備する場を提供します。

成果：参加者は他者の信仰に対する尊敬を促進する方法として諸宗教活動を展開します。参加者は人々の間の相互理解の醸成を促す行動をとることにコミットします。

アクティビティ

参加者に学校または組織内で異なる宗教および信仰を尊重することの重要性に着目したキャンペーン活動を開始するように促します。

そのような活動にはさまざまな形があり得ますが、以下にそのいくつかを例示します：

コミュニケーション及び学習キャンペーン

掲示板

他者の信仰、祝典、催しに関する事実やニュースを提供する掲示板を用意します。生徒のグループが定期的に情報を収集し、掲示板を更新、維持します。

諸宗教ラジオ

生徒たちの信仰についてインタビューする学校のラジオ番組を推進します。

諸宗教バザー

様々な宗教について学ぶためのバザーを催します。バザーでは、他の宗教に関する情報を提供する売店、関連する映画を上映するフィルム・ルーム、宗教音楽のコーナー、異なる宗教を信仰する人たちによるラウンド・テーブルなどの催し、出店が考えられます。また、バザーは参加者による諸宗教の問題に関連した文書や絵画を展示する機会にもなります。

月例の諸宗教討論・諸宗教カフェ

異なる宗教を信仰する生徒をあなたの学校に招待して彼らの信仰について学ぶ、あるいは関連した関心のあるトピックについて話し合います。

あなたの担当する若者の意欲を持続させる手段としてキャンペーンの提案をします：学習する意欲、他者についてより多くの知識を得る意欲、他者の信仰を体験する意欲です。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

学校間交流

目的：参加者に自分の学校と違う、異なる宗教の人たちが通う学校での学校活動を体験させます。

成果：参加者は相互理解と他者の信仰に対する尊敬を促進し、体験します。

アクティビティ

別々の学校に通う、宗教的背景も異なる同学年の2人の生徒が一定期間通う学校を交換します。

学校間で実施する場合、この活動には関係する教育委員会や教員の同意が必要です。交流活動は異なる宗教団体や青年組織の間でも実施できます。特別な行事あるいは活動があるたびに生徒をあなたの学校に招待することによっても異なる学校や、宗教間の生徒同士の親密さを発展させることができます。

生徒間交流は異なる宗教を持つ人々との相互理解に寄与するばかりでなく、異なるコミュニティ間の持続的つながりを発展させることにも寄与し、このことがより平和な将来に貢献することになります。

異なる青年組織間の交流では、2つかそれ以上の組織の協力を要し、それぞれのグループからの参加者が特定の責任を担うプロジェクトが考えられます。例えば、このようなプロジェクトでは異なる宗教を信仰する人たちの1カ月間の参加を義務づけるようにしても良いでしょう。

特定の任務を伴う特別交流プログラムを作成することも可能です。：諸宗教対話を促進する諸宗教委員会への参加；他の学校の授業、討論あるいは諸宗教活動への参加など。

交流プログラムの一環として、交流を通じて近づいた2つの伝統、宗教または文化の研究のために時間を当てます。この研究に各種プレゼンテーション、論文、絵などを含めてもいいでしょう。

118

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

私のメモ

子どもの権利キャンペーン

目的: 子どもの権利条約についての認識を高めます。

成果: 参加者は自分たちの権利とそれを推進する方法を学びます。参加者はすべての子どものために、宗教や文化とは関係なく、これらの権利を推進する必要性について認識します。

アクティビティ

この活動は、世界195か国中193か国が批准した国際権利章典である子どもの権利条約（CRC）についての意識普及に寄与します。

若者は、彼ら全員が世界的に認められ明確にされた権利を共有していることを学ぶことによって世界中の仲間との連帯を体験できます。

学校や青年グループで定期的に子どもの権利を啓蒙するキャンペーンを展開することは、権利の知識と人種、文化、宗教を問わずすべての子どもを保護する上でのその役割の普及に貢献します。こうしたキャンペーンにはさまざまなやり方があります。ある特定の権利、一連の権利あるいは困難な環境で生活している子どもに焦点を合わせることができます。異なる宗教の他の学校、団体あるいはグループとの協力を奨励します。

月例イベントの具体例:

子どもの参加の月間（子ども権利条約第12条に基づく）

民主主義と相互理解を促進するために、学校、指導者グループ、その他団体が準備した討論、パネル、フォーラムに子どもが参加できます。意思決定者が出席し子どもの主張を聞くことが重要です。

子どもの意見と信仰の月間（第13条、第14条に基づく）

子どもが自らの考え、宗教および文化を表現します。

多様性の月間（第30条に基づく）

子どもが相互に学ぶことを目的に、宗教的少数派、先住民グループおよび移民との相互学習を促進するための活動を準備します。

子どもの権利条約の総体的かつグローバルな性格が強調されるべきです。参加者はまた、子どもの保護、養育、発達および参加の権利の達成は締約国が条約の実施状況等に関する報告書を提出しなければならない子どもの権利委員会によって監視されていることを理解すべきです。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

プロジェクト開発

目的: 自分の身の回りの状況を変えることに参加者を関与させます。

成果: 参加者は世界の平和と正義の促進に貢献するよう奨励されます。

アクティビティ

参加者に社会の変化に寄与するプロジェクトを提案するように指示します。プロジェクトは合意した日までに完了しなければなりません。

参加者は10人を上限とするグループを形成し、(学校、家族、居住地周辺、市あるいは国の中の) 社会の問題あるいは状況を転換するため、数ヶ月以内で達成可能なプロジェクトを作るよう指示を受けます。

一部のプロジェクトは学校の理事、あるいはあなたの組織の指導者の支持を得て、正式なプログラムとして発足する必要があるでしょう。このため、より多くの人たちを当該プロジェクトに関与させることになります。当該プロジェクトのための資金を確保することも必要になるかもしれません。

プロジェクトは具体的な基準を満たす必要があり、参加者がこの基準を決定できます。例えば、プロジェクトは以下の要件を満たす必要があるかもしれません：

- ・ 諸宗教に基づいていること
- ・ 具体的かつ明確であること
- ・ 倫理的実践を支持すること
- ・ 特定の状況の転換に寄与すること
- ・ 革新的であること
- ・ 解決重視であること

プロジェクト開発プログラムを上級生向けに制度化し、妥当な取り決めを前提に、特定科目の単位に数えることも可能だと思われます。

特別イベントを準備し、父兄および特別ゲストを招き、参加者にプロジェクトの発表を行わせます。

映画は生徒を動機付け、彼らの想像力を駆り立てるための有益な手段になる可能性があります。推薦映画には以下を含めます：「ペイ・フォワード」(Pay it forward)、「シンドラーのリスト」(Schindler's List)

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

諸宗教対話

目的：異なる宗教を信仰する人々を、世界を変えることに貢献する方法を話し合う対話に引き合わせることで、相互理解を促進します。

成果：参加者は異なる宗教を信仰する人々間の理解の増進に貢献します。参加者は和解の姿勢を通じて世界に変化をもたらす可能性を探究します。

用意するもの：宣伝用資料、紙、ペン。

アクティビティ

諸宗教対話は異なる宗教を信仰する人々間の相互理解と協力の方法を構築することを目的としています。諸宗教の話し合いは特定のトピックをめぐって行われますが、トピックには例えば以下のようなものがあります：尊敬の欠如、偏狭、宗教間の関係、和解と許し、各宗教が平和をどのように理解し、そのためにどのように取り組んでいるか、子どもの権利の保護など。

あなたの諸宗教の取り組みに参加する人々は多くの諸宗教対話の開催を手伝うことができるでしょう。

諸宗教対話の開催：

- ・ 関心のあるトピックを選択します。
- ・ さまざまな環境設定において諸宗教対話を宣伝します。イベントをどの程度正式あるいは非公式なものにしたいかによって、学校、宗教にゆかりのある場所、青年グループなどの設定が考えられます。
- ・ 必ず異なる宗教の代表の出席を募ります。
- ・ 議論を前向きな成果に導くために、幅広く、オープンな質問を作成します。
- ・ 議論のための進行役を任命し、進行役に一定の情報を提供させ、鍵を握る質問を取り上げてトピックを紹介してもらいます。進行役が話者を紹介してもいいでしょう。
- ・ 出席者には輪になって座ってもらい、全員が対等でお互いの顔が見え、声が聞こえるようにします。
- ・ 「私たちはこれから一緒に何ができるのでしょうか？」という問い掛けで諸宗教対話を締めくくります。

平和と相互理解のための祈りとともに会合を締めくくります。参加者が望めば、祈りを紙に書かせ、声に出して読ませるのもいいでしょう。

参加者にこのアクティビティを学習日誌に記入するように指示します。

セクション5

資料集

物語

わが民よ、わが教えを聞き、
わが口の言葉に耳を傾けよ。
わたしは口を開いて、たとえを語り、
いにしえからの、などを語ろう。
これはわれらがさきに聞いて知ったこと、
またわれらの先祖たちがわれらに語り伝えたことである。
われらはこれを子孫に隠さず、主の光栄あるみわざと、その力と、
主のなされたくすしきみわざとを
きたるべき代に告げるであろう。

これは、ヘブライ語の聖書（詩篇78章1〜4節）からの引用です。これらの言葉は、人間という存在の一面に光を当てています。すなわち、私たち1人1人の心の奥深くに入っていこうとするなら、物語以上に私たちの内面に入っていくやすいものはないということです。「神」、「究極の存在」、「実在」、「叡智」、「超絶者」、「不可知なる者」、あるいは「すべてを超越する存在」といったものについて、私たちはすべて物語を通して語り伝えてきました。物語には古くから伝わることわざや、聞き伝えられてきたこと、祖先たちが語ってくれたことが繰り返し登場します。物語は世代から世代へと受け継がれてきました。人々の記憶だけが伝承の車輪であり、物語の出典となってきたのです。そのように伝承されるからこそ、新しい世代への洞察を提示しつづけることができるのです。物語は、反論できないような事実を主張することはありません。その必要はないのです。なぜなら物語は、教訓や理論とは異なる種類の真実を伝えるものとして受け入れられているからです。実際、フィクションの中に偉大な真実が存在し、事実を伝えているはずがまったくの嘘になってしまうこともあるのです。ハンナ・アーレント¹は、物語は意味を定義するという間違いを犯すことなく、意味を明らかにすると述べています。これこそが物語の力です。物語は、物事の意味を単に暗示するだけであり、私たちを拘束するものとして押しつけることはありません。私たちは、意味を概念として理解するのではなく、実感として「分かる」のです。意味は、そこに確かに存在するのに、目で見ることにはできないのです。

物語は天と地を結びつけ、具体的な現実と、表現したり理解したりすることが難しい事柄を結びつけます。物語は過去への扉を開き、現在に時を超えた永遠性を与えます。そして、物語は未来にしっかりとつながっているのです。ナイジェリアの詩人であり小説家でもあるベン・オクリはこう言っています。「物語は、恐れを征服する。物語は心を大きくしてくれる」

私たちはみな、物語を聞くのが大好きです。眠りにつく前の子ども、あるいは炉端で語り部のまわりに集い、言葉を味わい、うなずき、ほほえみ、声を立てて笑い、嬉しくてお互いをつつき合う人々。語られる物語とともに聞く所に、交流が生まれ、共同体が生まれます。多くの文化圏で、テクノロジーや双方向メディアや電子ゲームなどを通してもっと複雑なストーリーや派手な出来事、あるいは残酷な描写の「物語」が生まれているのも事実ですが、物語に惹かれるのは、人間である証しだと言ってもいいでしょう。ユダヤの伝統では「物語を聞いている限り、人間は孤独ではない」と言われています。「なぜ神様は人間を創ったの?」という質問をされたら、「なぜなら、神様はよい物語を聞くのが好きだからだよ」という答えが返ってくるのです。

1 Hannah Arendt (ハンナ・アーレント:ドイツ出身の政治学者・哲学者) 『Origins of Storytelling』
(Bartlett's Book of Quotations, 1907年)

物語は、子どもを別の世界にいきません。それは、良く知っている世界であると同時に未知の世界でもあります。物語は、魔法の言葉で始まります。それは「むかしむかしあるところに」という言葉です。アラビア人は物語を始めるとき、「それは起きて、それは起きませんでした」と言います。その言葉を聞けば、誰もが物語の時間だと分かるのです。イランの人々は「あるところに誰かがいて、誰もいませんでした」という言葉で物語を始めます。そうすると人々は腰を降ろして耳を傾け、1つの宇宙へと入り込んでいくのです。それは、ありとあらゆることが可能な宇宙です。物語は、単なるおとぎ話ではなく、人間であることの意味をあらゆるレベルで表現したものです。物語から教義や論理的命題を導き出そうと考える人は誰もいません。物語は「誰かがいて、誰もいない」次元、「それは起きたけれど、それは起きなかった」という次元に存在するものなのです。

物語は、現実の世界で語られますが、物語そのものは現実ではありません。それは別の世界、黄昏時とつながっている世界です。黄昏時は2つの種類の光が出合う時間です。昼間の光と夜の光が混ざり始め、どこまでが昼間の光でどこからが夜の光なのか区別がつかません。それは、ちょうどどこかへの入り口に立っているのと同じことです。そこは外側でも内側でもない場所なのです。2つの相反する真実が、お互いに排除することなく、私たち自身の内面の奥深くへ分け入っていくための創造的な緊張関係を保ちながら両立し得るものであることを私たちが理解するのは、そういう場所であればこそなのです。



中国の民話

むかしむかしあるところに、ピンという名の男の子がいました。ピンは花が大好きで、ピンがまいた種は皆、見事な花を咲かせるのでした。この国を治めていた年老いた皇帝も花が大好きでした。皇帝の跡継ぎを決めることになったとき、皇帝は花を使って跡継ぎを決めることにしました。国中の子どもたちを宮殿に招き、特別な種を一粒ずつ渡しました。1年後、いちばん美しい花を咲かせた子どもを次の皇帝にするというのです。おおぜいの子どもたちにまじって、ピンもやってきました。皇帝から種を渡されると、ピンは喜びで胸がいっぱいになりました。

ピンは、美しい植木鉢に最高の土を入れ、注意深く種をまきました。きちんと水やりもしました。ところがしばらくしても何も生えてきません。植木鉢を変えてみましたが、それでも生えてきません。土を変えてみましたが、やはり何も生えてきませんでした。そうして1年が過ぎました。

ほかの子どもたちは、いちばん上等なよそいきの服を身につけ、美しく咲き誇る花を抱えて宮殿にやってきました。ピンは恥ずかしくなりました。みんなに笑われてしまうと思いました。でも、ピンのお父さんは「できる限りのことをしたのだから、何も生えていない植木鉢を持っていきなさい」と言いました。

ピンが宮殿に着くと、皇帝は子どもたちが持ってきた花を検査しているところでした。信じられないほど見事な花ばかりなのに、皇帝はしかめ面をしています。ピンの番が来ました。皇帝は尋ねました。

「なぜ何も植わっていない鉢を持ってきたのだ？」

ピンは恥ずかしさでいっぱいになり、

「できる限りのことはやったのですが……」

と言いながら、涙をこぼしました。

すると皇帝はにっこり微笑み、子どもたちに向かってこう言いました。

「わしは種を全部ゆでておいた。だから、お前たちに渡した種が育つはずはないのだ。次の皇帝にふさわしいのはこの子どもだけだ。この子は正直で勇気がある。今日ここに来て、種が育たなかったことを私に話したのだから。この子は、この国の皇帝にふさわしい資質を持っている」

Benjamin Unseth編『Little Books of Virtue』シリーズ1「Honesty」(Garborg's Inc., Bloomington, 1995年, pp11-13.)

少年と狼

村から少し離れた場所で羊の番をしている少年がいました。あるとき、少年は村人たちにいたずらをしてやろうと思いつきました。そして、村に向かって走っていき、声の限りに叫びました。

「狼だ！ 狼が出た！ 助けてくれ！ 狼が羊を襲ってきたんだ！」

親切な村人たちは、自分たちの仕事を放って少年を助けに牧場に向かって走って行きました。しかし、牧場へ行ってみると、狼は1匹もおらず、少年は慌ててやってきた村人たちを見て笑っていました。

しばらくたったある日、少年はまた同じいたずらをしかけました。村人たちは今度も大急ぎで助けに来ましたが、また少年に笑われてしまいました。

ある日、1匹の狼が本当に羊の群れを襲ってきました。少年は恐ろしくなって、助けを呼びに村に向かって走りました。「狼だ！ 狼が出た！」彼は叫びました。「羊の群れの中に狼がいるんだ！ 助けてくれ！」

村人たちは少年の叫び声を聞きましたが、またいたずらをしているのだらうと思い、気に留める者も助けに行く者いませんでした。そして、少年の飼っていた羊は1匹残らず殺されてしまいました。

これは、うそをつくとういう罰を受けるというお話です。ふだん、うそばかりついていると、本当のことを話しても信じてもらえなくなるのです。

Benjamin Unseth編『Little Books of Virtue』シリーズ1「Honesty」(Garborg's Inc., ブルーミントン, 1995年, pp34-36.)

これからの勇気

私は子どもの頃、家族や近所の人にとってもかわいがられていました。私が生まれたオンタリオ州のラマという町で、いろいろな遊びをして過ごしました。3年生になったとき、オリリアという近郊の町までスクールバスに乗って通学することになりました。

ある日のこと、学校で男の子が私を小突いたので、私は持っていた本を思わず落としてしまいました。

「本を拾ってちょうだい」と私は頼みました。

「やだね」

そう言って男の子は私につばを吐きました。

「本を拾ってよ!」

今度はさっきより大きな声で言いました。

「拾わないよ、インディアン! やーい、インディアン女!」

男の子は叫びました。

私はものすごく腹が立ちました。

「本を拾いなさいよ! あんたのせいで本を落としたんだから!」と私は怒って言いました。

「拾わせられるもんなら拾わせてみろよ、インディアン! インディアン女のくせに!」と男の子はあざけるように言いました。

先生が騒ぎを聞きつけてやってきました。私たちは2人とも先生に叱られました。それでも男の子は私に謝ろうとしませんでした。私の怒りも収まりません。男の子は私に間違っただけをしたのです。

私の心の中で、孤独、怒り、自尊心、そして意固地な気持ちが全部一緒にうずまいていました。家に帰って母にその日の出来事を話すと、母は「堂々としていなさい。自分自身を信じなさい。神様はいつでも私たちとともにいます。何事も何者も恐れることはありません」と話してくれました。

私は心の奥底で「私はインディアン女ではない。私は先住民族だ」ということを知っていました。男の子は確かに間違っていました。でも私はこれからいつでも自分自身のために、そして正しいことのために、勇気を持って立ち上がることができるという自信を身につけることができました。

Peggy Monagueによる物語を改作。オンタリオ州クリスチャン島

Lois Miriam Wilson著『Miriam, Mary and Me』(Wood Lake Books Inc. ウィンフィールド 1992年, p.62)

誰もいない誰か

宮廷で開かれた晩餐会での出来事です。人々は身分の高い順に座り、王様がやって来るのを待っていました。そこへ、みすばらしい身なりの男がやって来て、一番の上席に座りました。

彼の大胆な行動に大臣は怒り、その男に「おまえはいったい誰だ?」と尋ねました。

- － 大臣のひとりか? ー いや、それ以上だ。
- － 国王か? ー いや、彼よりも上だ。
- － それなら預言者か? ー いや、もっと上だ。
- － 「それなら神か?」大臣は男に尋ねました。
- － 「いや、それよりもさらに上だ」とみすばらしい男は答えました。
- － 「神を超えるものなど誰もいない」と大臣は言い返しました。
- － すると男から返ってきた答えはこうでした。
- － 「私はその“誰もいない誰か”だ」

Kenneth Cragg著『The Wisdom of the Sufis』(ロンドン 1976年 p.8)

鉄を食べたねずみ

むかしむかしあるところに、ナダックという名の裕福な商人がいました。けれども景気が悪くなり、商売もうまくいかなくなってしまいました。ナダックは都会を離れて新しい場所で運試しをしようと決心しました。彼は家財道具をすべて売り払い、借金もきれいに返済しました。彼の手元に残ったのは重たい鉄の棒だけでした。ナダックは友人のラクシュマンのところへ別れの挨拶をしに行きました。そして、最後に残った鉄の棒を彼が戻るまで預かっておいてほしいと頼みました。ラクシュマンはナダックのためにその棒を預かることを約束しました。

ナダックは何年も何年も旅を続けながら財産を築いていきました。運がよかったナダックは元のような大金持ちになりました。そして、故郷の町に戻ると新しく家を建て、再び商売を始めました。彼が友人のラクシュマンを訪ねると、温かく迎えてくれました。しばらくして、ナダックは彼の預けた鉄の棒を返してほしいと頼みました。しかし、ラクシュマンはあの棒を売ればかなりいい値段で売れるということを知っていたので、返したくありませんでした。そこでナダックに言いました。

「あの棒を倉庫に保管しておいたら、ねずみが食べてしまったんだよ」

それを聞いたナダックは気にする風もなく、ラクシュマンに言いました。

「旅のお土産を渡したいから、君の息子をうちに寄こしてくれないか？」

ラクシュマンは息子のラムをナダックの家に行かせました。

ナダックは、家にやってきたラムを地下室に閉じ込めてしまいました。夜になっても息子が戻ってこないで、心配になったラクシュマンが訪ねてきました。ナダックは答えました。

「家に向かっている途中で、鷹が飛んできて息子さんをさらっていったんだ」。「嘘だ！」

ラクシュマンはナダックに向かって叫びました。「15歳の少年を鷹がくわえていけるわけがない！」

こうして始まった大喧嘩は、とうとう裁判所に持ち込まれることになりました。裁判官はラクシュマン側の話を聞くと、ナダックに息子を父親の元に返すように命令しました。しかし、ナダックはあくまでも鷹が少年を連れ去ったと主張します。裁判官は「鷹はどうしてそんなことができるのだ？」と尋ねました。すると、ナダックはこう答えました。

「ねずみが巨大な鉄の棒を食べることができるなら、鷹が少年をくわえて飛び去ることだってできるはずだ」

ナダックはこれまでの経緯をすべて話しました。裁判所にいた人々はそれを聞いて、みな大笑いしました。裁判官はラクシュマンに鉄の棒をナダックに返すように命じ、ナダックにラクシュマンの息子を返すように命じました。

『パンチャタントラ物語』（古代インド説話集）より「鉄を食べたねずみ」（1999年）

以下のサイトに掲載。

<http://www.indiaparenting.com/stories/panchatantra/panch009.shtml>

天国と地獄

古代ユダヤの民話には、地獄へ行った男の話があります。男が地獄に行ってみると、地獄の人々は長いテーブルに並んで座っていました。テーブルには上等なテーブルクロスがかかり、ピカピカの銀食器に食べ物がつまみ盛り盛られています。しかし、誰も食べ物を食べている人はいません。そして、みんなむせび泣いています。よく観察してみると、人々はひじを曲げることができないため、食べ物にさわることはできても、それを口に運ぶことができないのです。

次に男は天国に行きました。そこには地獄で見たのと同じ光景がありました。長いテーブルに座った人々、上等なテーブルクロス、ピカピカの銀食器、そしてつまみ盛り盛られた食べ物。天国の人々もひじを曲げることができませんでした。しかし、泣いている人は1人もいません。それは、隣の人同士でお互いに食べ物を食べさせていたからです。

こじきへの施し

私が道路を渡っていると、みすばらしいこじきのおじいさんが私を呼び止めました。涙で潤んだ腫れぼったい目、青ざめた唇、ボロボロの衣服、汚れた傷口。

「不幸な男をここまで痛めつけるとは、貧しさとはなんと残酷なのだろう」と私は心の中で思いました。

彼は赤く膨れ上がった汚い手を私に向かって伸ばしてきました。

そして、うなるような大きな声で「どうかお恵みを」と言いました。

私はすべてのポケットを探ってみました。財布も時計も、ハンカチ1枚すら出てきません。何も持たずに家を出てきたのです。

男はまだ待っています。伸ばした手を細かく振わせながら左右に揺らしています。

途方に暮れた私はその汚れた震える手をそっと握り、握手をしました。

「悪く思わないでくれ、きょうだい。今日は何も持っていないんだ」

おじいさんは腫れた目で私をじっと見ると、青ざめた唇をゆるめてにっこりと微笑みました。そして、私の冷たい指先をぎゅっと握り返してきたのです。

「いいんだ、きょうだい」

彼はぼそぼそとした声で続けました。

「それから、これ、ありがとう。これも十分な施しだよ、きょうだい」

そのとき私は理解したのです。私自身が同胞から施しを与えてもらったことを。

Elbert Hubbard 著『*Elbert Hubbard's Scrap Book*』（*Wm. H. Wise & Co., Roycroft Distributors*, ニューヨークシティ、1923年, p.9）

心の中の2匹の狼

ある晩のことです。チェロキー族のおじいさんが孫息子に、心の中で起きる戦いについて話して聞かせていました。

「坊や、これは2匹の狼の戦いなんだ。1匹は悪い狼だ。怒り、嫉妬、悲しみ、後悔、強欲、傲慢、自己憐憫、過ち、憎しみ、嘘、根拠のない自負心、優越感、うぬぼれなどでいっぱい狼だ。もう1匹は良い狼だ。喜び、平和、静穏さ、謙虚さ、親切、博愛、思いやり、寛大さ、真実、共感、信仰などで満たされた狼なのさ。」

孫息子はちょっと考えてからおじいさんに尋ねました。「どっちの狼が勝つの？」

おじいさんはひと言、こう答えました。「わしが餌を与えたほうだよ」

馬はいつまでも馬

1人の青年がイスラエルのラビ、ルジンのところへ来て自慢そうに言いました。

「私は水しか飲みません。雪の中を転げまわります。靴には釘が刺さっていて、鞭で何度も打たれます」

するとイスラエルのラビは青年を窓辺に連れていき、庭にいる1頭の馬を指差して言いました。

「あの馬だって、蹄鉄に釘が刺さっているし、雪の中で転げまわるし、水しか飲まないし、鞭で何度も叩かれる。だが、それでも馬はいつまでも馬のままだ」

塩の人形

乾いた土地を長いこと旅してきた塩の人形が海までやってきました。そこで人形は今まで見たこともないもの、まったく理解できないものを見つけました。

硬い地面に立っていた小さな塩の塊の人形が見たものは、動いていて不安定で騒々しくて不思議でわけの分からない、もう1つの地面でした。

人形は海に尋ねました。

「あなたは何者？」

海は答えました。

「私は海です」

人形はまた尋ねました。

「海ってなあに？」

また海が答えました。

「それは私です」

人形は言いました。

「分からないわ。でも知りたいの。どうしたら理解できる？」

海は答えました。

「私にさわってごらんさい」

そこで人形はそっと片足を出して、海の水にさわってみました。すると不思議な感触がして、それが何かわかりそうな気がしました。人形が足を引っ込めると、つま先がなくなっているのに気づきました。心配になって海に尋ねました。

「まあ、私のつま先はどこへ行ってしまったの？ いったい私に何をしたの？」

海は言いました。

「あなたは何かを理解するために何かを与えたのです」

人形は海の中へさらに入っていきました。人形の身体の塩の一粒一粒を海がさらっていきました。そのたびに人形はさらに海のことを理解できたような気がしましたが、それを言葉にすることはできませんでした。

どんどん深いところに進んでいくにつれて、彼女の身体はどんどん溶けていきました。その間、彼女は繰り返しつぶやいていました。

「だけど、海ってなんなの？」

とうとう彼女は一粒残らず波に溶けてしまいました。そこで彼女は言いました。

「海は私なんだわ！」

人形は海が何なのかを知ることができましたが、水が何なのかはまだ理解できていません。

Anthony Bloom著『Living Prayer』（Libra ロンドン 1966年 pp.105-106）

森で迷った男

1人の男が深くて暗い森で道に迷ってしまいました。昼間の光が少しずつ広がっていく夕暮れの影に溶けていき、夜の闇が深まるにつれて、男の不安はどんどん大きくなっていきました。3日3晩、出口の見えない不安を抱えて歩き回った男は絶望感でいっぱいになりました。

森の中をさまよって4日目の夕暮れのことです。怪物のようなものが遠くから男のほうに向かって近づいてくるのが見えました。彼は怪物に投げつけるための石をポケットにいっぱい詰め込み、身を守るこん棒にするために木の枝を拾いました。心臓が激しく鼓動しています。恐ろしさのあまり、額には冷や汗がにじんでいます。怪物はどんどん近づいてきて、その姿がますます大きく見えてきました。それは人間と同じぐらいの大きさでした。男はやぶの影に身をひそめ、鋭く尖った石をいくつか握りしめ、攻撃の準備をしました。怪物はさらに近づいてきて、男は恐怖で凍りついたようになりました。

と、そのときです。怪物だと思ったのは1人の人間であることに気づきました。男は、握り締めていた石は投げ捨てましたが、用心のためにこん棒は持ったままです。その人間が男のすぐそばまで来たときです。男はこん棒も投げ捨て、近づいてきた男の肩に腕を回しました。それは、彼の弟だったのです！

男は、愛と感謝を込めて弟を抱きしめ続けました。

「ああ、ありがたい。探しに来てくれたんだね。さあ、森から出る道を教えてくれ」

弟は涙を浮かべて男を見つめ返すと、こう答えました。

「兄さん、ぼくも迷ってしまったんだ。だけど、通ってはいけない道ならわかるよ。2人一緒なら、きっと森から出る道を見つけられるさ。」

将軍との食事

ある日のこと、将軍が仏教の僧侶、一休を城での夕食に招待しました。一休は豪華な袈裟を着慣れていなかったため、普段着ている古い略式の袈裟を着て城へ出かけました。

城に着くと、2人の門番が一休の前に立ちはだかり、大声で言いました。

「このこじきめ、どこから来た？ 名を名乗れ！ 城のまわりを許可なくうろついてはいかん！」

「私の名前は一休法師です。将軍から夕食にご招待いただいたのですが……」

2人の門番は一休をじろじろ眺めて言いました。

「嘘をつくな！ どうしておまえのようなみすばらしい禅僧を将軍様が夕食に招待などするのだ？ 将軍様は大事な儀式のために、偉大なる一休大師様をご招待されたのだ！ おまえなど招待していない！ とっとと消えろ！」

一休は自分が確かに将軍に招待された客であることを門番たちに納得させられなかったもので、いったん寺に戻り、厳粛な儀式のための正式な袈裟に着替えて出直しました。一休がふたたび城の前に立つと、門番たちにも身分の高い僧侶だとひと目で分かったので、今度はうやうやしく城の中へ迎え入れられました。

夕食の席で、一休は料理がたくさん並んだ御膳の前に座っていましたが、料理を箸でつまんで、口に運ぶかわりに袈裟の袖の中に入れていました。

将軍は不思議に思い、一休に小さな声で言いました。

「これ、はしたないぞ。少し寺に持ち帰りたいのか？ それなら、持ち帰り用の料理を作らせよう。」

すると、一休はこう答えました。

「いいえ。最初にお城までやってきたとき、門番は城に入ることを許してくれませんでした。ところが儀式用の袈裟を着てくると簡単に中に通してくれました。つまり、将軍は私を招待したのではなく、私の袈裟を招待したのでしょうか。ですから、私ではなく、袈裟が料理をいただいているのです」

以下のサイトに掲載。

<http://www.geocities.com/Tokyo/Courtyard/1652/MilitaryDinner.html>

グール

むかしむかしあるところに、果樹園やオリーブ畑に囲まれた静かな村がありました。その村にハッサンという若者が住んでいました。その村のすぐそばには大きな山がありました。

村の人々は毎朝、男も女も急いで畑に出かけます。若い女たちはのんびりと泉まで歩いていき、その日に使う水を水差しにくんできます。子どもたちは庭で遊びます。村の暮らしは、一見のどこかで幸せそうでした。しかし、1つだけ村人たちの幸福な暮らしに影を落としているものがあったのです。それは、巨大でみにくくて恐ろしい化け物、グールでした。村人たちはグールが山の頂上に住んでいると信じていました。誰もがグールを恐れていました。畑に行くときもあたりを見回しながら足早に畑に向かいます。時にはつま先立ちでそっと歩いていくこともあります。子どもたちがうるさくしていると、「そんなに大きな声を出すんじゃないよ。大きな声を出すとグールが怒って襲ってくるよ」と言って静かにさせます。行儀が悪かったり、ベッドに入るのを嫌がったりする子は、「言うことを聞かない悪い子は、グールに食われちゃうぞ」と言って叱りつけます。すると、子どもたちは怖くなって、すぐにお行儀よくなるのでした。

オリーブを収穫する季節になったある日のことです。ハッサンがウム・ハミードおばさんに尋ねました。

「ねえおばさん、教えて。なぜ村の人々はそんなにグールを恐れているの？」

おばさんはため息をつきながら言いました。

「ハッサン、またかい！ 何度その質問を繰り返したら気が済むの？ グールは毛むくじゃらで、額の真ん中に目が1つしかない巨大な化け物さ。長くてするどい爪と、とがった牙を持っているんだ。ハッサン、おまえなんかとくに気をつけなくてはいけないよ。グールはおまえみたいな若者が大好物なんだからね。さ、同じことを何度も聞かないで、さっさと仕事にお戻り。」

ハッサンはおばさんの答えに満足できず、グールのことをもっと知りたいと思いました。そこで家に帰って父親に尋ねました。

「お父さんはグールを見たことがあるの？」

ハッサンの父親は少し考えてから咳払いをして答えました。

「いいや、ハッサン、見たことはないさ。でも、とても恐ろしくて危険だということは知っているぞ」

次にハッサンは母親に向かって尋ねました。

「じゃあ、お母さんは？ グールの声って聞いたことある？」

ハッサンの母親は一瞬たじろいで言いました。

「いいえ、聞いたことはないわ。でも、ライオンのうなり声ぐらい大きな声だということは知っているわ。お願い、ハッサン。グールのことなんか構わないでちょうだい。」

ハッサンは思いました。「村の人たちはグールを恐れているけど、どうやら誰もグールを見たことがないし、声を聞いたこともないようだ。もしかしたらグールなんていないのかもしれない。あるいは、いたとしても、村の人たちが言うほど恐ろしいやつじゃないのかもしれない。よし、確かめてやろう。村の中で足音を忍ばせて歩くのも、しょっちゅう静かにするように注意されるのもうんざりだ。明日の朝早く、山に登ってみよう。誰が止めたって絶対に行ってやるぞ」

次の日、村人たちはハッサンが山に登ろうとしていることを聞きつけました。ある者は「なんと勇敢で頼もしい若者だろう。もしかしたら、グールからわしらを救ってくれるかもしれんぞ」とハッサンを賞賛しました。一方で「なんと愚かで頑固な若者だろう。覚えておけ。きっとグールに食われちゃうぞ。それどころか、グールを怒らせて村にいるわしらまでとばっちりを食らうぞ」と言う者もありました。

次の朝早く、ハッサンは山に向けて出発しました。村人たちは閉めたドアのすき間からその後ろ姿を見送りました。ハッサンは少し怖かったのですが、それを気づかれなくなかったので、思い切り声を上げて歌を歌い始めました。

「おいらは怖くないぞ。でかくて毛むくじゃらのグールなんて。おいらは勇者ハッサン様だ！ 恐れ知らずのハッサン様だ！ 怖くないったら、怖くない！」

ハッサンは歩き続け、とうとう山の頂上にたどり着きました。注意深くあたりを見回しましたが、何も恐ろしいものは見えません。彼はホッとして大きく深呼吸すると、村人たちに聞こえるように、大きな声で叫びました。

「おいらは怖くないぞ。でかくて毛むくじゃらのグールなんて。おいらは勇者ハッサン様だ！ 恐れ知らずのハッサン様だ！ ほら、飛び跳ねてやるぞ！ 大声で叫んでやるぞ！ 怖くないったら、怖くない！」

そのときです。ハッサンの背後で物音がしました。身体が大きくて重たい生き物が近づいてくるような足音です。ハッサンがあわてて振り向くと、グールが彼のほうを向いて立っているのが見えました。

グールは村人たちが言っていた通りの姿をしていました。毛むくじゃらで、長くて鋭いつめを持っていて、目は額の真ん中に1つだけしかありません。ハッサンは恐怖で凍りついたようになりました。一方、グールはハッサンにそろそろと近づいてきて、用心深くハッサンのまわりをグルグル歩いていたかと思うと突然、うなり声をあげ、子犬のようにクンクン言いながら逃げ出したのです。

ハッサンはホッとして大きなため息をつきました。ハッサンは、村人たちがあれほど恐れていたグールが自分のような若者を怖がるなんて信じられませんでした。グールのあとを追って洞窟の中に入っていくと、グールに呼びかけました。

「グール！ グール！ どこにいるんだ？」

グールは震える声で答えました。

「若者よ、近づくな。あっちへ行ってくれ。おまえに危害を加えた覚えはない」

ハッサンは驚いて言いました。

「なんだって！ おまえはグールだろう？ 村人はみんな、おまえを恐れているんだぞ！」

グールは困ったように頭をかきながら答えました。

「おれを恐れている？ それは奇妙だ！ 村人たちはおれを恐れていて、おれは村人たちを恐れている」

ハッサンは大声で笑い出し、しばらく笑いが止まりませんでした。

「おまえはグールだっていうのに、なぜ村人が怖いんだい？」

グールは震えながら言いました。

「村人たちはとても恐ろしい姿をしているじゃないか。おれのように1つ目じゃなくて、目が2つもあるし、おれのように毛がたくさん生えているわけじゃなし、甲高くてけたたましい声を出す。それに何より恐ろしいのは、人間はグールが大好きだっていうじゃないか！」

ハッサンは笑いながら言いました。

「そんなのありえないよ！ 人間はグールなんて食べないよ。おまえたちグールが人間を食べるんだろう？」

グールが言いました。

「人間を食べる？ オエッ！ とんでもない！ おれたちグールは植物や昆虫しか食べないよ」

ハッサンはそれを聞いて言いました。

「それを聞いて、村の人たちも安心して喜ぶだろうよ」

グールは長いことハッサンをじっと見つめていましたが、突然、ゲラゲラと笑い出しました。

「おまえは奇妙で恐ろしい姿をしているが、いいやつみたいだな」

ハッサンとグールは揃って大声で笑うと、一緒に遊び始めました。

その日以来、グールは村人たちといい友達になりました。

そして、村人たちを危険から守り、雑用を手伝い、子どもたちの遊び相手にもなったということです。

Taghreed A. Najjarによる。(Al-Salwa Publishing House 2002年 Stand no.5.0 D 953)

2人の女の物語

1人の女が新しい町に引っ越してきました。町の入り口まで来ると門番が尋ねました。

「おまえがかつて住んでいた町の人々はどんな人々だったか？」

女は答えました。

「彼らは気難しくて、喧嘩っ早くて、噂好きで、だいたい不親切でした」

すると門番が言いました。

「この町の住民もそれに負けず劣らずひどいぞ。このまま旅を続けるほうがいい」

2人目の女がやってきました。門番は最初の女にしたのと同じ質問をしました。

その女はこう答えました。

「私が住んでいた町の人々は、とても親切で優しさにあふれていました。問題が起されば勇敢に対処し、分かち合いの精神を持っていて、見知らぬ人も温かく受け入れてくれました」

門番はこう言いました。「どうぞお入りください。この町の住民も同じくらい懐が深く、親切な人たちですよ」



3人の盲人と象

ある日のこと、3人の盲人が集まっていろいろな話をしていました。突然、1人が思い出したように言いました。

「象っていうのは、不思議な動物らしいな。わしらは盲目だから見られないのが残念だ」

2番目の盲人もため息をついて言いました。

「そうだ、そんな不思議な動物を見る機会がないなんて、まったくもって残念なことだ」

3番目の盲人がイライラしたように話に入ってきました。

「象を見る？ そんなの無理に決まっているだろ！ せめて触ることができればいいんだけどな」

「そうだ、その通りだよ。もしなんとかして象に触ることができれば、象がどういう動物だか、おれたちにも分かるってものだ」

残りの2人が口を揃えて言いました。

そこへ偶然、象の群れを引きつけた商人が通りかかり、盲人たちの会話を聞きつけました。

「おまえさん方、本当に象に触ってみたいかね？ それならついておいで。触らせてあげよう」

商人は3人に地面に座って待つように言うと、まず1人目の盲人に象に触らせました。彼は手を伸ばして、最初に左の前足を触り、次に右の前足を触りました。そのあと、2本の足の付け根からつま先まで撫でると、顔を輝かせて言いました。

「なるほど。象というのはこういう動物なのか」

そしてほかの2人が待っているところに戻って行きました。

2人目の盲人は象の後ろ側に連れて行かれました。彼は、パタパタと動く尻尾を触りました。そして満足そうに叫びました。

「なるほど。象は本当に不思議な動物だ！ 奇妙だ。よし分かった、分かったぞ」

そして元の場所に戻って行きました。

次は3人目の盲人の番です。彼は前後に動いたり、円を描いたり、ねじれたりする鼻を触って、こう思いました。

「そうだったのか！ よく分かったぞ」

3人の盲人たちは商人にお礼を言って帰って行きました。3人とも今、経験したことに密かに興奮していて、話したいことがたくさんありました。

「なあ、どこかに座って、この不思議な動物について話し合わないか？」

2番目の盲人が沈黙を破って言いました。

「それはいい考えだ」

ほかの2人も賛成しました。3人がちゃんと腰をかけるかかけないかのうちに、2番目の盲人が話し始めました。

「この不思議な動物は、まるでわらのうちわみたいだったな。パタパタと動いて風を送ってくれた。だけど、ものすごく大きくて頑丈だった。肝心な部分はどちらかというと、か細い感じだったが……」

「違う、違う！」

1番目の盲人が大きな声で反対しました。

「この不思議な動物は、枝のない2本の木に似ていた」

「2人とも間違っているぞ」

3番目の盲人が言いました。

「この不思議な動物は、ヘビのようだった。長くて、丸くなったりして、強そうだった」

こうして2人の議論は延々と続けました。それぞれ自分が正しいと主張したからです。もちろん結論は出ません。なぜなら3人とも象の全体を見たわけではなかったからです。個々の部分だけを見て全体を知らなければ、そのものを説明することなどできるはずなのです。

Louise Kuo・Yuan-Hsi Kuo著『Chinese Folk Tales』(Celestial Arts 231 Adrian Road, Millbrae, CA 94030 1976年 pp. 83-85.) より

汝自身のように隣人を愛しなさい

ユダヤ教ハシド派の伝統的な物語の1つに、「汝自身のように隣人を愛しなさい」という聖書の言葉（レビ記19章18節「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」）の本当の意味を2人の農民から学んだというラビ（ユダヤ教の聖職者）の話があります。

1人の農民がもう1人の農民に聞きました。

「イワン、わしのことが好きか？」

イワンは答えました。

「ウラジミール、もちろん好きだとも」

ウラジミールは聞きました。

「わしの苦しみのわけを知っているか？」

イワンは言いました。

「おまえさんの苦しみのわけなど、どうしてわしに分かる？」

ウラジミールは言いました。

「イワン、わしの苦しみのわけが分からないのに、どうしてわしのことが好きだなんて言えるんだ？」

対立している相手に対して思いやりを持っていると主張するなら、私たちがしなければならないのは、相手が苦しんでいるわけを理解しようとすることです。それは厳粛なる私たちの義務なのです。

キツネとコウノトリ

あるとき、意地悪なキツネがコウノトリを夕食に招きました。キツネの家は木の空洞の中です。その晩、コウノトリはキツネの家に飛んできて、長いくちばしでドアをノックしました。キツネはドアを開けながら言いました。

「さあ入って。一緒に食事を楽しもうじゃないか」

コウノトリは、部屋の中に入るとテーブルに案内されました。コウノトリはとてもおなかがすいていて、とてもいいにおいがしています。キツネが浅い皿によそったスープ持ってきました。そして、自分だけさっさと飲み干してしまいました。しかし、皿が浅すぎて、長いくちばしのコウノトリはひと口も飲むことができません。かわいそうに、コウノトリはにっこり微笑みながら、おなかをすかせたまま礼儀正しく座っていました。

意地悪なキツネは尋ねました。

「コウノトリさん、なぜスープを飲まないんだい？ おいしくなかったかい？」

コウノトリは答えました。

「ご親切に夕食に招待してくれてどうもありがとう。明日は私の家にご招待するわ。一緒に夕食を食べましょう」

次の日、キツネがコウノトリの家にやってくると、コウノトリもスープを作っていました。今日のスープは、背の高い水差しに入っていました。コウノトリは簡単にスープを飲むことができましたが、キツネの口は水差しの中まで届きません。今度はキツネが食べ損ねる番でした。

隣人のために

偉大な法学者（ムジタヒド）のサイド・ジャワッド・アメリが夕食をとっていると、誰かがドアをノックしました。それは、彼の恩師であるアヤトラ・サイド・メフディ・バルール・ウルームの召使でした。彼は言いました。

「ご主人様があなた様にすぐ来てほしいとおっしゃっています。夕食のテーブルにおつきになったのですが、あなた様がいらっしゃるまで食べないとおっしゃるのです」

ぐずぐずしてはいられません。サイド・ジャワッド・アメリは自分の夕食を放り出して、アヤトラ・バルール・ウルームの邸宅へ急ぎました。部屋に入ると、恩師はとがめるような目で彼を見ながらこう言いました。

「サイド・ジャワッド！アラーを恐れぬ不屈き者！アラーの御前で恥ずかしいと思わないのか？」

これを聞いてサイド・ジャワッドは大きなショックを受けました。恩師の怒りに触れるようなことをした覚えはまったくなかったからです。

彼は言いました。

「先生、私がどこで間違ったことをしたのか、どうか教えてください。」

アヤトラ・バルール・ウルームは答えました。

「おまえの隣人家族が麦も米もない暮らしを1週間も続けている。彼はデーツを掛けて買おうとしたが、店主に掛け売りはしないと断られた。彼は手ぶらで帰ってきて、家族が食べるものはひとかけらもないのだ」

サイド・ジャワッドは不意をつかれてこう言いました。

「アラーに誓って、そんなこととはついぞ知りませんでした」

恩師は続けて言いました。

「だからよけいに怒っておるのだ。なぜ自分の隣人のことに無関心でいられるのだ？ 苦しい日々が7日間も続いたあげく、おまえはそのことをまったく知らなかったと言うのか。もしこのことを知っていたにもかかわらず、知らないふりをしていたというのなら、おまえはイスラム教徒ですらない！」

そしてサイド・ジャワッドに目の前の料理をすべて隣人に持っていくように命じて、こう言いました。

「隣人に恥をかかせないように、彼らと一緒に食事をしなさい。そしてこれを将来の備えとして持っていき、彼に恥をかかせないように枕かじゅうたんの下に置いてきなさい。それが終わったら、きちんと指示どおりにできたかどうか戻ってきなさい。それまで私は夕食を食べずに待っている。隣人がおなかをすかせて眠っているのに、満足して眠ることなど私にはとうていできない」

聖なる預言者ムハンマド（彼に平安あれ）

ヒトデ

むかしむかし、あるところに、1人の賢い男がいて、海辺のコテージに行ってあれこれと執筆をしていました。彼は仕事に取りかかる前に浜辺を散歩するのが習慣でした。ある日、いつものように海岸沿いを歩いていると、砂浜上で踊っているような人影が見えました。彼は、誰かがダンスを踊っているのかもしれないと思ってにっこり微笑むと、その人のところへ足速に歩いていきました。

近づいてみると、それは若い男でした。男はダンスを踊っているわけではありませんでした。彼は浜辺に手を伸ばしては何かを拾い上げ、それをそっと海に投げ込んでいるのです。

彼はさらに近づいて若い男に声をかけました。

「おはよう！ 何をしているんだい？」

若者は手をとめて顔を上げると答えました。

「ヒトデを海に投げているんです」

「聞いてもいいかな？ なぜヒトデを海に投げているんだい？」

「太陽が昇ってきて、潮が引いてしまうからです。海に投げてやらないと、ヒトデが死んでしまう」

「しかし、浜辺は何マイルもあるし、ヒトデはそこらじゅうにいるじゃないか？ そんなことをしたって、何の違いも生み出さないよ」

若者は礼儀正しくその言葉を聞くと、また腰をかがめてヒトデを拾い、寄せる波の向こうに放り投げました。

「ほら、あのヒトデにとっては違いが生まれましたよ」

その答えに男は驚きました。狼狽して言葉を失ってしまいました。男は何も言わず、背中を向けると、コテージに戻って執筆に取りかかりました。

1日ペンを走らせながら、男は今朝見た若者の姿を脳裏から振り払うことができませんでした。無視しようとしてもまぶたに焼きついて離れないのです。その日の午後遅くになって、やっと彼は気づいたのです。科学者であり詩人でもある彼は、若者が見せた行動の本質を理解していなかった、ということに。若者はこの宇宙の中で、ただの傍観者であることをやめ、違いを生み出す選択をしたのだ、ということに。男は自分が恥ずかしくなりました。

その夜、男は悩みながら床につきました。朝が来て彼が目を覚ました。今の彼は、やらなければならないことがあるということを知っていました。彼は起きて身支度を整えると浜辺に行きました。そして昨日の若者を見つけると、午前中ずっと彼と一緒にヒトデを海に投げ続けました。

ローレン・アイズリー（1907～1977年）『星なげびとーコスタベルの浜辺から』より

ケーススタディ（事例研究）

教育者や進行役は、実話や実在の人の話に基づく事例を、人間の尊厳や人権に影響を及ぼす倫理問題や倫理的状況についてのディスカッションの材料として使うことができます。うまく書かれた事例研究は、子どもや若者を、主人公の視点で示された別世界に入り込ませることができます。事例研究は身近な問題を扱ったものでも良く、その場合は参加者が自分の状況について客観的に考えるのに役立ちます。

事例研究を通すと、身近な状況でも全くなじみのない状況であっても、子どもや若者は状況を分析することができます。事例研究は、共感を育む重要なツールになり得ます。情報は登場人物の視点で提供され、単なる「ニュース」ではありません。ですから事例や、そこに示された選択肢について考えることは、主人公の身になって考えるのに役立ちます。

事例研究の利用は、批判的思考と分析力を育み、子どもや若者が疑問を持ち、選択肢を話し合う能力を伸ばします。また、子どもや若者が、他者の生活を通じて自分の態度や行動を省みる助けにもなります。

事例研究には、解決は必ずしも必要ありません。事例研究で語られる状況には、既に「結末」があることもあります。事例研究は通常、実話をもとにしています。

子どもに対する暴力について事例研究を利用する場合は、『World Report on Violence against Children』と関連して開発された教材を使用することもできます。²

2 The United Nations Secretary General's Study on Violence Against Children, <http://www.violencestudy.org/r236>

事例1 クリスのさんざんな朝

月曜日の朝のことだった。クリスは起きて学校に行くのが嫌だった。ベッドは暖かくて気持ちよく、外は寒い。それに、今日提出する宿題がまだ全部終わっていない。ぐずぐずと目を開けると、犬のブラウラーが床に寝そべって、おろしたてのスニーカーを囓んでいる。

「ブラウラー、出て行け!」クリスはどなってベッドから飛び出した。ブラウラーは逃げて、隅に隠れた。

起きたクリスはのろのろと着替えて歯を磨き、1階に下りた。新しいスニーカーをボロボロにされたし、学校には行かなければならないして、2倍腹が立った。「どうして、まだ週末じゃないんだよ」と、クリスは考えた。

クリスは朝ごはんを食べ、通学カバンを持ってバス停に行った。子どもたちがキックボールをして遊んでいる。クリスがかがんでカバンを地面に置くと、ボールが飛んできて頭に当たった。「痛い!」クリスはどなった。「誰がやった?」ショーンがばつが悪そうに叫んだ。「わざとじゃない。ホントだよ」ほかの子たちは笑った。クリスはカッとした。

「いや、わざとだ、このマヌケ! 自分がやられたらどう思うかな」そう言うと、クリスはボールを拾ってショーンに投げた。ボールはショーンの腹に当たった。

ショーンは叫んだ。「おい、それはないだろ! お前にボールが当たったのは、たまたまなのに、わざと当てたな。嫌な奴!」

今度はショーンが、クリスの脚めがけて強くボールを投げた。クリスはショーンに駆け寄って突き飛ばした。ほかの友達が止めに入らなかったら、本格的なケンカになって、どちらかがケガをしたかもしれない。

- > ボールが当たったとき、なぜクリスはあのような態度を取ったと思いますか?
- > クリスは、別の反応をすることもできましたか?
- > この状況は、どうすれば防げたと思いますか?
- > クリスは、後で気持ちが落ち着いたらどうすべきですか?

事例2 1人が好きなのか、仲間はどれか

ジョージはあなたの中学校の2年生。いつも気軽に声をかけてくれるので、あなたはジョージが好きです。気さくな性格のおかげでみんなに好かれ、リーダーシップがある生徒だと思われています。

でも、あなたは気づきました。ジョージはクラスメートの1人、シファンとうまくいっていないようです。シファンは、町で臨時の仕事に就いたお父さんと一緒に、ヨルダンから来た男の子です。

シファンはいつも1人です。ほかのクラスメートと一緒に勉強するのが好きではないようです。ジョージは、シファンは学校で友達をつくりたくないのだ、あいつは自分は人より偉いと思ってる、と考えているようです。

確かにシファンは、ジョージに対して何回か、意地悪な態度を取ったことがあります。そのせいで、ジョージがシファンの悪口を言ったこともあります。大抵は、肌の色や文化の違いによる振る舞いを引き合いに出しての悪口でした。

あなたの学校には、アラブ諸国から来た生徒は少なく、その子たち全員をバカにする生徒もいます。もちろんシファンも、何度もからかいの対象になりました。

先週、シファンのお父さんは仕事の打ち合わせのためにヨルダンのアンマンに行き、ホテルに仕掛けられた爆弾が原因で亡くなりました。そのことは学校の皆が知っています。先生たちはシファンと家族にお悔やみを言いました。

シファンは学校に戻りましたが、クラスメートは誰も話しかけません。学校に友達がいないので、1人で悲しみに耐えています。

- > シファンはどんな気持ちだと思いますか？
- > あなたはシファンの状況についてどう思いますか？
- > ジョージはどうすべきだと思いますか？
- > あなたがジョージだったら、どうしますか？
- > シファンのクラスメートとして、また学校のリーダー的存在として、ジョージの役割は何ですか？
- > シファンは誰かと話さなくてはいけないと思いますか？
- > シファンがジョージの立場だったら、どうしたと思いますか？
- > シファンを救うために、教師や学校は何をすべきだと思いますか？

事例3 アナの物語

私は以前、コロンビアのアルト・バウドに住んでいましたが、ある出来事のために逃げ出して、エクアドルのエスメラルダスに避難場所を見つけました。私の名前はアナです。

私たちが住んでいた地方は、何年か前から、武装ゲリラに悩まされていました。住民には手を出さない年もありましたが、裏切り者と考えた人の家を襲うこともありました。

ある日ゲリラは、町の住人を全員集めました。私のきょうだいアンドレスを、敵側の民兵に協力したと言って責めました。そして、説明も聞かずに頭を撃ったのです。広場で、みんなの見ている前で。アンドレスには若い妻と3人の子どもがいました。

きょうだいの私も疑われ、町を出ろ、さもなければお前の子どもたちを殺すと言われました。私は荷造りもそこそこに、6人の幼い子どもと、義理のきょうだいと、その3人の子どもを連れて町を出ました。

私は49歳で、8人の子どもがいます。1人はキブドで勉強していましたが、ゲリラのグループに加わりました。アンドレスを殺し、私を脅したのと同じグループです。娘の1人は民兵に協力しています。万一、2人が出くわしたら、一体どうなると思いますか。

エスメラルダスでの生活は、私にとっても下の6人の子どもにとっても楽ではありません。私は果物を売って、子どもたちと暮らす小さな部屋の家賃を払うお金を何とか稼いでいます。息子の1人、カルロスは郵便局で働いていますが、この3カ月間、給料を支払ってもらえません。16歳のホルヘは先週、腕時計を盗んだという理由で訴えられ、監獄に入れられました。私たちは、食べ物を買うお金がなかったんです。

ほかの子どもは仕事を見つけられず、学校に行かせる余裕もありません。私たちは、ときどき近所の人たちから「麻薬の売人」だの「ゲリラ」だのと呼ばれ、まるで犯罪者のように扱われていますが、それでもコロンビアの内戦の中に戻るよりはマシです。あそこの問題が解決する日が来るとは思えません。あの周辺に武装集団がいる限り、私は故郷に戻れないのです。

私たちはエスメラルダスに一応の避難場所を見つけましたが、どうやって暮らしていけばいいのでしょうか。下の子たちのことが気がかりです。学費を払うことができないため、彼らは学校に行くこともできません。1日中、どうやって過ごすのでしょうか。悪い仲間に入って厄介事に巻き込まれ、監獄に入れられるか、街をうろつくようになるのではないかと心配です。人生はつらいことばかりです。

- > アナのことをどう思いますか？
- > 自分と子どもたちの暮らしを良くするために、アナにできることは何ですか？
- > アナは誰に助けを求めることができますか？
- > あなたがアナのような状況に置かれたら、どうしますか？
- > あなたの町にはアナのような人がいますか？
- > あなたはその人たちを少しでも助けることができますか？

事例4 マリアの話

16歳のマリアには、暴力的な義理の父親がいます。マリアは殴られるようになる前から、母親が殴られている音を耳にしていました。マリアが8歳のとき、父親に何時かと聞かれて、間違った時刻を答えてしまいました。

マリアは言いました。「あんまり強く殴られたので、私は倒れて、ソファに頭をぶつけた。すると義父は私を蹴り始めた。私はあんまり怖くて、お漏らししてしまった」

その後も暴力は続きましたが、マリアは誰にも打ち明けられませんでした。「学校にも相談したくなかったし、母にも言いたくなかった。母には、それでなくても、たくさん心配事があったから。何をされているか、人に言うのが怖かった。万一、そのことを義父が知って、私や母に腹いせをされたらと思うと…」

暴力はマリアの生活のあらゆる面に影響を与え、成績も下がりはじめました。

「私は3年間、ろくに教育を受けられなかった。母を義父と2人きりにするのが不安だったから。私の自尊心にも影響したし、学校でもいじめられた。でも学校に相談するのは嫌だったし、母にも話したくなかった。母にはほかにたくさん心配事があったから」

やがて、学校も心配し、マリアが中学1年生、13歳になったとき、カウンセラーをつけました。最初のうち、マリアはカウンセラーにも本当のことを言いませんでしたが、徐々に心を開きました。

「最初は信用しなかったけど、1年ほど経ったとき、何もかも打ち明けた。彼女は親友のような存在になって、何でも打ち明けて大丈夫だと思った。話した内容が他の人に漏れることもなかった」

ところが、まだカウンセリングを受けている間に、マリアは薬物を大量に摂取し、1週間入院しました。マリアはこう言いました。「生きているのが嫌になった。生きていく理由がないと感じた」

マリアは別のカウンセラーを紹介されました。回復を助けるために、精神科医と医師の治療も受けています。

マリアは言いました。「カウンセリングや、精神科医と医師のサポートには、とても助けられた。それに、本や雑誌を読んで、この問題を抱えているのは私1人ではないと気がついた。自分1人の問題ではないと思ったら、とても気持ちが楽になった」

- > マリアの状況に置かれたら、あなたならどうしますか？
- > これまでに起こったことは、マリアの今後の人生にどう影響すると思いますか？
- > 子どもを家庭内暴力から守るには、どうすればいいですか？
- > あなたの国では、家庭を含む暴力的な環境で暮らす子どものために、どのような法的対策が取られていますか？
- > 家庭内暴力から子どもを守るには、誰が、どうすればいいですか？
- > 家庭内暴力や虐待を受けている子どもが、あなたのクラスにいますか？
- > 彼らを救うため、また学生同士でお互いに助け合うために、あなたには何ができますか？
- > 少年よりも少女の方が暴力を受けやすいと思いますか？なぜそう思うのですか？
- > 学校でいじめに遭ったことがありますか？ どうすれば止めることができますか？

道徳的ジレンマ

道徳的ジレンマとは、解決が必要な状況のことです。ある問題がジレンマだということは、解決法はいくつもあるが、どれも短期的あるいは長期的に望ましくないということを意味します。ジレンマの解決には、しばしば難しい倫理問題がかかわってきます。

道徳的ジレンマの例を自分で考える際の指針を、いくつか挙げておきます。

- > 参加者が自分で決断しなくてはならない状況にする。若者に選択させることの重要性を忘れないように。
- > ルールを迂回する機会を提供する状況にする。
- > 参加者が、何が正しくて何が間違っているのか疑問を抱くような状況にする。
- > ベストの解決法は自分の利益になりそうだが、他者にも影響を及ぼすだろう、という所まで参加者を導くこと。

道徳的ジレンマ1 命を救う

2人の男が砂漠を旅しています。水は2人で一瓶しかありません。その水を分け合ったら、2人とも死にます。もし片方だけが水を飲んだら、その男は生き延びますが、もう1人は助かりません。

2人はどうすべきでしょう？ 水を分け合うべきだという考え方もあります。そうすれば、どちらも相手が死ぬのを見ないで済むでしょう。一方、水の持ち主、つまり水を持ってきた用意のいい方が水を飲むべきだという考え方もあります。

2つの矛盾する解釈があるわけです。異なる2つの意見を、どう考えるべきでしょう？ どちらの命が優先されるべきでしょう？ もし一方が子どもでもう一方が大人だったらどうでしょう？ 男性と女性だったらどうでしょう？ 命の価値を、どうやって計るのでしょうか？

道徳的ジレンマ2 バスケットボールの試合

学校対抗のバスケットボール大会が、あなたの町でもうすぐ始まる。去年はあなたの学校のチームが優勝し、フェアプレー賞の金メダルも受賞した。

今年は参加校が増えた。あなたの学校の一番優秀な選手2人はもう在学していないので、代わりに新しい選手が2人必要だ。監督は3週間ほど町を離れることになり、新しい選手2人を選ぶ責任をあなたに託した。でも、監督はアドバイスをくれた。誰を採るか決める前にチームのルールを説明し、それを理解し、同意する選手を選ぶこと。そして、最も優秀な選手を選ぶこと。

あなたは選手の募集を始めたが、興味を示して応募してきたのは3人だけだった。募集をやり直す時間はないので、この3人から選ばなくてはならない。

3人の候補者の顔ぶれは・・・

クリスチャン：14歳

バスケットは未経験だが、習いたい。

毎日午後、練習に出られる。

ハイラン：16歳

昨年の大会で2位になったチームのメンバーだったが、アンフェアなプレーをしたためチームを辞めさせられた。辞めてから麻薬を使い始めたと言う人もいる。

週4日、練習に出られる。

アンドレス：15歳

1年の経験がある。

週3日、練習に出られる。

チームで面接した際、応募者にチームのルールを説明した。

- > メンバーは15歳から18歳まで。
- > 練習は1回3時間で週3回。
- > 毎週土曜日にリーダーシップ・トレーニングがある。これは選手全員が受けなくてはならない。
- > 2カ月に一度、その月の第一週に、チームワークを養うための合宿に参加しなくてはならない。
- > 欠席が認められるのは病気か、家族に問題が起こった場合だけ。

クリスチャンは言った。「自分は3カ月後に15歳になる。金曜日は生徒会役員のミーティングがあるので、練習に出られない」

ハイランは、すべてのルールを承諾した。

アンドレスは説明した。「宗教上の制約があるので週末のプログラムには参加できない。自分はユダヤ教徒なので、土曜日は安息日として神に捧げなくてはならないから」

あなたなら、誰をチームのメンバーに選びますか？

- ・ チームのルールだけで、誰を選ぶか決められますか？
- ・ クリスチャンとアンドレスは、チームのルールを全部は守ることができません。あなたは自分の決定と、「チームのルールすべてに同意し、理解する選手」という監督のアドバイスの間に、どう折り合いをつけますか？
- ・ もしあなたがハイランを選ばないとしたら、その理由は何ですか？ 以前のチームを辞めさせられたことは、彼をあなたのチームに入れない理由になりますか？ 麻薬を使っているとの噂は、彼を受け入れない理由になりますか？
- ・ もしあなたがアンドレスを選ばないとしたら、その理由は何ですか？

道徳的ジレンマ3 嘘をかばう

ジュディは12歳。ベビーシッターのアルバイトや昼食代からチケットを買うお金を貯めたら、町で予定されている特別なロックコンサートに行きたいと、お母さんに約束してもらった。ジュディは20ドル貯めた。チケットは15ドルなので、十分以上の金額だ。ところがお母さんの気が変わり、そのお金は学校で使う本を買うのに使いなさいと言われてしまった。

ジュディはがっかりしたが、やはりコンサートに行くことにした。チケットを買い、母親には5ドルしか貯められなかったと言った。その土曜日、ジュディはコンサートに行った。お母さんには、友達の家に行くと言っておいた。お母さんにバレないまま、1週間が過ぎた。

その頃になって、ジュディは姉のルイズに、コンサートのことで母親に嘘をついたと打ち明けた。ルイズは妹のしたことを母親に話すべきかどうか迷っている。

1. 姉のルイズは、ジュディがコンサートとお金のことで嘘をついたことを母親に話すべきですか？それとも黙っているべきでしょうか？何を根拠に、心を決めたらいいですか？
2. ルイズは誰に対して、より強い忠誠心を持っていますか？母親でしょうか、妹でしょうか？その理由は？
3. ジュディがチケット代を自分で稼いだという事実は、この状況で重要なことでしょうか？その理由は？
4. 母親はジュディに、チケット代を貯めたらコンサートに行きたいと約束していました。母親がその約束を破ったことは、重要な考慮材料でしょうか？その理由は？
5. 一般的に約束は守るべきでしょうか？その理由は？
6. 何かを約束してもらった人が、あなたと親しい人か、そうでないかで話は変わりますか？
7. この状況でルイズが取れる、一番責任ある行動は何でしょう？

Victor Grassian著『Moral Reasoning,』(Prentice Hall, 1981, 1992)より。

道徳的ジレンマ4 医療のジレンマ

ヨーロッパのある女性がガンになり、命が危ぶまれる状態だった。だが、ある薬を使えば助かるかもしれない。同じ町の薬剤師が最近発見したラジウム的一种だ。その薬剤師は、その薬を2000ドルで売っている。製造にかかる費用の10倍の値段だ。

病気の女性の夫ハインツは、知人や親類を尋ねて金を借りようとしたが、1000ドルほどしか集まらなかった。彼は薬剤師に妻が死にかけているのだと言って、値引きするか、代金を貸しにしておいてほしいと頼んだ。薬剤師は断った。

夫は破れかぶれになって、男の店に押し入り、妻に飲ませる薬を盗んだ。

- ・ 薬剤師がハインツの頼みを断ったのは正しいことですか?その理由は?
- ・ 夫が店に押し入ったのは正しいことですか?その理由は?
- ・ 夫は、他の方法を取ることもできたでしょうか?
- ・ もし、あなたが夫の立場だとしたらどうしますか?

Kohlberg, Lawrence 著『Collected Papers on Moral Development and Moral Education』

(Cambridge: Moral Education and Research Foundation, Harvard University Education Foundation, 1973) より。

道徳的ジレンマ5 救命ボート

1842年、一隻の船が氷山に衝突し、30人余りの生存者が7人乗りの救命ボートに詰め込まれた。

嵐が近づくにつれて、ボートを軽くしなければならないことが明らかになった。でなければ、誰も生き残れないだろう。船長は、何人かを海中に落として溺れさせるのが正しいことだ、と言った。そのようなことは投げ落とされる者にとって不公平ではない。なぜなら、どうせ溺れ死ぬのだから。もし手をこまねいていれば、救えるはずの者まで救えず、その死は私の責任になるというのが船長の言い分だった。

だが、何人かは船長の決断に反対した。彼らの主張では、もし何もせずに全員が死んでも、それは誰の責任でもない。だが、船長が一部の人の命を救おうとしたら、他の人を殺すしかなく、その死は船長の責任になるというのだ。

船長は、この言い分を退け、助かるにはボートを漕ぐという力の要る作業が必要なので、弱者を犠牲にしなければならないと決めた。この状況で誰を海に投げ込むかをくじ引きで決めるのは愚かなことだと考えたのだ。そしてその後、弱者をボートから放り出した。

結果的には、何日も懸命に漕いだ末、生存者たちは救出され、船長は行動の責任を問われて裁判にかけられた。

- ・ もし、あなたがボートに乗っていたら、どんな主張をしましたか。次の2つの場合について教えてください。
 - a) あなたがボートから放り出される側になりそうな場合
 - b) あなたが頑強で、ボートに残る側になりそうな場合
- ・ もし、あなたが船長の裁判の陪審員だったら、有罪にしますか、無罪にしますか？
- ・ もし有罪なら、船長はどんな刑罰を受けるべきだと思いますか？
- ・ もし、あなたが船長の立場なら、どうしましたか？

道徳的ジレンマ6 カンニング

ソーナは化学が苦手で、今までのテストでは良い成績を取れませんでした。

でも、最終試験のために一生懸命勉強したので、今度は良い成績を取る自信がありました。長いテストでしたが、ソーナはほぼ全部の問題に解答し、ここまでは良くできたわと思っていました。ところが1つだけ、答えられない質問がありました。この質問は、全得点の25パーセントの配点です。もう時間はあまり残っていません。

ソーナの隣の男子生徒はもう解答を終えていて、ソーナが分からなかった問題の答えが見えました。教師は他の生徒の質問に答えていて、こちらに注意を払っていません。大急ぎで書き写せば、絶対見つからないでしょう。

この最後の問題に正解すれば、ソーナは試験に合格し、この科目の単位を取れます。もし正解できなければ、試験は不合格で、この科目は来学期にやり直さなくてはなりません。

- > ソーナはどうすると思いますか？
- > あなたがソーナの立場ならどうしますか？
- > 仮に、あなたがカンニングしたとします。もし翌日、教師にカンニングしたかと訊かれたらあなたは白状しますか、それとも何か作り話をしますか？
- > もし誰かがカンニングをしたら、クラスの他の生徒も影響を受けると思いますか？なぜ、どんな影響を受けるのでしょうか。影響を受けないとしたら、それはなぜでしょう。

映画・ビデオ

映画やビデオは、参加者を新しい世界へとといざない、他者の人生や他者がおかれた状況を学んでもらうのに利用することができます。すぐれた制作者の作品であれば、参加者はさまざまな物の見方や、行動を起こす動機、私たちが直面する状況の複雑さなどについて考えるようになります。

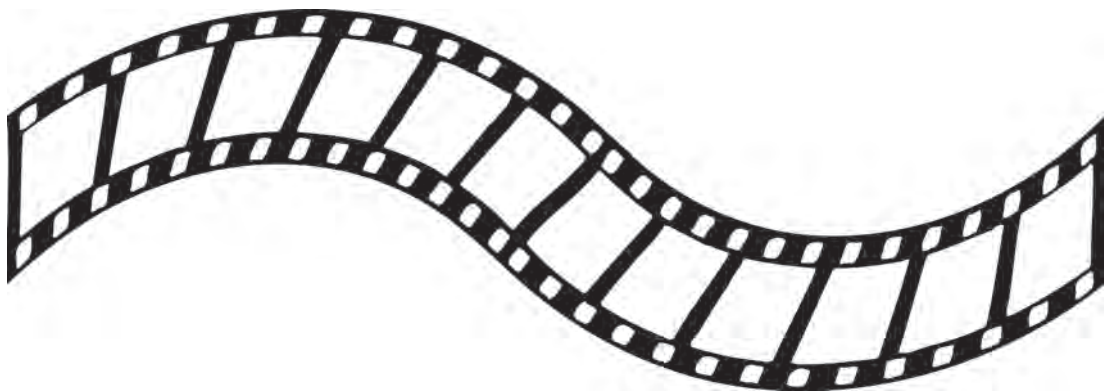
教育者やファシリテーターは最新の社会問題を扱った映画やドキュメンタリーを利用して、子どもや若者と容易に心を通じ合うことができます。映画を見ることで、参加者たちは世界のさまざまな地域の実情について質問をしたり、人権問題について考えさせられたり、暴力に頼らずに争いを解決する方法を学んだりしていくのです。

映画は大衆文化の1つで、若者向けの娯楽として大きな位置を占めています。従って、子どもや若者の興味を引き心に訴えかける形で、特定のテーマをより身近に感じさせることができます。映画についてのディスカッションを行なうと、参加者は自分の不安や、思ったことや感じたこと、状況をどう理解したかなどを表現することができます。また、別の側面として、消費者文化においてメディアが果たす役割について話し合うこともできます。

以下のリストに挙げた映画は、人権、平和教育、異文化・諸宗教学習に関係する映画をお探しのファシリテーターや教師の皆さんの参考として選んだものです。各作品のレーティングは、作品のテーマや言葉遣い、暴力・裸体・性の描写、ドラッグの使用などを考慮してモーション・ピクチャー・アソシエーション (MPA) が指定したものです。このレーティングは通常、親の立場にある人が決めていますので、教える子どもの年齢層にその映画がふさわしいかどうかを判断する上で良い目安になります。MPAのレーティングのない映画もありますが、その場合は、その映画を使うかどうかをファシリテーターが判断する必要があります。

映画のレーティングは以下の通りです。

G (General Audience)	: 全年齢が視聴可。
G (Parental Guidance Suggested)	: 一部の内容が子どもに適さない可能性がある。 保護者との同伴が勧められている。
PG-13 (Parents Strongly Cautioned)	: 一部の内容が13歳未満の子どもに適さない可能性がある。 ある。保護者には十分な注意が求められている。
R (Restricted)	: 17歳未満は保護者または成人の同伴が必要。
NC-17	: 17歳以下は視聴禁止。



題名	監督	レーティング	概要
さよなら子供たち	ルイ・マル	PG	第二次大戦中、フランスの田舎町にあるカトリックの寄宿学校で出会った2人の少年が主人公。1人はユダヤ人の少年で、学校を運営する修道士らによって、ナチスに見つからないようにかくまわれていた。マル監督自身の体験をもとにしている。
The Believer	ヘンリー・ビーン		ニューヨークに住むユダヤ人の学生が自分の人生におけるユダヤ教の意味を探ろうとする旅を描き、宗教や家族の問題を掘り下げた作品。個人や社会全体の不寛容が及ぼす影響力について考えさせられる。
ブラッド・ダイヤモンド	エドワード・ズウィック	R (激しい暴力、卑語)	1990年代のアフリカ、シエラレオネ。内戦の混乱の中で、ジンバブエ人の元傭兵ダニーとメンデ族の漁師ソロモンが、かつてソロモンが発見して隠した希少なピンクダイヤを取り戻そうとする。2人はアメリカ人ジャーナリストのマディーの助力を得て、ソロモンの家族を救い、マディーとの約束を果たすための危険な旅に出る。
セントラル・ステーション	ヴァルテル・サレス	R (卑語)	元教師のドーラはリオ・デ・ジャネイロの中央駅で代書業を営む無愛想な老女。そこへ9歳の男の子ジョズエを連れた女性が夫への手紙の代筆を依頼に来る。ドーラは父親に会ったことのないジョズエを連れて、その父親を探す旅に出ることに。この旅が2人の人生を変えていく。
遠い夜明け	リチャード・アッテンボロー	PG	アパルトヘイト時代の南アフリカを舞台に、リベラルな地元紙「デイリー・ディスパッチ」の編集長ウッズと、運動家ピコの交流を描く。ピコが獄中で死んだあと、ウッズはピコについての本を書くが、出版するためには不法出国するしかない。彼は家族とともに危険な脱出を試みる。
いまを生きる	ピーター・ウァー	PG	自分の決めた道を選ぶ勇気を手にした人々の物語。アメリカの名門進学校に新しく赴任した国語教師キーティングは、現状に甘んじないよう生徒たちを鼓舞する。生徒たちはそれぞれのやり方でキーティングの教えに従い、それによって人生を大きく変えられていく。
ガンジー	リチャード・アッテンボロー	G	平和的共存と民主主義のために非暴力で戦い続けたインド独立運動の指導者ガンジーの伝記映画。その生涯は、人権と政治的・宗教的寛容さを訴える直接行動の一生であった。

題名	監督	レーティング	概要
ホテル・ルワンダ	テリー・ジョージ	PG-13 (暴力、不快な映像、短い卑語)	1994年、ルワンダでホロコースト以来の規模となる大量虐殺事件が発生し、わずか3カ月の間に100万人が無残に殺された。この惨劇の中、1人の平凡な男が自らの家族への愛に導かれ、支配人として勤めるホテルに寄る辺のない難民たちをかくまい、1000人あまりの命を救う。
In the Name of God	アナンド・パトワルダン	G	インドは1947年の独立以来、政教分離国家だが、今日、この国のきわめて緊迫した社会構成への最大の危険要因は、ヒンズー教原理主義者である。彼らは人口の83%を占めるヒンズー教徒に対して、ヒンズー国家としてのインドの再生を訴えている。
君のためなら千回でも	マーク・フォースター		原作はカーレド・ホッセイニの小説。主人公のアミールは、子どものころ家に仕えていた召使の息子で親友だったハッサンを裏切ったことに対する罪の意識に苛まれている。子ども時代の過ちに許しを得られることを願って故郷のアフガニスタンに戻るが、時のアフガニスタンはタリバン独裁政権下にあった。
コーリャ愛のプラハ	ヤン・スヴェラーク	PG-13 (性描写)	ソビエト占領下のチェコスロバキアに暮らすチェロ奏者ロウカは、国立オーケストラでの職を失った。多額の借金を抱えているロウカは友人の勧めで、チェコ国籍を欲しがらるロシア女性との偽装結婚にしぶしぶ応じる。ところがこの女性は、5歳の息子コーリャを自分の母親の元に残して恋人の待つ西ドイツへ逃亡。その後母親が死に、コーリャは「継父」であるロウカと一緒に暮らすことになる。
クンドゥン	マーティン・スコセッシ	PG-13 (暴力的な映像)	ダライ・ラマの伝記映画。彼はまだ幼い少年だった頃、チベットの奥地を訪れた僧侶らに「慈悲の仏陀」の14代目の生まれ変わりとして発見される。第二次大戦後は、中国共産党政府によるチベット侵攻に立ち向かうことに。毛沢東は抗議を無視してチベットの軍事支配を継続し、ダライ・ラマはインドのダラムサラへの亡命を余儀なくされる。

題名	監督	レーティング	概要
ライフ・イズ・ビューティフル	ロベルト・ベニーニ	PG-13 (ホロコーストに関するテーマ)	ユダヤ系イタリア人の詩人グイドは妻子とともに幸せに暮らしていたが、ドイツ軍に逮捕され強制収容所に連行される。息子ジョズエに酷い真実を知らせたくないグイドは、休暇でゲームをしに行くんだと息子に話し、千点取れば本物の戦車をもらえて収容所を出られると信じ込ませる。論議を呼んだ作品で、ホロコーストを「笑いの」にした冒瀆的な映画だとする見方と、人間の不屈の精神を描いた佳作だとする見方がある。
大いなる陰謀	ロバート・レッドフォード	R (戦争暴力、卑語)	2人の学生が、恩師マレー教授に触発されてアフガニスタン戦争への従軍を決意。彼らの戦場での生き残りをかけた闘いが、2つのまったく異なる物語を結びつける糸となる。カリフォルニアにいるマレー教授は、恵まれた立場にありながら無関心な学生の手を掴もうと試みる。いっぽう首都ワシントンでは、大統領の座を狙う上院議員アーヴィングが気鋭のテレビ記者にセンセーショナルな情報を提供しようとするが、その情報には戦場に行った若者の運命がかかっていた。3つのストーリーが複雑に絡み合い、それぞれの人物が互いに、そして世界にも大きな影響を与えていることが明らかになっていく。
マルコムX	スパイク・リー		著名なアフリカ系アメリカ人指導者マルコムXの伝記。牧師の父親をKKKに殺されたマルコム・リトルはしがないチンピラだったが、服役中にライジャ・ムハマッドが率いる黒人イスラム教組織「ネイション・オブ・イスラム」の教えに出会う。出所後その教えを広め始めるが、メッカへの巡礼を機に正統イスラム教に改宗し、スンニ派ムスリムとなる。エル・ハジ・マリク・アル・シャバズと改名した彼は反白人の教えを捨てる。最後には暗殺され、イスラム教殉教者となった。
マザー・テレサ	ケヴィン・コナー	G	マザー・テレサの実話。インドのカルカッタでさまざまな逆境に立ち向かいながら、「神の貧者」の中でも最も貧しい人々を救うための活動の基礎を築いていく姿を描く。

題名	監督	レーティング	概要
モーターサイクル・ダイアリーズ	ウォルター・サレス	R (卑語)	革命家エルネスト・“チェ”・ゲバラが23歳のときに書いた日記を脚色。彼が友人アルベルトとともに39年型ノートン500のバイクを駆って敢行した南米大陸縦断の旅を描く。恵まれた中流家庭に生まれたゲバラは、この初めての南米探検で鉱山労働者や迫害され家を捨ててきたコミュニストらに出会い、先住民農民階級の役割と生活を目の当たりにする。これが転機となり、ゲバラはラテンアメリカのプロレタリアートの大義のために命をかけて闘い抜くことを誓う。
ペイ・フォワード	ミミ・レダー	PG-13 (薬物乱用、性描写、卑語、暴力描写などの成人向けテーマ)	トレバー少年は新しい社会科教師のシモネット先生から「世界を変える方法を何か考えて実行しなさい」という課題を出される。トレバーが思っていたのは、人から受けた好意を返すのではなくほかへ回す—つまり、誰かから良くしてもらったら、別の3人に何か良いことをしてあげるといった方法だった。
ペレ	ビレ・アウグスト		19世紀末、スウェーデン移民を満載した船がデンマークのボルンホルム島に到着する。その中にラッセとペレの父子がいた。二人は大農場で働き始めるが、ひどい扱いを受ける。ペレはデンマーク語を話すようになるものの、外国人と言われていじめられる。それでも2人は、スウェーデンにいた頃より良い暮らしを手に入れるという夢をあきらめようとしないう。
シンドラーのリスト	スティーヴン・スピルバーグ (1993)	R (卑語、性描写、史実的暴力)	ホロコースト時代に1000人を超えるポーランド系ユダヤ人の命を救ったドイツ人実業家、オスカー・シンドラーの実話。原作はトーマス・キニーリーの『シンドラーの箱舟』。

題名	監督	レーティング	概要
海を飛ぶ夢	アレハンドロ・アメナーバル		尊厳死を求めて30年に及ぶ闘いを繰り広げた四肢麻痺者ラモン・サンペドロの生涯を描く。彼の訴えを支援する弁護士フリアと、死を思いとどまらせようとするロサという2人の女性が、ラモンの愛情に心を動かされ、それまで思いもなかったことを実現しようと動き出す。ラモンは自らは死を望みながら、出会ったすべての人に人生の意味とその崇高さを教えた。
Silent Waters	サビハ・スマル		ジアウル・ハック大統領の軍事政権下にあった1979年のパキスタンにおける衝撃的な人生を描いた作品。未亡人アイエシャと18歳の夢見がちな息子サレーム、その恋人ズベイダの人生が描かれる。サレームはイスラム原理主義者グループに深く関わるようになり、ズベイダのもとを去る。やがて村へやって来たインドのシーク教巡礼団の1人が、1947年に誘拐されたという妹を探し始めるが、これがアイエシャの悲劇的な過去の記憶を呼び起こす。
Veer-Zaara	ヤシュ・チョブラ		新進気鋭の女性弁護士サーミヤは、パキスタンにいる囚人の人権問題を担当することになる。囚人の1人ラージェシュ（＝ヴェール）はインド軍のスパイとされ、スパイ行為の現行犯で逮捕されて終身刑を言い渡されていた。サーミヤは、彼はスパイではなく、イスラム教徒の女性と恋に落ちたシーク教徒であることをつきとめる。陰謀に巻き込まれて捕えられた彼は、「供述書」に署名させられ、22年間も収監されていた。サーミヤはヴェールの無実を晴らそうと立ち上がるが、同僚たちは「男の仕事」をしようとする女性を認めようとしていない。

題名	監督	レーティング	概要
クジラの島の少女	ニキ・カーロ		ニュージーランド東岸に住むワンガラ族の人々は、千年前にカヌーが転覆して海に投げ出された祖先のパイケアがクジラの背中に乗ってこの地にたどり着いたという伝説を信じていた。以来ワンガラ族の族長は必ず長男が継ぎ、パイケアの直系の子孫とみなされてきた。族長の孫に当たる11歳の女の子パイは、やがては自分が族長になると信じていたが、祖父のコロは伝統に従って男子を後継者を選ぶとする。パイは誰よりも祖父が大好きだったが、千年の伝統を破って運命を成就させるために祖父と闘うことになる。
愛のイエントル	バーブラ・ストライサンド	PG	若いユダヤ人女性のイエントルは、男の振りをしてユダヤ教学校イエシヴァに入学し、ユダヤ教の教義や律法を学ぶ。アイザック・バシェヴィス・シンガー（1902-1991）の小説『Yentl, the Yeshiva Boy』の映画化。

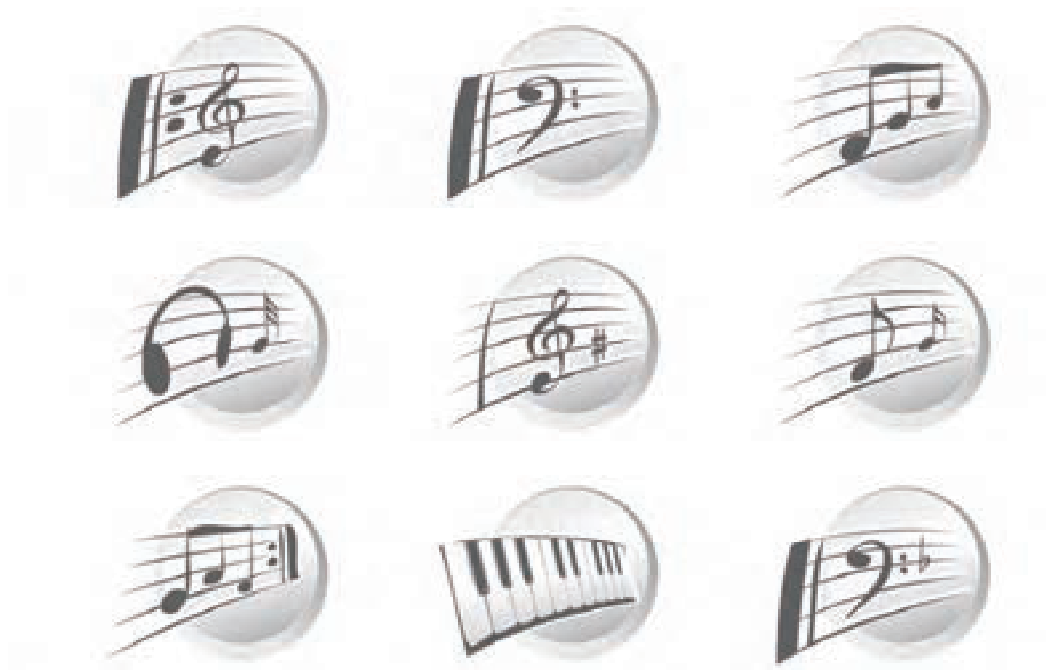
歌

教育プログラムに音楽を利用すると、子どもの集中力と創造性に刺激を与えることができます。子どもをリラックスさせ、学習を妨げるストレスを和らげるのにも役立ちます。また、ある種の音楽にはエンドルフィンの分泌を促す効果があり、こうした音楽を聴くことで気持ちが落ち着き、学習のスピードアップにつながる場合があります。

子どもたちは音楽を通して感情を表現したり、記憶や考えを思い出したり、解放感や穏やかな気持ち、楽しさなどを感じることができます。それによって非言語コミュニケーションのルートが広がり、会ったことのない人たちとでも一体感を感じることができるようになります。また、教師やファシリテーターは、不正や暴力に対する非暴力の抗議手段の1つとして歌を利用することができます。

歌を聴くことによって、今日の子どもや若者にとって重要な問題を話し合うきっかけをつくることもできます。そうしたディスカッションを通じて、人の話を聞き、対話をし、自分の意見を言う姿勢や、お互いに敬意を持って話し合いに参加する姿勢を養うことができます。

以下のリストに挙げた歌は、参加者に他者の信条や異なる文化や宗教を学ぶ意欲を起こさせることを目的とした異文化・諸宗教学習プログラムで利用できるものです。また、今日の世界が直面する問題や、人々の感情や理解の欠如について話し合うきっかけづくりにも役に立ちます。参加者に歌を教える際には、それぞれの国の言語に翻訳しても良いでしょう。



題名	作曲者	アルバム	国
Al-dameer El-Arabi, (The Arabic Consciousness)	Arab singers	シングル(2008)	アラブ諸国
A Daniel,, un chico de la Guerra	アルベルト・コルテス	Entre Lineas (1985)	アルゼンチン
Color Esperanza	ディエト・トレス	Un Mundo Diferente(2002)	アルゼンチン
Shosholoza	ヘルムート・ロッティ	Out of Africa(2004)	ベルギー
Canco sense nom	Lluís Llach	L' estaca (1973)	ブラジル
ブレーキング・ザ・ サイレンス	ロリーナ・ マッケニット	パラレル・ドリームズ (1989)	カナダ
Gracias a la Vida	Mercedes Ossa	Las Últimas Composiciones (1966)	チリ
Sobreviviendo	Victor Heredia	Solo quiero la vida (1984)	チリ
Solo le pido a Dios	Leon Gieco	El Encuentro	チリ
Fijate Bien	フアネス	Fijate Bien(2000)	コロンビア
クランデスティーン	マヌ・チャオ	クランデスティーン (2000)	フランス
Je crois que ca va pas etre possible	Zebda	Essence ordinaire, Barday(1998)	フランス
ミリオン・ヴォイセズ	ワイクリフ・ジーン	ホテル・ルワンダ: オリジナルサウンド トラック(2004)	ハイチ
サンデー・ブラディー・ サンデー	U2	ウォー(1983)	アイルランド
ウォー・チャイルド	ザ・クランベリーズ	トゥ・ザ・フェイスフル・ デパーテッド(1996)	アイルランド
シャローム、シャローム	ノア	ノア・ゴールド	イスラエル
Shir Lashalom (Song for Peace)	Miri Aloni	Golden Hits of the Nahal	イスラエル
バッファロー・ソルジャー	ボブ・マーリー	ワン・ラブ・ザ・ベリー・ ベスト・オブ・ボブ・マーリー (2001)	ジャマイカ
花	喜納昌吉	ザ・ベスト・オブ 喜納昌吉&チャンブルーズ	日本
Jawaz al-Safr Passport	Marcel Khalifa	プロミシズ・オブ・ザ・スト ーム(1999)	レバノン
Khoufi Aa Wlad(マイ・ フィア・フォー・マイ・ チルドレン)	ジュリア・ブトロス	Ta' awdna Alaik (2006)	レバノン

題名	作曲者	アルバム	国
Folon	サリフ・ケイタ	ザ・パスト(1995)	マリ
Me voy a convertir en un ave	Mana	Sueños Liquidos(1997)	メキシコ
アンノウン・ソルジャー	Fela Kuti	アンノウン・ソルジャー	ナイジェリア
Junoon	ノーモア	Best of Junoon	パキスタン
Desapariciones	Ruben Blades	Buscando America(1984)	パナマ
ママ・アフリカ	エイコン	コンヴィクテッド (2007)	セネガル
Lokayak Nasannata	Sunil Edirisinghe	Mage senehas(1985)	スリランカ
ヒロシマ	Bjorn Atzelius	エグザイル(1984)	スウェーデン
ブラザーズ・イン・アームズ	ダイアー・ストレーツ	ブラザーズ・イン・アームズ(1985)	イギリス
平和をわれらに	ジョン・レノン	平和をわれらに(1969)	イギリス
世界に平和を	ジル・ジャクソン& サイ・ミラー	Circa(1955)	イギリス
ピース・トレイン	キャット・スティーブンス	ティーザー・アンド・ザ・ ファイアキャット(1971)	イギリス
ザ・スペシャルズ	フリー・ネルソン・ マンデラ	イン・ザ・スタジオ (1984)	イギリス
ザ・ウェイ・オブ・ラブ	オリビア・ニュートン・ ジョン	ガイア〜新たなる 旅立ち〜(1993)	イギリス
ア・サマー・プレイヤー・ フォー・ピース	アーチーズ	サンシャイン(1970)	アメリカ
マスターズ・オブ・ ウォー	ボブ・ディラン	ザ・フリーウィーリン・ ボブ・ディラ(1963)	アメリカ
虹の民	ビート・シーガー	ビート(1966)	アメリカ
アンダー・ザ・ レインボー	Joyce Rouse	アンダー・ザ・ レインボー(2004)	アメリカ
ウォー	ブルース・スプリングス ティーン	ライブ(1975-85)	アメリカ
サウンド・オブ・ サイレンス	ポール・サイモン、 アート・ガーファンクル	水曜の朝、午前3時 (1966)	アメリカ
ウィー・アー・ザ・ ワールド	マイケル・ジャクソン、 ライオネル・リッチー	ウィー・アー・ザ・ ワールド(1985)	アメリカ
ワット・ア・ ワンダフル・ワールド	ルイ・ アームストロング	ワット・ア・ ワンダフル・ワールド	アメリカ
ウェア・イズ・ザ・ラブ	ブラック・アイド・ ピース	エレファンク(2003)	アメリカ
ワイ・キャント・ウィ・リブ・ トゥゲザー	ティム・トーマス	ワイ・キャント・ウィ・リブ・ トゥゲザー (1964)	アメリカ

詩

「詩 (poetry)」とは、ギリシャ語で「作る」、「制作」を意味する「poiesis」から来た言葉で、言葉の文字通りの意味に加えて、あるいは文字通りの意味の代わりに、言葉の持つ美的な性質や喚起的な性質を用いた芸術の一形態です。

子どもや若者に詩を読み聞かせることで、物語では伝えることのできない形で創造性や芸術性、感受性を増すことができます。言葉のリズムや韻から感じられる心地よさから、子どもはその詩の先の展開を予測することができます。気持ちを和ませるような規則的なリズムが、心の平安の醸成に欠かせない安心感を抱かせます。

詩は、言葉の文字通りの意味を広げて理解させ、空想や現実に対する感情的な反応を呼び起こすのに役立ちます。多義的な表現や象徴的な表現、反語法などが用いられた詩はさまざまな意味に解釈することができますので、子どもの創造力や、異なる可能性を追求する能力を刺激します。

対立と同化、拒絶と受容、与えることと奪うことを明確に区別する詩もあります。こうした詩を読むと、その詩が作り出した架空の世界の中でしか意味をなさない矛盾について考えさせられることになります。これによって子どもたちは、現実にとれほど矛盾があっても、さまざまな異なる視点からその現実を理解する力を高めることができます。

詩はひと続きの会話と考えることができます。詩の本質そのものについてだけでなく、人間の人生についての一種の続き物語として捉えることができます。

子どもは詩の中に自分自身の姿を見ることができたとき、言葉の不思議と詩の持つ力を見出し始めます。詩を暗記したり暗唱したり、あるいはしばらくの間、心の内ポケットにしまっておくのも良いでしょう。

詩は、内省的な活動の前後やその活動の中で用いることができます。また、プログラムを始める前に、静かに考える時間を持つためにも利用できます。

魂の塩

親愛なる友へ
あなたが私のために割いてくれる時間はほとんどない…
そんな時間が恋しい
私を震わせる思いはめったにない
その思いはあなたのもの
私たちが共に過ごす時はほとんどない…
そんな時がほしい
あなたに触れ、私を近くに感じる瞬間は熱い
涙を内にしまい、思いであなたを微笑ませるのは私
あなたの気づかない、あなたの命の力の源は私
あなたの魂より

子どもについて

それから、胸に赤ん坊を抱いた女が言った。「子どもについて話してください」
すると彼は、こう言った。
あなたの子どもは、あなたの子どもではない。
彼らは、生命を求めるいのちの息子であり、娘なのだ。
あなたを通して生まれたが、あなたから生まれたのではない。
あなたと一緒にいるが、あなたのものではない。
愛を与えるのは良いが、考えを押し付けてはいけない。
子どもには子どもの考えがあるのだから。
子どもの体を家に置くのは良いが、魂を閉じ込めてはいけない。
子どもの魂は明日という家に住んでおり、
あなたがそこを訪れることは、夢の中ですらできないのだから。
子どもようになろうと努めるのは良いが、子どもを自分に似せようとしてはいけない。
いのちは後戻りすることも、昨日に留まることもない…

カリール・ジブラン『預言者』「子どもについて」と題された章より



子どもは生活から学ぶ

けなされて育つと、人をけなす子どもになる
とげとげしい環境で育つと、乱暴な子どもになる
馬鹿にされて育つと、引っ込み思案な子どもになる
自尊心を傷つけられて育つと、誇りを持たない子どもになる
(だが)
広い心で接すれば、我慢強い子どもになる
励ましてあげれば、自信に満ちた子どもになる
褒めてあげれば、人の長所を見つける子どもになる
公平であれば、正義感のある子どもになる
守ってあげれば、人を信頼できる子どもになる
認めてあげれば、自分を愛せる子どもになる
和気あいあいとした環境で育てば、
子どもは、この世には愛があると思えるようになる

ドロシー・ローノルト



「憎しみの余地はない」

私の心に
復讐や非難や憎しみの入る余地はない
私の頭には
そんな思いは何ひとつ浮かばない
言葉が見つからない
この気持ちをどう伝えたらいいのか
でも、この何より深い傷から
許しを見つけなくてはならないのだ
私たちが受けた傷は
ナイフで切られたように痛む
でも、それと同じやり方で
その仇を返してはならない
とても難しいことだけれど
私たちはその代わりに
今こそ愛の手を差し伸べ
友情といえるものを見つけなくてはならない
ほかの人たちもたいていは
私たちと同じ人間なのだ
この目をしっかりと開けてそれを確かめることほど
癒されるものはほかにない

デービッド・グールド

2005年7月7日に発生したロンドン同時爆破事件の犠牲者の父親

国境にて

「ここがこの国の最後の検問所だ」
私たちは飲みものを手に取った
もうすぐ何もかもが違う味になるはずだ

足元の大地は続いていた
太い鉄の鎖で区切られて

妹が鎖をまたいで
「こっちを見て」と私たちに言った
「右足はこっちの国にあるのに
左足は向こうの国にあるのよ」
国境警備兵がやめろと命じた

母が言う 私たちはふるさとに帰るのよ
道はもっときれいだし
景色はもっと美しい
それに人々はもっと親切だ、と

何十という家族連れが雨の中で待っていた
「ふるさとの空を感じるよ」と誰かが言った
もう泣いている母親はいない 5歳の私は
検問所のそばに立ち
国境の両側をくらべていた

秋の土が向こう側に続いていた
同じ色 同じ肌合い
鎖のどちら側にも雨が降っていた

書類が確認されるのを待つ間
警備兵は私たちの顔をじろじろと見た
そして鎖が外され、私たちは通された
1人の男がひざまずき ぬかるんだ祖国の土にキスをした
同じ山並みが私たちみんなを包み込んでいた

チョマン・ハルディ

ロンドン在住の若いクルド人の詩人。母語クルド語と英語の両方で作品を書く。

もっと明るい世界

クリスマスなんだから 幸せだと思ふべきなのに
何もかもがお祭り気分で 何もかもが輝いているのに 私の心は明るくならない
着るものもなく病に苦しむ子どもたちの写真が何度も頭をよぎる
正義といくらかの食べ物さえあればと願わずにいられない

飢えと貧しさと戦争は人類が負ってきた重荷
私は自分に問いかける 平和はどこに? 愛はどこに?
なぜ思いやりが私たちの心の扉をたたかないの?
怒りがあふれ もっと良い世界のために働く意欲がくじけてしまう

ちょうどそのとき 幼い妹がこちらへやってきた
愛らしい笑みを浮かべ お人形にキスしてとねだる
人形にミルクを飲ませるまねをしながら
妹は言う ねえお姉ちゃん、ミルクをあげるのを手伝って

その言葉が雷のように胸を打った これこそがこの悲しみと怒りへの答えだ
私は気がついた あきらめずに自分にできることをする それが答えだと
みんなが少しずつできることをやれば きっと子どもたちが平和に暮らせる場所ができる
もっと明るい世界がやってきて 子どもたちは新しいチャンスと希望をつかめるのだ

家族や隣人や友だちを愛そう
みんなのためになることを もっと心をこめてしてあげよう
みんなのより良い暮らしと子どもの未来のために できることを精いっぱいやろう
子どもたちが愛を見つけられる もっと明るい世界をつくろう

ヒンド・ファラハト

フィッシャーズ・プログラムのメンバーで、ヨルダンのGNRCユースメンバー

「私たちの望む変化」

イギリスに対して立ち上がったとき、私たちはみな1つになった
生まれも宗教もカーストも信条も、私たちは気にしなかった
イギリスから独立を勝ち取った私たちは、新たな国の始まりを期待していた
私たちのリーダーが権力を握り、政府に主導を求めた
生まれも宗教もカーストも信条も、彼らは気にしなかった

ところが
権力への欲求が現れ、リーダーたちは支配しようと躍起になった
愛国者たちが権力の亡者となり、戦争の気配が漂いはじめた
欲求と態度が変わり、エゴが増長する
リーダーたちは一夜にして一変してしまったのだ

この小さな国で、話す言語の違いをきっかけとした分裂が
政治不安を呼び、互いに理解し合うことが難しくなった
人々は「向こう側」の言語を話す人たちを憎むようになった
状況は悪くなるばかり
独立を目指して共に闘った人たちが二つに割れた
暴力が激しさを増し、人々は互いに殺し合い、平和は行き場を失った

自らの権利を闘い取ろうと様々な組織が結成され、暴力はついに戦争に発展した
多くの人が家を逃げ出し、家族や仕事を捨てた
過去にもあったこの過ちを、リーダーたちは誰1人認めなかった
彼らは権力に留まり私利を得るために、この状況を利用したのだ

この戦争への答えは今も私たちには分からない、そもそもなぜ戦争をするだろう？
私たちのリーダーは不和を誘発するために言語の違いを利用したのか？
独立とその先の未来のために共に戦った人たちは、どうなってしまったのだろうか？

結局、今の状況はどうだろう？
私たちは過去の傷を癒したいのか？
互いを尊重し、気遣っているのか？
互いに協力し合いたいのか？

みんな分かっている 私たちは共に生き、力を合わせなくてはならないと
でも、進んでそうしようとはしない
誰もが過去を忘れ、戦争を忘れない
でも、私たちのエゴは大きくなりすぎてしまった
千年の不満は十年やそこらでは解消できない
現状を見る限り、いま私たちが状況を変えるのは無理かもしれない

けれども
私たちは明日のリーダーになり、自分たちの未来を築くことができる
誰もが互いを尊重する国を目指して努力し、前進することができる
やがて1つになって、平和を芽生えさせることができる

世界を変える前に、自分自身を変えることができる
他人の問題の前に、自分たちの問題を解決することができる

私たちは誰もが平和に暮らせる国を作ることができる
互いに非難し合うのではなく、少なくとも解決策を見つける努力をしなくては
この状況をつくったのはイギリスではない
私たちが権力にとりつかれたとき、彼らはここにいなかったのだから

世界を変えたいと思い立ったら、まず自分自身を変えよう
変化が自ら結果を見せてくれると期待してはいけない
誰かが犠牲を払い、できる限りの努力をしなくてはならない
ここには慰めや利己心の入る余地はない

完璧な国などない 自分たちで完璧な国にしなくてはならないのだ

「時は癒しを与えるが、時はつねに流れていく
時は誰をも待ってくれないけれど、物事はその道筋を変えなくてはならない」

私たちは平和のうちに変わらなくてはならない
私たち自身が自らの望む変化にならなくてはならない

ヌーラニー・ムタリフ
スリランカのGNRCユースメンバー

アフリカの子どもたちの声

平和、平和、私たちの家族に平和を

私たちの周りのすべての人に平和を

平和は進歩の源

平和は愛と幸せを運んでくる

暴力、暴力、私たちの社会に暴力はいらない

暴力は幼い子どもたちへの叫び

暴力は家族を壊し、引き裂く

暴力は無慈悲と悪意の兆し

私たちの国では平和と自然が破壊された

ソマリアでは子どもたちが銃を握っている

エチオピアやアンゴラでは人々が飢えと戦闘で死んでいく

アフリカの子どもたちは将来の暮らしへの希望を失いつつある

ここタンザニアでは多くの子どもたちが路上で暮らす

違う暮らしを求めて家から逃げ出してきた子どもたち

家族がばらばらになり

権利を侵された子どもたち

誰もこの子たちに向かって目を開こうとしない

みんな見えないふりをする

路上で物乞いをしたり盗みを働いたり

そんな子どもたちのふるまいを物笑いにする

私たちの平和な母国は

戦いの場になってしまった

人々はその美しい自然を壊してしまった

ああ神様、「私たちはこんな国を受け継ぐの？」

この声をあげるのはアフリカの子どもたちのため

もう目の前で人が死ぬのは見たくない

この大陸を変えてほしい

私たちの平和をもう一度取り戻したい

クララ・ムドゥマ

タンザニアのGNRCユースメンバー

平和の祈り

…「私たちは肯定し、拒否し、そして行動することを明言する」

2005年、世界教会協議会（WCC）の諸宗教会合に参加した複数の宗教コミュニティを代表する人々のグループが、今日の世界を若者と子どもたちに譲り渡そうとしていることに対する深い懸念から集いました。そのグループはこの世界を支配している広がる暴力、排斥の文化と貪欲に深く憂慮し、次のように述べています。「従って、私たちは、私たちの宝を遺産として代々引き渡していくためには宗教的な育成が決定的に重要であることを認識する。若者が進みつつある遺産の変革に参加する力を持てるようにする必要があることを各宗教コミュニティが理解することが重要である」

「また、私たちは信仰を基礎に他者に対する包括的、オープンで思いやりのある姿勢をつくり上げる学習過程を目指す。また、私たちはお互いに他の宗教についての知識と理解を持つ重要性を理解し、これにより他の宗教について長年抱いてきた偏見とマスメディアによる歪んだ情報からイメージを得ることをしない」

宗教と暴力の関係が今の時代の喫緊の課題となっていることを認識し、同グループは次のように述べています。「私たちは、いかなる宗教も暴力を徳目や宗教的価値のあるものとは考えていないと確信しており、暴力が宗教の本質ではないことを承知している。反対に、愛、慈悲そして平和的共存がすべての宗教が支持する価値観である。従って、私たちは暴力を宗教に起因させることに反対し、私たちの宗教の核心にある価値観であるところの平和と非暴力の実現に向けて努力する」

共通のコミットメント

「私たちは、世界において私たちが直面している課題はどの宗教も1つでは対応できないほど大きなものであり、それに応えていこうとする中で私たちは互いを必要としていることを認識している。故に私たちは一緒になってできることを個々に行うべきではない。互いが真に理解し合うのは、お互いの差異を認識し共に行動する過程においてであり、私たちが共に成長するのは、共通のコミットメントを行う時である。よって私たちは以下の肯定とコミットメントを行う。

私たちは多くの人々、国家、民族、人種、文化と宗教から構成される人類が1つの人間の家族であることを肯定する。

従って、私たちは宗教が互いに排他的なコミュニティであるとして宗教の間に楔を打ち込むすべての試みを拒否する。

私たちはもっとお互いについて学び合い、お互いから学び、他者との関係において自己を理解し、再発見することを明言する。

私たちはすべての宗教の中心に愛、慈悲、自己犠牲、命とコミュニティにおける生活を維持する価値観があることを肯定する。

従って、私たちは敵意、憎悪、排他を促進するすべての宗教教義の解釈を拒否する。

私たちは命を育みコミュニティを促進する宗教の教えと実践を支持することを明言する。

私たちは対立、暴力そして戦争が私たちの宗教教義にはそぐわないものであり、どの宗教も暴力的手段による対立の解決を支持しないことを肯定する。

従って、宗教の名の下に行使されるすべての暴力、戦争を支持するすべての宗教の解釈そして対立を支持するための聖典のすべての解釈を拒否する。

私たちは私たちの宗教を平和と調和を促進するために解釈し、教え、実践することを明言する。

私たちは民族、カースト、社会的地位、身体的・心理的能力、人種、性別などによる差別が私たちの宗教教義すべてにそぐわないことを肯定する。

従って、私たちはあらゆる形態による差別と排他を拒否する。

私たちはすべての人々を包含するコミュニティ形成に向けた活動を行い、差別を正当化する信仰と聖典の解釈に反対していくことを明言する。

私たちは正義と公正が信仰生活の中心であり、貧困、墮落、飢えと病気が人間の尊厳と潜在的可能性を損なう力であることを肯定する。

従って、私たちは不正、不平等、人間の貪欲のための無意識な地球の搾取をもたらす経済的・政治的営みの秩序を拒否する。

私たちはすべての人々の尊厳、人間的・社会的・経済的権利と地球の保全を共に守ることを明言する。

私たちは若者と子どもの権利、そして信仰生活についての理解と実践のために彼らが使う才能を肯定する。

従って、私たちは若者と子どもを信仰生活の主流から排除しようとするすべての試みを拒否する。

私たちは、若者と子どもがその才能を私たちの共通の生活に十分活用できるよう彼らを含む包含的なコミュニティをつくることを明言する。

千里の道も一歩からと言われる。私たちはこれらのコミットメントを正義と平和を指針とする世界のヴィジョンに向けた私たちの歩みであると考えます。私たちはすべての宗教コミュニティがそれぞれこのようなコミットメントを行い、私たちの分裂した世界に癒しと一体性をもたらす精神性のビジョンを推進していくことを呼びかける」³

これらの肯定は、さまざまな宗教の人々が共通の生活に影響を与える問題について発言し共に行動していく必要性の切迫感から生まれたことに意義があります。しかし、こうした切迫感、宗教コミュニティだけでなく宗教用語では語られない人間的価値観や精神性に感化を受けている人々も感じています。

3 世界教会協議会（WCC）が主導し、異宗教間の協力により作成された文書“Religious Life: A Commitment and Calling”より。

宗派を越えた平和の祈り

神よ、あなたはいのちと平和の源です
永遠に御名があがめられますように
あなたこそが私たちの心を平和の思いに向けてくださることを、私たちは知っています
この危機のときに、私たちの祈りをお聞きください
御力は人々の心を変えるのです

イスラム教徒とキリスト教徒とユダヤ教徒は、
みな同じ神を信じる者であることを心に留め、これを強く肯定します
みなアブラハムの子であり、兄弟姉妹であることを
敵同士は互いに話し合いを始めます
反目していた者たちは友情の手を結びます
諸国は共に平和への道を求めます

これらの真実を自らの生き方によって証明しようとする
私たちの決意を強めてください
不和を終わらせる理解と
憎しみを打ち消す慈悲と
復讐心を克服する許しを
私たちにお与えください
すべての人々に、あなたの愛の教えのもとに生きる力をお与えください
アーメン

(バックス・クリスティ)

汝、永遠の叡智よ

汝、永遠の叡智よ
われらはその一部を知るものの
すべてを知らず
汝、永遠の正義よ
われらはその一部を認めるものの
すべてに従わず
汝、永遠の愛よ
われらはそのいくらかを愛するものの
愛しすぎることを恐る
われらが理解するよう
われらの心を開きたまえ
われらが従うよう
われらの意志を鍛えたまえ
われらが汝を愛するよう
われらの心を照らしたまえ

1991年4月21日、神学教授クリスター・ステンダールの70歳の誕生日を祝う諸宗教集会での祈り

私をあなたの平和の道具としてお使いください

私をあなたの平和の道具としてお使いください

憎しみのあるところに愛を

いさかいのあるところにゆるしを

疑いのあるところに信仰を

絶望のあるところに希望を

闇に光を

悲しみのあるところに喜びを

慰められるよりは慰めることを

理解されるよりは理解することを

愛されるよりは愛することを

私が求めますように

私たちは与えるから受け

ゆるすからゆるされ

自分を捨てて死に

永遠のいのちをいただくのですから

(アッシジの聖フランシスコ)

いつも私をならしめてください

今も、そして永遠にいつのときでも

私をならしめてください

助けのいる人を守る者に

迷った人を導く者に

海をわたる人の船に

そして川をわたる人の橋に

危険にある人の聖所に

闇にいる人の明かりに

保護を求める人の避難所に

恵まれないすべての人々に仕える者に

(2000年11月6日ダライ・ラマ14世)

寛大であれ

幸運にあっては寛大になり、不運にあっては感謝しなさい。公平に判断し、注意深く話しなさい。闇に歩む人の明かりになり、見知らぬ人の家になりなさい。目が見えない人の目になり、道を誤った人を導く光になりなさい。人の体に吹き込まれるいのちの息に、人の心の土におりる露に、謙遜の木に結ぶ果実になりなさい。

(バハーウッラー)

世界に平和を

世界に平和をもたらすには
国に平和がなければならない

国に平和をもたらすには
町に平和がなければならない

町に平和をもたらすには
隣人との間に平和がなければならない

隣人との間に平和をもたらすには
家に平和がなければならない

家に平和をもたらすには
心に平和がなければならない

(老子)

神性への道

誰かに悪く言われたら
いつでもその人をほめなさい
誰かに傷つけられたら
親切にその人に仕えなさい
誰かにしいたげられたら
できる限りのことをしてその人を助けなさい
そうすればあなたは
はかりしれない強さを手に入れる
怒りと奢りをおさえ
平和と落ち着きと安らぎを味わえる
あなたは神のごとき者となる

(スワミ・シヴァナンダ)

万人のための平和の祈り

私を導いてください
死から生へと 偽りから真理へと
私を導いてください
絶望から希望へと おそれから信頼へと
私を導いてください
憎しみから愛へと 戦争から平和へと
私たちの心と、私たちの世界と、私たちの宇宙を
平和で満たしてください

(世界平和のための祈祷週間 ジャイナ教の古い聖歌より)

真の平和をお与えください

神よ、われらが主よ。あなたはその本質と特性において永遠のいのちであり、永遠に続く平和です。永遠の平和はあなたから来て、あなたに帰ります。われらが支え主よ。真に平和な暮らしをわれらに与え、われらを平和の居所へ導いてください。栄光に満ち、惜しみなく与えたもう神よ。あなたは尊く崇高なお方です。

Allahumma ya mowlana antas-salaam, wa minkas-salaam, wa ilaika yarjaus-salaam, haiyyina rabbana bis-salaam, wa adkhilna daras-salaam, tabarakta rabbana wa-ta'la'ita, ya zal jalali wal ikram

平和の祈り

だから、彼らがもし平和に傾くならば、あなたも平和に傾き、神を信じなさい。なぜなら、神こそが（あらゆるものを）聞き、知る者だからです。

コーラン第八章（戦利品章）第61節

英訳: A・ユスフ・アリ

「慈悲」についての仏陀のことば

善行に長け
平和への道を知る者がなすべきことは
次のとおりである

何人も他者を欺いてはならない
また、どのような状況にあっても何者をも軽んじてはならない
何人も怒りや敵意をもって
他者に害が及ぶことを望んではならない
あたかも母が自分のただ1人の子を
命をかけて守るように
無限の心を持って
あらゆる生きとし生けるものを慈しむべきである
慈しみの意を全世界へ向けて
空へ向かって上へ
また深淵に向かって下へ
外へ向かって限りなく
憎しみも敵意もなく差し伸べるべきである
立つときも歩むときも、座すときも臥すときも
眠らないでいる限り
この思いを抱きつづけるべきである
これが崇高な境地と呼ぶべきものである
さまざまな偏った見方にとらわれず
はっきりと物を見
いかなる欲望からも解き放たれた心の清き者は
再びこの世に生まれ出ることはない

（スッタニパータ 145節）

恐れの日々

ユダヤ教の暦にある「恐れの日々」はヨーム・キップール（贖罪の日）の祭日に近い時期で、罪を悔い改める期間とされています。

おお、平和の源よ、われらを平和へ、深い真なる平和へ導いてください
癒しへ導き、仲間うちや他の人々との戦争にわれらを駆り立てる
あらゆるものを制させてください
われらの行いによって、いのちと恵み、正義と平和の書に
われらの名が刻まれますように！
われらが平和の源よ、われらに平和をお恵みください

（スターン編『Gates of Repentance』より）

宗教・精神指導者によるミレニアム世界平和サミットに先立つ諸宗教の祈り （2000年8月、国連にて）

私たちが戦争の兵器を土に埋め、
それが平安と至福の花に変わりますように
私たちが武器を捨て
創り主のもとへ腕を掲げますように
私たちの祈りと瞑想で
この世界が永遠に続く喜びの庭に変わりますように
そして、私たち1人1人が御光と愛を広がらせ
全世界に平和をもたらしますように

（サント・ラジンダー・シン・ジ・マハラジ）

広島原爆投下地での祈り

真理と美をもって自然と人間をお創りになった神に祈ります。

私の声をお聞きください。それは個人や国家の間でなされたすべての戦争の犠牲者の声だからです。

私の声をお聞きください。それは人々が武器と戦争を頼りにするときに苦しみ、また今後苦しむであろうすべての子どもたちの声だからです。

私の声をお聞きください。すべての人間の心に平和の知恵と正義の力と友情の喜びを注いでくださるよう、私は祈ります。

私の声をお聞きください。私はあらゆる時代のあらゆる国で、戦争を望まず、平和の道を歩もうとしている大勢の人々に代わって話しているからです。

私の声をお聞きください。そして、私たちが常に憎しみには愛をもって、不正には正義への全き献身をもって、貧困には自らを分かち合うことによって、戦争には平和をもって応えることができるよう、英知と勇気をお与えください。

（教皇ヨハネ・パウロ2世）

平和をもたらそう

平和をもたらそう おお息子よ、戦をはびこらせるな
槍を下ろし、形見としなさい
後世の者たちがそれを見守れるように
祖父のもとへ、アウルイアへ行きなさい
そうすれば物語で教えてくれるだろう

戦をなくそう 戦士は決して満足しないのだから
だが、わが息子は戦士ではなく、知恵と学びの人に
家の伝統を守る者になるように
戦をなくそう
平和の精神を深く根づかせなさい
あなたの教えが知られるように――
すべてを包み込む平和の地

(ポリネシア、ラロトンガ島の歌)

私の心はなれる

私の心はどんな形にもなれるようになった
ガゼルのための草地にも 修道士のための修道院にも
偶像をまつる寺院にも 巡礼者の神殿にも
表法にも コーランの書にも
私は愛の宗教を信じる
その馬がどの方角へ私を連れていこうと
愛が私の宗教であり信仰である

(イブン・アラビ 1165～1240年)

ロールプレイング

ロールプレイングは参加者が別の視点から物事を見るための手助けとなる有効な方法です。

「私の靴で1マイル歩いてみてください（私の立場になって考えてみてください）」というのは有効なアドバイスです。違う立場にいる自分を想像することが習慣となれば、子どもたちは他の人々を尊重するようになります。⁴

ロールプレイは、たった1つの「正しい答え」があるわけではなく、複雑な問題に取り組み、さまざまなスキルを活用することを参加者に課すため、参加者にとって興味深いと同時に有益な体験となります。

ロールプレイの演習には、事前の準備と実施中の細かな配慮が要求されますが、参加者の動機づけと達成感という観点から見るとその成果は十分に期待できます。

この演習でどのようなトピックを扱うかを決める際に重要なのは、目的をきちんと定義することです。まず、選んだトピックにかかわる問題と、登場人物の役割設定を特定します。その場合、現実的な設定を考えるのは良いことですが、必ずしも現実にある設定にする必要はありません。

次に、登場人物が達成すべき目標と、登場人物が目標を達成できなかった場合、どのようなことが起きるかを想定します。それぞれの登場人物の背景情報も考えてください。

役割設定と問題を説明し、参加者にシナリオを十分に理解してもらうようにします。また、登場人物の目標や背景などの情報も伝えます。以前にロールプレイを実施したことがある参加者の人数を確認し、以前のロールプレイがこの演習でどう応用されるのかを説明してください。

登場人物を演じる参加者は、演習で役になり切れるように、少し時間をかけて自分の役を研究します。参加者は自分に割り当てられた役割やそれぞれの真意に関して迷いを抱いている可能性があります。そのような迷いについては、実際にロールプレイを行なう前に明らかにしておくとい良いでしょう。

ロールプレイのあと、参加者は振り返りを行ない、ロールプレイを通して学んだことを確認し、それを強化します。振り返りは、ディスカッションを行う、短い時間でそれぞれ内省する、あるいは個々の学習日誌に書き込む等の形で行ないます。役を演じる参加者は、その役について話してもいいし、自分の本当の気持ちを表現していたのか、それとも役になり切って話していたのかを他の参加者と話し合っても良いでしょう。観察していた参加者から、役を演じている参加者に質問することもできます。質問は、役として尋ねても（これはしばしば「ホット・シーティング」と呼ばれます）、参加者自身として、たとえば、特定の役を演じることを通じてどんなことを感じたかなどを質問してもかまいません。

以下に見本のロールプレイをいくつかご紹介しますが、実践を重ねていけば、自分でもトピックと関連させたロールプレイを比較的簡単に考案できるようになっていきます。

4 Neil Kurshan (Raising Your Child to Be a Mensch, ch. 4, 1987)

ロールプレイ・カード1

ブンジャマは17歳の女の子です。彼女は、父親、母親、2人の男きょうだいと暮らしています。ブンジャマは1人娘だったので、両親は過保護で、ブンジャマがボーイフレンドを持つことを許してくれません。ブンジャマの家庭は非常に保守的で、宗教的・文化的な習慣を大切にしています。ブンジャマは、親友の兄（弟）マシューと知り合い、両親やきょうだいに隠れてデートをするようになりました。マシューは外国出身で、ブンジャマの家庭とは異なる宗教を信仰しています。

ある日、ブンジャマがマシューと手をつないで歩いているところをきょうだいの1人が見つけ、両親に告げ口しました。両親は激怒し、ブンジャマが帰宅するのを待っていました。家に戻ると、母親は「親に恥をかかせて、そんな子はうちの娘ではありません!」と叫び、ブンジャマを非難しました。きょうだいたちは、マシューと会えないようにブンジャマを家に閉じ込めておくべきだと両親に提案しました。父親は怒りに任せてブンジャマの頬を叩きました。ブンジャマは別の部屋へ逃げていきましたが、きょうだいたちに両親の元へと連れ戻されました。

ロールプレイ・カード2

サラ、リナ、ルーシーの3人は大の仲良しです。学校ではいつも一緒に行動し、内気な女の子や自分たちが気に入らないことをする女の子をからかって楽しんでいました。

ファージーナとローラは転校してきたばかりの女の子です。2人とも、まだそれほど多くの友達がいるわけではありませんが、ほかの生徒たちとはとても友好的な関係を築いています。

ある日、ファージーナとローラが校庭でバスケットボールをして遊んでいると、サラ、リナ、ルーシーの3人が近づいてきました。そしてファージーナとローラに「私たちが遊ぶから、ボールだけ置いて校庭からいなくなつてよ」と言いました。ファージーナは、「まだ遊び始めたばかりだから、もう少し遊びたいの」と答えました。するとサラが怒って、ファージーナを小突きました。ファージーナもとっさにサラを小突き返すと、リナとルーシーも喧嘩に加わってきました。ファージーナが怪我をしてしまうのではないかと不安になったローラがボールを乱暴に投げつけました。そのボールがサラの頭に当たり、サラは転んでしまいました。サラの怒りはさらに高まり、まっすぐローラに向かって行ったかと思うと、思い切りローラを叩きました。

ピースニュース・カード

このカードは93頁のピースニュースアクティビティと一緒に使用します。カードの目的は、参加者が、前向きな解決策を模索しなければならない尊敬を欠く、あるいは差別があるといった状況を示しています。参加者はあたかもテレビの臨時ニュースのトップ記事のように解決策について報告をしなければなりません。参加者はカードに書かれた状況を演じる、あるいは関係者へのインタビューを行って見出し記事を発表します。

あなたの町や近隣にある問題に関係した状況について独自のピースニュース・カードを作ることができます。

ピースニュース・カード1

あなたの住んでいる町の人口の5%は他の国からの移民です。2、3週間前、移民と地元住民の間で暴力事件が発生しました。

あなたの近所に住む移民の子ども3人が、ある店でバッグを盗んでつかまりました。地元住民たちは、このような事件は初めてではなく、これ以上移民を近所に住まわせておくことは我慢ならないと移民排斥を訴え始めました。

地元住民と移民の間で緊張が高まり、それが暴力的な対立へとつながっていったのです。地元住民たちは、移民を別の場所に移住させ、移民だけの居住区をつくってほしいと政府に請願しました。彼らは、移民が増えたために、地域の安全が脅かされ、犯罪率が上昇したと主張しています。

移民側は、自分たちが受けている差別や、仕事を見つけたり社会に溶け込んで生活したりする上での困難を訴えています。このところ、市役所の前では毎日のように移民たちによる抗議が行なわれています。

政府はある解決策を考案し、それが新聞で大きく取り上げられました。

177

ピースニュース・カード2

あなたの学校に3人の転校生がやってきました。彼らは外国から移住してきた家族の子どもたちで、他の生徒のほとんどが所属している宗教とは異なる宗教を信仰しています。この転校生たちの両親は、カフェテリアで出される料理の中で、自分の子どもたちが食べられるベジタリアン用の料理がないと学校に苦情を言っています。

彼らは、ベジタリアン用のメニューを作してほしいと学校に要請しました。しかし、校長はたった3人の生徒のために別のメニューを作るのはコストがかかりすぎる、そのような目的で配分される予算はないとして、両親からの要請を受け入れませんでした。校長は、3人の生徒が自宅から弁当を持ってくることを提案しました。

3人の生徒とその両親は、学校が人種差別的な行為をしたと批判し、子どもたちのためにベジタリアン用のメニューを作らなければ、学校に対して裁判を起こすと校長を脅しました。

その状況は見事に解決し、その解決策は新聞で大きく取り上げられました。

ピースニュース・カード3

政教分離を掲げる国のある学校で、13歳の少女が顔を覆うベールを含めた、正式なヒジャーブ（スカーフ）姿での登校を始めました。

彼女は、思春期に入ったので彼女自身を隠さなければならないからだと言います。また、ヒジャーブを着用することで、学習への取り組み方に違いが出るわけではないと主張しています。

しかし、校長は彼女を家に帰し、ヒジャーブを取るまで学校に来てはいけないと指導しました。ヒジャーブは、たとえば化学の実験中など、危険につながる可能性があり、また非宗教的な教育の場である学校に宗教を持ち込むことになるというのが校長の主張です。

少女の両親は、ヒジャーブ着用での登校を強く主張し、裁判も辞さないと学校に圧力をかけてきています。

しかし、この問題は見事に解決し、その解決策は新聞で大きく取り上げられました。

ピースニュース・カード4

ある学校にこの国に移住してきたばかりの移民たちが大量に入学し、大きな騒動が持ち上がっています。

移民の若者たちは、この国の言葉をまったくではないにしても、あまりうまく話せません。在学生たちは、教師たちが理解力の低い学生たちへの対応に追われ、彼ら自身が受ける教育の質が下がることを心配していました。

また、在学生たちは教育水準が下がることで、希望する大学に入学できないのではないかという不安を抱えていました。

在学生たちは、新しく入学してきた学生たちに対して非常に乱暴な態度をとるようになり、教師たちに文句をぶつけるようになっていました。

この状況は見事に解決し、その解決策は新聞で大きく取り上げられました。

国連子どもの権利条約の要約（第1条～42条）

この条約の「子ども」とは、18歳未満のすべての人を指します。

第1条

18歳未満のすべての人は、この条約に書かれた権利を持っています。

第2条

この条約は、宗教、能力、考えや発言、どんな家庭の出身かに関係なく、すべての子どもに適用されます。

第3条

子どもにかかわるすべての団体は、1人1人の子どもにとって何が一番いいことを考え、それに向かって努力しなくてはなりません。

第4条

政府は、この条約に書かれた子どもの権利を守るために、できる限りのことをしなくてはなりません。

第5条

家庭には、子どもが権利を正しく使えるようになるように、教え導く権利と責任があります。政府は、そうした家庭の権利と責任を尊重しなくてはなりません。

第6条

すべての子どもには、生きる権利があります。政府は、子どもが健康に生きて成長できるように、できる限りのことをしなくてはなりません。

第7条

すべての子どもには、公式に登録され、名前や国籍を持つ権利があります。また、可能な限り、自分の親を知り、親に育ててもらう権利があります。

第8条

政府は、子どもが名前や国籍や家族とのつながりを持つ権利を、尊重しなくてはなりません。

第9条

子どもを親から引き離してはいけません。ただし、親が子どもを虐待したり、子どもの世話を放棄したりして、親から離すほうが子どものためになる場合は別です。両親が別れてしまった場合でも、子どもは両方の親と接触を保つ（連絡を取ったり会ったりする）権利があります。それを止められるのは、そのことが子どもにとって害になる恐れがあるときだけです。

第10条

家族が別々の国で暮らしている場合、親と子どもが接触を保ち、家族が再び一緒になれるように、その家族が互いの国の間を行き来できるようにしなくてはなりません。

第11条

政府は、子どもが自分の国から違法に連れ出されないように、手を打たなくてはなりません。

第12条

大人が子どもに影響を与える決定をするとき、子どもは自分がどうしてほしいか意見を述べる権利があります。その意見は、きちんと考慮しなくてはなりません。

第13条

子どもには、情報を得たり、伝えたりする権利があります。ただし、人に迷惑をかけたり、子ども自身のためにならない情報は別です。

第14条

子どもには、自由な考えや信念を持つ権利や、自分が信じる宗教の教えを実践する権利があります。ただし、他の人の権利を侵害しないことが条件です。親は、こうしたことがらについて、子どもを教える導かなくてはなりません。

第15条

子どもには、集まってグループや団体を作る権利があります。ただし、他の人の権利を侵害しないことが条件です。

第16条

子どもには、プライバシーを持つ権利があります。法律は、子どもの生き方や名誉や家族や住居に対する攻撃から、子どもを守らなくてはなりません。

第17条

子どもには、マスメディアから信頼できる情報を得る権利があります。テレビやラジオや新聞は、子どもに理解できる情報を提供しなくてはならず、また、子どもに有害な内容を流してはいけません。

第18条

父親と母親には、どちらにも子どもを育てる責任があります。どうすれば一番子どものためになるか、親は常に考えなくてはなりません。政府は、親を支援する方策を実行して、子育てを手助けしなくてはなりません。両親が共働きの場合は、政府の支援が特に大切です。

第19条

政府は、子どもがきちんと世話をされ、また、親や保護者から暴力やネグレクト（育児放棄）を受けないように、できる限りのことをしなくてはなりません。

第20条

自分の家庭できちんと世話をしてもらえない子どもは、他の人に面倒を見てもらえるように手配しなくてはなりません。面倒を見る人は、子どもの宗教や文化や言語を尊重しなくてはなりません。

第21条

子どもを養子にするときは、何が子どものために最も良いことかを1番に考えなくてはなりません。このことは、子どもが生まれた国で養子になるときも、他の国で暮らすことになるときも同じです。

第22条

難民として外国から来た子どもにも、もともとその国で生まれた子どもと同じ権利があります。

第23条

子どもの心や体に障害がある場合は、その子が自立して充実した暮らしができるように、特別なケアや支援をしなくてはなりません。

第24条

子どもには、良い医療を受け、きれいな水を飲み、栄養のある食物を食べ、きれいな環境に暮らして、健康に生きる権利があります。豊かな国は、これが貧しい国でも実現するように、貧しい国を助けなくてはなりません。

第25条

子どもが家庭ではなく、何らかの権限を持った機関に面倒を見てもらっている場合は、その子が置かれている状況を定期的に見直さなくてはなりません。

第26条

困っている家庭の子どもには、足りないお金を政府が用意してあげなくてはなりません。

第27条

子どもには、体や心が健やかに成長できる水準の生活を送る権利があります。そうした生活が難しい家庭は、政府が援助しなくてはなりません。

第28条

子どもには、教育を受ける権利があります。学校が生徒に決まりを守らせたり、罰を与えたりするときは、子どもの人間としての尊厳を尊重するやり方で行わなくてはなりません。初等教育は無料でなくてはなりません。豊かな国は、これが貧しい国でも実現するように、貧しい国を助けなくてはなりません。

第29条

教育は、子ども1人1人の人格や才能を最大限に育てるものでなくてはなりません。また、子どもが両親を尊敬し、自分の国や他の国の文化を尊重することを学ぶ教育であるべきです。

第30条

子どもには、自分の家族が使う言語を学んで使い、家族と同じ慣習にしたがう権利があります。このことは、その言語や慣習が、その国の大多数の人と同じものでも、そうでなくても同じです。

第31条

すべての子どもには、ゆっくり休んだり、遊んだり、いろいろな活動に参加する権利があります。

第32条

政府は、子どもが危険な仕事や健康に悪い仕事をさせられたり、働くために教育を受けられなくなったりしないように、子どもを守らなくてはなりません。

第33条

政府は、子どもを危険な薬から守る方法を提供しなくてはなりません。

第34条

政府は、子どもを性的虐待から守らなくてはなりません。

第35条

政府は、子どもが誘拐されたり売られたりしないように守らなくてはなりません。

第36条

子どもは、子どもにとって害になりそうな活動から守られなくてはなりません。

第37条

子どもが法律を破っても、残酷な扱いをしてはいけません。大人と同じ牢獄に入れるのは避け、家族と連絡が取れるようにしなくてはなりません。

第38条

政府は、15歳未満の子どもを軍隊に入れてはなりません。戦争が行われている地域の子どものは、特別に保護しなくてはなりません。

第39条

子どもがネグレクト（育児放棄）や、虐待されていた場合は、その子どもが自尊心を取り戻せるように、特別なやり方で手助けしてあげなくてはなりません。

第40条

法律を破ったとして告発された子どもには、法律的な助言や手助けをしてあげなくてはなりません。子どもを刑務所に入れるのは、非常に重い罪を犯したときだけにすべきです。

第41条

この条約よりもしっかり子どもを守る法律がある国では、その法律を尊重しなくてはなりません。

第42条

政府は、この条約をすべての親とすべての子どもに知らせなくてはなりません。

世界人権宣言（要約）

1948年、国連総会で採択

すべての人は・・・

自由な人間として生まれ、同じように扱われなくてはなりません。

言葉や性別、肌の色、宗教や国籍は違っても、みんな平等です。

生きる権利と、自由で安全な暮らしを送る権利があります。

奴隷にされない権利があります。

拷問されない権利があります。

法の下に、人として認められる権利があります。

法の下に、平等に扱ってもらう権利があります。

自分の権利が尊重されないときは、法律に守ってもらう権利があります。

理由もないのに逮捕されたり、牢屋に入れられたり、追放されたりしない権利があります。

公平な裁判を受ける権利があります。

有罪が証明されるまでは、無罪とみなしてもらう権利があります。

プライバシーを持つ権利があります。

国内を移動したり、外国へ行ったりする権利があります。

迫害から逃れるために亡命する権利があります。

国籍を持つ権利があります。

結婚して一緒に家庭を作る相手を選ぶ権利があります。

財産を所有する権利があります。

思想や信仰の自由を持つ権利があります。

自由に意見を持ち、表現する権利があります。

他の人と会う権利があります。

政府に参加し、投票する権利があります。

社会保障を受ける権利があります。

働く権利、平等な報酬を受け取り、安全な環境で仕事をし、労働組合に入る権利があります。

休息や余暇を取る権利があります。これには休暇も含まれます。

食べ物や住む所、衣服や医療などの面で、十分な水準の生活を送る権利があります。

教育を受ける権利があります。

コミュニティの文化生活に参加する権利があります。

こうした権利の実現に必要な、秩序ある社会（国際社会も含む）で暮らす権利があります。

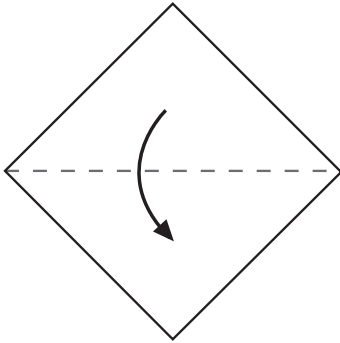
他の人の権利を尊重するために必要な責任を負う権利があります。

以上の権利を破壊することを目的とした行為を行う権利は、誰にもありません。

折り鶴の折り方

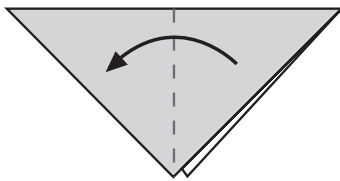
ステップ1

対角線で半分に折ります。



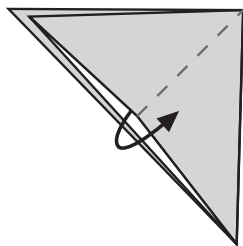
ステップ2

さらに対角線で半分に折ります。



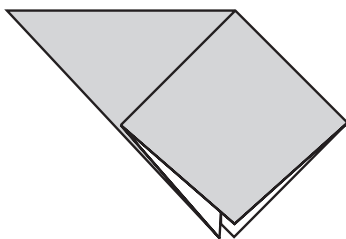
ステップ3

袋になった部分を内側から開いて、小さな正方形にします。



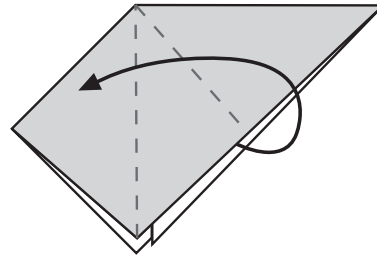
ステップ4

裏返します。



ステップ5

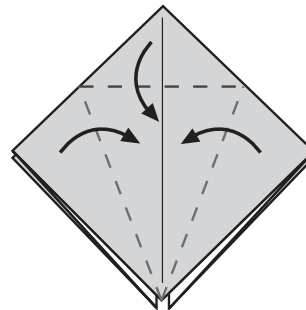
ステップ4と同じようにします。



ステップ6

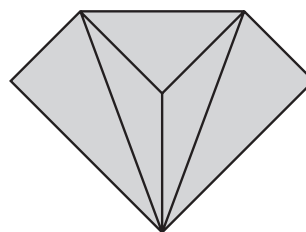
ちょっと分かりにくいところです。(省略して、ステップ9に進んでも構いません。)

左右の角を、それぞれ中心線に向けて、赤い谷線で折ります。次に上の角を青い谷線で折ってください。ここでは、折り目をつけるだけです。



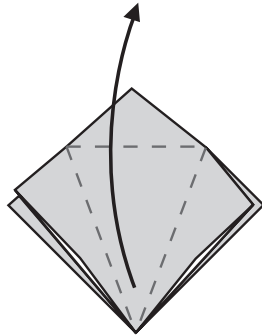
ステップ7

このように見えるはずです。

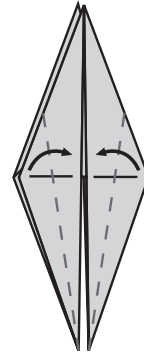


ステップ8

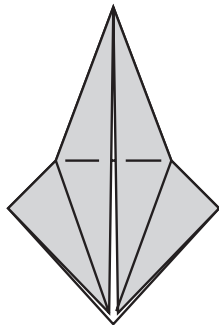
今度は下の角を持ち上げて、袋になった部分を開き、折り目に沿って内側に折ります。(山折りと谷折りが逆になる折り目もあります)

**ステップ11**

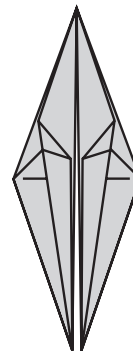
上下を確認し、点線を谷折りにします。折るのは、上の層だけです。

**ステップ9**

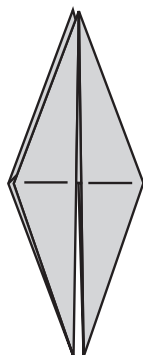
このように見えるはずですが。端がきちんとそろい、角がきれいに尖るように気をつけてください。裏返して、同じように (ステップ6・7・8) します。

**ステップ12**

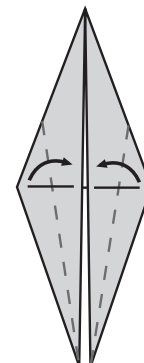
こんなふうに見えるはずですが。裏返して・・・

**ステップ10**

これで土台ができました。ここからは早いですよ。

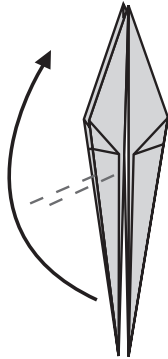
**ステップ13**

ステップ11と同じようにします。難しいですか?でも、もうほとんど完成です。

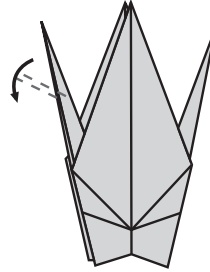


ステップ14

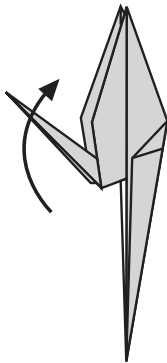
点線で折って縦の折り目を逆にし、首を作ります。

**ステップ17**

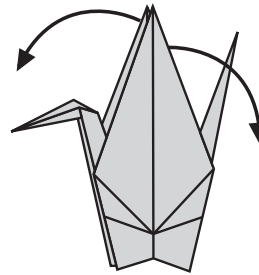
点線で折って縦の折り目を逆にし、くちばしを作ります。くちばしの長さは、お好みで。

**ステップ15**

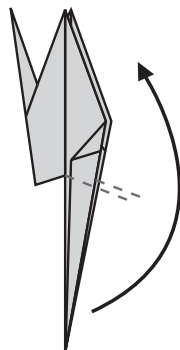
横を少し開いて、首の部分をこのように上向きにします。

**ステップ18**

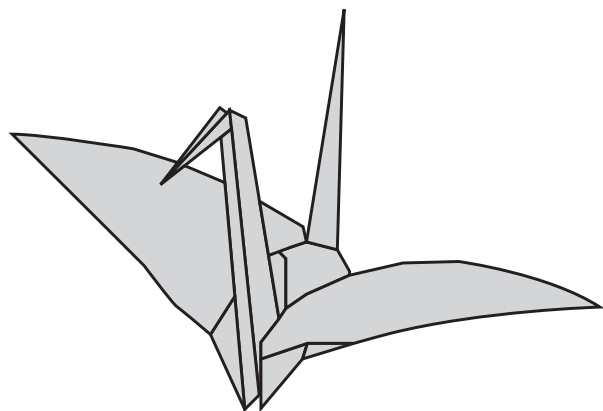
翼を外側に折って形を整えます。下から空気を吹きこむこともできます。

**ステップ16**

上向きにしたら、しっかり押さえてください。反対側も同じようにして、尾を作ります。

**ステップ19**

できあがり。



セクション6

私たちはこうしました

文化や宗教の異なる人々が『共に生きることを学ぶ』とその方法を使った世界各地からの実践例



187



この教材は非常に長い時間をかけて開発されてきました。宗教的、文化的にさまざまな異なる背景を持つ人々の協力が結実したものです。それぞれ環境の異なる5地域の10カ国でこの教材の試験が実施され、総参加者数は300名を上回りました。参加国は、アルゼンチン、アゼルバイジャン、ボリビア、カナダ、コロンビア、コスタリカ、デンマーク、エクアドル、エルサルバドル、フィンランド、ガーナ、グアテマラ、ホンジュラス、インド、イスラエル、日本、ヨルダン、ケニア、レバノン、モルディブ、ネパール、パナマ、スペイン、スリランカ、スウェーデン、タンザニア、イギリス、ベネズエラです。

テストワークショップには、アフリカ伝統宗教、バハイ教、仏教、キリスト教、ヒンズー教、民族宗教、イスラム教、ユダヤ教、ブラマ・クマリスのメンバー、無宗教の代表者が参加し、相互に学ぶ機会を持ちました。本教材の内容はこうした参加者の意見を取り入れることで大変充実し、グローバルな視点を保ち、それぞれの地域に合わせて実践できる柔軟でありながら体系的な資料となりました。

この最終版には、ファシリテーター（進行役）の皆さんの意見、会議に出席された大人の方々の提案、子どもや若者の参加者から学んだこと、教育や倫理・諸宗教学習の専門家やGNRCメンバーの提言、ワークショップの過程の中で私たちが新たに発見したことなど、各ワークショップで得られたさまざまな経験が取り入れられています。

このセクションでは、各ワークショップの概要と、使用した方法、参加者が学習した内容、ワークショップの効果、本教材に取り入れられた主な意見を紹介しています。各ワークショップが最終的な成果にどのように寄与したかについてお分かりいただけたと思います。第1回のワークショップ以来私たちがたどってきたプロセスと、各ワークショップが宗教や文化の壁を越えてさまざまな異なる条件の下で利用できる教材の開発に、どのように役立ったかをご覧ください。

また、異なる地域でそれぞれこのプログラムがどのように利用されたかについても詳しく紹介していますので、実際に自分自身で利用する際の参考になるでしょう。

皆様には是非、本教材が参加者に与えた影響とそれを使用した体験を記録していただきたいと思います。そして、本教材が皆様のグループの倫理教育プログラムの記録と、参加者の学習プロセスの評価に役立つ有益な教材となることを願っております。



倫理教育 ワークショップ リディング (スウェーデン) 2005年11月18~20日

3日間のワークショップにデンマーク、フィンランド、スウェーデン、イギリスからの参加者が集まり、「尊敬」、「共感」、「責任」に関する問題について話し合いました。参加者は3つのグループに分かれ、それぞれがこの3つの価値観のうちの1つをテーマとして取り上げました。各グループは若者と大人の混成で、テーマとした価値観について、それが自分たちの社会の中でどのように適用されるのか、またどのようにしてその価値観を発展させることができるのかについて話し合いました。



最初のグループは、共感というテーマをさまざまな視点から探りました。参加者は、苦難、尊敬の欠如、憎しみ、愛、理解、心遣いといった概念を表した写真の分析を通して、私たちの社会における共感の大切さと、他者への思いやりと尊敬の心を育む習慣の必要性をさらに深く考えることに意欲的に取り組みました。

実際に他の人の靴を履いて歩き、信頼についての演習（参加者は目隠しをされる）を行うことで、参加者は共感するとはどういうことか、共感することが他者を助ける行動にどう結びつくのかを発見しました。また、ヨーロッパの移民問題に関する

ケーススタディ（事例研究）をもとに、社会における共感について話し合いました。

2つ目のグループは、責任という価値観に焦点を当てました。参加者は各自の視点から、社会における自分の役割や立場、経験を分析しました。また、北欧諸国が抱えるさまざまな問題や、自分たちが市民として担う個人的・集団的責任について話し合いました。また、ケーススタディやディスカッションを通じた探究によって、不正に対抗したり、自国のニーズを満たすためにできることがあることに気づくことができました。





最後のグループは尊敬というテーマに取り組みました。参加者は、尊敬とは何か、尊敬の気持ちはどのようにして培われ、どのように踏みにじられるのかを話し合ったあと、ペンと厚紙、ハサミなどの基本的な道具を使って、このテーマに関するアニメ映画を作りました。この方法によって、参加者の創造力と、自らの行動について批判的に考える力が強まりました。

ワークショップの終わりには、参加者たちが準備した諸宗教の祈りが捧げられ、それぞれが自分の宗教の祈りの言葉を唱えたり、歌ったり、暗唱した

りました。1人1人がここに参加したことを振り返り、学んだことや経験したことについて静かに考える時間になりました。

学習と成果

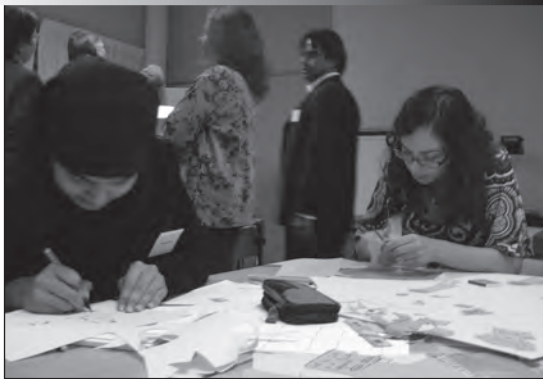
参加者たちはディスカッションを通して、今日の北欧諸国が直面するいくつかの社会問題についての理解が深まったと感じました。また、異なる宗教を持つ人とのやり取りが自分の視点を見直すきっかけにもなり、ここで取り上げられた価値観が人と接するときいかに大切かを理解することができました。そのほかに学習した点としては、人の立場に立って考えることや、自分の偏見を考え直すことの大切さが挙げられました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

『共に生きることを学ぶ』の草案の試験がここで初めて行なわれましたが、この段階では導入章だけしかできていませんでした。このワークショップの評価から、この教材の内容の具体化に役立つ多くの重要な学習点が得られました。最終版に取り入れられた主な意見は以下のとおりです。

- > 倫理的価値観を育てるには、積極的な参加型の方法が不可欠である。
- > 子どもと若者が共有し、学習する彼ら自身の空間を設ける。
- > 価値観は1つずつ区別するのではなく、相互に関連させる。
- > 教材により地域的なアプローチを取り入れ、各地域独自のアイデアやリソースを盛り込む余地を残す。
- > 教材で社会問題を取り上げ、子どもや若者が自分たちの社会が抱える問題を理解できるようにする。
- > 価値観は教えるのではなく、育むものである。
- > 個人が精神性を発達させるための場がもっと必要である。
- > 活動の概要、ストーリー、ケーススタディなどのリソースを盛り込む。

ワークショップの概要	
会場	エキュメニカル研究所、 リディング（スウェーデン）
参加者数／ファシリテーター数	33名／3名
大人の参加数	27名
若者（15～19歳）の参加数	6名
実施期間	3日
使用言語	英語
参加者の出身国	チリ、エクアドル、デンマーク、フィンランド、インド、 イスラエル、日本、ヨルダン、スリランカ、スウェーデン、 イギリス、タンザニア
参加者の宗教	仏教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教、 ユダヤ教、無宗教
使用した方法	芸術 経験の共有 円卓会議





移民と難民に関する ワークショップ ボゴタ (コロンビア) 2005年12月5～8日

この4日間のワークショップには、アルゼンチン、ボリビア、コロンビア、エクアドル、ベネズエラから子どもと若者、大人が参加し、各国の状況に、また特にアンデス地域が抱える移民や難民の問題に、「尊敬」、「共感」、「和解」、「責任」という価値観をどのように適用できるかについて話し合いました。

このワークショップは、ここで取り上げる価値観をもとにした新しい実際の活動の方法を教育者の方々に学んでもらい、教材のさらなる開発のための提案をしてもらうことを目的としました。

第1日目は、参加者がそれぞれ自分のアイデンティティを探りました。各自の出自や、自分は何者か、人生でどのようなことを達成したいかなどを説明した樹形図を描くことによって、他者との関係における自分自身について新しい発見をしました。また、参加者間の相違点と類似点を見つけるダイナミックなアクティビティを行ない、相互理解というテーマについて考えました。



参加者が自分の感情について考える瞑想のアクティビティを通じて、共感について探りました。この演習によって、参加者は地球や周囲の人々と自分を結びつけることができました。また、他の人の体の輪郭をかたどったシルエットに自分の体を載せてみることによって、共感の大切さについて考えることができました。こうしたアクティビティに続いて行なわれたディスカッションでは、人間の権利を侵害した人々に共感を抱くことの難しさが明らかになりました。参加者は、たとえ重い罪を犯した人でも、その人の人間性に目を向けることの必要性について考えました。

和解のプロセスの分析を通じて、参加者は、争いは私たちの社会の現実の一部であり、争いを平和的に解決する必要があることを認識しました。また、和解に関するケーススタディを用いて、参加者は人々が共に生きていくためには対話が重要だということを強調しました。



最終日には、地域内の難民の問題について分析しました。各社会的参加者の役割と責任を図で表すことで、難民問題を背景とした倫理教育を実施するための行動計画の立案につながりました。ワークショップは毎朝祈りとともに始められ、参加者たちは歌を歌い、共に黙祷の時間を持ちました。

学習と効果

各アクティビティのあと、参加者たちは全員集まってそれぞれの価値観を自分なりに消化し、学習したことについて考えました。大人の参加者のほとんどは、このワークショップが大変刺激になったと感じ、参加型の方法を用いた倫理教育プログラムを開発する方法を学ぶことに関心を示しました。暴力犯罪者に対して共感し思いやりを持つことの難しさについて考えていたとき、ある子どもの参加者が「こういうとき、神様はどこにいるんですか」という質問をして、大人たちの注意を引きました。この質問によって参加者たちは、他者の人間性に目を向け、許すことによって社会に平和をもたらすことができることに気づかされました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

ワークショップの成果、使用された方法、参加者から出た意見、グループでの反省などすべての点が、現在の教材に盛り込まれているモジュールの作成に役立てられました。最終版のリソースパックに取り入れられた主な意見は以下のとおりです。

- > 活動によっては、子どもと大人が一緒に取り組むことが効果的である。
- > 音楽、ゲーム、ロールプレイング、映画など、ダイナミックな参加型の活動や演習を取り入れる。
- > 4つの価値観をモジュール化することで、柔軟性を与えながら価値観相互の関係づけを促すことができる。
- > 経験の共有と考える時間は高く評価でき、優先的に実施するべきである。
- > 子どもがお互いについて発見し、自分自身や世界について考える場を与える方法の重要性。

ワークショップの概要	
会場	サンペドロ・クラベール静養センター
参加者数／ファシリテーター数	49名／4名
大人の参加数	35名
子ども（9～13歳）の参加数	5名
若者（14～18 歳）の参加数	9名
実施期間	3日
使用言語	スペイン語
参加者の出身国	アルゼンチン、ボリビア、コロンビア、エクアドル、フランス、ベネズエラ
参加者の宗教	キリスト教:聖公会、カトリック、ルーテル派、メノー派、長老派
使用した方法	経験の共有 ゲーム 瞑想 円卓会議





ユースGNRCを 共に築く ジュネーブ（スイス） 2006年7月13～15日

完成した初版「共に生きることを学ぶ」を初めて試す場としての国際ワークショップが開催され、アゼルバイジャン、コロンビア、ホンジュラス、インド、イスラエル、ヨルダン、ケニア、レバノン、スリランカ、スウェーデン、イギリス、タンザニアから代表が集まりました。

14～16歳の若者が、自分たちの宗教的アイデンティティについて話し合いました。宗教や宗教的儀式についての理解を述べあうことで真剣な対話を行ない、互いに心を通じ合わせることができました。また、諸宗教訪問が実施され、参加者は他者の立場に自分を置いてみる機会を持ちました。

Tシャツのペインティングでは、参加者は他者との関係や自分が直面するさまざまな状況について考え、団結や思いやり、愛、尊敬を通して世界に平和をもたらしたいという願いを表現しました。学校や家庭や地域社会における相互尊重をテーマにしたフォーカスグループでは、参加者が尊敬の気持ちなどがどのように実際に生かされるかを分析するのに役立ちました。



文化の夕べが企画され、ジュネーブ在住の若者も参加しました。参加者は、それぞれの文化や宗教的信条についての情報を共有する機会を持ちました。イスラエルから参加した若者たちが、共生と相互理解を培うために自国のコミュニティで参加してきた活動について話をし、平和のメッセージを伝えました。

最終日には、さまざまな種類の紛争と、紛争がどのようにして暴力的な状況へ発展するかについて学習し、こうした紛争を転換するための和解の態度の必要性について考えました。若者の1人が他の参加者に対して、他の若者による暴力の犠牲者にされたらどうするかという質問を投げかけました。



一部の参加者は、平和的な対応がうまくできなかった自らの経験を語り、暴力を避けるのが難しい場合もあると述べました。ディスカッションの中でインドからの参加者の1人が、ガンジーが平和的抵抗によっていかにインドに平和をもたらしたかを指摘しました。最後に参加者たちは、困難な状況に対応できるようになるために内なる平和を育む必要性についてじっくり考えました。

ワークショップの終わりに、参加者たちは、自国の他の若者たちとこのワークショップで取り上げた価値観について話し合うためのミーティングを持つことを約束しました。

学習と効果

大半の参加者は、諸宗教訪問によって他者の宗教的信条に対する意識が高まり、非常にためになったと感じました。文化のタベを通じては、互いの実情を理解し合い、他者のアイデンティティや文化を認識することができました。ワークショップ終了後、タンザニアとケニアの参加者は、それぞれの学校で「ピースクラブ」を立ち上げました。アゼルバイジャンの参加者は首都バクーのユースグループに、ヨルダンとレバノンの参加者はヨルダンのフィッシャーズプログラムのメンバーに、それぞれここで学んだことを伝えました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

学習モジュールの試験が多文化・多宗教の環境で初めて行なわれました。これによって、教材の実施における段階的な目標と課題を特定することができました。教材に取り入れられた主な意見は以下のとおりです。

- > 第1モジュールから第2モジュールへの移行をもっとスムーズにできるようにする。
- > 大人の参加者に教材を紹介するためのセッションを別に設ける。
- > 内省的な活動を通して精神性を育む場を増やす。
- > 参加者が自分自身の文化や信条について話をする場を設ける。
- > 活動を地域特有の環境や社会の実情に関係づけることが必要。
- > 子どもや若者に深く考えさせるためにより教育的な手法を使う。

ワークショップの概要	
会場	ジョン・ノックス・センター（ジュネーブ、スイス）
参加者数／ファシリテーター数	16名／4名
若者（15～19歳）の参加数	16名
実施期間	3日
使用言語	英語／スペイン語
参加者の出身国	アゼルバイジャン、コロンビア、ホンジュラス、インド、イスラエル、ヨルダン、ケニア、レバノン、スリランカ、スウェーデン、イギリス、タンザニア
参加者の宗教	仏教、キリスト教（聖公会、カトリック、正教会）、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教
使用した方法	芸術 経験の共有 フォーカスグループ 社会見学 ゲーム





倫理教育 ワークショップ コインバトル（インド） 2006年8月2～5日

このテストワークショップの開催にあたり、インドは非常に特別な場所でした。諸宗教の環境とダイナミックな社会、この国が抱える社会問題と人々の持つ起業家精神が相まって、参加者たちの精神的な学習体験を充実させる素晴らしい環境が生み出されました。

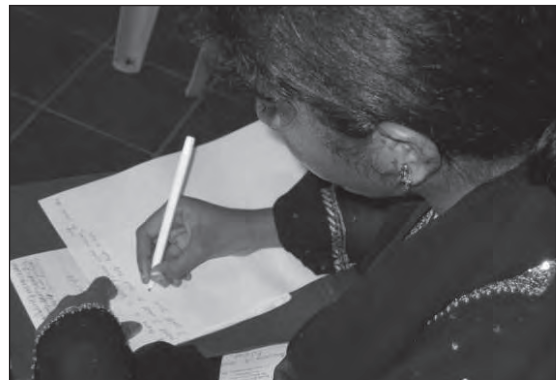
カナダ、インド、ヨルダン、レバノン、モルディブ、ネパール、スリランカからの参加者が、他者との関係における自分自身について新しい発見をし、精神性を育むための旅に乗り出しました。参加者は毎朝一堂に会し、祈りと瞑想の時間を持ちました。初日はいくつかのグループに分かれて、社会における尊敬の必要性和、多様性の中で生きるために必要な態度や行動について話し合いました。



諸宗教訪問が開催され、参加者はモスクやジャイナ教の寺院、シーク教のグルドワラ（寺院）、キリスト教の教会、ヒンズー教の寺院を訪ねました。各訪問先ではさまざまな質問をし、祈りや音楽や黙祷の時間を体験し、異なる宗教間の相違点と類似点を見つけることができました。

その後、アクティビティのクイズ「他の宗教についてどれだけ知っているか」を行ない、参加者はグループに分かれて、訪問した宗教にゆかりのある場所についての質問に答えました。また、和解と尊敬の必要性について話し合いました。

参加者は学習日誌にワークショップで学んだこと、体験したこと、一番影響を与えたことを記録しました。





最終日には近隣の村々を訪問しました。子どもたちはコミュニティのメンバーが運営するプロジェクトや、地域のNGOが組織する教育プログラム、コミュニティを変えることに意欲的な人々の取り組みについて学ぶことができました。参加者はこの経験型のアクティビティによって、個人や集団としての責任が世界に変化をもたらすことを発見できました。

文化の夕べでは音楽とダンスと詩が合わせて披露され、参加者は才能を発揮して、それぞれの文化のさまざまな側面を共有しました。最終日のコインバトル平和祭には全員が参加しました。250名を超える子どもたちが集まり、社会における倫理的価値観の必要性や、平和の構築者としてどのように行動できるかについて話し合いました。ワークショップの終わりには音楽の出し物が行なわれ、参加者たちはワークショップで学んだきょうだい愛と、平和を訴える歌を歌いました。

学習と効果

ワークショップの最後に行なわれた共有セッションで、参加者たちはこのワークショップで学んだことや、他の文化や宗教を持つ人々と交流することで世界や他の宗教に対する自分の認識について考えさせられたことを述べ合いました。ある参加者は、「他者を尊重することについては、頭では分かっていました。でもここへ来て、それが現実には何を意味するのかが、また、私たち若いヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒と一緒に自分たちのコミュニティを良くしたいと思ったら、どんな姿勢や行動が必要なのかといったことが分かりはじめた気がします」と語りました。

199

このワークショップが教材の開発に寄与した点

使用された方法と、このワークショップを取り巻いていたスピリチュアルな環境が、教材に取り入れるべき重要な要素を特定することに役立ちました。

- > 社会見学や地域住民との交流を通して、参加者に地域の実情やコミュニティとかわらせる。
- > 諸宗教訪問と、経験に基づいた活動の実施の仕方。
- > 精神性を養うための黙祷や音楽、祈り、熟考の時間をより多く取り入れる。
- > 現実の状況に価値観をどう当てはめるかを発見することが必要。
- > 倫理プログラムを関連する社会問題に応用できること。

ワークショップの概要	
会場	シャンティ・アシュラム (コインバトール、インド)
参加者数／ファシリテーター数	65名／5名
子ども (10～19歳) の参加数	65名
実施期間	3日
使用言語	英語／タミール語通訳
参加者の出身国	カナダ、ヨルダン、インド、レバノン、モルディブ、ネパール、スリランカ
参加者の宗教	仏教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教
使用した方法	芸術 ディスカッション 経験の共有 社会見学 ゲーム 瞑想 ストーリーテリング





倫理教育 ワークショップ サラマンカ（スペイン） 2006年 8月31～9月2日

スペインでのワークショップには、国内のさまざまな地域からキリスト教、バハイ教コミュニティ、ブラーマ・クマリスを代表する大人と子どもが集まりました。1カ国のみの参加者を対象として教材の試験が行われた最初の機会でした。

大人と若者の参加者は2つのグループに分けられました。どちらのグループも教材の第1モジュール「自分と他者を理解する」に取り組むとともに、その内容について話し合い、このモジュールのさらなる開発に役立つ意見を提供する機会が持てました。

第1日目、若者の参加者はアクティビティの地図を描こうを通して世界の多様性を探り、異なる宗教とそれらの宗教が実践されている地域について話し合いました。これによって、宗教の多様性がどのように世界を形作っているか、伝統的に単一の宗教が実践されてきた国々がいかにして他の多くの宗教を次第に受け入れるようになってきているかを新たに学びました。

参加者はゲームを通じて、人間の尊厳について話し合い、相互尊重と理解の必要性を発見しました。



共有の時間には、他の文化や宗教に対する偏見や、自分たちとは異なる人々のことを知る必要性について話し合いました。また、スペインのさまざまな社会問題の原因と、それが自分たちの社会全体にどう影響しているかを分析しました。さらに、排除され、軽視されている人々に対してもっと心を開くにはどうしたらいいかを話し合いました。

夜は大人と子どもと一緒に諸宗教カフェに集まり、信条や文化の異なる人々と調和しながら生きるために必要な原則や行動、態度について話し合いました。引き続いて文化の夕べが開かれ、子どもたちがそれぞれの地域の活動、踊り、代表的なストーリーなどを紹介しました。



最終日には、内なる平和を見つけることと、他者の立場に自分を置くことの必要性について考えました。歩く瞑想のアクティビティを通して、自然や他の参加者との結びつきを見つけながら、問題の解決を助け、他者のニーズに平和的に対応するための自分の感情と責任について考えました。

学習と効果

カトリックの子どもたちにとって、バハイ教の子どもたちと知り合う機会を持ったことがどれほど重要であったかを表現し、相互理解を深めるために、さまざまな活動に協力して取り組むことに乗り気でした。バハイ教の参加者は、このワークショップで学んだことを地元の同じ宗教の仲間と共有することを約束し、スペインの平和と団結を促すことを助けるために若者による諸宗教活動を発展させる意欲を示しました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

このワークショップでは、教材に取り入れられた新しい活動や方法の試験を行なうことができました。また、内容の改訂や新しいアイデアの導入を行なう良い機会にもなりました。集まった主な意見は以下のとおりです。

- > 「共に生きることを学ぶ」は大人を対象としても利用できる。アクティビティは異なる年齢層に応用できる。
- > 時事問題や若者の社会的実情についてのディスカッションを教材に取り入れることが必要。
- > 社会の実情について話し合う際に経験に基づいた活動を利用し、学習をより有意義なものにする。
- > 宗教的に同質なグループで教材を利用するためのアイデア。
- > 内省型の活動は、参加者に学習したことを消化させ、自分自身の経験について考えさせるのに役立つ。

ワークショップの概要	
会場	ティラノココ・レジデンス サラマンカ (スペイン)
参加者数／ファシリテーター数	20名／3名
大人の参加数	12名
若者 (14～18歳) の参加数	8名
実施期間	3日
使用言語	スペイン語
参加者の出身国	スペイン
参加者の宗教	バハイ教、キリスト教 (カトリック、聖公会)、 ブラーマ・クマリスのメンバー
使用した方法	ゲーム フォーカスグループ 経験の共有 瞑想 円卓会議





倫理教育 ワークショップ 京都（日本） 2006年8月

京都で開催された1日ワークショップに、ガーナ、イスラエル、日本、ヨルダン、スリランカ、イギリスを含むGNRCが活動する世界の国と地域から子どもと若者が集まりました。このワークショップは、世界宗教者平和会議（WCRP）の第8回世界大会に際して実施されました。

アフリカ伝統宗教、仏教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教を代表する6名の子どもたちが、相互作用のある手法を用いながら、自分と他者について共に学びました。また、内省的な方法を通じて、他者と自分の関係について考えました。



ワークショップの始めに、参加者はさまざまな活動を通じて互いに知り合い、このワークショップに参加した理由と期待することを話し合いました。この導入セッションによって、その後の交流に安心して取り組める雰囲気がつくられました。

子どもたちは自分のルーツや家族、興味のあること、嬉しくなることや悲しくなること、一番楽しいことなどを表す木を描くよう指示されました。この私のライフツリーのアクティビティによって、静かに考え、内省する時間を持つことができました。この演習の最後に子どもたちは自分の描いた絵を他の参加者と見せ合い、互いの相違点と類似点を探りました。

消えゆく島々のアクティビティを通じて、子どもたちは分かち合うことと他者を助けることの必要性を発見しました。また、参加者全員がいかに人類の一部を形作っているか、他者を尊重し、他者の立場に自分を置いてみるがいかに大切かについて話し合いました。

子どもたちは紛争について考え、異なる状況で人々が紛争にどう対処するかを探りました。そして、非暴力の選択肢について学び、現在と未来の世界を変えるためのさまざまな方法を見出すためにいろいろな演習に取り組みました。

共有とグループで考える時間には、広島原爆の影響により白血病で亡くなった日本人の少女、貞子の物語が紹介されました。貞子は生涯最後の1年間に、願いがかなうようにと千羽を超える折鶴を作ったという話です。子どもたちはじっと物語に聞き入ったあと、折鶴の折り方を学びました。



子どもたちは、なぜ折鶴が世界中で平和のための祈りの象徴となったのかについて考えました。そして、与えられた時間で、鶴を折るのに使った紙に自分なりの平和の祈りを書きました。これによって静かに考える場ができるとともに、鶴を折ることが精神的な時間になり、参加者は貞子の物語と広島原爆の悲惨な影響について考えることができました。

学習と効果

子どもたちは、世界の問題の多くはいかに理解の不足によって生み出されているかについて発言し、個人のレベルでも社会のレベルでも平和的なやり方で紛争を解決する必要性を認識しました。また、他者にもっと思いやりを持つこと、自分とは違う人々を尊重することを誓いました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

多文化の背景を持つ実に少人数の子どもたちのグループを対象に教材の試験を行なったのは、今回が初めてでした。短時間のワークショップでしたが、プログラムに取り入れるべき非常に興味深いアイデアが生まれました。

- > 熟考を促すために実話を利用することの重要性。
- > 参加者の年齢に合わせて方法を変える柔軟性。
- > 参加者の創造性や芸術的感覚を養う方法の採用。
- > 子どもたちが邪魔されず、気を散らすことなく、安心して互いに話し合える場をつくることの必要性。

ワークショップの概要	
会場	国立京都国際会館
参加者数／ファシリテーター数	6名／2名
子ども（9～13歳）の参加数	6名
実施期間	1日
使用言語	英語
参加者の出身国	ガーナ、イスラエル、日本、ヨルダン、スリランカ、イギリス
参加者の宗教	アフリカ伝統宗教、仏教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教
使用した方法	芸術 ディスカッション 経験の共有 ゲーム





共に平和を目指す旅 ダルエスサラーム (タンザニア) 2006年12月7～10日

「共に平和を目指す旅」と題したワークショップがダルエスサラームで開催されました。ケニア、ウガンダ、タンザニアから来た参加者は、自分たちがそれぞれの国で相互理解によって平和を構築し、推進する力になるにはどうすればいいかを見出すために集まりました。

ワークショップはこの地域の環境と文化に適応され、東アフリカの地域に根づいた活動や社会問題と関連付けられました。宗教間対話にも関与しているさまざまな宗教の代表者が参加者に多様性を受け入れ、他者に対して心を開き思いやりを持つよう促しました。

平和への「旅」は、他者との関係における自分自身を知るためのセッションから始まりました。参加者自身のアイデンティティと他者との相違点と類似点に注目しながら、さまざまな活動を行ないました。相違点についてのディスカッションでは、自分たちの社会で相互尊重の欠如によって生じる問題について考えました。倫理銀行という問題解決活動を通じては、汚職や子どもへの暴力などの社会悪を特定し、こうした問題がいかに人間性を損なうかを考えました。また、そうした状況を変えていくための創造的な方法についても話し合いました。

困難な状況をどうすれば平和的に解決できるかを明らかにするロールプレイングにも取り組みました。子どもたちはいじめ、社会的排除、差別などの問題について話し合い、自分自身の行動や態度について考えました。そして共感の必要性に注目し、ゲームやシミュレーションを通じて、他者の文化に入っていくこと、自分自身の偏見を考え直すこと、多様性の豊かさから学ぶことを学びました。

参加者はさまざまな宗教のゆかりの地を訪問し、自分の認識や考え方を考え直す機会を持ちました。そして、この諸宗教訪問を通じて、神聖な存在はいろいろな顔を持ち得ることや、異なる人々によって理解の仕方が異なることを発見したと述べました。



最終日には、紛争の解決と、紛争をどのように理解し分析する必要があるかについて学びました。参加者たちは消えゆく島々のアクティビティを通じて、私たちは時折自分の必要なものや欲しいものを得るために無意識に他者を排除してしまうということを考えさせられました。参加者は他者と分かち合い他者を受け入れることの大切さについて考えました。また、共有の時間が用意され、タンザニアのGNRCピースクラブの創始者である若者の話を聞く機会を持ちました。多くの困難で過酷な状況に見舞われてきたこの青年は、自らの経験を語り、自己の強い決意がいかにして子どもの権利やタンザニアの他の若者たちの間に平和の取り組みを推進する活動につながったかについて話しました。

ワークショップの終わりに、キャンプファイアが行なわれました。子どもも大人も共にアフリカの伝統的なかり火の周りに集まり、太鼓を使ってコミュニケーションを取り、楽しい時間を過ごしました。祖先が築いてきた精神的な空間を通じて時を越えた大切な倫理的価値観が受け継がれ、争いあう人々の間の和解を促しているというアフリカの遺産を思い起こさせる雰囲気が醸成されました。



学習と成果

ほとんどの子どもたちは他の文化や宗教に対する理解が深まったと語り、中には自分の学校でピースクラブをつくりたいと言う子どももいました。その後、参加者たちの手でダルエスサラームに新しいピースクラブが設立されました。全員がここで学んだことを友人や家族に話すと約束し、将来の活動に参加したいという強い意欲を示しました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

このワークショップで実施された多様な種類の活動から生まれた多くの意見が、教材に取り入れられました。とりわけ以下の意見が有用でした。

- > 参加者が模範とし、変化をもたらそうという意欲をを起こさせてくれる人物と交流する場を設ける。
- > キャンプファイアやドラム・サークルなどのコミュニティ構築活動を取り入れる。
- > 参加者の批判的思考や創造的思考を促す方法を取り入れる。

ワークショップの概要	
会場	タンザニア・エписコパル会議センター
参加者数／ファシリテーター数	24名／3名
子ども（15～19歳）の参加数	24名
実施期間	3日
使用言語	英語
参加者の出身国	ケニア、ウガンダ、タンザニア
参加者の宗教	バハイ教、仏教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教
使用した方法	経験の共有 社会見学 ゲーム 問題解決 ロールプレイング





難民と移民に関する ワークショップ サンロレンソ (エクアドル) 2007年1月23～25日

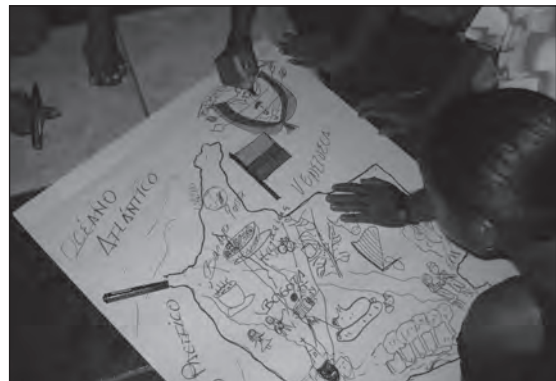
この難民と移民に関するワークショップには、コロンビアとエクアドルの親、若者、子どもが集まりました。教材はワークショップのテーマに当てはめられました。キリスト教のさまざまな宗派とバハイ教を信仰する参加者が、危険な情勢にあるコロンビアとエクアドルの国境地帯に住む人々が直面する倫理的な課題について話し合いました。



参加者は、毎朝活動を始める前にそろって黙祷の時間を持ち、瞑想をし、この地域の平和のための祈りを捧げました。子どもと大人が一緒に行なうセッションもありましたが、より深い探求や時間の共有が求められるセッションは別々に行ないました。

ワークショップは、文化的アイデンティティについてのセッションから始まりました。参加者はグループに分かれ、それぞれコロンビアとエクアドルの地図を、それぞれの国の最も代表的なものや活動、食べ物、イメージなどを特定しながら描くように指示されました。それから、両国のルーツや、相違点と類似点について話し合いました。このアクティビティによって、結びつきや共有の雰囲気が醸成されました。

午後は多様性に関する活動を行ないました。参加者は自分の経験や宗教的な考え方、倫理的・社会的な背景をもとに、難民と移民の問題について考えました。その結果、多様性はすべてを豊かにし、受け入れる必要のある現実として確認されました。



文化のタベが行なわれ、エクアドルとコロンビアの音楽のリズムに乗せて参加者は踊り、歌い、語り合いました。ラテン特有の夜を皆で楽しみながら、互いのきずなを深めるまたとない機会になりました。翌日は、サンロレンソ近郊の地域コミュニティを訪ねました。この訪問によって参加者たちは、そこに暮らすコロンビア人とエクアドル人の住民たちが直面している状況に対する認識を深めることができました。地元の人々と交流する機会を持ち、コミュニティリーダーと社会問題について話し合い、コミュニティでのさまざまな取り組みやプロジェクトについて学びました。



最終日には、この地域のコロンビア人とエクアドル人の間に生じているさまざまな紛争について詳しく調べました。ケーススタディとロールプレイングを通じて、考えられる原因と結果を分析し、こうした紛争を転換するための非暴力の選択肢について学びました。子どもたちは学校や地域社会で日常的に出会う暴力的な状況を紹介した後、考えられる解決策について話し合い、自分自身の責任について考えました。

学習と効果

コロンビアにおける武力紛争の影響は、不幸なことに、この状況の直接的な影響を受けている子どもたちの行動や態度に深く根付いています。そのためこうした子どもたちは、他者に対して怒りをぶつけたり、不寛容になったりすることがあります。このワークショップで、子どもたちは自らの経験と不安を共有し、他者に対してもっと敬意を表し、違いを受け入れ、たとえ自分の権利が侵害されたときでさえも暴力を使わないで対処する方法を自ら提案しました。また、自分たちは問題の一端となるのではなく、解決策の一翼を担うことができるということに気づきました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

特定の社会的テーマに教材が初めて応用されました。このアプローチは、教材の柔軟性を高め、他の応用の仕方の可能性を探るのに役立ちました。教材に取り入れられた重要な意見は以下のとおりです。

- > 社会見学の準備のガイドライン。
- > 特定のテーマ（難民問題など）に教材を活用する方法。
- > 特定の社会問題をめぐる諸宗教の協力を促進するために教材を用いる。
- > 参加を促し包含性を高める方法をもっと取り入れる。
- > 教材をさまざまな設定のもとで利用できるように大人や教師、ファシリテーターの準備を整えることが重要。

ワークショップの概要	
会場	ホテル・サンロレンソ (サンロレンソ、エクアドル)
参加者数／ファシリテーター数	37名／4名
大人の参加者	25名
若者 (14～18 歳) の参加数	12名
実施期間	3日
使用言語	スペイン語
参加者の出身国	コロンビア、エクアドル
参加者の宗教	パハイ教、キリスト教：(カトリック、福音派、ルーテル派、メノー派、長老派)
使用した方法	芸術 経験の共有 社会見学 ゲーム 問題解決 ロールプレイング





若者の暴力に関する ワークショップ サンサルバドル (エルサルバドル) 2007年11月1～5日

バハイ教、仏教、キリスト教、先住民族宗教、イスラム教、ユダヤ教を代表するエルサルバドルの子ども25人とさまざまな宗教組織を代表する大人が、相互理解を深めることを学ぶことによって精神性を養うために集まりました。参加者はワークショップを通して、暴力的状況を変え、違いはあっても社会に平和をもたらすために協力する能力を開発する平和的な方法を見出しました。



ワークショップの第1日目に、参加者は紙の上に自分たちのシルエットを描き、「自分とは何者なのか」、「過去の経験によってアイデンティティがどのように形成されるのか」を探究しました。参加者はお互いに考えたことを共有しました。共通の目標に向けて協力する方法を見だし、個々が持つユニークさに目を向けるために協力ゲームが行われました。参加者は、互いに尊重することを学び、開かれた心で他者の存在を認めることができれば、「協力」は実現可能であるとの結論に達しました。

このアクティビティの後、参加者はいくつかのグループに分かれて紋章を作り、それぞれのグループのメンバーの間で紋章の相違点と類似点を比較しました。このアクティビティは参加者が外見にとらわれることなくお互いをより良く知ることを助けました。最後に、参加者はそれぞれの社会や世界の中の多様性の重要性について話し合いました。

参加者たちの直面する現実や問題について話し合うことで、自分たちの私的な体験をオープンに共有することができるようになりました。家族の問題、マラスというギャングのメンバーになっているきょうだい、暴力的な状況などが共有され、話し合われました。





エルサルバドルで起きている暴力的状況と非暴力の選択肢を話し合うセッションがいくつか実施されました。これらのセッションは参加者に他者との不和を解決し、偏見やステレオタイプを克服する方法を学ぶための創造的で批判的な考え方を持つことを奨励しました。ケーススタディ、ロールプレイング、ディカッションを通して、参加者は自分たちに直接影響する紛争と、そうした紛争を平和的に解決する手段を明らかにしました。

沈黙の旅では、参加者は会場内のいろいろな場所を歩き、それぞれの場所に特定の色をつけました。それぞれに自分たちの生活、他者や自然との関係、社会に平和をもたらすために必要な和解の姿勢を表す色をつけました。匂い、音、音楽はいずれも参加者の内省プロセスを助け、参加者が忙しい日常と距離を置く手伝いをしました。

異なる宗教の祈りと「沈黙の時間」は、参加者の精神性を養い、社会に平和をもたらすことができるように内なる平和を見出す必要性を発見する環境づくりに役立ちました。



学習と成果

今回体験した諸宗教の旅を継続し、子どもや若者に影響を及ぼす問題に共に取り組む方法を模索し続けるコミットメントとして、宗教にゆかりのある場所を訪問することが提案されました。子どもたちからは、次回のワークショップではゲームの数や祈りの時間を増やすこと、大人からは、親を対象とした倫理教育についての会合を行うことが提案されました。ワークショップ終了後、参加者は今回のワークショップでの経験を共有し、コミュニケーションを継続するためのブログ (<http://www.gnrcelsalvador.blogspot.com/>) を立ち上げました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

教材に反映された主な点は以下のとおりです。

- > 内省を促し、子どもたちが自らの姿勢や他者との関係を振り返る気持ちにさせるための沈思のときを使った演習。
- > 他者の信仰に対する理解を深めることができるよう祈りのためのスペースを確保する重要性。
- > 紛争転換のための非暴力の選択肢を見出す方法としてロールプレイングを含めること。

ワークショップの概要	
会場	太陽の神殿（仏教コミュニティ）（サンサルバドル）
参加者数／ファシリテーター数	43名／5名
大人の参加数	18名
若者（14～18歳）の参加数	25名
実施期間	3日
使用言語	スペイン語
参加者の出身国	エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス
参加者の宗教	バハイ教、キリスト教（カトリック、福音派、ルーテル派、長老派）、先住民宗教、イスラム教、ユダヤ教
使用した方法	芸術 経験の共有 ゲーム 瞑想 問題解決、 ロールプレイング





若者の暴力に関する ワークショップ カピラ (パナマ) 2008年1月21~23日

バハイ教、キリスト教の各宗派、ハーレ・クリシュナ教、ユダヤ教を代表する大人と子ども38人がパナマにおける若者の暴力に関する問題を分析し、熟考するために3日間の会議に集いました。



第1日目、参加者である若者たちを歓迎するキャンプファイアが行われました。歌、ギターやシンバルの演奏、笑い、祈り、詩の朗読が混ざり合って、つながりと相互尊重の雰囲気がつくられました。

参加者は私の支持するものというアクティビティを通して、異なる意見や理解を尊重することの必要性を話し合いました。自分たちに影響を及ぼすトピックについて、異なる考えを述べ合い、自分たちの信条を主張しました。これによって、参加者は自らの考えに批判的な眼を向けて、自分の考え

とは異なる意見でも他者の意見を尊重するよう奨励されました。

参加者はまた、さまざまな倫理的ジレンマも話し合い、倫理的決定を下す方法を考えました。互いの経験を共有することで、参加者は明確な根拠に基づく決定を下すには共感や他者を尊重する態度が必要であることを熟考しました。

ワークショップでは、若者が経験する暴力、若者が犯す暴力、若者が暴力の犠牲となる環境などが整理され、そうした暴力を引き起こす原因とその結果、さらにはそうした状況を変える可能性について考察しました。若者の暴力の主な原因としては、機能不全に陥った家庭、暴力的な親、悪い手本の存在などが挙げられました。ロールプレイングでは、参加者は、暴力的な状況に対処し、日常生活において影響を及ぼす暴力のレベルを減少させるために非暴力の選択肢を分析しました。



文化のタベでは、コロンビア、コスタリカ、パナマ、ウルグアイの慣わしが紹介されました。参加者である若者はパナマの伝統的な歌を歌い、踊り、現在にまで続く文化的伝統を学びました。

ワークショップの最終日には内省のためのアクティビティが行われ、参加者は自分たちの人生や他者との関係、自らの姿勢について考えを深めることができました。参加者は自分たちの考えを共有し、自分は何者であるのか、自分が他者とのように関係しているのかに気づくことが重要であるとの結論に達しました。



学習と成果

経験を共有するためのセッションの1つで、ある参加者は「錆びた鎧の騎士」の話共有し、私たちが他者から自らを守り、自分の真の姿を隠すためにどんな鎧を身に着けているかを説明しました。彼女は、他の参加者に対し、自らの心を開き、自分の真のアイデンティティや人生の意味を探求するよう促しました。若者が自分自身や他者との接し方を振り返る良い機会となりました。

ワークショップに参加した大人からは、家族を対象とした倫理教育プログラムの開発や、子どもとの倫理に関する議論に親を含めることを求める声が挙がりました。パナマの社会保健省の代表からは、同国で若者の暴力を防止するために倫理教育を促進するにあたってGNRCと協力することに関心が示されました。

このワークショップが教材の開発に寄与した点

教材を試す最後のワークショップとして行われました。改良された資料を試し、新たなアクティビティやテクニックを活用するユニークな機会となりました。以下のアイデアが教材に反映されました。

- > 問題と衝突を分析するためのアプリシエイティブ・インクワイアリ（肯定的な模索）を活用すること。
- > 子どもたちが人生とその目的を考えることに役立つ曼荼羅の活用。
- > 「倫理的決定とは何か」について子どもたちの考えに挑み、批判的思考を促す道徳的ジレンマの活用。

ワークショップの概要	
会場	オガール・ハビエル (カピラ、パナマ)
参加者数／ファシリテーター数	38名／3名
大人の参加数	18名
若者（14～18歳）の参加数	20名
実施期間	2日
使用言語	スペイン語
参加者の出身国	コスタリカ、パナマ
参加者の宗教	バハイ教、キリスト教（バルボアユニオン教会、カトリック、メノー派）、ハーレ・クリシュナ運動、ユダヤ教
使用した方法	経験の共有 ゲーム 瞑想 問題解決 アプリーシエイティブ・インクワイアリ ロールプレイング



セクション7

参考文献

出典

物語

A Chinese folktale - Unseth, Benjamin (edit). Honesty, Little Books of Virtue, Series One. Garborg's Inc., Bloomington, 1995, pp11-13.]

The boy who cried 'Wolf' - Unseth, Benjamin (edit). Honesty, Little Books of Virtues, Series One. Garborg's Inc., Bloomington, 1995, pp 34-36.

The courage to be - Adapted from the story of Peggy Monague, Christian Island, Ontario
Wilson, Lois Miriam. Miriam, Mary and Me. Wood Lake Books Inc., Winfield, 1992, p.62

The mice that ate iron - Panchatantra-The Mice that ate Iron (1999). Available from: <http://www.indiaparenting.com/stories/panchatantra/panch009.shtml>

The beggar man - Elbert Hubbard's Scrap Book. Wm. H. Wise & Co., Roycroft Distributors, New York City, 1923, p.9

The nothing beyond - Kenneth Cragg: The Wisdom of the Sufis, London, 76, p.8

The salt doll - Anthony Bloom: Living Prayer, Libra, London, 1966, pp.105-106

Dining with a general - Available from <http://www.geocities.com/Tokyo/Courtyard/1652/MilitaryDinner.html>

The ghoul - By Taghreed A. Najjar, Al-Salwa Publishing House, published 2002, Stand no.5.0 D 953

The blind men and the elephant - Kuo, Louise and Kuo, Yuan-Hsi (1976), "Chinese Folk Tales," Celestial Arts: 231 Adrian Road, Millbrae, CA 94030, pp. 83-85. The links below are to other versions of the tale:

The fox and the stork. Aesopo

The neighbour. Avail /stories/mis40.asp

Starfish - Adapted from The Star Thrower by Loren Eiseley (1907 - 1977)

詩

Speak to us children. Kahlil Gibran "The Prophet", chapter entitled "Children" Arrow Books Ltd. New York. 1991

Children learn what they live. Dorothy Law Nolte. Workman Publishing Company. New York. 1998

Poems by GNRC youth members, name recognised under each poem.

平和のための祈り

Pathways to Peace. Interreligious readings and reflections. A. Jean Lesher. Cowley Publications. Cambridge, Massachusetts, 2005.

Religious Life: A Commitment and Calling. Developed through an interreligious process arranged by the World Council of Churches.

Prayer Library at <http://www.beliefnet.com>

Stern, Chaim (ed). Shaarai Teshuva: Gates of Repentance. The New Reunion Prayerbook for the Days of Awe. Central Conference of American Rabbis: 1978, 1999.

ケーススタディ

Case Study 1 Chris's Bad Morning, page x - Adapted from Learning the Skills of Peacemaking, Naomi Drew, Jalmar Press, Rolling Hills Estates, California, 1987.

Case Study 3 Ana's Story, page x - Adapted from testimonies of internally displaced people from the International Committee of the Red Cross, <http://www.cicr.org/web/spa/sitespa0.nsf/iwpList2/Home?OpenDocument>

道徳的ジレンマ

Protecting a lie and life boat, pages 145 and 147 - Adapted from *Moral Reasoning*, by Victor Grassian (Prentice Hall, 1981, 1992),

The price of a life - Taken from Kohlberg, Lawrence. Collected Papers on Moral *Development and Moral Education*. Cambridge: Moral Education and Research Foundation, Harvard University Education Foundation, 1973.

アクティビティの補助資料

Convention on the Rights of the Child <http://www.unhchr.ch/html/menu3/b/k2crc.htm> or a child friendly version http://www.rcmp-grc.gc.ca/pdfs/NCD-poster_e.pdf

Universal Declaration of Human Rights at <http://www.un.org/Overview/rights.html>

Or a child friendly version:

<http://www.amnesty.ie/amnesty/upload/images/attachdocuments/Universal%20Declaration%20of%20Human%20Rights%20-%20child%20friendly%20version.pdf>

Summary of the CRC and of the UDHR taken from Under the UN Flag, assemblies for citizenship in Secondary schools, UNICEF UK, 2005.

The United Nations Secretary General's Study on Violence against Children, <http://www.violencestudy.org>

A Human Rights-Based Approach to Education for All

http://www.unicef.org/publications/files/A_Human_Rights_Based_Approach_to_Education_for_All.pdf

Will you listen? Young voices from conflict zones

http://www.unicef.org/publications/files/Will_You_Listen_eng.pdf

Violence prevention and peace building

http://www.unicef.org/lifeskills/index_violence_peace.html

Handbook for Story Tellers. Inez Ramsey, Professor Emeritus James Madison University
<http://falcon.jmu.edu/~ramseyil/storyhandbook.htm>

How to light a campfire, <http://www.luontoon.fi/page.asp?Section=8497>

12 Skills for Conflict Transformation. Adapted from a version used by Ms. Amada Benavides.
 Escuelas de Paz, Colombia

World Schools Debating Championships. <http://www.schoolsdebate.com/guides.asp>

Information on debates <http://www.idebate.org/debate/what.php>

Information about Mandalas. <http://www.mandalaproject.org/Index.html>.

Story of Sadako. www.sadako.org

Making a Film. <http://www.filmyourissue.com/making/index.shtml>

Safe you, Safe Me, a resource for child safety. Save the Children. Contribution to the United Nations Secretary-General's Study on Violence against Children. 2006 <http://www.violencestudy.org/IMG/pdf/safeyoufinal.pdf>

Sports as a methodology for peace and reconciliation, <http://www.toolkitsportdevelopment.org>

Service Learning: Lessons, Plans and Projects. Human Rights Education Program, Amnesty International and Human Rights Education Associates, HREA. March 2007

Appreciative Enquiry. <http://appreciativeinquiry.case.edu/>

アクティビティの参考資料

My Life Tree, page x - Adapted from Jag & Du, Dioceses of Lund, 2004

Reach for the stars, page x - Adapted from a version used by Fundación Escuelas de Paz, Bogotá - Colombia

Using Role-Play, page x - Adapted from a version used by Centre San Bartolome de las Casas, El Salvador.

Your Silhouette is Mine, page X - Adapted from a version used by Fundación Escuelas de Paz, Bogotá - Colombia

Joyful Appreciation, page x, - Adapted from the Dhamma lesson taught by a Thai master

Diminishing Islands, page x - Adapted from a version used by Dr. Mustafa Ali, Tanzania, Africa

Ball in the Air, pag x - Adapted from a version used by Centre San Bartolome de las Casas, El Salvador.

用語集

- 倫理：** 哲学の主な分野の1つ。個人や集団の価値観や慣習を研究する学問で、正邪、善悪、責任といった概念の分析や使用を対象範囲とする。本質的な問いに対する信念、思想、理論、根本的な内省であり、規範を定める際に役立つ。
- 道徳：** 人間の行動に適用され、善悪の区別や応用、具体例、行為について言う。行動基準において表現され、良い道徳は「美德」と呼ばれる。道徳という概念には、私的あるいは個人的な側面が含まれている。また、道徳には「すべきこと」と「してはいけないこと」を教えてくれるという実用的な面もある。
- 価値観：** 特定の個人や集団が許容する理念。個人的価値観と文化的価値観がある。人間の行為の指針となる原則や基準や性質。

個人的価値観

個人的価値観は、外界との経験から生じ、時と共に変化し得る。価値観の適用における整合性とは、その一貫性のことである。ある人が、他者からの反論や無理強いに関係なく、自分の価値観を適切に適用するなら、その人の価値観には整合性があると言える。個人的価値観は潜在的に、ものごとの選択にかかわる。個人的価値観はある個人にとって、個人の選択肢と各々の選択肢にかかわる価値観を比較することによって、決断する際の指針になる。

子どもの頃に身につけた個人的価値観は、変化しにくいことがある。そうした価値観は、特定の集団や制度、例えば文化、宗教政党などに由来する場合がある。しかし個人的価値観は普遍的ではない。個人の遺伝子、家族、国家、歴史的環境が、個人的価値観を決定する。これは、価値観という概念そのものが普遍的でない、という意味ではない。各人は価値観に対する独自の考えを有する、すなわち、自己の遺伝子、感情、経験に見合った私的な価値観の認識を持つ、と述べているに過ぎない。

文化的価値観

集団、社会、宗教そして文化には、そこに属する大多数の構成員に共有される価値観がある。構成員は、たとえ各自の価値観がその文化で是認される規範的価値観と完全に一致しなくても、1つの文化を共有している。これは、個人が複数のサブカルチャー（下位文化）に属しており、それらの中から自分にとって価値のある面だけを抽出し、そして合成する能力があることを反映している。

もし個人が、所属する集団の規範と深刻に対立する価値観を表明したら、その集団の権威は、その個人を非難する、もしくは規範に従わせるように働きかけるかもしれない。例えば、法律として確立されている社会的規範と対立すれば、投獄という結果に陥る可能性がある。

カテゴリー

価値観はいくつかのカテゴリーに分類することができる。ただし、各カテゴリーは議論の余地がある。

- > 健康的価値観と習慣 – 感覚的・作用的価値観 – 感覚的価値観は個人の価値観であり、個人の感情的生存にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。個人の感情的成熟度によって、敏感なことも鈍感なこともある。作用的価値観は個人の価値観であり、個人の身体的生存にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。個人の身体的発達の度合いによって、活発であったり不活発であったりする。健康的価値観・習慣は、個人的な満足や慣習や体験を通じて身に付く。
- > 道徳的価値観と規範 – 社会的・宗教的／伝統的価値観 – 社会的価値観は家族や集団の価値観であり、家族や集団の存続にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。家族や集団の社会成熟度によって、育成的なときも攻撃的なときもある。宗教的／伝統的価値観は対人的価値観であり、家族や集団の外での非個人の存続にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。宗教的／伝統的価値観は、その宗教や伝統の成熟度によって、寛容なことも不寛容なこともある。道徳的価値観は、励ましや教育、対人経験を通じて身に付く。
- > 倫理的価値観と行動 – 経済的・政治的価値観 – 経済的価値観は国の価値観であり、国家の存続にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。その国の経済の発達状況により、生産的なことも非生産的なこともある。政治的価値観は国の価値観であり、国家の存続にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。その国の政治的発達によって、進歩的なことも逆行的なこともある。倫理的価値観は報奨や教育、対人経験を通じて身に付く。
- > 歴史的価値観と行動 – 美的・理論的価値観 – 美的価値観は人間の価値観で、人間の生存にとってプラスまたはマイナスの機能を果たす。人間の芸術的発達の度合いにより、美しかったり醜かったり（意味があったり、なかったり）する。理論的価値観も人間の価値観であり、人間の科学的発達の度合いによって、人間の生存にとって正しいことも誤っていることも（または、目的にかなうことも的外れなことも）ある。歴史的価値観はひらめきや認識、創造的経験を通じて身に付く。

すべての価値観は、意識の感情や条件付けに基づいている。

美 徳： その人の道徳的に優れたところ。長所として評価される性格の特徴。美德の反対の概念は悪徳である。

諸宗教的： 異なる宗教や信仰を持つ者同士の、協力的でポジティブな交流のこと。個人レベルの場合も、組織レベルの場合もあり、寛容や相互の尊重につながる。シンクレティズム（諸派統合）やオルタナティブ・レリジョン（代替宗教）とは異なって、新たな宗教を作ろうということではなく、対話によって異なる宗教への理解を促すことで、他者への尊敬を高めようという場合が多い。

略語解説

CRC	子どもの権利条約 Convention on the Rights of the Child
GNRC	子どものための宗教者ネットワーク Global Network of Religions for Children
MPA	モーション・ピクチャー・アソシエーション Motion Picture Association
SMART	具体性、計測可能性、実現可能性、現実性、時宜性 Specific, Measurable, Attainable, Realistic, Timely
UDHR	世界人権宣言 Universal Declaration of Human Rights
UNESCO	国連教育科学文化機関 (ユネスコ) United Nations Educational, Scientific and Cultural Organisation
UNICEF	国連児童基金 (ユニセフ) United Nations Children' s Fund
WCC	世界教会協議会 World Council of Churches
WCRP	世界宗教者平和会議 World Conference of Religions for Peace

倫理教育委員会メンバーリスト

名誉顧問

エル・ハッサン・ビン・タラール王子
ヨルダン王立諸宗教研究所会長、ヨルダン

委員

A. T. アリヤラトネ博士 サルボダヤ・シュラマダナ運動創立者、スリランカ
アドルフ・ベレス・エスキヴェル氏 平和と正義奉仕会会長、ノーベル平和賞受賞者、アルゼンチン
クル・ガウタム氏 ユニセフ（国連児童基金）事務局次長、ネパール
ハンス・キュング博士 地球倫理財団会長、ドイツ
ビビファテマ・モサーヴィ・ネザード氏 諸宗教対話協会マネージャー、イラン
アリス・シャルヴィ博士 シェクター・ユダヤ研究所元理事長、元学長、イスラエル
ディディ・タルウォーカー氏 スワッドヒヤヤ・パリヴァー指導者、インド
アナスタシオス・ヤノウラトス師 アルバニア正教会大主教、アルバニア

子ども委員

ノウル・アマーリ氏 フィッシャー・プログラム、ヨルダン
エマニュエル・マシアス氏 子どもピースクラブ創始者、タンザニア

（肩書きは当時）

倫理教育委員会部会メンバーリスト

ハサン・アブニマー大使

王立諸宗教研究所所長

エル・ハッサン・ビン・タラール王子アドバイザー、ヨルダン

スワミ・アグニヴェッシュ

国連現代の奴隷制度に関する基金元会長、インド

チャランジット・アジットシン氏

フリーランス監査官・教育マネージメントコンサルタント、英国オックスフォード国際諸宗教センター理事及び副議長

ファリダ・アリ氏

ユニセフ・パブリック・パートナーシップ部プログラムオフィサー、米国

イブラヒム・アルシェディ氏

サウジ教育文化科学国家委員会事務局長、サウジアラビア

ケゼヴィノ・アラム博士

シャンティ・アシュラム・ディレクター、インド

ウェスリー・アリアラジャ博士

ドリュー大学大学院神学校エキュメニカル神学教授、米国

アリシア・カベスド教授

中南米教育都市機構ディレクター、アルゼンチン

メグ・ガーディニエール氏

ユニセフ米国委員会、教育・コミュニティパートナーシップ常務、米国

アンドレス・ゲレロ氏

ユニセフ・ジュネーブ・パブリック・パートナーシップ部部長、スイス

マグナス・ハーヴェルスラッド博士

ノルウェー科学技術大学教育学部教授、ノルウェー

ハイジ・ハッドセル博士

ハートフォード神学校学長、米国

ヴィノッド・ハラン氏

英国教育技能省プロジェクトディレクター、英国

スチュアート・ハート博士

子どもの権利開発国際研究所副所長、米国／カナダ

アッサ・カラム博士

国連人口基金上級文化アドバイザー、米国

(肩書きは当時)

メソッド・キライニ師

タンザニア・ダルエスサラーム司教、タンザニア

マーレーン・シルバート氏

ケープタウンホロコーストセンター教育ディレクター、南アフリカ

ハンス・ウコ師（博士）

WCC諸宗教関係プログラム部長、スイス

デボラ・ワイスマン博士

元カリーム博愛ユダヤ教指導者研究所ディレクター、イスラエル

スニル・ウィジェシリワデーナ博士

サルボダヤ・シュラマダナ運動・平和・文化・メディアコンサルタント、スリランカ

GNRCコーディネーター

アフリカ

ムスタファ・ユースフ・アリ博士

GNRCアフリカ事務局GNRC事務所コーディネーター

アラブ地域

カイス・サディーク師（博士）

ヨルダン エキュメニカル・スタディーズセンター所長

中央アジア・コーカサス

ラジア・スルタン・イスマイル・アバシ氏

平和と尊厳のある開発のための女性連合創始者・会長

ヨーロッパ

マルタ・パルマ氏

WCC総幹事子どもの問題担当顧問

中南米・カリブ海

メルセデス・ロマン氏

メリノール国際問題事務所 女性と子ども担当

南アジア

ビンヤ・アリヤラトネ博士

スリランカ サルボダヤ・シュラマダナ運動エグゼクティブ・ディレクター

イスラエル

ドリット・シッピン氏

多元的スピリチュアル・センター ネーベシャローム／ワハト・アル・サラーム

ドゥミヤ・サキナ コーディネーター

（肩書きは当時）

付録

評価・感想記入用紙

準備・手配

	評価 (1～5、5が最高)	コメント
会場		
宿泊施設		
食事		
教材		
その他のコメント		

内容

ワークショップの目的は明確でしたか？	
セッションの内容は、あなたにとって有意義でしたか？	
トピックに対して適切な方法が使われていましたか？	
セッション中に難しかったことや困ったことはありましたか？ それは何ですか？	

学習

このワークショップで主に学んだことは何ですか？	
学んだことを実際に生かせそうですか？ (私生活、社会、仕事、組織などで)	
こうすればいいと思うことを書いてください	

影響評価チェック表

A. 私が知っていること			
	はい	いいえ	コメント
私は、自分の能力やスキルが何かを知っている。			答えが「はい」なら、あなたはその能力やスキルをどのように使っていますか？
私は、自分自身や自分の家族、文化や信仰に誇りを持っている。			説明してください。
私は、他の文化や信仰を持つ人を知っている。			答えが「はい」なら、あなたはその人について、何を知っていますか？
私は、自分の文化や宗教と、他者の文化や宗教の違いを知っている。			答えが「はい」なら、あなたが聞いたことのある他の文化や宗教をいくつか挙げて、違いを2つ書いてください。
私は、私の学校や地域で起きている暴力や理解不足で生じた問題を知っている。			答えが「はい」なら、どんな問題ですか？
私は、私の社会で起きている対立や不正の原因を知っている。			答えが「はい」なら、例を1つ挙げて原因を書いてください。
私は、私のコミュニティの平和運動について知っている。			答えが「はい」なら、それはどんな運動ですか？

B. 以下の文章について、それが間違いか正しいかを答え、そう考えた理由を書いてください。

文章	間違い	正しい	理由
自分の周囲の大多数の人と意見や考えが異なるときは、自分の考えや信仰を隠した方が良い。			
誰かに話しかけられたら、相手の身振りや態度、目を見て話しているかどうか、語調、声、表情などにも、言葉と同じぐらい注意を払う。			
自分と同じ信仰や考え方の人と友達になるほうが簡単だ。			
他の人の考えが私の信仰や信条と対立するときは、その人の考えを無視するほうが良い。			
みずぼらしい格好をした路上生活者は、私に危害を加えたり、私から物を盗む可能性が高い。			
何かを決めるときは、それが他の人に与える影響を踏まえて決めるべきだ。			
私は腹が立つと、何かをする前に時間を取って心を落ち着かせ、よく考えてみる。			

C. 次のような状況について考え、もしそうなったら自分ならどうするかを答えてください。

誰かがあなたの信仰やあなたの家族の文化的な習慣をからかいました。あなたならどうしますか？	
ある人と組んで作業しなくてはいいませんが、あなたはその人の振る舞いが好きではなく、考え方にも賛成できません。この状況にどう対応しますか？どうすればその人と協力することができでしょうか？	
あなたは友達と口論し、心を傷つけられました。なぜ、友達がそのように振舞ったのかを理解できません。あなたは、この問題を解決する努力をしますか？そうであれば、どのようにしますか？	
あなたのクラスで差別問題が起こっています。でも、あなたに直接関係があるわけではありません。あなたは何とかしようと努力しますか？もしするなら、なぜですか？また、どんなことをしますか？	
あなたの学校に、文化も宗教も違う生徒が転校してきました。ほかの大部分の生徒は、その転校生の悪口を言っています。転校生は、ほかの大部分の生徒とは、振る舞いも服装も違います。あなたは、その転校生といると気まずい感じがしますが、向こうは友達になろうとしています。でも、もし友達になったら、ほかの生徒はあなたと友達付き合いをしてくれなくなるかもしれせん。あなたはどうしますか？	
あなたが、ある判断を下したことで、他の人たちに迷惑をかけています。それについて何もしなくても、あなたが罰せられることはありません。あなたは、迷惑をかけた償いをしますか？もしするなら、どんなことですか？	

メモ

✕

（『共に生きることを学ぶ』は倫理教育のための異文化間・諸宗教プログラムです。これは、国連子どもの権利条約（CRC）、世界人権宣言（UDHR）第26条1項、万人のための教育世界宣言、およびミレニアム開発目標に謳われている子どもが身体的・心理的・精神的（スピリチュアル）・道徳的・社会的に健全かつ十分に成長し、教育を受ける権利の実現に寄与することを目指した教育者や青年指導者向けの教材です。

『共に生きることを学ぶ』は、子どもや若者により強い倫理観を身に付けてもらうための異文化間・諸宗教プログラム実施を支援するツールで、世界中の青年指導者や教育者に提供しています。『共に生きることを学ぶ』は、若者が文化や宗教の異なる人々を理解・尊重し、地球はひとつのコミュニティであるという感覚を培う助けとなるように考えられています。この教材は、ユネスコおよびユニセフとの緊密な協力の下に開発されました。